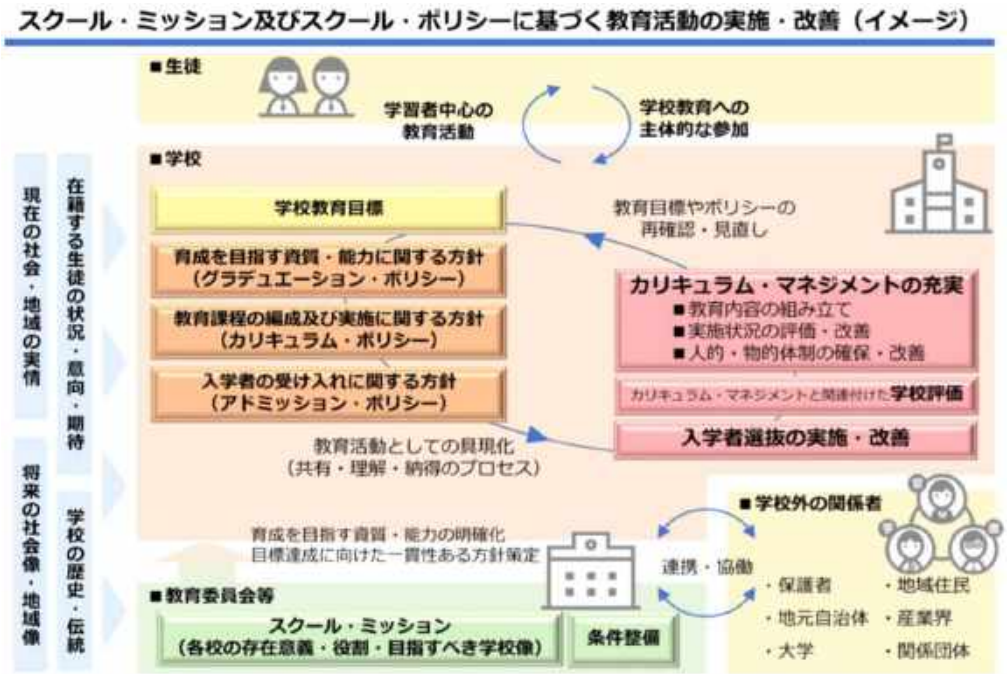
令和２年度文部科学省委託事業
「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」（Ｒ１～２）作成資料

カリキュラム・マネジメントを進める上での手引き



中央教育審議会初等中等教育分科会「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議まとめ）[1] より

宮崎県教育委員会

はじめに

本資料は、文部科学省委託事業「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」（Ｒ１～２）の一環として作成したものである。事業内容は、①カリキュラム・マネジメント実践校３校（日向高等学校、都城西高等学校、宮崎南高等学校）による実践研究と②カリキュラム・マネジメントの手引きの作成である。本資料は②になる。

昨年度、本資料の前段として、『カリキュラム・マネジメントを進める上での基礎資料』を作成したが、今回は、カリキュラム・マネジメント実践校３校の具体的な取組を追加したものになる。また、カリキュラム・マネジメントの議論は、コロナ禍においてＩＣＴ活用による「学びの保障」やＳＴＥＡＭ教育との関わりで「総合的な探究の時間」の位置付け等が注目されるようになり、それらに関わる内容も掲載している。

なお、本県では新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育活動を推進するために、「資質・能力育成研究会」（Ｒ１～３）を組織し、４つの研究部門（「授業」「探究学習」「評価問題」「マネジメント」）において実践研究を実施している。カリキュラム・マネジメントについては、マネジメント研究部門における研修会を、この調査研究と連動させて実施しているので、そこで話題になった議論等も掲載している。

２０２１（令和３）年中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」には、「カリキュラム・マネジメント」について下記の説明[2]がある。

> 各高等学校においては、スクール・ポリシーを起点としてカリキュラム・マネジメントを適切に行い、教育課程や個々の授業、入学者選抜の在り方等について組織的かつ計画的に実施するとともに、ＰＤＣＡサイクルを通じて不断の改善を図る必要がある。また、授業改善のための組織的な体制整備や設置者による指導助言・支援も必要となる。（傍線筆者）

今後高等学校は各学校の特色化・魅力化のために、スクール・ミッションに基づき「育成すべき資質・能力に関する方針」「教育課程の編成及び実施に関する方針」「入学者の受入れに関する方針」の３つの方針（スクール・ポリシー）の策定が求められる。しかし、それらを画餅に終わらせないためには、カリキュラム・マネジメントの充実こそが、鍵を握ると言えよう。Society5.0時代を見据え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成する教育を行うために、カリキュラム・マネジメントの重要度は、ますます高まってきている。

本資料は、カリキュラム・マネジメント実践校の先生方をはじめ、多くの関係者の方々にご協力いただきながら作成した。日々、悪戦苦闘されながら、カリキュラム・マネジメントを推進されている先生方の一助になれば幸いである。

宮崎県教育庁
高校教育課長　押方　修

目　　次

はじめに

第１章　カリキュラム・マネジメント実践上の諸課題

１．カリキュラム・マネジメントの目的
２．カリキュラム・マネジメントの定義
３．カリキュラム・マネジメントの構造
４．カリキュラム・マネジメントの実態分析から見える諸課題

第２章　カリキュラム・マネジメントの実際

１．カリキュラム・マネジメント推進事業の概要
２．カリキュラム・マネジメント実践校の取組
⑴学校の教育目標等の設定及び実現に向けた研究（日向高等学校）
⑵学習の基礎となる資質・能力の育成に向けた研究（都城西高等学校）
⑶現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究（宮崎南高等学校）
３．カリキュラム・マネジメント研修会の取組
４．カリキュラム・マネジメントに関わるＱ＆Ａ

第３章　カリキュラム・マネジメントの充実

１．「資質・能力育成研究会」の概要
２．「主体的・対話的で深い学び」とカリキュラム・マネジメント
３．「総合的な探究の時間」とカリキュラム・マネジメント（飯野高等学校）
４．「学びの保障」とカリキュラム・マネジメント（五ヶ瀬中等教育学校）

第４章　カリキュラム・マネジメントのこれから

１．カリキュラム・マネジメントのこれからを考える視点
２．スクール・ポリシーとカリキュラム・マネジメント
３．ＳＴＥＡＭ教育とカリキュラム・マネジメント
４．エージェンシーとカリキュラム・マネジメント

〈資料〉
１．「主体的・対話的で深い学び」の授業実践の学習指導案（一部）
２．育てたい生徒像を踏まえた校内授業研修（「高鍋高校授業研究レポート」の一部）

おわりに

第１章　カリキュラム・マネジメントの実践上の諸課題

カリキュラム・マネジメント研修会
「各校のカリキュラム・マネジメントの現状と課題」について話し合う様子

１．カリキュラム・マネジメントの目的

２０１８（平成３０）年に改訂された学習指導要領は、「育成をめざす資質・能力の三つの柱」（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）をバランスよく育むために、「アクティブ・ラーニングの視点」に基づき「授業のイノベーション」を起こすとともに、中長期的な視点に立って「カリキュラムをデザイン」することを求めている。すなわち、資質・能力を育成する両輪が「アクティブ・ラーニング」と「カリキュラム・マネジメント」になる。

では、カリキュラム・マネジメントが機能していないと、授業はどうなるのか？　田村知子氏は、授業に焦点を合わせて、カリキュラム・マネジメントが機能している例とそうではない例を、次のように比較している。

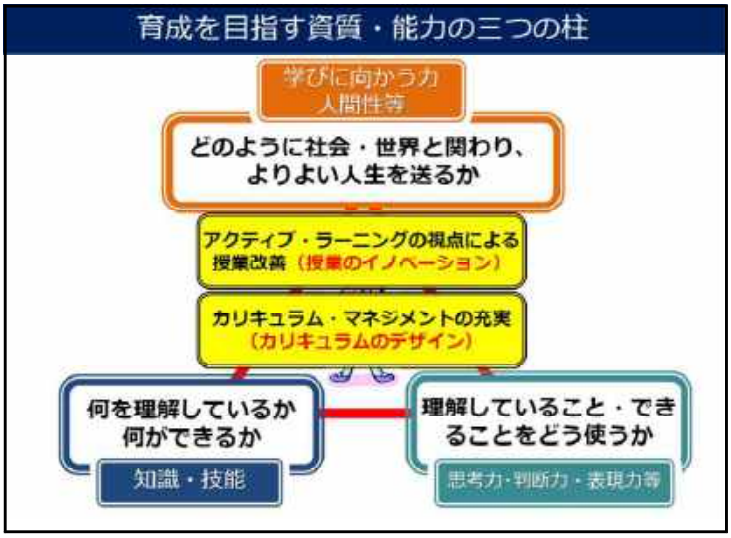


図１　学習指導要領の方向性[3]

ＣＭが機能していない例	ＣＭが機能している例
単に教科書や指導書の内容を順番にこなす、いわば「教科書を教える」授業。	児童生徒が「何を、どのように学び、何を身につけるか」を考え、そのために「教科書を使って教える」授業。
「今日は教科書○ページから」と始まり、目標やねらいがない授業。教師にはねらいがあっても、それが生徒には伝わらない授業。	教師はもちろん児童生徒も、本時や単元のねらいや目標、学習課題などを意識しながら臨む授業。ねらいに迫る本質的な問いや、学びの振り返りのある授業。
１単位時間ごとの授業は意図的・計画的かつ工夫されたものであっても、中長期的に育成する資質・能力の視点が弱い、「本時主義」の授業。	ひとつの単元全体、あるいは複数単元を見通し、個別的知識やスキル、概念や方略、原理をいつどのような手順で学習させるのかが設計された授業。既習事項や今後学ぶ単元との系統性や他教科等との関連性を考慮し、中長期的に育成する資質・能力（目標）が意識された授業。
キャリア教育、国際理解教育、環境教育、食育・健康教育、人権教育……といった多様な教科横断的な教育課題について、総合的な学習の時間を使って、単発的・イベント的に対応する授業。	教科横断的な教育課題について、総合的な学習の時間や課題研究等を核としながら、各教科・領域における関連単元を見出し、教育課題や学習対象に多面的・多角的・総合的にアプローチし、児童生徒の知の総合科を図る授業。

表１　授業改善とカリキュラムマネジメント[4]

高校では「教科書をこなす」授業になりがちだが、カリキュラム・マネジメントを機能させることで、意図的・効果的・効率的に「結果を出す」授業に改善することができる。

２．カリキュラム・マネジメントの定義

次に「学習指導要領総則の構造とカリキュラム・マネジメントのイメージ」[5]と『高等学校学習指導要領（平成３０年告示）解説　総則編』[6]における説明を確認する。

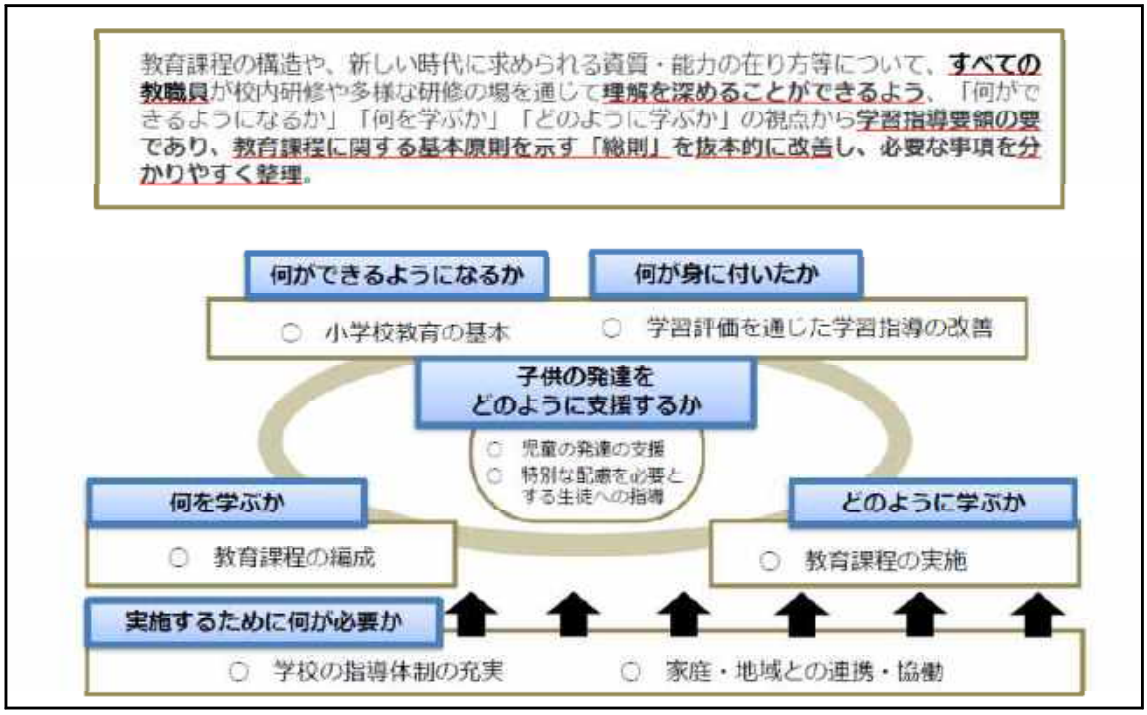


図２　学習指導要領総則の構造とカリキュラム・マネジメントのイメージ

教育課程はあらゆる教育活動を支える基盤となるものであり，学校運営についても，教育課程に基づく教育活動をより効果的に実施していく観点から組織運営がなされなければならない。カリキュラム・マネジメントは，学校教育に関わる様々な取組を，教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施・評価し，教育活動の質の向上につなげていくことであり，本項においては，平成２８年１２月の中央教育審議会答申の整理を踏まえ次の三つの側面から整理して示している。具体的には，生徒や学校，地域の実態を適切に把握した上で，

- 教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，
- 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，
- 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

などを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことと定義している。　　下線部は筆者

カリキュラム・マネジメントは、「学校教育に関わる様々な取組を，教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施・評価し，教育活動の質の向上につなげていくこと」と定義され、そのために①「教科横断的な視点」を取り入れたり、②「教育課程の評価や改善」のＰＤＣＡサイクルを意識したり、③「人的・物的な体制づくり」をしたりすることが求められている。

さらに、「平成３０年度改訂の高等学校学習指導要領に関するＱ＆Ａ」[7]（令和元年１１月１８日）では、カリキュラム・マネジメントの具体的な実践について説明をしている。

〈総則に関すること〉

（高等学校）

問６　カリキュラム・マネジメントとは，具体的にどのような実践をしたらよいのでしょうか。

（答）

「カリキュラム・マネジメント」のねらいは「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」（総則第１款５）にあります。

各学校では，これまでも，学校の教育目標の実現に向けて，教育課程の編成の基本方針を定め，各種指導計画を作成し，指導体制を含めた校務分掌を整え，授業の実施に必要な予算を配当したり，地域からの協力を得ながら，それらに基づいた日常の授業を展開し，授業の成果や課題を見取ったりしながら，次年度の改善につなげるといった形での教育活動の質の向上を図ってきていると思います。

新学習指導要領の下ではますます，自校にある「学校の教育目標」や，その実現に向けた「教育課程の編成の方針」，「各種指導計画」，「校務分掌や予算の配当などの人的・物的な体制」が，自校の教育活動の質を最大限に高めることができるものとなっているか，教科等を超えて育成される学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応する資質・能力がねらいどおりに育成されているか，地域の人的・物的資源の活用について考えることはできないか，といった点について，学校として組織的，計画的，継続的に，その実施状況を把握して，改善を図っていく視点をもつことが重要です。

「カリキュラム・マネジメント」の充実を図るためには，例えば，①学校評価との関連付けを図り，PDCAサイクルを機能させること，②職員会議や学年会，教科主任会など既存の関連の会議の場を生かすこと，③学校運営協議会や学校評議員会，保護者説明会，学校だよりなどを活用すること，などが考えられますが，それぞれの学校の実態に応じて，既存の取組や組織を生かしつつ，その取組の質の向上を図っていくことが求められます。

カリキュラム・マネジメントの具体的な実践の手立てとして、①「学校評価との関連付け」を図ったり、②「職員会議や学年会、教科主任会」や③「学校運営協議会や学校評議員会、保護者説明会、学校だより」を活用したりして、既存の取組や組織を生かしつつ、ＰＤＣＡサイクルを機能させることを例示している。

３．カリキュラム・マネジメントの構造

ここでは田村知子氏の開発した「カリキュラムマネジメント・モデル」[8]をもとに、カリキュラム・マネジメントの全体構造を確認する。このモデルは、カリキュラム・マネジメントの「定義」や「具体的な実践」を理解する上で、どのような要素が、どのような関係にあるかを俯瞰的に分析する上で効果的で、このモデルをもとに作られた「カリキュラムマネジメント・チェックリスト」と共に広く活用されている。

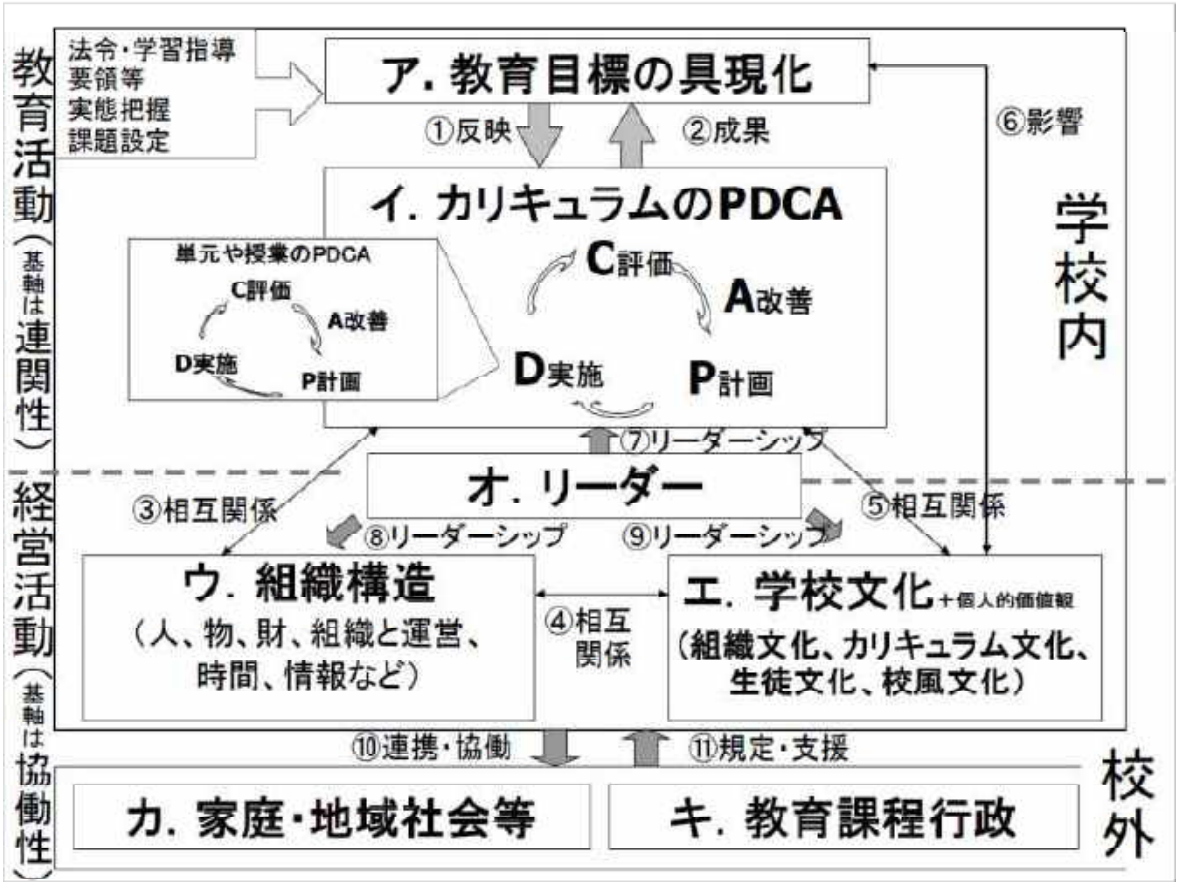


図３　カリキュラムマネジメント　モデル

田村氏は、この「カリキュラムマネジメント・モデル」の活用法を次のように解説する[9]。

> このカリキュラムマネジメント・モデルは、教育課程経営論やカリキュラムマネジメント論の先行研究の検討と、筆者自身による質的調査と量的調査による検証を経て開発したものです。カリキュラムマネジメントをとらえる際に考慮すべき要素を示しただけでなく、要素間の関係性が示されている点が特徴的です。分析する際も、ぜひ、要素間の関係性、相互の影響関係を意識してください。

本県では、各県立高等学校（中等教育学校を含む）３８校にカリキュラム・マネジメント担当者を配置し、「資質・能力育成研究会」（マネジメント部門）の研修会等において、この「カリキュラムマネジメント・モデル」と「カリキュラムマネジメント・チェックリスト」[10]を活用し、継続的に各校の実態分析を実施した。ここでは、この構造図の解説と第１回目の研修会等で出された各校の現状を併せて記載する。

表２　「カリキュラムマネジメント・モデル」を活用した実態分析

系列	要素	内容	現状
教育活動 教育の目標・内容・方法	**ア．教育目標の具現化**	「教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」（総則解説）。各校の教育目標は「法令や学習指導要領等、生徒や学校や地域の実態」を踏まえて設定する。	どの学校でも教育目標や重点目標を設定しているものの、それを職員全体が意識して教育活動を行っておらず、教育目標が「形骸化」している学校が多い。
	イ．カリキュラムのＰＤＣＡ	「教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと」（総則解説）。目標を具体化するための具体的な手段（教育の内容・方法）が「カリキュラムのＰＤＣＡ」になる。したがって、教育目標はカリキュラムに反映される。	高校の教科・科目は、高度化・細分化されているため、「教育目標」と「カリキュラム」の関連性を見いだしにくい。それゆえ「教科横断的な視点」で教育課程の編成をすることに困難さを感じている。
経営活動 条件整備	**ウ．組織構造**	「教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと」（総則解説）。カリキュラムを実際につくり動かしていくための「人（人材育成を含む）、物（時間や情報を含む）、財、組織と運営」のこと。	一般的に管理職による「組織マネジメント」の領域と考えられているようだが、「教育活動」と「経営活動」を一体的に考えるためには、全職員が関わる体制づくりが求められる。
	エ．学校文化	各学校の教員が共有している「組織文化」、生徒が共有している「生徒文化」、学校に定着した「校風文化」の集合のこと。「文化」は継続的に共有された考え方や行動様式のことをさす。	「学校文化」は可視化できないものだが、カリキュラム・マネジメントに少なからず影響を及ぼしていることに、多くの教員が納得されていた。
	オ．リーダー	校長や副校長、教頭、教務主任、研究主任などのリーダー層のこと。リーダーシップは、直接的に教育活動に働きかける教育的リーダーシップ（矢印⑦）、間接的に教育活動を支援する管理・技術的リーダーシップ（矢印⑧）、学校内の人間関係や校風をポジティブなものに変え、教育活動を活性化する文化的リーダーシップ（矢印⑨）がある。	高校の授業では、個人の裁量によるものが大きいため、一人ひとりの教員が、学校の教育目標やカリキュラムを理解した上で、主体的・自律的に取り組めるようマネジメントすることが重要。「個人プレー」になりがちな学校組織を「組織プレー」ができるようにすることが課題。
	カ．家庭・地域社会等	「社会に開かれた教育課程」で求められている保護者や地域社会、企業といった外部関係者のこと。また、「チームとして学校」では、「教員と多様な専門性をもつ職員が一つのチームとして、それぞれの専門性を生かして、連携、協働すること」を求めている。	外部関係者と連携をコーディネートすることに苦労している学校が多く、双方に利益のある「Win & Win」のパートナーシップを構築することが今後の課題。
	キ．教育課程行政	文部科学省や教育委員会による予算措置や加配、指導主事の訪問などの支援のこと。	「カリキュラムマネジメントが分かりにくい」という声を受け、本県では文科省の調査研究、カリキュラム・マネジメント担当者の配置や研修会等を実施している。

４．カリキュラム・マネジメントの実態分析から見える諸課題

⑴カリキュラムマネジメント・チェックリストの集計結果の推移

下記は、田村知子氏の作成した「カリキュラムマネジメント・チェックリスト」を、本県の実状に合わせて加筆・修正し、研修会等で活用したものである。１回目は令和元年６月に、２回目は令和２年１２月に実施した。全体的に集計結果は上昇しているため、研修会や実践研究等を通して、各校のカリキュラム・マネジメントの取組が進んだことが伺える。

このチェックリストには、各校が気づいたことや、改善策等も記述しているので、それらをもとに２年間の取組で見える諸課題をまとめた。

カリキュラムマネジメント・チェックリスト　集計結果の推移

○評価

４よくあてはまる　３どちらかといえばあてはまる　２どちらかといえばあてはまらない　１ほとんどあてはまらない

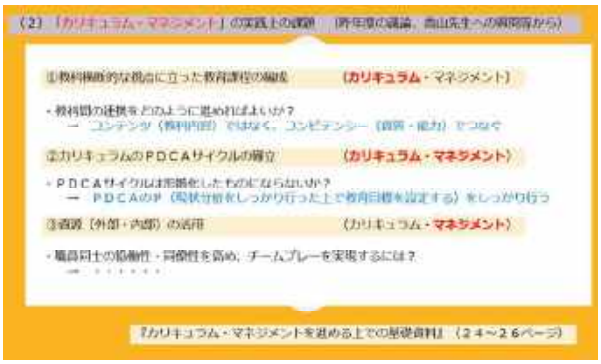
要素	カリキュラム・マネジメントの基本的な実践内容	R１（６月）評価	R２（１２月）評価	記述（気づいたこと、改善策）
ア　学校の教育目標	1．学校の教育目標や重点目標は「生徒に育成を目指す資質・能力」として具体的に記述されている。	3.7	3.7	教育目標を設定はしているものの、職員がそれを意識していない状況は続いている。CM実践校が教育目標をコンピテンシーとして整理していたので、各学校の教育目標の見直しが進んでいる。
	2．学校の教育目標や重点目標は、生徒や学校の実態を踏まえて設定されたものである。	3.7	3.7	
	3．ほとんどの教員は、学校の教育目標や重点目標を具体的に説明できる。	2.5	2.7	
イ　カリキュラムのＰＤＣＡ Ｐ　計画	4．学校経営計画、各校務分掌経営案、学年経営案は、それぞれの目標や内容が連動するように作成されている。	3.3	3.4	R1に比べ学校経営案、校務分掌経営案、学年経営案が連動できるように検討が進んでいる。令和４年度からの新教育課程の実施を踏まえ、観点別学習状況評価による評価計画・授業計画の検討が進んでいる。
	5．各学年、各教科等の学習の目標や内容の相互関連をわかりやすく示した図や表が作成されている。	2.0	2.5	
	6．年度当初に教育課程を計画する際、評価規準や方法、時期なども合わせて計画している。	2.9	2.9	
Ｄ　実施	7．ほとんどの教員は、学校の教育目標や重点目標を意識して授業や行事に取り組んでいる。	2.8	3.0	R1は「各教科等の教育目標や内容の相互関連を意識」することに課題があったが、R2「総合的な探究の時間」を中心とした教科横断的なカリキュラムや各教科の系統性を意識した授業の検討が進んでいる。
	8．ほとんどの教員は、各教科等の教育目標や内容の相互関連を意識して、日々の授業を行っている。	2.6	2.9	
	9．ほとんどの教員は、既習事項や、先の学年で学ぶ内容との関連（系統性）を意識して指導している。	2.9	3.2	
Ｃ　評価	10．ほとんどの教員は、学校の年間指導計画の改善に役立つような記録（メモ）を残している。	2.5	2.7	「学校として取り組んでいる授業研究が学校の課題解決に役立っているか」については、各校で教育目標の見直しが進んだことで、授業研修のあり方なども改善が進んだ。
	11．生徒の学習成果の評価だけでなく、教育課程や授業の評価も行っている。	2.5	2.8	
	12．学校として取り組んでいる授業研究が学校の課題解決に役立っているかについて評価している。	2.3	2.8	

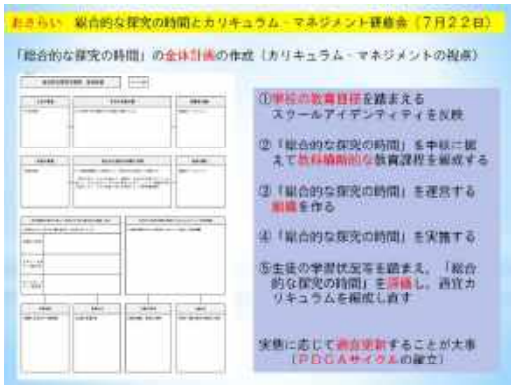
A　改善	13. 教育課程の評価を、確実に次年度に向けた改善活動につなげている。	2.7	2.9	R1に比べ「高校生のための学びの基礎診断」等の外部評価ツールの活用が進んでいるが、ＰＤＣＡサイクルを確立する手立てになっているかは今後の課題。「教育課程の評価」についてもまだ理解が進んでいない。
	14.「高校生のための学びの基礎診断」等の外部評価ツールの分析結果が、対象学年・教科だけでなく学校全体の指導計画や授業改善につなげられている。	2.1	2.5	
	15. ほとんどの教員は、学校の授業研究の成果を日常の授業に積極的に生かしている。	2.7	3.1	
ウ　組織構造（人、物、財、組織と運営、時間、情報など）	16. 教育課程の編成、評価や改善には全教職員が関わる組織体制が整備されている。	2.7	3.0	R1はカリキュラム・マネジメントの「組織体制」や「時間の確保」に課題があったが、R2では改善が図られている。カリキュラム・マネジメントに対する職員の参加意識の向上や「働き方改革」によるタイムマネジメントが進んでいる。
	17. めざす教育活動を行うために必要な研究・研修ができるよう時間の確保への配慮がなされている。	2.5	3.0	
	18. 教職員が、他校や研修機関などの学校外での研修に積極的に参加できるように支援されている。	2.9	3.1	
	19. めざす教育活動を行うために、教員以外の学校内外のスタッフ（事務職員、理科支援員等）と連携協力している。	2.9	3.0	
エ　組織文化	20. 新しい実践への挑戦が奨励され、挑戦の結果失敗しても個人が責められない安心感がある。	2.8	3.4	R1に比べ学校の「組織文化」については、全体的に上昇している。特に「新しい実践への挑戦が奨励される」ようになったが、教員の「学校が力を入れている実践（特色）」の理解度は低い。スクールミッションの共有化は今後の課題。
	21. 大方の教職員は、学校が力を入れている実践（特色）を具体的に説明できる。	2.6	3.0	
	22. 大方の教職員は、自己の知識や技能、実践内容を相互に提供し合う姿勢がある。	2.7	3.1	
	23. 大方の教職員は、学級や学年を越えて、生徒の成長を伝え合い、喜びを共有している。	3.1	3.4	
オ　リーダーシップ	24. 校長は、教育と経営の全体を見通し、ビジョンや戦略を示している。	3.4	3.7	R1に比べリーダーシップについても全体的に上昇している。管理職をはじめそれぞれの教員が、役割に応じたリーダーシップを発揮している。ただ、中堅教員だけは低くなっているため、ＯＪＴによる人材育成が今後の課題。
	25. 副校長・教頭は、ビジョンの具体化を図るために、学校として取り組む体制や雰囲気づくりに尽力している。	3.2	3.7	
	26. 中堅教員は、ビジョンをもとにカリキュラムの工夫や研究推進の具体策を示して実行している。	3.3	3.2	
	27. 大方の教職員は、立場や役割に応じて、リーダーシップを発揮している。	2.8	3.1	
カ　家庭・地域・社会	28. 学校の教育の成果と課題を保護者・地域と共有し、共に解決策を考えたり行動したりする機会がある。	2.7	3.0	R1に比べ「学校外の施設」「地域の人材や素材」の活用度の改善が見られ

	29. めざす教育活動のために、図書館・博物館・科学館等の学校外の施設を積極的に利用している。	2.1	2.3	た。「チームとしての学校」の認識のもと、外部リソースの積極的な活用が、進んでいる。
	30. 地域の人材や素材を積極的に活用する教職員が多い。	2.3	2.8	
キ　教育課程行政	31. 指導主事等の訪問の機会を積極的に活用している。	2.2	2.6	教育課程行政による「学校訪問」「教員研修」「資料」の活用に改善が見られた。
	32. 多くの教職員が、国や教育委員会主催の教員研修に積極的に参加している。	2.1	2.6	
	33. 国や教育委員会が提供している資料等を積極的に活用している。	2.1	2.8	

田村知子・村川雅弘・吉冨芳正・西岡加名恵　編著『カリキュラム・マネジメントハンドブック』（ぎょうせい）をもとに作成

研修で使用したスライド





研修会の様子

⑵「各校のカリキュラム・マネジメントの現状と課題」の推移

カリキュラム・マネジメント研修会において、毎回「各校のカリキュラム・マネジメントの現状と課題」についてレポートをもとに研究協議を行っている。ここでは、令和元年１１月２１日と令和２年１０月２７日に作成された３校のレポートから、「各校のカリキュラム・マネジメントの現状と課題」の推移を確認する。

Ａ高校　　※一部修正あり（筆者）

	カリキュラム・マネジメント現状と課題
Ｒ１	本校では、これまでの教育活動の見直しと改革を目的に、令和元年度より「学校改革推進委員会」を設置した。令和元年度の改革目標は、「〇〇高校のグランドデザイン」を完成させることである。このグランドデザインは、本校の「教育目標」を軸に据え、「育てたい生徒の資質・能力」を明示した上で、本校の教育活動等を全体に一貫性のあるものとして表現するものである。４月から１１月現在までに１４回の会議を行ってきた。主な検討内容は以下の通りである。 ・複数の他校のグランドデザインの検討 ・本校の実態・課題の共有（職員研修において生徒の実態把握のため SWOT 分析を行った） ・グランドデザインの全体図（内容、構成）の検討 ・グランドデザインの用途（何のために誰に向けて使うのか）の検討 ・育てたい資質・能力の検討 ・学校で共有したい「どのような生徒を育成したいか」の検討（職員会議でも説明を行った）」 １１月現在、「育てたい資質・能力」（何ができるようになるか）を精選し、分かりやすく表現するために、各教科・各校務分掌・各学年で協議することを依頼中で、今年度中に完成予定である。
Ｒ２	昨年度から本年度にかけて、学校改革推進委員会を中心としながら、生徒に身に付けさせたい資質・能力を洗い出し、本校のグランドデザインが作成された。各教科や校務分掌を通じて、生徒に身に付けさせたい資質・能力を検討し、図式化したが、PDCA サイクルでの C 段階やルーブリック評価まで行き着いていない。 また、主に年２回の学校評議員会で学校全体の外部評価を受けるが、本講義で指摘のあった本校の存在意義を考えるまでに至っているかは疑問である。外部資源活用の視点からも、今後は多くの利害関係者を巻き込み、この学校の存在意義を明らかにしていかなければ、独立〇〇高校の意義も薄れてしまうと感じている。 本校では、現在令和４年度の学科改編に向けての協議を進めている。しかし、内部の教員だけで知恵を絞っているだけでは、新しい時代に向けた教育には届かない。この点からしても、開かれた教育課程を生み出すため、地域と学校を結びつけてくれるコーディネータの選出から改めて考えていきたい。

B高校　　※一部修正あり（筆者）

	カリキュラム・マネジメント現状と課題
R１	**１．本校の現状** 本年度から朝課外を廃止するとともに授業を４５分に短縮し、月・火・木・金に３５分間の「〇〇プログラム」を開始した。１年生は中学校の復習、２年生は高校１年生の復習から開始し、基礎学力向上を目指して全職員で取り組んでいる。授業については各教科等の教育目標を踏まえ、系統性を意識した指導がなされている。〇〇科は課題研究に取り組んでおり、個々の課題を設定し、研究発表・〇〇市への提言に向けて大学や地域に専門家の協力を得ながら調査・研究を行っている。 授業力向上の取組は、相互授業旬間に授業研究及びその評価を実施している。授業者と参観者のポイントを事前に協議した上で相互の授業参観を行い、教科会の中でお互いに学んだことを共有する形を取っている。「学習及び生徒指導に関するアンケート」を年２回実施し、アンケート項目の内容を踏まえて授業改善に取り組んでいる。 **２．課題** ・学校経営計画と各分掌の目標、学年の重点目標は連動しているが、各教科の目標との関連性について図示がなく、教科を越えた指導に対する共通理解と取組に十分活かせていない。 ・教育目標は共有しているが、その中で示されている普遍的な表現を、どのような段階を経て具現化させるのか、また実施にそれがどの程度生徒の能力育成に結びついているのかを評価する共通した指標がなく、教科任せ、担任任せになっている。 ・教育課程について全職員が関わることができるものの、複数の会議を経ての集約になるため、機能的に合意形成ができない。 ・日常的に研修する時間を確保することが難しい。
R２	本校では全職員への周知がほとんどできておらず、全体的な取り組みがあまり進んでいない。情報提供や校内研修等を他校の取り組みを参考にしながら進めていかなければならない。以下にカリキュラムマネジメントの３つの側面についての本校の実施状況を記載する。 **①教科横断的な視点で、学校の教育目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく。** →年度始めに学校長がグランドデザインを作成しているが、学科・部・学年・教科がそれぞれその実現にむけて個々に動いている。組織・横断的な取り組みが実施できていない。 **②各種調査・データに基づく教育課程の編成およびPDCAサイクルの確立** →テスト前の学習量調査や授業評価を実施し集計しているが、各職員が個々に活用するだけで終わっている。全職員で共有し、本校の課題や改善策を見いだす資料としなければならない。教育課程の評価（C)や改善(A)につながる計画(P)を立てる必要がある。 **③教育活動に必要な人的・物的資源、地域の外部資源の効果的な活用** →総合的な探究の時間におけるメンターとして地元企業の社長や市役所職員の方にご協力を頂いている。地域との繋がりをさらに強めていきたい。

C高校　　※一部修正あり（筆者）

	カリキュラム・マネジメント現状と課題
Ｒ１	**【現状】** **○身につけさせたい５つの力** 「問う力・見る力・試みる力・繋がる力・関連付ける力」という身につけさせたい５つの力を策定し、総合的な学習（探究）の時間を核としながら、職員・生徒間の共有化を進めている。今年度の授業研修週間において、全職員が「５つの力（いずれかを選択。複数可。）を身につけさせるための工夫」という共通テーマで、教科の枠を超えて相互に授業参観を行ったことで、身につけさせたい５つの力についての共通理解が深まったとともに、課題を明らかにすることができた。 （ア　学校の教育目標、イ　カリキュラムのＰＤＣＡ、ウ　組織構造） **○タテ（系統的）の学びとヨコ（教科等横断的）の学びの充実** 学年リーダー会において系統的な学び、教科代表者会において教科等横断的な学びについての議論を行っている。３学年合同（１～３年）の国語の授業や、国語×英語、数学×体育、総合学習×社会など、チャレンジングな授業実践も増えてきている。 （イ　カリキュラムのＰＤＣＡ、エ　組織文化） **○地域等の外部の人的・物的資源の効果的活用** 開校当初から取り組んでいる○○学習では、地域内外の方々との交流や地域資源の活用を通した体験的学習が充実している。 （イ　カリキュラムのＰＤＣＡ、ウ　組織構造、カ　家庭・地域・社会） **【課題】** **○５つの力を身につけさせるための具体的スキルの設定と共有化** 身につけさせたい５つの力自体が、やや大義的であるため、それを身につけさせるための具体的スキルを設定していくことが課題である。現在は、あらゆる教育活動に関わってくる「思考力」の定義化と細分化を検討している。これが、コンピテンシーベースの教科等横断的な学びをより充実させていくことにも繋がると考えている。 （ア　学校の教育目標、イ　カリキュラムのＰＤＣＡ） **○「カリキュラム・マップ」の作成** 各学年、各教科、さらには各種行事等の目標や内容の相互関連、身につけさせたい連関性を可視化するための図や表を作成し、職員・生徒・保護者等と共有化を密にしていくことが課題である。まずは、簡単なものを作成し、教育活動と並行しながら修繕を加えていきたい。 （イ　カリキュラムのＰＤＣＡ、ウ　組織構造） **○評価と改善の充実** 職員アンケートの結果からも低い評価であった「教育課程や授業の評価」、「外部評価ツールの分析結果を踏まえた学校全体の指導計画や授業改善」をどう進めていくかが課題である。学力検討会等で話題になるのは、対象学年や教科のことになりがちで、本校で育てたい生徒像とつなげていくことを今後はさらに意識していかなければならない。 （イ　カリキュラムのＰＤＣＡ、ウ　組織構造）

Ｒ２	【現状】 ・教育目標の具現化については、「身につけさせたい５つの力」を各教科の目標との連関性を可視化する形で整理するとともに、各科目におけるシラバスに明記することで、今まで以上に全職員で共有化・意識化できるような手立てを行った。 ・教科等横断的な視点を可視化するために、各科目のシラバスの中に、「何と繋がるか（教科等横断的要素）」という項目を設けることで、より横断的な視点を意識する手立てを行った。 ・地域等の外部の人的・物的資源の効果的な活用としては、コロナ禍にはありながらも、ＩＣＴ活用のさらなる充実を図り、授業はもとより様々な教育活動において、有効な取組を行うことができている。 【課題】 ・「身につけさせたい５つの力」のさらなる共有化と具現化が必要である。授業だけではなく、学校行事などにおける観点を整理・可視化し、個々の教育活動の評価・改善につなげていく必要がある。 ・「教育課程や授業の評価」、「外部評価ツールの分析結果を踏まえた学校全体の指導計画や授業改善」をどう進めていくかが依然として課題である。学力検討会等で話題になるのは、対象学年や教科のことになりがちで、本校で育てたい生徒像とつなげていくことをさらに意識していく必要がある。

公開授業・研究協議の様子

NP9 評価表　高校３年間で S をめざそう！

都城西高校では９つの資質・能力を向上させ、S レベルを身につけて卒業することを目標としています。

	C	B	A	S
①コミュニケーション能力	自分の意見や心情を言葉や文章にして、他者に伝えることができる	他者の意見や心情を理解し、それを言葉や文章にして表現することができる	自分の意見をわかりやすく伝え、他者の意見を聞くことができる	自分の意見をわかりやすく伝え、他者の意見を取り入れることができる
②論理的思考力	物事をどう考えればよいか、方法・知識を持っている	物事を客観的にとらえるために必要な情報を、収集・分析することができる	物事を客観的にとらえ、根拠を立てて説明することができる	物事を客観的にとらえ、根拠を立てて考えたり、わかりやすく説明できる
③課題発見・解決能力	疑問を感じたことについて、質問をしたり調べたりすることができる	身の回りの疑問を解決する方法を考えることができる	身の回りの問題点の解決策を具体的に考えることができる	身の回りの問題点に疑問を感じ、その解決に向けて具体的に行動できる
④文化・歴史に対する理解と関心	自身の文化や歴史に興味・関心を持っている	日本や自分が生まれ育った地域のことについて、調べる方法を知っている	日本や自分が生まれ育った地域の様子を、自分の言葉でまとめることができる	日本や自分が生まれ育った地域のことを知り、その良さを発信できる
⑤社会問題に対する関心	新聞やニュースなどを通じ、国内外や地域社会の課題に関心を持っている	国内外や地域社会の課題を自分や自分の将来と関連付けて考えることができる	国内外や地域社会の課題を自分事としてとらえ、解決策を考えることができる	国内外や地域社会の課題を自分事としてとらえ、解決に向けて行動できる
⑥多様性への理解	身近なところにも、さまざまな意見、立場、考え、生活習慣の人たちがいると理解できる	共生社会を実現するための正しい知識を身に付け、差別や偏見に気づくことができる	差別や偏見をなくすための具体的な方法を考えることができる	共生社会を実現するための正しい知識を身に付け、差別や偏見をなくそうと行動できる
⑦ＩＣＴ活用能力	パソコンや情報機器を使い、文書を作成したり、必要な情報を集めることができる	情報及び情報技術を活用するとともに、情報セキュリティについて理解し、守ることができる	情報及び情報技術を適切に活用して、自分の意見を発表したり、表現したりすることができる	様々な事象を情報とその関係としてとらえ、情報及び情報技術を適切に活用して考えを形成し、問題の解決に向けて行動できる
⑧主体的・協働的な姿勢	自分の属する集団の中において、他者とともに活動することができる	自分の属する集団の中において、自分の役割について考えることができる	よりよい集団関係を作り上げるためにはどうすればよいかを話し合い、行動することができる	自分の考えに基づき、あらゆる現場の人々と協力して行動できる
⑨グローバル社会への対応	世界の言語や文化・歴史について、興味・関心を持っている	世界の共通の価値観や世界規模の課題について、興味・関心を持っている	世界共通の価値観や世界規模の課題に対応していく方法を考えることができる	世界共通の価値観や世界規模の課題に対応していくために、生涯にわたって学び続けることができる

都城西高校で身に付けさせたい９つの資質・能力（ＮＰ９）

ポスターとして掲示して、教育活動のゴールイメージを可視化し、教員と生徒の共通理解を図る

１．カリキュラム・マネジメント推進事業の概要

⑴カリキュラム・マネジメント実践校と「資質・能力育成研究会」との連携

本県のカリキュラム・マネジメントの推進は、文科省委託事業「カリキュラム・マネジメントの調査研究」と県の事業「資質・能力育成研究会」（マネジメント部門）を連動して実施している。この章では、第２節でカリキュラム・マネジメント実践校３校の取組を、第３節でカリキュラム・マネジメント研修会の取組を掲載する。そして第４節では、主に研修会で話題になった課題や質疑応答でのやりとりを「Ｑ＆Ａ」形式で掲載する。

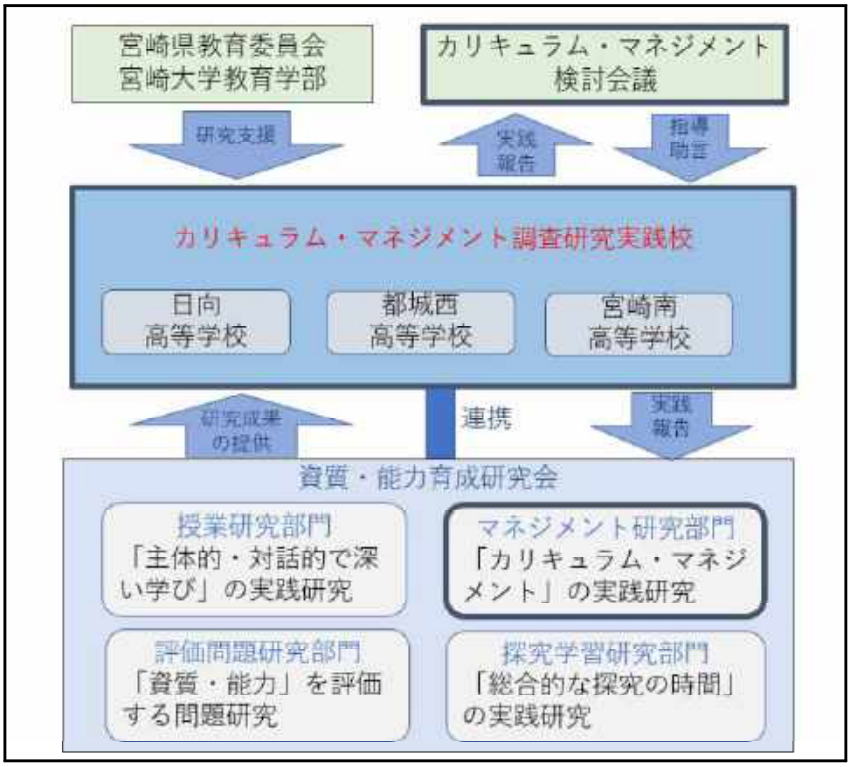


図１　カリキュラムマネジメント推進事業の組織体制

●カリキュラム・マネジメントの実践研究　文部科学省委託事業	
研究テーマ	実践校
a 学校の教育目標等の設定及び実現に向けた研究	日向高等学校
b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究	都城西高等学校
c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究	宮崎南高等学校

連携

●カリキュラム・マネジメントの研修会　資質・能力育成研究会（マネジメント研究部門）		
	研修名	対象
R 1	第１回カリキュラム・マネジメント研修会 第１回総合的な探究の時間とカリキュラム・マネジメント研修会 第２回カリキュラム・マネジメント研修会	ＣＭ担当 総探担当 ＣＭ担当
R 2	第２回総合的な探究の時間とカリキュラム・マネジメント研修会 第３回カリキュラム・マネジメント研修会（オンライン）	総探担当 ＣＭ担当

⑵カリキュラム・マネジメント実践校の研究内容

①事業名

これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究

②目的

カリキュラム・マネジメントの充実を図るための実証的な調査研究を行い，その成果を普及することにより，各学校におけるカリキュラム・マネジメントの取組を支援する。

③研究内容

⑴以下のabc のテーマに沿った実践研究を行い、研究成果をまとめる。

a 学校の教育目標等の設定及び実現に向けた研究

b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

⑵ 各学校がカリキュラム・マネジメントに取り組む際の手引きを作成する。

④学習指導指導要領（総則）との関連性

上記のａ～ｃのテーマは『高等学校学習指導要領（平成３０年告示）解説　総則編（抄)』[11]の下記の解説と関連がある。

> 第２節　教育課程の編成
>
> １　各学校の教育目標と教育課程の編成
>
> １　教育目標の設定と実現
>
> 教育課程の編成に当たっては，学校教育全体や各教科・科目等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ，各学校の教育目標を明確にするとともに，教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。その際，第４章の第２の１に基づき定められる目標との関連を図るものとする。
>
> ２　教科等横断的な視点に立った資質・能力
>
> ⑴学習の基盤となる資質・能力
>
> 各学校においては，生徒の発達の段階を考慮し，言語能力，情報活用能力（情報モラルを含む。)，問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう，各教科・科目等の特質を生かし，教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。
>
> ⑵現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力
>
> 各学校においては，生徒や学校，地域の実態及び生徒の発達の段階を考慮し，豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を，教科等横断的な視点で育成していくことができるよう，各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。　（傍線　筆者）

次に、カリキュラム・マネジメント実践校３校（日向高等学校、都城西高等学校、宮崎南高等学校）の令和２年度の実施計画書によって、各校の取組の概要を紹介する。

a　日向高等学校

（１）研究テーマと内容

a 学校の教育目標等の設定及び実現に向けた研究
～「学校魅力化プロジェクト」カリキュラム･マネジメントで生徒を伸ばす～

昨年度、教育目標の中にスクールコンセプトを取り入れ、地域・生徒・職員での共通理解が図られるものとなった。今年度については、PDCAのDに重点を置きつつ以下の取組を実践していく。

①学校行事とスクールコンセプトとの関連づけの作業
②学校行事実施後の職員・生徒双方へのアンケート
③教育課程(特に教科・科目)におけるスクールコンセプトとの関連づけの作業
④生徒のスクールコンセプト力向上のための手立て

特に、今年度は、行事が新型コロナウイルスの影響を受け、十全には実施できない状況がある。そのような中で改めて各種行事の意義や生徒が成長する為の必要な要素を整理していきたいと考えている。

（２）学校・地域の実態

良い点

素直な生徒が多く日向市の協力もあり落ち着いた学校生活を送っている。職員の連携もよく中規模校として地域から一定の評価を受けている。特にフロンティア科の探究学習は重厚な取組が評価されており、話題として取り上げられることも多い。

改善すべき点

学校の教育課程や教育目標に基づいた教育活動というよりも先生方のマンパワーに頼り生徒に多大な影響を与えている現状がある。また、４５分授業を実施しているが、十分に生かされているとは言えない。働き方改革の視点からも職員間の共通理解を図り生徒自らが改善の意識を持って高校生活を過ごしていけるように取り組んでいきたい。

（３）研究体制

研究主体は学校ビジョン委員会(教頭が主催。教務主任、生徒指導主事、進路指導主事、各学年主任、フロンティア科主任)となる。以下、関係について記す。

・ビジョン委員会は、各種委員会と同列の位置づけであり、決定機関ではない。
・ビジョン委員会で、各部・教科等から出された意見を短期・中期・長期的な課題として分類・整理し検討していく。
・ビジョン委員会での試案を該当部・教科等に検討を依頼し、平行して運営委員会で審議する。
・課題の重要度・喫緊性に応じて運営委員会での決定や職員会議を経ての決定等、その都度、校長と審議しながら確定していく。

b　都城西高等学校

（１）研究テーマと内容

b　学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
～「資質・能力」を育成する教科横断的なカリキュラムの実践研究～

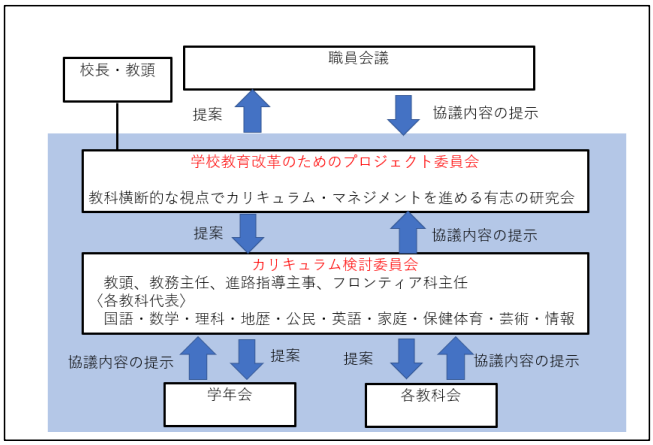
学校教育目標として設定した「生徒に身に付けさせたい資質・能力」である９つの資質・能力を「ＮＰ９」と名付けるとともに、本校におけるルーブリック評価表である「ＮＰ評価表」を検討、作成した。この評価表をもとに、各教科でＲ２年度１年次の年間指導計画を作成。その中から１つの単元について単元計画、１単位時間の指導案を作成するというPlanはできている。Ｒ２年度は、各教科で研究授業を行い(Do)、検証(Check)、評価(Action)の段階に入っていく。新学習指導要領開始に向けた授業改善の取組として教職員に意識付けをしながら、生徒の成長と変容のための取組を通じ、教職員の資質･能力を高めていきたい。

（２）学校・地域の実態

平成１５年に合同選抜制が廃止されて以降、生徒の学力差も顕著になり、進路目標の多様化も進んでいる。大半が普通科高校における経験の豊富な教職員で占められているが、中学校までの学習到達度が不十分な生徒へのきめ細かな指導が行き届いているわけではない。また、教職員の定員減少により、各種の業務や特別活動、部活動の指導において、負担感も増している中で、経験年数の浅い教職員へのＯＪＴも充実しているわけではない。ただ、地域との結びつきが以前から強いため、平成１０年度からボランティア活動を継続的に実施し、学校の特色づくりに生かしている。地域のなかでさまざまなことを体験し、協働し、創造していくなかで、地域の良さを学び、コミュニティを支える意欲や能力を、各教科等との関連で育成していくことも求められる。

（３）研究体制

教頭、教務主任、進路指導主事、フロンティア科主任と各教科代表によって構成されるＮＰ委員会を「カリキュラム検討委員会」として、具体的な研究協議を進める。また、「学校教育改革のためのプロジェクト委員会」を「カリキュラム検討委員会」のメンバーとは違う有志によって組織し、教科横断的な視点で研究を進める。この二つの委員会を有機的に機能させることで、本校の「カリキュラム・マネジメント」を多角的・多面的に検討できるようにする。



c　宮崎南高等学校

（１）研究テーマと内容

c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究
～「総合的な探究の時間」を中心とした教科横断的カリキュラムの開発～

本校は本研究とは別に、昨年度から３カ年、文部科学省より「産学官連携による人の地域循環教育プログラムの研究開発」の研究名で指定研究を受けている。この課題研究のカテゴリーは「工学」「食・農業」「教育」「観光スポーツ」「起業」「医療」の６つで、それぞれのカテゴリーに対して生徒グループがそれぞれに設定したテーマで課題研究を行っている。

本研究は、「課題研究」と「各教科」それぞれの取組によって、どれだけ生徒に狙った資質・能力が育成できたかを測ることである。そのために「鵬DP評価」を設定した。以下にその６項目と各項目の定義を示す。

鵬DP評価

１　再認識力　考えたり振り返ったりできたり、得た知識や技能を応用できる力
２　情報収集力　調べるための手段や対象を適切に設定できる力
３　問題発見力　課題を的確に捉えたり、捉えた課題から新たな視点や発見ができる力
４　分析力　論理的に思考できたり、データの特徴を的確に捉えることができる力
５　共感力　自分の意見を主張するだけでなく他者の意見や感情を理解することができ、さらにいろいろな意見を総合してよりよいものを創造することができる力
６　表現実行力　物事を他者に伝えられたり、実際に行動につなげる力

本年度は、この鵬DP評価が実際に生徒にどれくらい育成できたかを「各教科」において、定期的に評価していき、課題研究で育成した力が、各教科の学習においても発揮されることを確かめたい。

（２）学校・地域の実態

①生徒の実態

本校生徒は、明朗で真面目であり、学習だけでなく部活動、ボランティア活動などの課外活動に対しても熱心に取り組むという良さを持っている。しかし、指導者の指示には素直に従うものの、自分で考えて実行する力や、未来を見据えた創造力を持つ生徒は少ないと感じている。

②教員の実態

本校職員は、約９０名で構成されており、そのうち４０～６０代が、約７割で、中堅・ベテランと呼ばれる教員が多く、指導体制も充実している。しかしながら、職務内容の多様化・高度化が進み、教職員の負担が増えている実態が本校にもある。

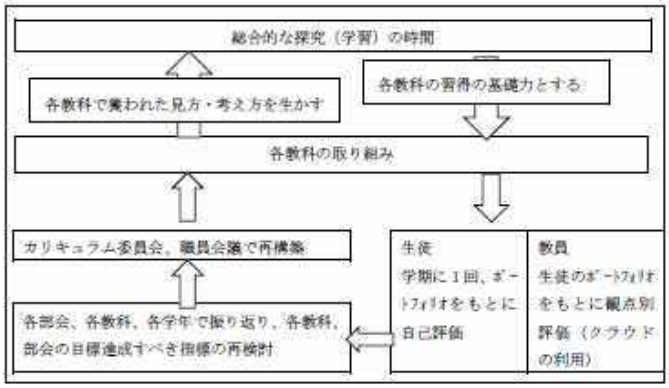
③地域、家庭の実態

本校は来年度創立６０周年を迎える伝統校で、「活性とロマン」をキャッチフレーズに多数の国公立大学合格者を輩出したり、全国高校野球大会出場をはじめとして全国大会出場する部活動の高い実績などを残してきた歴史があり、地域社会や家庭からの期待は現在も大きい。しかしながら、地域社会との交流は減少し、心理的な距離が大きい。また、家庭についても遠距離通学の生徒の保護者や共働きの保護者が増え、学校と家庭との連携を図りにくくなっている状況もある。このように多様化する各家庭への対応の工夫も必要である。

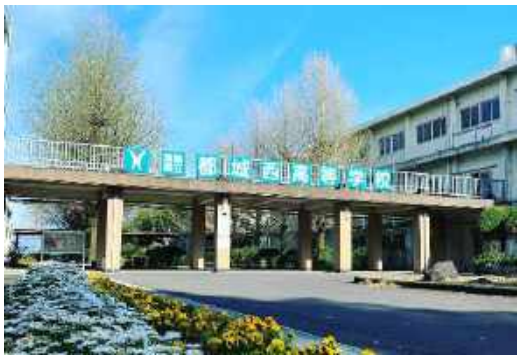
（３）研究体制

右図のように総合的な探究の時間と各授業との取り組みを相互的に評価しＰＤＣＡサイクルを確立する。

Ｐ：カリキュラム委員会、職員会議
Ｄ：各教科の授業、総合的な探究の時間
Ｃ：生徒、教員による評価
Ａ：各教科会、部会、学年会



日向高等学校


都城西高等学校

宮崎南高等学校

カリキュラム・マネジメント実践校の教育活動

２．カリキュラム・マネジメント実践校の取組

(1) 学校の教育目標等の設定及び実現に向けた研究（日向高等学校）

～　「学校魅力化プロジェクト」カリキュラム・マネジメントで生徒を伸ばす　～

１　問題の所在

今回、実践校として取り組む中で特に意識した課題は以下の３点である。

・７割強と言われる普通科高校の存在意義が薄れつつあり、多様な生徒が入学してくる中、職員間の感覚のずれが見られ、共通意識の再確認が必要とされる場面が多々ある。

・それぞれの行事で目標等を設定し取り組んでいるが、関連性が見えにくく学校全体のコンセンサスが取りにくい現状が見られる。結果、行事の精選等も難しくなっている。

・新型コロナウイルス感染症の影響で、行事の変更も多くなり新たな課題にも柔軟に対応できるように取り組む必要がある。

これらの課題を解決するためには職員の力量に大きく左右されず、根幹となる学校目標の設定と共有化、その目標を達成するための取組が必要であると考える。

２　学校の概要

学校の規模

日向市内唯一の普通科高校

生徒数

１年生(普通科４クラス・１３７名、フロンティア科１クラス・４０名、計１７７名)

２年生(普通科４クラス・１４４名、フロンティア科１クラス・３９名、計１８３名)

３年生(普通科５クラス・１４３名、フロンティア科１クラス・３９名、計１８２名)

計１６クラス・５４２名

学校や地域の実態

日向市内の県立高校は、富島高校、日向工業高校、日向ひまわり支援学校、日向高校の４校である。地域に根ざす普通科高校としてその使命を果たすべくさまざまな取組を行っている。中でも探究活動を推進した取組が充実しており、特にフロンティア科は日向市役所や商工会議所等との連携が強く、生徒が課題解決のための様々な活動を行っている。また多様な生徒が入学している実態を踏まえ、個別指導の更なる充実と２年時から普通科にスタンダートコースを設けることで、特技を活かした進学や公務員関係への進路をサポートする体制を次年度から始めることになっている。

なお、定員割れが続いている実態、他地域への進学を目指す中学生が一定数存在することから、本校内部での取組が十分に伝わっていない現状や本校への進学を敬遠する要因があることも事実である。現在、先にも示したように、クラス減、職員減の状況の中でより効率的・効果的な取組が求められている状況にある。

３　実践の計画(目標)

本校ビジョン委員会(学校長の諮問機関)を中心に計画・実践を行う。

（１）　学校経営方針の中から特に「目指す生徒像」の新たな作成

職員研修・職員アンケートを活用としての取組

（２）「目指す生徒像」を核とした学校経営方針の作成
職員研修・職員アンケートを活用としての取組
（３）「目指す生徒像」の生徒用ルーブリック評価・チェックシートを活用した取組
１・２年生へのルーブリック評価・チェックシート等の実施
（４）ルーブリック評価・チェックシート実施後の分析と活用方法
職員研修を活用しデータの活用方法等の検討

４　実践の実際

（１）「目指す生徒像」を議論するに当たり、実践校となる前年度に実施した職員研修での取組が連動する内容であったため前段階として活用することにした。

前年度の職員研修で実施した主なテーマの内容

①授業改善　②学校状況分析　③生徒状況分析　④働き方改革　等

上記の職員研修の中で、ゆとりのある職場環境、地域に貢献・期待される学校になるための改善点が多く話し合われた。ただ、改善の方向性までは熟していない。

これらの取組を踏まえて、令和元年５月の職員研修において

「目指す生徒像」の話し合いを実施。従来の「目指す生徒像」（平成２７年度作成）は

○生命と人権尊重を基盤とした責任ある言動のとれる生徒
○自己を知り目標に向かって学び続ける力を身につける生徒
○何事にも果敢に挑戦し、喜びや成就感の味わえる有意義な高校生活を送る生徒
○地域や日本をリードし、核となる心豊かでたくましい品格のある生徒

となっていた。内容は伝わりやすいものではあるが、生徒目線から見ると、高校生活を上記の４点を意識して過ごすことは難しいと思われる。そこで、キーワードとして記憶しやすい言葉にまとめられないかという形で話し合いを進めた。

以下、各グループ（教科を混在）から出た意見

○社会を生き抜く力のある生徒　○未来を拓く主体性のある生徒
○社会の変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手
○主体的な判断のもとに行動し、自立した生徒
○自立した人間として他者と共によりよく生きる生徒
○主体的に学習に取り組み、多様な人々との協働を図りながら
課題を解決できる生徒　　○人間尊重の精神
○多様な人々との協働力を促す教育の充実
○主体的な判断の下に行動し、自立した人間
○我が国の未来を切り拓く教育　○主体・判断力・地域のリーダー・社会貢献
○豊かな心（広い心）・道徳性　　○宮崎から世界へ、そして宮崎へ
○主体的・困難を乗り越える力・多様性を認める力
○主体性・自発性・自立性・探究心・地域と共に学ぶ
○人間性を重視　　○主体性・他者との協働・自己肯定感
○主体性・協働性・基礎基本・人権・地域　　等

様々な生徒像が出され、その中で上記の４つの言葉がキーワードとして多用されていた。

次回の研修会までにこれらの候補を中心に整理していくことにした。

令和元年７月に実践校教員と共にカリキュラム・マネジメント先進校(山梨県立吉田高校・山梨県立市川高校・東京都立町田高校)を視察。
カリキュラム・マネジメントの説明を受け、今後の方向性が見える内容であった。特に本校における流れは吉田高校の取組を大いに参考にさせてもらった。
令和元年１０月の職員研修会で前回(５月)検討した「目指す生徒像」をまとめ、提示。
「目指す生徒像」として以下の５つにまとめたことを説明し、グループ協議。
①傾聴力　②自己肯定力　③剛健力　④協働力　⑤地域力
上記の言葉を説明した後、出された意見として

- 「求めたい」では教師側に余り責任が感じられない。「身に付けさせたい」の方がよいのではないか。
- ①が「傾聴力」でいいのか。②から始まった方がよいのでは。
- ①と②はイメージが湧きにくい。「傾聴力」は多様性の方がいいか。寛容とかダイバーシティとか。
- 「自己肯定力」の説明は吉田高校のがよいのではないか。
- 頭文字から分かりやすい言葉にすると浸透するのでは。H・Y・U・G・Aの文字に当てはめる等。
- 「良さを引き出す力」は分かりにくい。「相手を受容する」にかえてはどうか。
- 「自分の考えを大切にして」は自己中心的とも捉えられる。

話し合いの結果をまとめたアンケートにより、①と②は順位として自己肯定力が一番にきた方が望ましいという意見が多くあったため、修正を行い、
①自己肯定力　②傾聴力　③剛健力　④協働力　⑤地域力の順とした。(参考資料①)
一連の取組の中でロジック思考からアナロジー思考へと変容が見られた印象がある。

（２）「目指す生徒像」の浸透に向けて

「目指す生徒像」が決定し、学校経営方針の中に取り入れることができた。次の段階として
ア　生徒にどのように説明し、浸透させていくか。
イ　今後の評価(新課程等)にどうつなげていくか。
という課題が出てきた。アについては、コロナ禍ということもあり、学年単位で説明する機会を設けた。その際、イの内容を踏まえながらの説明を行った。
イについては、検討会議等で意見をいただく中で、生徒自身が自己評価するルーブリックの作成が重要との指摘をいただき、ビジョン委員会で意見を聞きながら作成を行った。
参考資料②がその表となる。
また合わせて、令和２年１２月から携帯・スマホの校内持込を許可した関係で規則を守るためのチェックシートも同時に作成した。参考資料④がチェックシートの内容。
これらのシートを両面印刷紙し、令和２年度から実施することにした。ただ、当初予定の４月からの偶数月での実施は休校期間があり難しいと判断し、休校明けの７月・９月・１１月・１月(予定)・３月(予定)の奇数月に１・２年生対象に実施した。

（３）特別活動と関連に向けて

今回の取組の目的の１つに新課程の指導要録への対応がある。従来の文章記述を改め、各学

校が設定した観点を記入した上で、活動、学校行事毎に、評価の観点に照らして十分満足できる活動の状況にあると判断される場合に、〇印を記入することとなっている。

そこで、特別活動の評価の観点と本校のＳＰを関連づけると

内　容	観　点	１年	２年	３年
ﾎｰﾑﾙｰﾑ活動	習慣化された学習による知識・技能			
生徒会活動	自己肯定力・傾聴力を意識した思考・判断・表現			
学校行事	協働力・地域力・剛健力をよりよく発揮しようとする態度			

どの行事にどの観点があるかは参考資料③の通りとなる。

観点に十分満足できる状況にあると判断される場合に学年の欄に〇印を記入。〇印をつけた具体的な活動の状況等については、「総合所見及び指導上参考となる諸事項」の欄に簡潔に記述することで、評価の根拠を示していく。

この取組により生徒自身の自己評価も反映させることが可能となるため、令和４年度からの指導要録につながっていくと思われる。

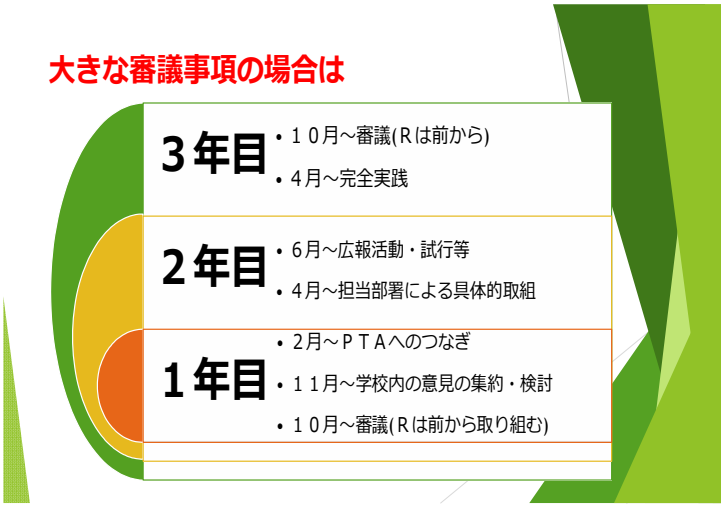
５　実践の成果（結果）と課題

（１）職員研修から見えてきたこと

・定期的に時間を取って課題について話し合うことは日頃の忙しい勤務の中では不足しがちな生の声も聞かれて有意義であった。

・次年度に向けた話し合いをする際、１学期に課題の洗い出し、２学期に解決に向けての対策等を行っていると外部（保護者・中学校）への変更等の通知が遅くなるため、右の期間を意識する必要があった。

・職員研修をどの時期に入れていくか、授業の確保や職員への負担を考慮に入れながら取り組んでいく必要がある。



（２）ＳＰルーブリック評価・チェックシートの実施から見えてきたこと

生徒に対して現段階で３回（７月・９月・１１月）の評価を実施した。

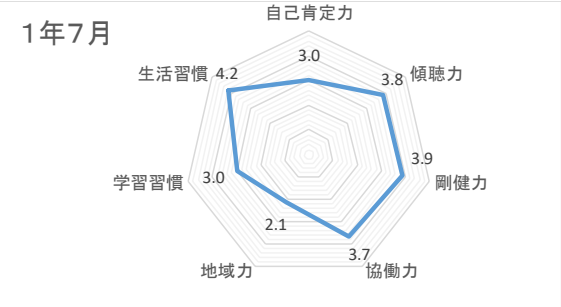
年度途中からの調査となったため、年間を通しての検証ができないが、いくつかの傾向や指導の方向性が見えてきた。

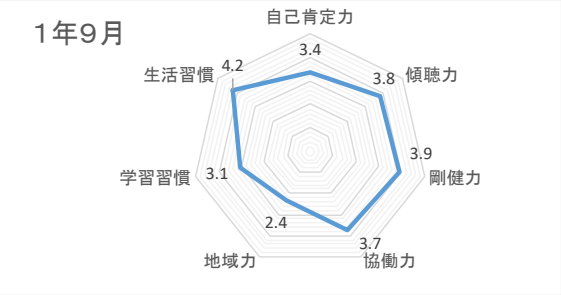
生徒が記入した評価を副担が入力し、クラス毎のデータや学年のデータを確認することができる。記述コメント表記は

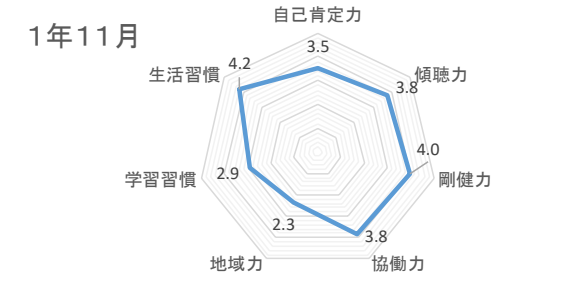
〇･･･評価できる点　△･･･どちらともいえない点　×･･･評価できない点

となっている。（以下同じ）

１学年全体







クラスデータ

日向SP(スクールプライド)力 自己チェックシート									1年全体
7月	実施月	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦		
実施	月	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計	平均
	1組	3.1	4.0	4.0	3.9	2.3	3.4	4.3	25.0	3.6
	2組	2.6	3.5	4.2	3.5	1.7	3.0	4.0	22.5	3.2
	3組	2.9	3.9	3.7	3.8	1.9	2.6	4.2	23.1	3.3
	4組	3.4	3.5	3.5	3.5	1.8	2.8	4.0	22.4	3.2
	5組	3.1	4.1	4.1	3.7	2.8	3.1	4.3	25.2	3.6
	平均	3.0	3.8	3.9	3.7	2.1	3.0	4.2	23.6	3.4

日向SP(スクールプライド)力 自己チェックシート									1年全体
9月	実施月	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦		
実施	月	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計	平均
	1組	3.6	3.8	3.9	3.9	2.3	3.2	4.2	24.9	3.6
	2組	3.2	3.9	4.1	3.8	2.3	3.2	4.1	24.5	3.5
	3組	3.1	3.8	3.8	3.5	2.4	3.1	4.2	23.9	3.4
	4組	3.0	3.3	3.5	3.4	2.1	2.9	4.2	22.5	3.2
	5組	3.9	4.0	4.4	4.0	2.8	3.1	4.4	26.4	3.8
	平均	3.4	3.8	3.9	3.7	2.4	3.1	4.2	24.4	3.5

日向SP(スクールプライド)力 自己チェックシート									1年全体
11月	実施月	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦		
実施	月	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計	平均
	1組	3.7	3.7	3.9	4.0	2.8	3.1	4.2	25.4	3.6
	2組	3.3	3.9	4.1	3.7	2.0	3.1	4.3	24.5	3.5
	3組	3.5	3.9	4.2	4.0	2.1	2.9	4.3	24.9	3.6
	4組	3.2	3.3	3.8	3.5	1.8	2.7	4.0	22.4	3.2
	5組	3.7	4.1	4.0	3.9	3.1	2.6	4.0	25.5	3.6
	平均	3.5	3.8	4.0	3.8	2.3	2.9	4.2	24.5	3.5

個人データ配布用(例)

日向ＳＰ(スクールプライド)力　自己チェックシート									１年
第１回		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
番号	名　前	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計
3		4	5	5	4	4	4	5	31
クラス平均		3.1	4.1	4.1	3.7	2.8	3.1	4.3	25.2
学年平均		3.0	3.8	3.9	3.7	2.1	3.0	4.2	23.6
第２回		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
番号	名　前	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計
3		4	5	5	4	1	4	4	27
クラス平均		3.9	4.0	4.4	4.0	2.8	3.1	4.4	26.4
学年平均		3.4	3.8	3.9	3.7	2.4	3.1	4.2	24.4
第３回		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
番号	名　前	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計
3		4	4	4	4	4	2	2	24
クラス平均		3.7	4.1	4.0	3.9	3.1	2.6	4.0	25.5
学年平均		3.5	3.8	4.0	3.8	2.3	2.9	4.2	24.5

○自己肯定力の高まりが見られる。

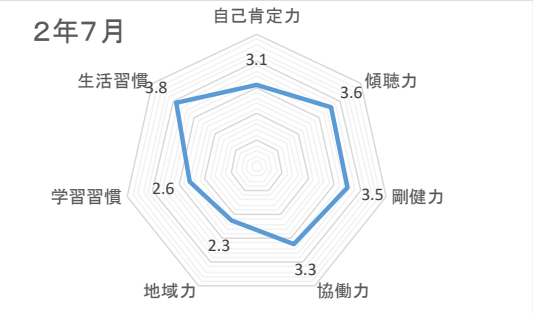
△学習習慣や生活習慣には大きな変化は見られなかった。

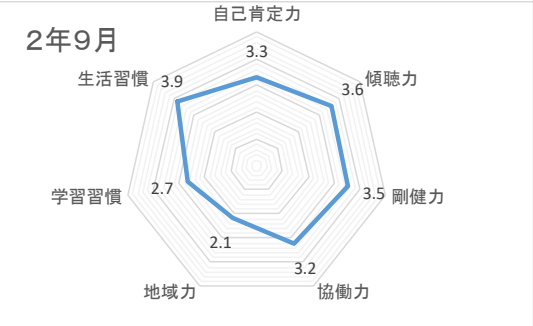
×地域力を発揮する場がなかなか得られなかった。

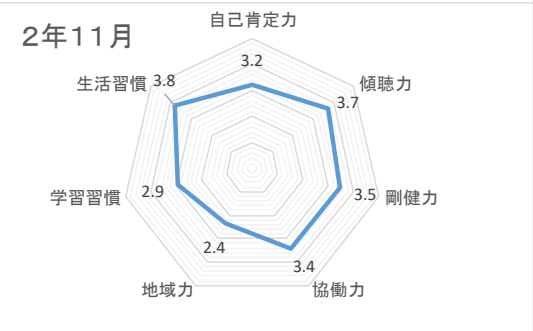
個人データ(例)の結果から

この生徒は学習習慣と生活習慣が第３回(１１月)に大きく下降している。自己評価が下がる要因が本生徒にあったのではないかと思われる。このような時に面談等が実施できると早期改善につながるのではないか。今後は学校の面談期間とリンクさせ、活用できるタイミングでルーブリック評価・チェックシートを実施していけるとより効果が高まると考えている。

２学年全体







クラスデータ

日向SP(スクールプライド)力　自己チェックシート　2年全体

7月 実施	実施月	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦		
	月	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計	平均
	1組	3.3	3.3	3.2	3.4	2.5	2.9	3.5	22.0	3.1
	2組	2.7	3.8	3.5	3.2	2.1	2.8	3.6	21.7	3.1
	3組	3.2	3.4	3.3	2.6	1.4	2.2	3.9	20.1	2.9
	4組	3.4	3.8	3.6	3.6	2.0	2.7	4.0	23.3	3.3
	5組	3.1	3.4	3.8	3.4	2.6	2.5	4.0	22.7	3.2
	6組	2.6	3.6	3.5	3.3	3.0	2.7	4.0	22.6	3.2
	平均	3.1	3.6	3.5	3.3	2.3	2.6	3.8	22.1	3.2

日向SP(スクールプライド)力　自己チェックシート　2年全体

9月 実施	実施月	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦		
	月	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計	平均
	1組	3.2	3.2	3.5	2.9	1.9	2.8	3.5	20.8	3.0
	2組	3.4	3.5	3.2	3.1	1.9	2.8	4.0	21.9	3.1
	3組	3.2	3.2	3.3	2.8	1.4	2.5	3.9	20.2	2.9
	4組	3.7	4.1	3.7	3.5	2.0	2.9	4.1	23.8	3.4
	5組	3.2	3.8	3.7	3.6	2.6	2.5	3.8	23.2	3.3
	6組	3.0	4.0	3.9	3.4	3.1	2.6	3.9	23.8	3.4
	平均	3.3	3.6	3.5	3.2	2.1	2.7	3.9	22.3	3.2

日向SP(スクールプライド)力　自己チェックシート　2年全体

11月 実施	実施月	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦		
	月	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計	平均
	1組	3.3	3.6	3.1	3.5	2.1	3.0	3.7	22.3	3.2
	2組	3.1	3.5	3.3	3.2	2.2	3.1	3.6	21.9	3.1
	3組	3.4	3.5	3.0	3.0	2.2	2.8	3.7	21.6	3.1
	4組	3.3	4.1	3.9	3.6	2.2	3.3	4.0	24.4	3.5
	5組	3.0	3.6	3.7	3.8	2.6	2.6	3.9	23.2	3.3
	6組	3.0	4.0	3.8	3.5	2.9	2.6	3.9	23.7	3.4
	平均	3.2	3.7	3.5	3.4	2.4	2.9	3.8	22.9	3.3

個人データ配布用(例)

日向SP(スクールプライド)力　自己チェックシート　２年

第１回		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
番号	名　前	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計
25		1	2	2	2	1	2	2	12
クラス平均		3.3	3.3	3.2	3.4	2.5	2.9	3.5	22.0
学年平均		3.1	3.6	3.5	3.3	2.3	2.6	3.8	22.1
第２回		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
番号	名　前	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計
25		1	2	1	2	1	2	4	13
クラス平均		3.2	3.2	3.5	2.9	1.9	2.8	3.5	20.8
学年平均		3.3	3.6	3.5	3.2	2.1	2.7	3.9	22.3
第３回		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	
番号	名　前	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	学習習慣	生活習慣	合計
25		2	4	2	2	2	5	4	21
クラス平均		3.3	3.6	3.1	3.5	2.1	3.0	3.7	22.3
学年平均		3.2	3.7	3.5	3.4	2.4	2.9	3.8	22.9

○回を追う毎に全体の評価が高まっている。

○地域力については探究活動が始まったことで高くなっている。

○学習習慣は、２年の後半になるにつれて取組が良くなっており評価が高くなっている。

△９月の自己肯定力や剛健力が高くなったクラスは文化祭や体育大会等の学校行事の評価が高かったところが多かった。

個人データ(例)の結果から

全体的に自己評価が低かったが、学習習慣、生活習慣は高い評価と変わっている。本人の意識の変化がどのようなものであったのか、低い評価のままの能力はどのように改善していったらよいか等、面談を利用して向上につなげられるとよいと考えている。また学力と学習習慣との関連性等が見える取組ができるとより効果が出てくると思われる。

（３）〈みんなの学校はみんなで守ろう！日向高校チェックシート〉関係

7月	1学年全体	
1 ソーシャルメディア関係		
	守っている	守れていない
a	174	0
b	167	7
c	174	0
d	172	2
e	157	10
f	145	24
g	156	18
2 日常生活全般		
h	170	4
i	174	0
j	164	10
k	173	1
l	153	21
m	174	0
n	148	20

9月	1学年全体	
1 ソーシャルメディア関係		
	守っている	守れていない
a	176	0
b	173	3
c	176	0
d	176	0
e	175	1
f	162	14
g	163	13
2 日常生活全般		
h	176	0
i	176	0
j	172	4
k	175	1
l	168	8
m	174	1
n	166	10

１１月	1学年全体	
1 ソーシャルメディア関係		
	守っている	守れていない
a	174	1
b	173	2
c	173	2
d	171	3
e	139	1
f	157	17
g	167	7
2 日常生活全般		
h	171	3
i	173	1
j	167	7
k	141	1
l	133	9
m	142	0
n	129	13

7月	2学年全体	
1 ソーシャルメディア関係 7月		
	守っている	守れていない
a	174	0
b	166	8
c	174	0
d	161	13
e	155	19
f	135	33
g	160	14
2 日常生活全般		
h	168	5
i	174	0
j	161	13
k	173	1
l	163	11
m	172	2
n	153	16

9月	2学年全体	
1 ソーシャルメディア関係　9月		
	守っている	守れていない
a	181	0
b	171	10
c	181	0
d	171	10
e	179	2
f	144	37
g	161	20
2 日常生活全般		
h	178	3
i	181	0
j	176	5
k	178	3
l	172	9
m	178	3
n	167	14

１１月	2学年全体	
1 ソーシャルメディア関係　１１		
	守っている	守れていない
a	217	1
b	179	1
c	179	1
d	177	3
e	170	10
f	161	19
g	174	6
2 日常生活全般		
h	178	2
i	177	3
j	177	2
k	177	1
l	173	4
m	176	0
n	130	6

○２ヶ月毎に実施することにより忘れがちな内容に定期的に触れることができている。

○今回のチェックシートでインターネット利用関係や交通マナーの法律について理解したという生徒が多かった。

○同じ生徒が複数の項目に×がついている場合が多いという傾向等が見えてきた。

△生徒一覧から状況把握はできるが、このチェックを活用しての指導までは至っていない。

×実際には守っていると記録した生徒が違反していた事例も見られた。

×「家庭のルール」を決めていない生徒は一定数存在している。

（４）今回の取組に関する生徒・職員の感想

現在は実験的に取り組んでいる段階であり、まとまった感想ではなく、実施途中での意見を掲載したものである。終了後の全体アンケートについては年度末に実施予定である。

【 生徒 】･･･「目指す生徒像」の変更とルーブリック評価・シートに取り組んだ事に関して

〇実際、自分のことを客観的に評価することはあまりないので、改めて自己批評の能力が高まったような気がする。

〇他の生徒に比べて自分の感じ方がどうなのか比較できたのは良かった。

△今年はいろいろな変更が多く、なかなか評価しにくかった。

△３回のチェックシートだけではまだ見えてこない部分も多い。

×自分たちで考えた「目指す生徒像」ならもっと身近に意識できたかもしれない。

×今の取組が何になるのか、あまり意味を感じない。

【 職員 】･･･「目指す生徒像」を変更した学校経営方針と生徒への２種類の評価・シートの取組・学校行事への取組に関して

〇スクール･ポリシー、スクール・ミッション等のある程度の理解ができた。生徒に分かりやすい説明が今後より求められてくると感じた。

〇全校集会ができない、校歌が歌えない、学校行事が従来通り実施できない等の制約がある中では、自己管理の必要性からこのような取組が重要になっているような印象を受けている。

△実際の効果がどの程度であるかは今後の積み重ねが必要。評価できる段階ではない。

△「目指す生徒像」に関しては、生徒会等で生徒自身が日常的に意識するものになるとよいのではないか。まだ身近には感じていないようだ。

×副担の入力等の作業が必要。マークシート等の読み取りでの対応が今後できないか検討してほしい。負担になっているわけではないが。

×生徒に結果等についてどのように還元していくのか、現段階では明確に示せていない。

【 全体 】

普通科という言葉からイメージできる生徒像は「進学を目的とし、普通教科を主とした学習活動に取り組む生徒」という姿である。しかし目指す学習活動の質・量の違いに加え、学びの手法も多様化しており、型に合わせた指導が成立しにくい状況が出てきた。そのような中、外からの動機付けではなく内発的な動機付けとなる「目指す生徒像」の作成と生徒自身による自己評価の形はこれからの時代に沿ったものになるのではないかと考えている。

今回は、令和４年度からの新課程に対応した形を意識し取り組んできたが、対応すべき事項が未整理な面も多くある。全体像が見えないまま進めてしまうと大きな失敗にもつながりかねないので、関係機関と連携しながら今後も取り組んでいきたい。

また学校評議員に説明した際、分かりやすい取組であること、今の生徒は客観的に示されたデータには理解が早いなど高評価をいただいたため、外部や地域の方々には伝わりやすい取組であるように感じた。

参考資料①

令和２年度学校経営方針

宮崎県立日向高等学校

目指す学校像（経営ビジョン）

- ○　人権感覚を身につけ、安全かつ安心して過ごせる地域に信頼される学校
- ○　生徒一人一人の個性を理解し、進路目標の達成に向け連携して取り組む学校
- ○　チーム日向として協働し、お互い補完し合いながら働ける風通しのよい学校

育みたい５つの力
日向高校スクールプライド
①自己肯定力 ②傾聴力
③剛健力　④協働力 ⑤地域力
＋ベースとなる学習・生活習慣

多様性の確保の視点

外的環境
地域貢献
地域人材育成
市内唯一の普通科

共通性の確保の視点

校訓
剛健（たくましいからだ）
信愛（他者への思いやり）
創造（新たなものの創出）

重点目標	学習・進路指導 キャリア教育	生活指導・健康指導 環境の充実	広報・募集活動 信頼される学校作り
主な担当部	教務部 進路指導部 図書・渉外部 各学年 各教科 フロンティア科	生徒指導部 保健・環境美化部 教育相談・特別支援推進部 事務部 各学年	フロンティア科 図書・渉外部 教務部 生徒指導部 進路指導部 各学年
具体的方策	・授業力の向上 ・カリキュラム・マネジメントの充実 ・総合的な探究の時間の活用 ・フロンティア科課題解決学習の充実 ・資格取得指導の徹底 ・図書館活用の促進	・基本的生活習慣の確立 ・規範意識とマナーの向上 ・常在危機意識の徹底 ・美化意識の高揚 ・人権教育の充実 ・命を大切にする教育の充実 ・部活動の活性化と充実 ・ボランティア活動の推進	・小学校・中学校・特別支援学校・大学・関係教育機関及び地域との連携 ・ＰＴＡ活動の活性化 ・広報活動の充実 ・産学官と連携、交流 ・魅力ある特長づくり ・校内研修の更なる充実

生徒に身に付けさせたい５つの力（日向高校スクールプライド・・・日向ＳＰ）

①自己肯定力・・・短所も含めて、自分を肯定する力を身につけます。
②傾聴力・・・相手の話をよく聞き、理解する力を身につけます
③剛健力・・・心身共にたくましく少しのことではくじけない力を身につけます
④協働力・・・同じ目的のために、対等の立場で協力して共に働く力を身につけます
⑤地域力・・・地域のリーダーとして課題解決に向けて取り組む力を身につけます

参考資料②（ルーブリック評価）

日向ＳＰ（スクールプライド）力　自己チェックシート　（〇〇月）

日向ＳＰ	Ｓ（５点）	Ａ（４点）	Ｂ（２点）	Ｃ（１点）	評価
① 自己肯定力 短所も含めて、自分を肯定する力を身につけます	自分の言動に責任を持ち、何事に対しても前向きな姿勢で取り組むことができる。	自分の言動に責任を持ち、積極的に行動する場面が多く意欲的に活動できる。	自分の言動に対して肯定的に受け止めることができ、日々の充実感もある。	将来に向けて長所を伸ばしていきたという気持ちがある。	
② 傾聴力 相手の話をよく聞き、理解する力を身につけます	誠意ある対応。同意点には頷き、相違点には意見を言える。	誠意ある対応。同意点、相違点を整理しながら聞くことができる。	相手の話を聞きながら、要点を整理することができる。	相手の話を静かに聞くことができる。	
③ 剛健力 心身共にたくましく少しのことではくじけない力を身につけます	心身共にたくましく少しのことではくじけない強さを持ち欠席もない。	心身共にたくましく少しのことではくじけない強さを持ち欠席も少ない。	心身共にたくましくくじけそうな時もあるけれど、バランスを保ち取り組んでいる。	くじけることがあるけれど、助けてもらいながら取り組んでいる。	
④ 協働力 同じ目的のために、対等の立場で協力して共に働く力を身につけます	同じ目的のために、対等の立場で協力して共に働くことができる。	とるべき行動を理解し、率先して取り組むことができる。	指示されたことを自分なりに工夫して取り組むことができる。	指示されたことをしっかりと取り組むことができる。	
⑤ 地域力 地域のリーダーとして課題解決に向けて取り組む力を身につけます	地域のリーダーとして課題解決に向けて意欲的に取り組むことができる。	地域のリーダーとして課題を発見し、解決の糸口を探ろうとしている。	地域の行事やボランティア等に積極的に参加し意欲的に活動することができる。	地域の状況を理解し、関心をもつことができる。	

上記に加えてベースとなる習慣

ベースとなる習慣	Ｓ（５点）	Ａ（４点）	Ｂ（２点）	Ｃ（１点）	評価
⑥学習習慣 知識・技能を身に付け、論理的に思考し、表現する力を身につけます	学習への自発性 日々の学習時間確保 課題等への取組 入試への対策 のうち４つに〇	学習への自発性 日々の学習時間確保 課題等への取組 入試への対策 のうち３つに〇	学習への自発性 日々の学習時間確保 課題等への取組 入試への対策 のうち２つに〇	学習への自発性 日々の学習時間確保 課題等への取組 入試への対策 のうち１つに〇	
⑦生活習慣 自立した一人の人間として力強く生きていくための基盤をみにつけます	３点固定 朝食を取る ５分前登校 自主的な挨拶・清掃 のうち４つに〇	３点固定 朝食を取る ５分前登校 自主的な挨拶・清掃 のうち３つに〇	３点固定 朝食を取る ５分前登校 自主的な挨拶・清掃 のうち２つに〇	３点固定 朝食を取る ５分前登校 自主的な挨拶・清掃 のうち１つに〇	

自己評価総合得点　　／３５

※Cまでに該当しない場合はD(0点)となるが、高校生の発達段階を踏まえ、極力評価しないように心掛ける。

振り返りコメント

年　　組　名前（　　）　CHECK　DAY　　月　　日（　　）

参考資料③

育みたい5つの力＋ベースとなる学習習慣　日向高校

特別活動		特別活動で重視する3つの視点 ・よりよい人間関係の形成 ・よりよい集団生活の構築や社会への参画 ・自己実現　に資する						
		日向高校スクールプライド(日向SP)　〇が主として該当する能力						
学力の3要素		思考力・判断力・表現力		主体的に取り組む態度			知識・技能	
活動種類	活動名	自己肯定力	傾聴力	剛健力	協働力	地域力	生活習慣	学習習慣
学校行事	式典	〇	〇		〇			
学校行事	全校集会		〇				〇	
学校行事	校歌	〇			〇			
学校行事	文化教室		〇		〇			
学校行事	清掃活動	〇		〇	〇		〇	
学校行事	遠足	〇		〇	〇			
学校行事	修学旅行	〇	〇	〇	〇			
学校行事								
学校行事								
学校行事								
ホームルーム活動	朝の会	〇	〇		〇		〇	
ホームルーム活動	帰りの会	〇	〇		〇		〇	
ホームルーム活動	討論活動	〇	〇		〇			〇
ホームルーム活動	振り返り	〇					〇	〇
ホームルーム活動	日直活動	〇			〇		〇	
ホームルーム活動	係活動	〇			〇	〇	〇	
ホームルーム活動								
ホームルーム活動								
ホームルーム活動								
生徒会活動	紫雲祭	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
生徒会活動	ボランティア	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
生徒会活動	生徒総会	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
生徒会活動	部活動	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
備　考		・特別活動と関連が深い「SHR、清掃活動、日直や放課後等に生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動」等については、それぞれの活動種類に区分けしている。(部活動の意義については、学習指導要領第１章総則第６款の１のウに示されている) ・「学力の３要素」についての捉え方 〇「知識・技能」・・・その活動に毎回、しっかり取り組むことで成長していくもの。または成長を支えるものとなるもの。よりよい人間関係の形成の本となるもの。 〇「思考力・判断力・表現力」・・・その活動を通してよりよい集団生活の構築が期待できるもの。 〇「主体的に取り組む態度」・・・その活動を通して社会への参画や自己実現が期待できるもの。 ・指導要録が簡略化(箇条書き・特に顕著な点を記す)してきているので、その分、根拠を確かなものにしていく必要性が高まっている。(何を根拠に〇をつけたのか)そのためにも学習評価に直結させるわけではないが、生徒自身の自己評価や相互評価等が求められることになる。						

参考資料④

＜ みんなの学校はみんなで守ろう！ 日向高校チェックシート ＞

(　　)の中に守っている場合は(○)、そうでない場合は(×)を入れてください。

年　　組　　番

名前(　　)

1　ソーシャルメディア関係

a(　　)インターネットは世界中の人が使う公共メディアです。 ソーシャルメディアを使う場合、発信者としての自覚と責任を持ち、法令・規範を守っています。

b(　　)現実社会でも、公共の場におけるデジタル機器の利用ルールやマナーを守っています。
（マナーモード指示を守る、「歩きスマホ」や「音楽を聴きながらの自転車走行」をしない」）

c(　　)自分はもちろん、友人・知人の個人情報に関する書き込み(他者を中傷する、または侮辱するような情報)も行わないよう気をつけています。

d(　　)自分以外の人の写った写真や情報を発信する際は、あらかじめその人に許可を得ています。
（許可を得る前に、インターネットに公開してもいい内容かどうか判断する必要があります）

e(　　)トラブルに巻き込まれた、またはその恐れがあるときは、先生や保護者に速やかに相談しています。(ない場合は○を記入)

f(　　)「青少年が安全に安心してインターネットを利用できる環境の整備等に関する法律」の中で保護者の責務が規定されていることを理解し、「家庭のルール」を決めています。

保護者の責務	・利用状況の把握　・フィルタリング等の利用　・不適切な使用に対する指導等 ・インターネットを活用する能力の促進　等

g(　　)ソーシャルメディア提供側が示す利用規約を必ず読み、正しく理解した上で、利用しています。

2　日常生活全般

h(　　)人権尊重の立場から相手に配慮した言動を心掛けています。相手がしてほしくないと思われることに対しては絶対に行わないように心掛けています。

i(　　)飲酒・喫煙、薬物などに対しては絶対に行っていません。またそのような場面や場所には近づかないように心掛けています。

j(　　)交通マナー(自転車安全利用5則)を意識し時間に余裕を持って行動するように心掛けています。また事故に遭った際の対応は理解しています。

5則	1　自転車は車道が原則(歩道は例外)　2　車道は左側を通行　3　歩道は歩行者優先で車道寄りを徐行　4　安全ルールを守る　5　子どもはヘルメットを着用
対応	1　相手の名前・連絡先・車体ナンバー等　2　病院(軽いケガでも)　3　警察(小さな事故でも必ず「事故証明」をとる)　4　連絡(保護者・学校等)

k(　　)深夜徘徊や外泊、未成年者立入禁止場所への出入り等、不健全な行動は絶対にしないように心掛けています。

l(　　)自然災害時(学校管理下以外)は自らその場に応じた的確な状況判断のもとに安全な場所に避難できるように普段から意識しています。

m(　　)不審者に対しては危険回避のために近づかないように意識しています。

n(　　)外出時には家族に行き先・帰宅予定時間・同行者等を伝えるようにしています。

⑵ 学習の基礎となる資質・能力の育成に向けた研究（都城西高等学校）

～「資質・能力」を育成する教科横断的なカリキュラムの実践研究～

１ 問題の所在

次期学習指導要領を踏まえて、本校は従前の学校教育目標の全面改定を行い、「生徒に身に付けさせたい資質・能力（ＮＰ９）」を設定した。それに伴い、ＮＰ９の育成に向けた各教科の目標及び指導計画、指導方法、評価方法等を研究していくことにした。研究を進めて行くに当たって現状の把握と原因の特定を行った。

ａ 現状の把握

・コンテンツベースの授業が続いている。
・教師個人の指導法に頼った授業になっていることが多い。
・定期考査では、知識を問う問題がほとんどである。
・学校の教育目標や各教科の目標を意識した授業が展開できているとは言えない。

ｂ 原因の特定

・進学校としての使命から、大学入試への対策を最優先に考えてしまう。
・教師の業務量の増加により、授業やテストについて協議する十分な時間が確保できない。
・目標は必要だが、様々な分野でそれぞれの目標が設定されており、複雑になっている。
・教科書自体がコンテンツベースの構成になっている。

２ 学校の概要

平成１５年に合同選抜制が廃止されて以降、生徒の学力差も顕著になり、進路目標の多様化も進んでいる。大半が普通科高校における経験の豊富な教職員で占められているが、中学校までの学習到達度が不十分な生徒へのきめ細かな指導が行き届いているわけではない。また、教職員の定員減少により、各種の業務や特別活動、部活動の指導において、負担感も増している中で、経験年数の浅い教職員へのＯＪＴも充実しているわけではない。

ただ、地域との結びつきが以前から強いため、平成１０年度からボランティア活動を継続的に実施し、学校の特色づくりに生かしている。地域のなかでさまざまなことを体験し、協働し、創造していくなかで、地域の良さを学び、コミュニティを支える意欲や能力を、各教科等との関連で育成していくことも求められる。

ａ 課程・学科・学年別生徒数，学級数

		第１学年		第２学年		第３学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全	普通科	１４８	５	１８６	５	２００	６	５３４	１６
日	ﾌﾛﾝﾃｨｱ科	３８	１	４２	２	４０	２	１２０	５

ｂ 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭
１		１		２	３９	２	１		
講師	ＡＬＴ	ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ	事務職員	司書	計				
８	１		１０		６５				

３ 実践の計画（目標）

「カリキュラム・マネジメント構想シート」を活用して、以下のように目標を設定し、計画を立てた。

Step ０　教科・科目の学習の中で、生徒の「汎用的なスキル」を育成したい。

各教科や科目の授業やテストで、生徒も教師もターゲットにする資質・能力を意識できれば、高校生活の中で、より効果的に「汎用的なスキル」を身につけることができる。

Plan（計画）

Step １　現状の把握

・コンテンツベースの授業が続いている。
・教師個人の指導法に頼った授業になっていることが多い。
・定期考査では、知識を問う問題がほとんどである。
・学校の教育目標や各教科の目標を意識した授業が展開できているとは言えない。

Step ２　原因の特定

・進学校としての使命から、大学入試への対策を最優先に考えてしまう。
・教師の業務量の増加により、授業やテストについて協議する十分な時間が確保できない。
・目標は必要だが、様々な分野でそれぞれの目標が設定されており、複雑になっている。
・教科書自体がコンテンツベースの構成になっている。

Step ３　目標の設定（仮説の再構築）

各教科・科目の評価表を活用することによる汎用的スキルの育成
・教科・科目の教育活動を通して身につけさせたい汎用的スキルを段階的に設定している
・各授業の中で、ターゲットにしている資質・能力が何なのか明確に提示できている
・生徒が高校生活の中で身につけるべき資質・能力を日常的に意識できている
・各授業の中で、ターゲットにされている資質・能力を生徒が意識できている

Step ４　手段の選択

・教科の評価表の基となる学校全体の「NP９評価表」を生徒・教師に浸透させる
・日常的には授業の中で各教科・科目の評価表を活用し、学期ごとに「NP９評価表」を活用する
・定期考査において、身につけさせたい汎用的スキルを問う問題を組み込む

Step ５　集団意思の形成

・教務部会…教科代表者会で提案する内容の検討および掲示物等による啓発
・教科代表者会…各教科の目線合わせ、および教科の特性による細部の調整
・各教科会…身につけさせたい汎用的スキルや実践方法の検討
・職員研修…他教科の事例・他校の事例等の紹介

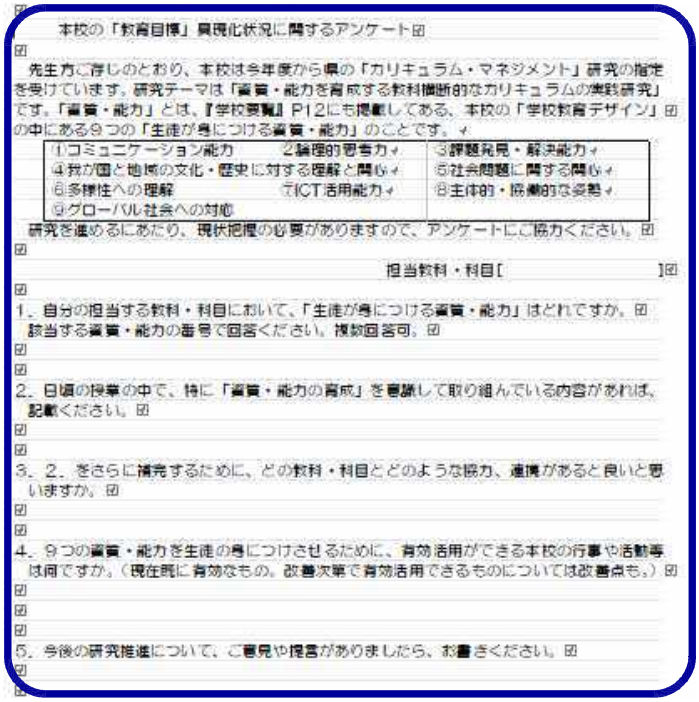
４　実践の実際

ａ　ＮＰ９の育成に向けた各教科の目標及び指導計画の作成

①職員へのアンケート

ＮＰ９を「すべての学習の基盤となる資質・能力」と考え、「教科横断的な視点」でとらえることを基本にした。ＮＰ９が授業に反映されているかを把握するために、担当する授業において生徒が身につけている資質・能力が何であるかの調査を行った【資料①】。このアンケートを通して、それぞれの教科が意識しやすい資質・能力や、他の教科と協力・連携を検討すべきものも把握することができた。一方で、それぞれの教科で共有すべき目標や指導計画についての意識や実践に差があることも見えてきた。

【資料①】



本校の「教育目標」具現化状況に関するアンケート

先生方ご存しのとおり、本校は今年度から県の「カリキュラム・マネジメント」研究の指定を受けています。研究テーマは「資質・能力を育成する教科横断的なカリキュラムの実践研究」です。「資質・能力」とは、『学校要覧』P12にも掲載してある、本校の「学校教育デザイン」の中にある９つの「生徒が身につける資質・能力」のことです。

①コミュニケーション能力	②論理的思考力	③課題発見・解決能力
④我が国と地域の文化・歴史に対する理解と関心		⑤社会問題に関する関心
⑥多様性への理解	⑦ICT活用能力	⑧主体的・協働的な姿勢
⑨グローバル社会への対応		

研究を進めるにあたり、現状把握の必要がありますので、アンケートにご協力ください。

担当教科・科目[　　]

1．自分の担当する教科・科目において、「生徒が身につける資質・能力」はどれですか。該当する資質・能力の番号で回答ください。複数回答可。

2．日頃の授業の中で、特に「資質・能力の育成」を意識して取り組んでいる内容があれば、記載ください。

3．2．をさらに補完するために、どの教科・科目とどのような協力、連携があると良いと思いますか。

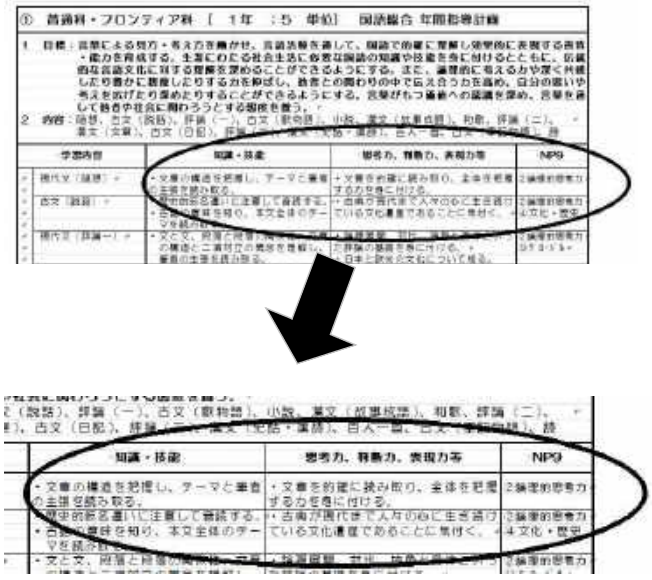
4．９つの資質・能力を生徒の身につけさせるために、有効活用ができる本校の行事や活動等は何ですか。（現在既に有効なもの。改善次第で有効活用できるものについては改善点も。）

5．今後の研究推進について、ご意見や提言がありましたら、お書きください。

②指導計画・指導案の作成

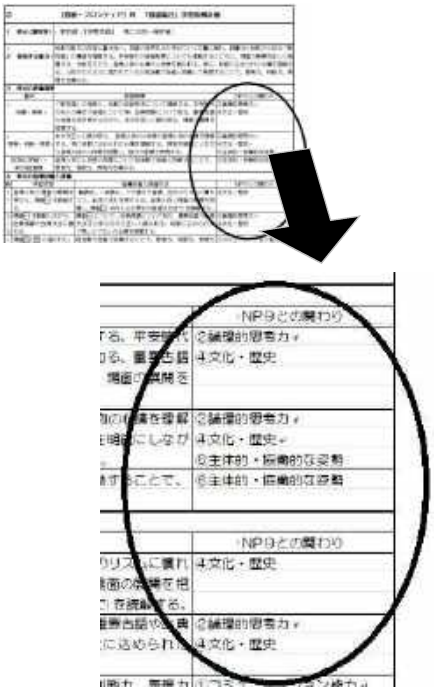
新学習指導要領をもとに、ＮＰ９をどのように授業に反映させるかを検討しながら各教科の指導計画・指導案の作成に着手した【資料②、資料③】。

【資料②】年間指導計画（例）



学習内容	知識・技能	思考力、判断力、表現力等	NP9
現代文（随想）	・文章の構造を把握し、テーマと筆者の主張を読み取る。	・文章を的確に読み取り、全体を把握する力を身に付ける。	②論理的思考力
古文（説話）	・歴史的仮名遣いに注意して音読する。 ・古典の意味を知り、本文全体のテーマを読み取る。	・古典が現代まで人々の心に生き続けている文化遺産であることに気付く。	②論理的思考力 ④文化・歴史
現代文（評論一）	・文と文、段落と段落の関係を理解し、文章の構造と二項対立の関係を理解し、筆者の主張を読み取る。	・評論の基礎を身に付ける。 ・日本と欧米の文化について考える。	②論理的思考力 ③ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ

【資料③】単元指導計画（例）



	NP9との関わり
②論理的思考力 ④文化・歴史	
②論理的思考力 ④文化・歴史 ⑥主体的・協働的な姿勢	
⑥主体的・協働的な姿勢	
	NP9との関わり
④文化・歴史	
②論理的思考力 ④文化・歴史	

b 「ＮＰ９評価表」の作成

①点数化する自己評価表

指導計画に従って各教科で授業を実践し、それをどのように評価するかが問題になる。まず取り組んだのが、生徒が自己評価をするための「ルーブリック評価」の評価表作成だ。これは、パフォーマンス評価として、何ができるようになったか、何ができるようにならないといけないかを、生徒に意識させるためにも必要である。また、教師にとっても、生徒に何を身に付けさせるかの指標になる。

本校のＮＰ９の観点でＣ・Ｂ・Ａ・Ｓの各段階を概ね次のように定義した。

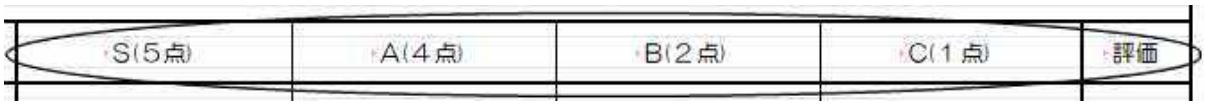
Ｃ･･･本校入学段階の生徒に求める力

Ｂ･･･１年生段階の生徒が身に付けている力

Ａ･･･２年生段階の生徒が身に付けている力

Ｓ･･･本校卒業段階の生徒が身に付けている力

【資料④】



【資料④】にあるように、４段階で点数化して自己評価したものを合計することで、生徒が自分の現状を把握できるものを作成した。

②点数化せず、視覚的に変容を認識できる評価表

【資料④】のＮＰ９評価表については実践校の担当者や指導助言者が集まった検討会議の中で、生徒は様々な場面で評価されてばかりで評価疲れしているのではないかという指摘もあり、【資料⑤】のような形に改善した。生徒はそれぞれの資質・能力について４段階で評価はするが点数化はせず、各評価時期における評価を折れ線グラフとして視覚的にとらえることで、各自の変容を認識できるようにした。また、各ルーブリックも左から右に習熟度が上がるように配置を入れ替えた。評価時期は各学期の終わりに設定し、評価結果を分析するため、その都度評価用紙を回収し、データを入力した。

【資料⑤】

ｃ　ＮＰ９を浸透させるためのポスター掲示

【資料⑤】の評価表を使うことにはなったが、学期末だけに使う飾りにならないように、カラフルなポスター形式にして、廊下や階段の踊り場、教室に掲示した【資料⑥、資料⑦】。【資料⑥】についてはＡ０版、Ａ１版で廊下や階段に掲示したが、教室には同じ大きさでの掲示が難しいため、【資料⑦】のように本校卒業段階で生徒が身に付けている力であるＳ段階を表示したＢ４版のポスターを教室用として作成した。

【資料⑥】

【資料⑦】

ｄ　スキルを伸ばす評価表

この研究の目標設定において、教科・科目の学習の中で生徒の「汎用的スキル」を育成することを掲げていたが、ＮＰ９の中には「汎用的スキル」には該当しない資質・能力もあるため、スキルに特化した教科独自の評価表を作成し、授業に活用することにした。具体的には、ＮＰ９の中の「コミュニケーション能力」「論理的思考力」「課題発見・解決能力」「ＩＣＴ活用能力」「協働的な姿勢」の５つに絞り、教科ごとに「スキルを伸ばす評価表」【資料⑧】を作成した。生徒も教師もターゲットにする資質・能力を意識できれば、高校生活の中で、より効果的に「汎用的スキル」を身に付けることができると考えた。

教科ごとに評価表を作成する際に問題となったのが、４段階の分け方についてどのような共通認識を持つべきかということだった。Ｃ・Ｂ・Ａ・Ｓ各段階については概ね定義はしているが、教科横断的な視点を取り入れるために、さらに次のような共通イメージを持ってルーブリック作りを行った。

Ｃ・・・自分自身の興味・関心　　Ｂ・・・自分の中での理解・表現

Ａ・・・他者との協働　　Ｓ・・・自他を融合し、発展

【資料⑧】

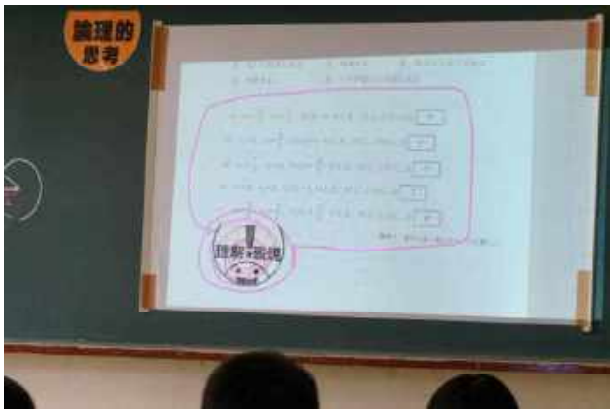
スキルを伸ばす評価表　※語尾はすべて「～できる」が基本　教科【　　】

各段階のイメージ→	自分自身の興味・関心	自分の中での理解・表現	他者との協働	自他を融合し、発展
	C	B	A	S
①コミュニケーション能力				
②論理的思考力				
③課題発見・解決能力				
⑦ＩＣＴ活用能力				
⑧協働的な姿勢				

※このファイルは教務・カリマネのフォルダにあります。

e　「スキルを伸ばす評価表」を活用した授業の実践

各教科の評価表が完成し、その評価表を活用した授業の実践に取り組んだ。生徒も教師もターゲットにする資質・能力を共通認識できるようにすることが重要であるため、授業中活用できるカードを作成し、各教科の授業に取り入れた。



５　実践の成果（結果）と課題

ａ　ＮＰ９評価表による自己評価の分析・考察

１学期末と２学期末に１年生と２年生を対象として、ＮＰ９評価表を使って自己評価を実施した。実践内容の説明にあったとおり、点数化するのではなく４段階の中から選択した値を線で結んで変容を可視化する形式の評価表で実施した。その後用紙を回収し、データ入力した結果が【資料⑨～⑫】である。

ＮＰ９：①コミュニケーション能力、②論理的思考力、③課題発見・解決能力
④文化・歴史に対する理解と関心、⑤社会問題に対する関心、⑥多様性への理解
⑦ＩＣＴ活用能力、⑧主体的・協働的な姿勢、⑨グローバル社会への対応

【資料⑨】

１年生自己評価の比較

１年	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧		⑨	
	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期
S	5%	12%	4%	7%	1%	6%	6%	6%	3%	4%	10%	11%	4%	6%	9%	13%	5%	7%
A	36%	54%	27%	37%	29%	46%	27%	42%	21%	32%	34%	46%	16%	39%	34%	45%	15%	28%
B	49%	29%	53%	50%	52%	43%	46%	44%	42%	54%	50%	39%	46%	45%	47%	36%	55%	59%
C	9%	4%	16%	6%	18%	4%	21%	8%	34%	11%	7%	3%	34%	11%	11%	5%	24%	6%

【資料⑩】

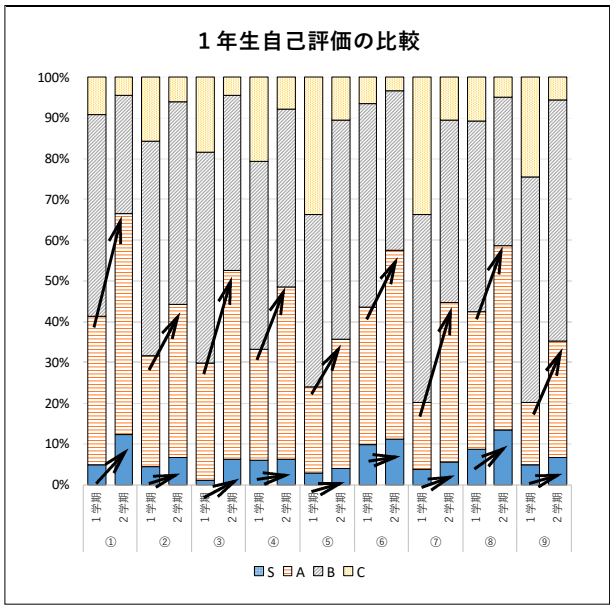
２年生自己評価の比較

１年	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧		⑨	
	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期	１学期	２学期
S	8%	17%	3%	5%	2%	6%	2%	6%	1%	6%	5%	8%	0%	3%	12%	18%	3%	6%
A	37%	56%	25%	45%	34%	49%	29%	41%	16%	33%	32%	46%	21%	34%	30%	35%	14%	32%
B	48%	23%	51%	46%	40%	38%	40%	41%	47%	49%	52%	40%	40%	45%	47%	42%	55%	51%
C	8%	3%	22%	4%	24%	6%	28%	12%	37%	13%	11%	6%	39%	18%	11%	5%	28%	12%

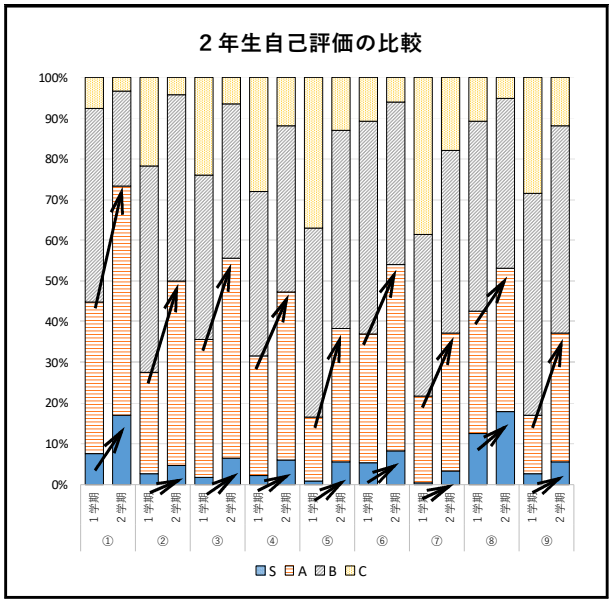
①成果：１学期と２学期を比較すると、１年生も２年生もすべての資質・能力に関して上の段階を選んだ生徒の割合が大きくなった。授業で実践してきた成果が出たと捉えることができる。

②課題：もともとＣ（本校入学段階の生徒に求める力）、Ｂ（１年生段階の生徒が身に付けている力）Ａ（２年生段階の生徒が身に付けている力）、Ｓ（本校卒業段階の生徒が身に付けている力）と定義してスタートしたのだが、１学期の時点で学年間の差がほとんどない資質・能力も見られ、２学期の時点でも１年生の方が上の段階を選んだ生徒の割合が大きい資質・能力もあった。原因としては、ルーブリックの記述の違いが生徒にとって分かりにくいものだったことが挙げられる。そうなると生徒の主観的な判断に頼る部分が大きくなってしまう。各段階におけるルーブリックの記述の違いが明確になっている表現を使うことや、書かれている内容を読まなくてもイメージしやすいシンプルな分け方を心がけたりすることが必要である。

【資料⑪】



【資料⑫】

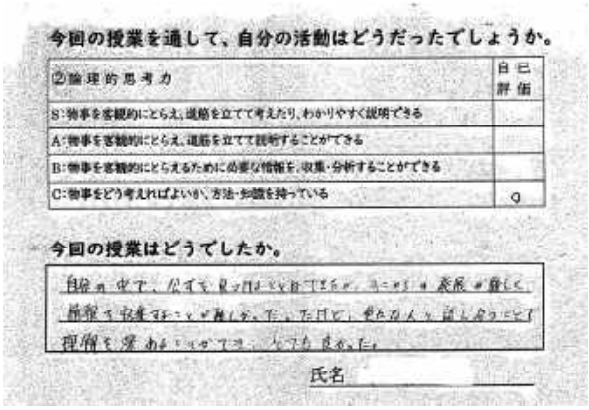


b 授業後の自己評価

「スキルを伸ばす評価表」を基に各教科・各教科担任の利用しやすい活用を実践した。例として「論理的思考力」に焦点をあてた数学の授業では、【資料⑬】のような自己評価表を使って、授業の最後に生徒の自己評価を実施した。

生徒のコメントの中には「答えを聞いたときに自分たちはどこを抜かしていたのかなども よく分かった。」「自分たちで筋道を考え、理解した上で人に説明することは難しかったですが、自分の意見を言ったあとに人の意見をきくことで、どこが間違っていたのかを理解しやすかったです。」など、ターゲットにした資質・能力についてプラスの反応が多数見られた。また、「Ａは他の生徒に説明できる」「Ｓは自分が説明した生徒が他の生徒に説明できる」など、４段階の各ルーブリックの補足説明をしたことも、生徒が自己評価をする助けになったと考えられる。

【資料⑬】



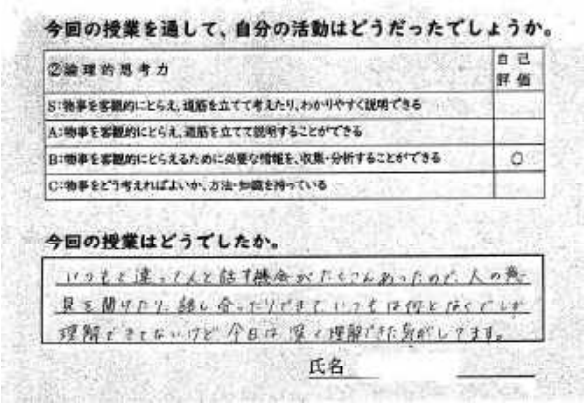
今回の授業を通して、自分の活動はどうだったでしょうか。

②論理的思考力	自己評価
S:物事を客観的にとらえ、道筋を立てて考えたり、わかりやすく説明できる	
A:物事を客観的にとらえ、道筋を立てて説明することができる	
B:物事を客観的にとらえるために必要な情報を、収集・分析することができる	
C:物事をどう考えればよいか、方法・知識を持っている	○

今回の授業はどうでしたか。

自分の中で、どうすれば見つけられるかを考えるのは楽しく、情報を収集することが難しかった。また、他の人と話し合うことで理解を深めることができ、よかった。

氏名



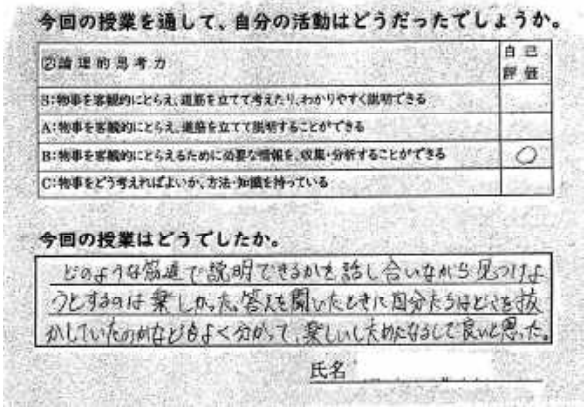
今回の授業を通して、自分の活動はどうだったでしょうか。

②論理的思考力	自己評価
S:物事を客観的にとらえ、道筋を立てて考えたり、わかりやすく説明できる	
A:物事を客観的にとらえ、道筋を立てて説明することができる	
B:物事を客観的にとらえるために必要な情報を、収集・分析することができる	○
C:物事をどう考えればよいか、方法・知識を持っている	

今回の授業はどうでしたか。

いつもと違ったんと話す機会がたくさんあったので、人の意見を聞けたり、話し合ったりできていつもは何となくでしか理解できないけど今日は深く理解できた気がしてます。

氏名



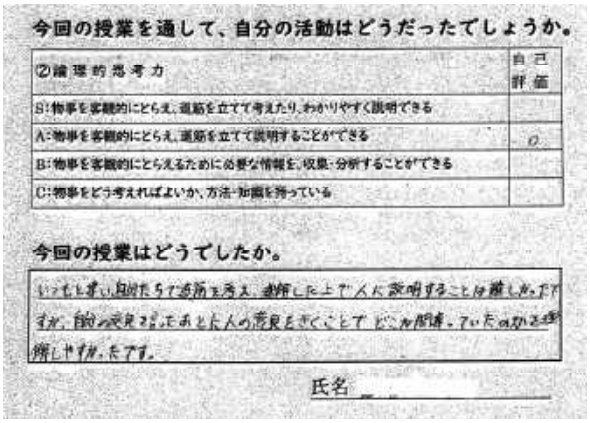
今回の授業を通して、自分の活動はどうだったでしょうか。

②論理的思考力	自己評価
S:物事を客観的にとらえ、道筋を立てて考えたり、わかりやすく説明できる	
A:物事を客観的にとらえ、道筋を立てて説明することができる	
B:物事を客観的にとらえるために必要な情報を、収集・分析することができる	○
C:物事をどう考えればよいか、方法・知識を持っている	

今回の授業はどうでしたか。

どのような筋道で説明できるかを話し合いながら見つけようとするのは楽しかった。答えを聞いたときに自分たちはどこを抜かしていたのかなども よく分かって、楽しいし大切なものだと思った。

氏名



今回の授業を通して、自分の活動はどうだったでしょうか。

②論理的思考力	自己評価
S:物事を客観的にとらえ、道筋を立てて考えたり、わかりやすく説明できる	
A:物事を客観的にとらえ、道筋を立てて説明することができる	○
B:物事を客観的にとらえるために必要な情報を、収集・分析することができる	
C:物事をどう考えればよいか、方法・知識を持っている	

今回の授業はどうでしたか。

いつもと違い自分たちで道筋を考え、理解した上で人に説明することは難しかったですが、自分の意見を言ったあと人の意見をきくことでどこが間違っていたのかを理解しやすかったです。

氏名

「カリキュラム・マネジメント構想シート」の中で、教科・科目の学習を通して生徒の「汎用的なスキル」を育成することを確認し、それを踏まえた実践を行ってきた。各教科や科目の授業やテストで、生徒も教師もターゲットにする資質・能力を意識できれば、高校生活の中で、より効果的に「汎用的なスキル」を身につけることができるという仮説に基づいた実践研究であった。学期末の自己評価表の回答内容や授業後の生徒の感想等を見ると、当初予想していた以上に効果があったと考えられる。

ｃ 見えてきた課題と今後の展望

課題

①ポスター等を使ってＮＰ９を浸透させてきてはいるが、それぞれの資質・能力の段階別の基準の違いは生徒にとっても教師にとっても分かりにくい。

②定期考査でもＮＰ９を意識した問題を一部取り入れてはみたが、問題作成の負担や評価方法の妥当性については明確な解決策が見つかっていない。

③２年間設定してきているＮＰ９自体が､地域や本校生徒の実態を反映したものとは言えない。

④教科によっては１年生の授業だけといったような限定された学年だけでしか授業が行えない場合があり、Ｃ・Ｂ・Ａ・Ｓの定義の仕方をすべての教科に当てはめることはできない。

⑤学期末に自己評価をさせた後に面談等でフィードバックする活用まではできていない。

今後の展望

①生徒に身に付けさせたい資質・能力を、より生徒や地域の実態に即したものへと変えていく検討を進める。

②観点別評価と連動できるように、生徒に身に付けさせたい資質・能力を３つの観点「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に分類できないかを検討する。

③「生活と学習の記録」など生徒や教師が毎日目にするものに、めざす資質・能力を明示するなど、日常的に意識できる状況をさらに作り出す。

④現在４段階で設定しているルーブリックを３段階にすることも含めて、生徒と教師が各段階の違いをイメージしやすいものへと改善する。

(3) 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究（宮崎南高等学校）
～「総合的な探究の時間」を中心とした教科横断的カリキュラムの開発～

１　問題の所在

新学習指導要領総則（解説）「５　カリキュラム・マネジメントの充実」で述べられているように，平成 28 年度 12 月の中央教育審議会答申を整理した三つの側面，その第一項目「教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」が、本校の課題であり，指定研究ではこの課題を解決するために取り組んだ。

２　学校の概要

本校は普通科 21 学級，フロンティア科８学級（全校生徒 1078 名）の計 29 学級、職員数 99 名の学校である。生徒の実態としては、真面目で明るく、部活動やボランティア活動など熱心に取り組む生徒が多い。しかしながら自ら先を見据えて行動ができる生徒は多くはない。その原因として自信が持てないといった「自己肯定感」や「自己有用感」が低い生徒が多いことにある。そのような生徒に自分の可能性を実感させるような取組をカリキュラムの中に入れることが必要となってきた。教員の実態としては、職務内容の多様化・多忙化による負担の増大が続いている。したがって、個々の教員の努力だけに頼る指導ではなく「チーム」としての学校の体制が求められている。地域の実態としては、創立 60 周年を迎える伝統校である本校のこれまでの進学実績や部活動の全国大会等での活躍などから地域社会からの信頼を得ている。一方で、地域と学校、地域と生徒とのつながりが次第に希薄になっていることも否めない。風水害や地震・津波等の自然災害が頻繁に起こる昨今、地域との連携はより必要性を増している。

そのような中で，「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」（令和元～令和３年）という文部科学省指定研究校となり、「総合的な探究の時間」で地域の課題解決に向けた実践研究を２年生を中心に進めている。

３　実践の計画

本校では教育目標を基に，目指す生徒像を「地域の次世代のリーダーとして，地域に根差し，貢献できる人材」と設定した。リーダーとして必要とされる６つのスキル（①再認識力，②情報収集力，③問題発見力，④分析力，⑤共感力，⑥表現実行力）を，「鵬 DP（オオトリ・ディプロマ・ポリシー）」として整理した。

「鵬」は本校の校章で、「高い理想に向かって前進する若者たれ」という本校設立当初の関係者の願いが込められたものである。この「鵬 DP」を卒業認定方針の「ディプロマ・ポリシー」とした。「鵬 DP」を活用した生徒の育成は，全ての教育活動を通して，学校全体で組織的・計

図 1　組 織

画的に取り組んでいる。

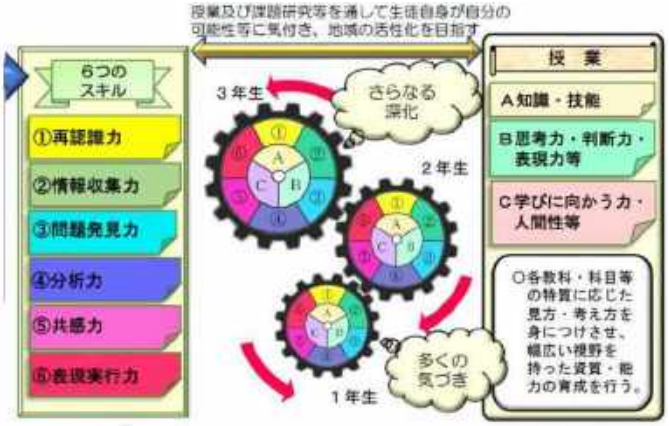
カリキュラム・マネジメントに関する組織としては、図１のようになっている。原案作成を担うのは「鵬 DP プロジェクト委員会」で，作成した原案を踏まえて， 教員が各教科や特別活動等の実践を行い，チェック機関である運営委員会や職員会議・職員研修等で評価・改善を図っている。

４　実践の実際

(1) 各教科における鵬DPの活用

本校の課題は，各教科の基礎的な知識・技能を問う短答式の問題は答えることができるが，自分の考えを他者に伝わるように根拠を示して説明する自由記述形式の問題を苦手とする生徒が多いことである。

本校では，自由記述形式の問題を克服するため，日々の授業の改革が必須であると考えた。そこで，定期考査において「鵬 DP」と関連する「思考力・判断力・表現力等」を問う問題を意図的に出題することで，生徒の実態を把握し，その結果を踏まえて，次の授業改善に取り組めるようにした。つまり，右図のような歯車のサイクルを回すことで，「６つのスキル」を日々の授業と関連付けて，「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」をバランス良く育成できるようにした。



「思考力・判断力・表現力等」は，鵬 DP の「分析力」，「表現実行力」「問題発見力」に該当し，昨年度の学年末

鵬DP評価表		評価基準	
	鵬DPとその定義	S（応用）	A（つながり）
	点　　数	５点	４点
DP	**問題発見力**	設定した課題を解決するための解決案を提案できる。	類似の問題解決策を参考に、現在の問題解決のための課題設定を行うことができる。
定義	・課題を的確にとらえたり、捉えた課題から新たな視点や発見ができる力		
DP	**分析力**	図表や分析結果から論理的に思考し、他者に説明できる。	書籍等から、適切な図表や分析方法を自ら学ぶことができる。
定義	・論理的に思考できたり、データの特徴を的確にとらえることができる力		
DP	**表現実行力**	スライドやポスター等の発表や論文、その他、その時最も適切な方法を選択し、他者を説得するための提案ができる。	物事を他者に伝えた後、質問や意見に対し、論理的に説明することができる。
定義	・物事を他者に伝えられたり、実際に行動につなげる力		

図２　鵬 DP 評価表

考査では，それらのスキルに関連する問題を，各５点の 15 点満点で作成した。評価については，各教科で検討した。さらに問題の妥当性を検証するため，令和２年度に入って職員研修会を開催した。

(2) 探究活動での鵬DPの活用

各教科の取組に加え，「総合的な探究の時間」においても「鵬 DP」を活用している。本校では探究課題を「宮崎市の活性化を目指した地域課題研究」と設定し，地域社会の問題を自分たちの問題として捉え，新たな解決策を地域に寄り添いながら提案・実践している。

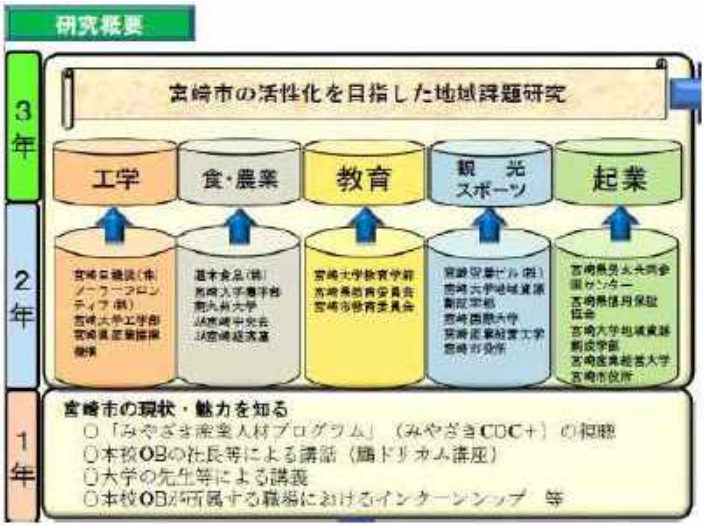
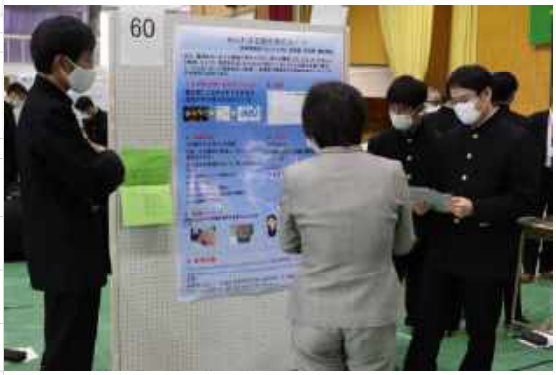


図３　研究概要

２年生は４～５名のチームを編成し，地域の活性化を目指して，地域の課題を自ら発見し，それを解決していくという取組を行っている。この探究活動ではポスターセッションによる「発表会」を計画し，企業や市役所，NPO 法人，大学教員等多くの方に来校していただいている。また，地域社会に対する生徒の提案・実践の完成度を見るため，職員に加え，これらの方々に「鵬 DP」を用いた審査をお願いしている。

2学年課題研究発表DP評価表		評価基準	
	鵬DPとその定義	S	A
	点　　数	3点	2点
DP	分析力	□AIに加え、集めた情報を様々な観点から比較検討している。	□集めた情報を適切に読み取り、事実に基づいて客観的に結果を述べている。
定義	・論理的に思考できたり、データの特徴を的確にとらえることができる力		
DP	再認識力	□AIに加え、新たな視点を取り入れた提案ができている。	□根拠を持って課題解決につながる具体的な提案ができている。
定義	・考えたり、振り返ったりできたり、得た知識や技能を応用できる力		
DP	表現実行力①（発表態度）	□AIに加え、質問応対が優れている。	□堂々と聴衆を見ながら、十分な声量で、適切なスピードで発表している。
	表現実行力②（見やすさ）	□大きさや配色に配慮があり、必要なデータも適切である。	□大きさや配色に配慮があるが、必要なデータ(数値や単位)が抜けている
定義	・物事を他者に伝えられたり、実際に行動につなげる		

図４　２学年課題研究発表DP評価票



発表会の様子（１）

発表会の様子（２）

４　実践の成果と課題

(1) 各教科の取組について

以下は，昨年度学年末考査「生物基礎」で用いた問題の一部を抜粋したものである。

> 分析力）成分表を活用しての問題
> ・イヌリンと尿素の血しょうに対する濃縮率を，それぞれ小数点第１位まで求めよ。
> 表現実行力）成分表を活用しての問題
> ・ナトリウムイオンの濃度が原尿と尿で同じである理由を再吸収の観点から述べよ。
> 問題発見力）カタラーゼに関しての問い
> ・過酸化水素水と煮沸した肝臓片（内部にカタラーゼが含まれる）を入れた試験管では酸素の気泡は発生しないと教科書にあるが，実験すると，少量ではあるが気泡が発生していた。これはなぜか。説明しなさい。

次の図５は，昨年度の学年末考査での鵬 DP を用いた評価を個票で示したものである。

この個票は，「国語総合前半」において，「問題発見力」は５点満点中２点，「分析力」や「表現実行力」はそれぞれ０点であることを示している。また「保健」では，「問題発見力」は１点，「分析力」，「表現実行力」はそれぞれ５点で，総点としては「問題発見力」は 21 点，「分析力」は 29 点，「表現実行力」は 17 点であることを示している。さらに，それぞれの力の総点と学年の平均とを比較したレーダーチャートを用いているので，身に付けた力と身に付けていない力を明確にすることができる。この個票を個別面談等でも活用する予定である。

学年末　考査　成績表

年	組	番	氏名
1			

	5点 問題発見	5点 分析	5点 表現実行	合計点
国語総合前半	2	0	0	2
国語総合後半				
数学前半	5	5	0	10
数学後半				
コミ英Ⅰ	0	1	3	4
英語表現Ⅰ	3	4	0	7
世界史A				
日本史A				
地理A				
現代社会	2	3	0	5
科学と人間生活	4	5	1	10
保健	1	5	5	11
家庭基礎	0	1	4	5
情報	4	5	4	13
総点	21	29	17	67
学年平均点	29.8867	28.4282	24.0967	82.4116

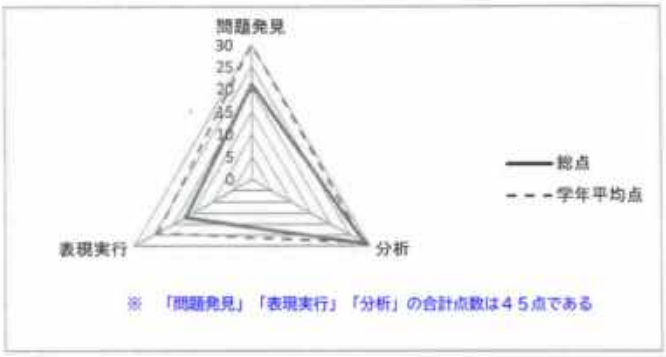


図５　鵬 DP を用いた評価した成績表

(2) 探究活動の取組について

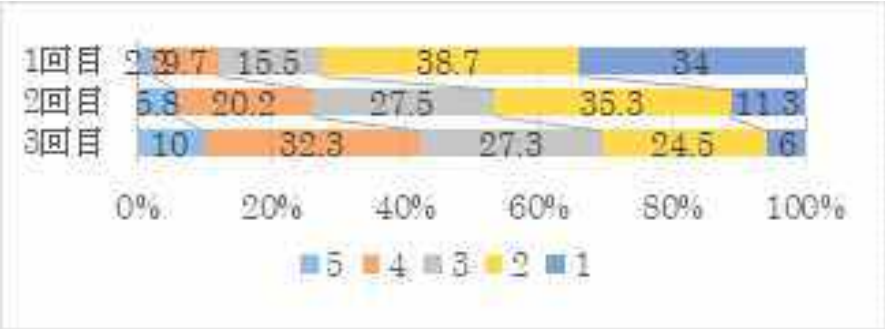
アンケート結果から，この探究活動を通して生徒たちの鵬 DP の６つの力は確実に向上していることが明らかになった。アンケートの結果の一部を示す。

【実施時期】

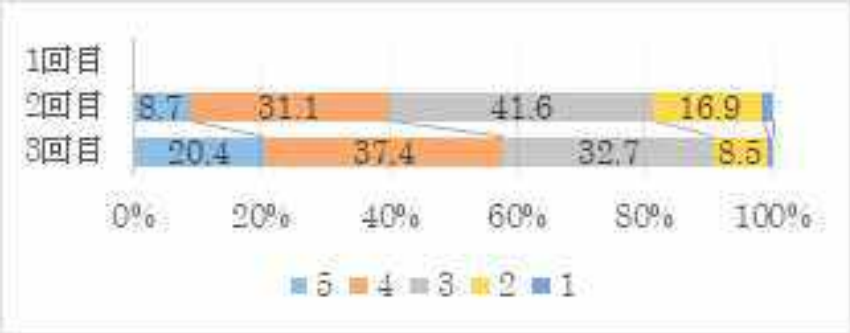
１回目：平成31年　　４月（入学後）
２回目：令和元年　　８月（地域学終了後）
３回目：令和２年　　１月（トリコン終了後）

５　できる　　４　まあまあできる　　３　ややできる　２　あまりできない　１　できない

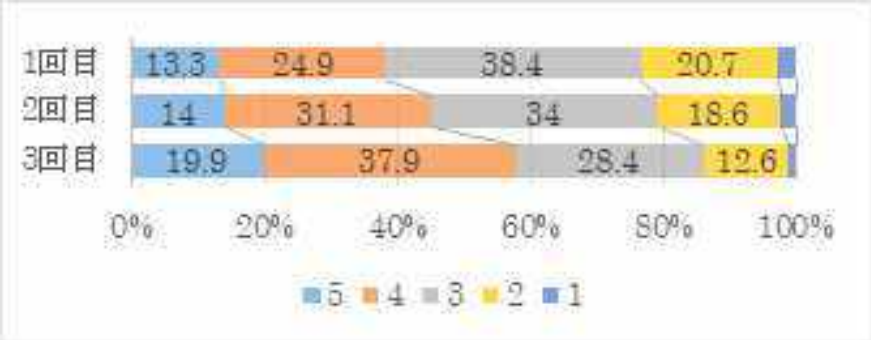
設問１　宮崎市の地域資源について具体的に説明できる。**（再認識力）**



設問14　課題研究の結果を分析し結論を見出すことができる。**（分析力）**



設問21　自分の考えを様々な方法で効果的に表現することができる。**（表現実行力）**



鵬 DP のうち，特に注目しているのは「再認識力」，「分析力」，「表現実行力」である。これらの力は入学当初の「できる」「まあまあできる」といっていた肯定的な割合が，「地域学」（地域のことを知る活動）や「トリコン」と呼ばれる発表会の後，上昇していることが分かる。

「トリコン」とは「鵬コンテスト」の略で，１年次に取り組んでいる課題研究の発表会のことである。

「再認識力」については，高等学校入学以前も地域についての学習を行ってきたが，地域にある具体的な資源までは十分な認識がなかった。「再認識力」については「地域学」の中で，地域に根ざした取組の説明を聞いたり，生徒自らが設定したテーマに基づいた探究学習を行ったりすることで向上したと考えられる。

「分析力」については，インターネットを駆使して図表を調べたり，「アンケート調査」や「インタビュー調査」を実施して，データを調べ，そのデータが持つ意味などを生徒どうしで検討し

たりすることで向上したと考えられる。

「表現実行力」については，人前で発表する機会はあったものの，発表者が固定されていたり，発表原稿のフォーマットができあがったものを発表したりするなどであったと思うが，今回の取組は発表原稿をはじめ，プレゼンテーションに必要なスライドや発表の仕方などを生徒自らが学び取っていったことで向上したと考えられる。

このように探究活動においても，鵬 DP を活用することで，一人一人の生徒に対して学校全体の「つけたい力」の向上する様子を可視化できるようになった。

(3) 特別活動等における鵬DPの活用

令和元年度および令和２年度においては「教科活動」と「探究活動」に力点をおいて実践している。今後は生徒会活動，部活動，各種学校行事などについて「鵬 DP の６つの力を評価したいと考えている。

図６は，令和３年度以降，各行事や活動を鵬 DP の視点に当てはめたものである。この表を利用すれば行事等の目的や意思を再検討し「スクラップ＆ビルド」することが可能であると考えている。

	入学式	始業式	生徒会入会式	四校定期戦	遠足	ピアサポート	生徒総会	生徒会選挙	鵬ドリカム講座	避難訓練	ボランティア活動	部活動	・・・	
再認識力	○	○	○				○	○		○				6
情報収集力					○	○			○	○	○			5
問題発見力						○	○	○			○			4
分析力									○			○		2
共感力			○	○	○	○					○	○		6
表現実行力	○	○		○			○	○		○		○		7

図６　評価票

これまでのテストの作成や授業改善の話合いは教科あるいは科目の中だけで閉じてしまいがちだった。そこで，学期に１回，教科を超えた職員研修会を実施している。研修テーマは，過去のテストの振り返りで，問い方や模範解答について協議し，次回の作問の基準決めや内容について幅広く検討する。研修会の前半は各科目で検討し，その内容を教科全体に広げた。後半では，各教科で検討されたことを職員全体に向けて発表し，情報を共有した。これは貴重な体験であり，教科横断的な取組の第一歩であると考えている。

令和２年度　職員研修会記録用紙

1　教科・科目名

2　昨年度の鵬ＤＰを使った学年末考査の作問で「うまくいったこと」「うまくいかなかったこと」をできるだけ体的に書いてください。

うまくいったこと	うまくいかなかったこと
・評価の明確化ができたこと。	・評価の明確化ができていない部分がいろいろある。
・作問の工夫（教科横断的な作問も含む）ができたこと。	・作問の工夫にまだまだ課題がある。
・授業研究ができたこと。	・授業研究に足りないことがまだまだある。
・このようなテストをしたことで、生徒に変化が見られた。	

3　ＨＲ活動や生徒会活動、学校行事などの特別活動や部活動で鵬ＤＰを活用した例があれば書いてください。
例えば、朝の 10 分間読書の後、読んだ本の内容を発表するなど。

・HR での活用
・部活動での活用
・文化祭での活用

図７　令和２年度職員研修会記録用紙

図７は，先日の職員研修会で用いた記録用紙である。

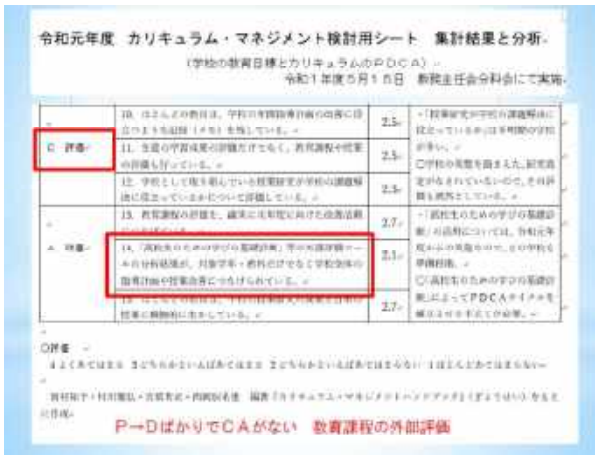
職員研修会を通して，日頃は思いつかない発想や意見を職員全員で共有できることが，今後の「鵬 DP」活用に有効であると感じている。

最後に，「地域の次世代リーダーをつくる」ためには，教科教育活動は重要である。この教科教育を基礎として探究活動を生徒に実践させることで，地域の実態を浮き彫りにし，地域の課題を解決できる人材を育成したい。この２つの活動を鵬 DP という指標に基づいて評価することで，必要な力がどれくらい身に付いたかを可視化できる。それらの評価を基に，これらの活動や評価方法を検討，改善する。つまり，カリキュラム・マネジメントの手法で本校の課題である「学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で，その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」が実現できると考えている。

３．カリキュラム・マネジメント研修会の取組

(1) カリキュラム・マネジメント担当者対象の研修会

研修名	第１回カリキュラム・マネジメント研修会	日時	令和元年６月６日（木）
内容	**①講義「カリキュラム・マネジメントの充実に向けて」** 担当　高校教育課・指導主事 ・「資質・能力育成研究会」の目的と概要 ・学習指導要領とカリキュラム・マネジメント ・カリキュラム・マネジメントの実態分析 **②演習・協議「各校のカリキュラム・マネジメントの現状と課題」** 担当　高校教育課・指導主事 ・カリキュラムマネジメント・チェックリストを活用した演習		
受講者感想	・教頭先生からこの会に参加するように言われ、自分はカリキュラム・マネジメントに関わるポジションにもないのだが･･･と思いながら参加しました。参加してみて、カリキュラム・マネジメントの考え方は、むしろ、一般の職員まで全員理解していないといけないなということが実感できました。推進する立場の人がリーダーシップをとってすすめていくためにも個々の理解度を上げるのは重要だと考えます。 ・「カリキュラムマネジメント・チェックリスト」にチェックを入れることで、具体的に考えることができた。学校・組織としての弱さについても自校のことを把握するだけでなく、他校と共有することができた。 ・今日はありがとうございました。カリキュラム・マネジメントの担当に任命され、本日の研修に参加する事になりましたが、正直何をすればよいのかわからなく、業務が増えたと心配していましたが、研修の中で、働き方改革につながるというお話があったとおり、実現できれば、より働きがいややりがいを持って働ける学校になると思いました。他の教員の理解が得られるよう学校での研修も計画していきたいと思います。		



研修で使用したスライド

「各校の取組の現状と課題」について研究協議

研修名	第２回カリキュラム・マネジメント研修会	日時	令和元年１１月２１日（木）
内容	**①講義１「カリキュラム・マネジメント実践研究の進捗状況」** 担当　高校教育課・指導主事 ・カリキュラム・マネジメントの実践研究と研修会の現状と課題 **②報告「カリキュラム・マネジメント先進校視察及び実践校の取組」** 担当　カリキュラム・マネジメント実践校３校の代表者 ・カリキュラム・マネジメント先進校視察と実践校の取組の現状報告 **③情報交換「カリキュラム・マネジメントの取組の現状と課題」** 担当　高校教育課・指導主事 ・各校のカリキュラム・マネジメントの取組についての情報交換 **④講演２「カリキュラム・マネジメントの充実に向けて」** 講師　京都大学大学院教育学研究科　特任教授　盛永　俊弘　氏 ・教科横断的な視点に立った教育課程は、なぜ必要？　誰に必要？ ・教職員の協働性・同僚性を高めるヒント		
受講者感想	・本校でも教育目標や目指す生徒像がありながら、それをどう具体化すべきかについては教科や担当者任せになっており、可視化するにはどうすれば良いかについて悩んでいたところでしたので、３校の実践報告で更に方向性がクリアになり、大変ありがたかったです。学校の強みを生かしつつ、実態に合った形で計画していきたいです。盛永先生の話も大変参考になりました。特にＳＴＥＡＭの考え方は新鮮でした、と同時に納得できました。私たち自身も時代を読み本質を見極めることが大事だと思いました。とても興味深く面白い講義でした。ありがとうございます。 ・午前中の報告や情報交換等で、これまで漠然としすぎていて分からなかったカリキュラム・マネジメントについて、担当者として今後どう動いて行けばよいのかが何となく分かったような気がします。午後の講演会ではカリキュラム・マネジメントを手段として、これからの社会で学校がどのように変容していくべきかが見え、勉強になりました。形ばかりのカリキュラム・マネジメントになってしまわないように、管理職や同僚と意志を統一して動いていきたいと思います。		

講演をされる盛永先生

グループ協議の様子

盛永先生の講演資料の一部

盛永先生は、カリキュラム・マネジメントについて多角的な視点で説明いただいた。ここではご自身が公立中学校（Ａ校・Ｂ校）で取り組まれた実践についての部分を掲載する。なお、本実践の内容は『子どもたちを“座標軸”にした学校づくり』（日本標準、２０１７年３月）[12]に詳しくまとめられている。

Ａ校　・Ｂ校のマネジメント

1　子どもたちを座標軸に･･･生徒の考える“理想の学校”へ
「子どもたちが学びたい学校」「保護者が通わせたい学校」「教職員が勤めたい学校」

学校を改善するカリキュラム･マネジメント･･･生徒の教育的成長を実現し、学校課題を解決する5つの視点

①ビジョン・目標の共有化と具現化
・学校のビジョン・目標を子どもたちと共有化（全校生徒へのアンケートなど）･･･絵に描いた餅にならないように
・生徒・保護者が「新制服」を決める、生徒・保護者参加による修学旅行先の決定･･･

②教育活動の質を高める取り組みとマネジメントサイクルの改善
・生徒のために短期間での小さなPDCAを繰り返す
・年度途中でも柔軟に軌道修正（例、昼休みの延長）
・学校行事などの評価（総括）は年度末を待たずその都度実施
・「授業評価アンケート」を活用しながら、継続的に授業づくりの改善
・教科と総合的な学習の時間、特別活動をつなぐ
・早めの年間指導・評価計画の作成

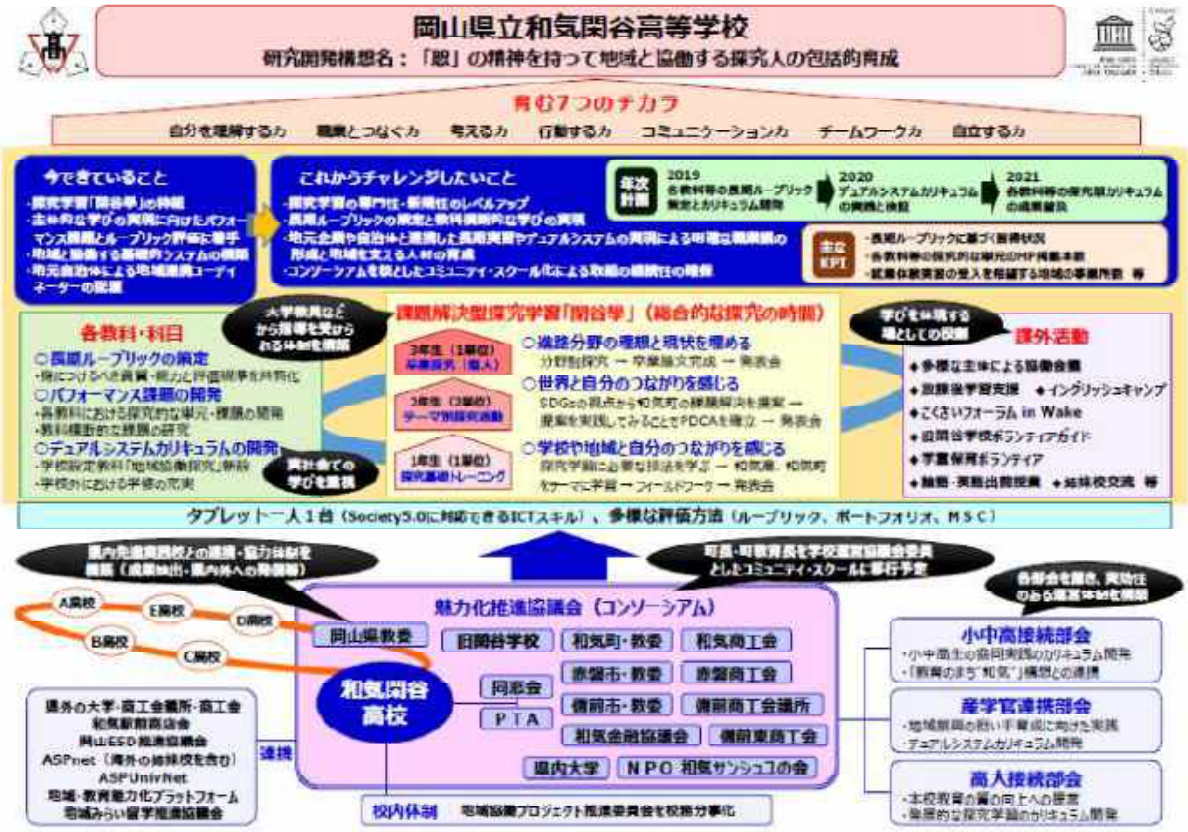
③学校評価とデータでの検証（エビデンス・ベースト）
・「学校評価」が有効に機能するように、実施時期と内容を変更
・最も大切で基本となる教職員による自己評価を年度末ではなく２学期末に実施（１月～３月は次年度の準備期間）
・２月の職員会議では、総括と併せて、次年度方針案をセットで検討
・第三者評価の実施（評価委員は、民間企業の元役員、文科省の研究官、教育産業の代表取締役、大学教員など）

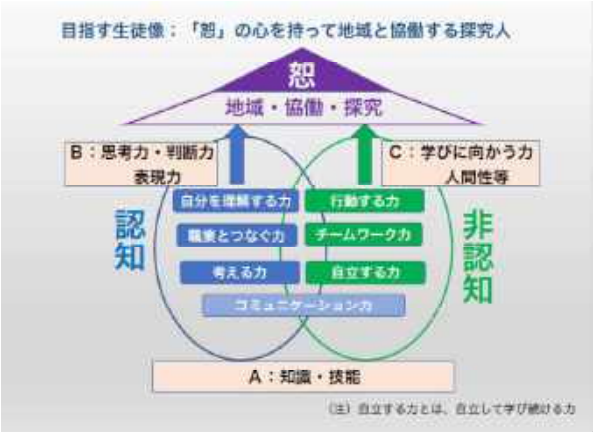
④家庭・地域社会との協働
・学校だより（市内の自治会の協力で配布、回覧）、ホームページ
・キャリア教育推進への地域の協力・ゲスト講師
・社会とともにつくる教育課程
・総合的な学習の時間などで、「東日本大震災を考える」カリキュラム
・内外リソースの活用･･･学習支援ボランティア（英語･数検･補充学習）、図書館支援ボランティアによる読書活動（図書館コンサート、人形劇の自主公演）

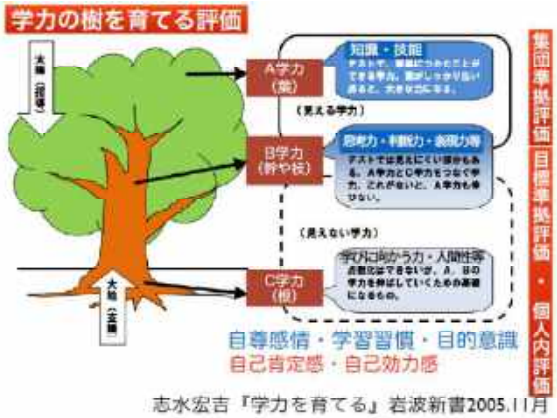
⑤教職員の同僚性・協働性の向上で組織力（チーム力）を高める　※元気で楽しく力を合わせて！
・教職員のモチベーションを高める職場　※「有能性・自律性・関係性」
ー“私たちの学校”という風土が高まれば、一人ひとりの力は足し算ではなく、かけ算になる。
組織力で達成した感動と充実感は、一人で達成する感動と充実感よりも広くて深いものになる。

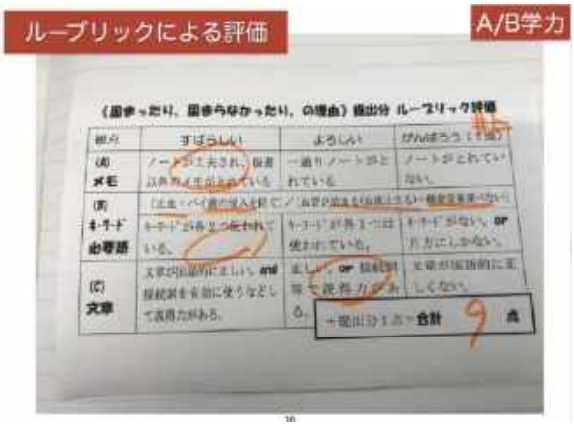
研修名	第３回カリキュラム・マネジメント研修会 （オンライン）	日時	令和２年１０月２７日（火）
内容	**①説明「カリキュラム・マネジメント実践上の課題」** 担当　高校教育課　指導主事 ・カリキュラム・マネジメントの実践研究のこれから **②報告「カリキュラム・マネジメント実践校の取組」** 担当　カリキュラム・マネジメント実践校３校の代表者 ・カリキュラム・マネジメント実践校の現状報告 **④講演「新時代に対応した高等学校教育の在り方とカリキュラム・マネジメント」** 講師　岡山県青少年教育センター閑谷学校　所長　香山　真一　氏 １．新しい時代とは（背景）　　２．どんな人材を育てるのか（理想） ３．どんな課題があるか（現状）　４．どう改善していくか（手立て）		
受講者感想	・とても勉強になり、やるべき事が見えた気がします。まだその過程が明確ではありませんが、カリマネ委員の先生方と本研修内容を共有し、一緒に悩みながら進めたいと思います。特に参考になったのは和気閑谷高校の実践でした。状況も本校と似ており、大変参考になりました。本校のように多様な生徒を受け入れている学校は進路先も様々ですが、どの進路に進む生徒でも必要な非認知能力を、組織的に育成することが大切だと感じました。全職員でこの考え方を共有できると、業務が進みやすくなると思いました。質疑応答では、今後この仕事を進めていく上で、どこの学校も職員の温度差等の同じような課題を乗り越えていかなければならないのかなと感じました。定期的に各校で出てきた課題を共有できるとありがたいです。管理職の先生のリーダーシップはもちろんですが、たくさんの先生を巻き込んで進めたいと思います。また、作成した先生方が、本校を離れた後も続くような仕組み作りが大事だと考えています。働き方改革の観点からも、新しい業務を増やすのではなく、今ある業務とうまくつなげてこの仕事をしていきたいと考えています。 ・カリキュラム・マネジメント実施校３校の実践事例を見て、職員全体で生徒に身につけさせたい資質・能力が共有化されており、学校行事、総合的な探究の時間、さらに各教科においてルーブリック（チェックシート）が整備、活用されいることが大いに参考になった。校内研修等でボトムアップの形でスクール・ミッション／スクール・ポリシーが練り上げられ、「見える化」された形で職員、生徒に浸透していく取組は、管理職と相談しながら、是非実施していきたい。香山真一先生の講演では学力をＡ～Ｃ学力に分け、「見える学力」「見えない学力」や大学入試等との関連も示しながら、ペーパー評価、パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価等への落とし込みの具体例が紹介された。普通科進学校として、「出口の指導」との関連が気になるところであったが、分かりやすくまとめられており、本校でも「未来リサーチ委員会」や教科代表者会での話題にしたいと考える。具体的な実践報告が大変参考になる研修であった。		

香山先生が講演で使用されたスライドの一部









まとめ

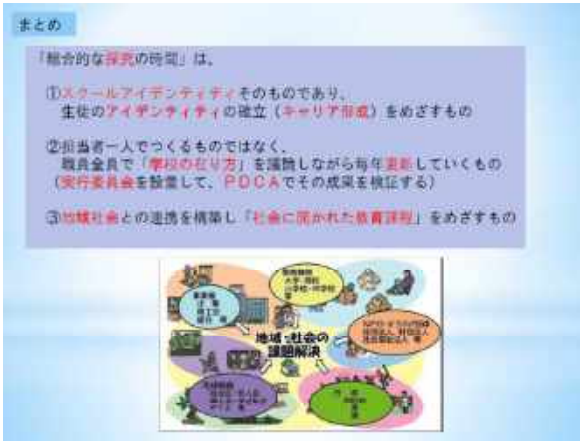
1. 恕の心をもって探究する人を地域と協働して育てたい。

2. 学力の３要素を包括的に向上させる必要がある。

3. 地域でのリアルな体験を通して学びを深めることによって個が育ち、地域の形成者としての自覚と新時代に対応する資質・能力が育まれる。

(2) 総合的な探究の時間担当者対象の研修会

研修名	第１回総合的な探究の時間とカリキュラムマネジメント研修会	日時	令和元年７月２２日（月）
内容	**①講義１「総合的な探究の時間の充実に向けて」** 担当　県教育研修センター　教育支援課・主幹 ・学習指導要領と総合的な探究の時間 **②情報交換「総合的な探究の時間の全体計画作成の現状と課題」** 担当　高校教育課・指導主事 ・総合的な探究の時間の全体計画についてのグループ協議 **③講義２「総合的な探究の時間を支える学校図書館」** 担当　学校司書エリアコーディネーター２名 ・情報活用能力を育成する場としての学校図書館 **④シンポジウム「総合的な探究の時間とカリキュラム・マネジメント」** パネリスト　地域と協働による高等学校教育改革推進事業指定校３校の代表者 （カリキュラム・マネジメント実践校含む） コーディネーター　高校教育課・指導主事 ・地域と協働による「探究的な学び」とカリキュラム・マネジメント		
受講者感想	・今日の研修で、探究活動の難しさを改めて感じました。中途半端では生徒にとって良くないし、よい環境を整えようと思えば物理的問題が生じる。このジレンマを克服するには、入念な計画と職員間の十分な理解と協力が欠かせないと考えます。根本的に今の形を変えていかなければ無理が生じると思われるので、再度見直しをしていこうと思います。 ・総合的な探究の時間がどういうものか、少しだけ分かったように感じました。この研修を受けた自分自身は「生徒、教師、学校、地域が変わるきっかけになるからがんばって取り組みたい」半分、「総合的な学習と何が違うの、めんどうだから今まででいいじゃないか」半分の思いがあります。それは研修を受けていない先生方に一致して見られる思いかもしれません。めんどうだけどそれを進めていく意義と、日々目の前にいる生徒の未来と照らして考えていかないとなあとじわっと思ったところでもありました。		

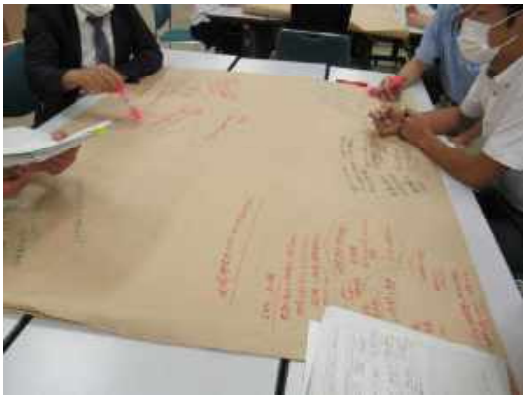


研修で使用したスライド

●総合的な探究の時間の全体計画モデル

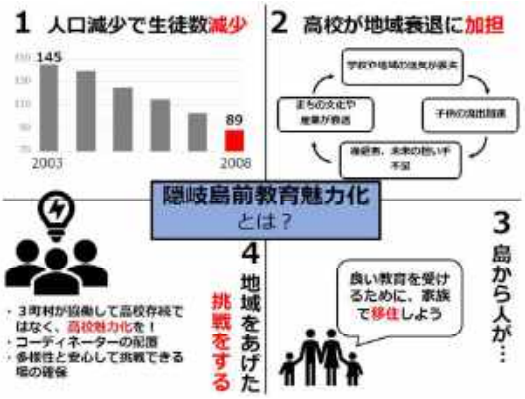
教育目標をもとに教育課程を編成する上で「総合的な探究の時間を教育課程の中核に据えて、学習効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立することが大切」[13]であるため、各校の「総合的な探究の時間」の「全体計画」についてグループで情報交換を実施した。

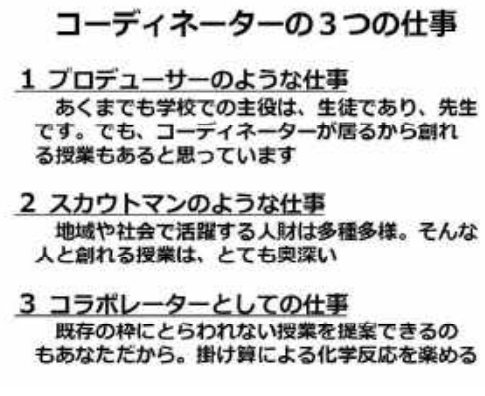
研修名	第２回総合的な探究の時間とカリキュラムマネジメント研修会	日時	令和２年７月１３日（月）
内容	**①講義１「総合的な探究の時間とカリキュラム・マネジメント」** 担当　高校教育課・指導主事 ・総合的な探究の時間と学習指導要領 **②実践報告「島根県立隠岐島前高等学校の授業実践」** 講師　こゆ財団　教育イノベーション推進専門官　中山　隆　氏 ・総合的な探究の時間と外部リソースの活用 **③演習１「総合的な探究の時間における『問い』の設定」** **演習２「総合的な探究の時間における『対話』の支援」** 担当　飯野高等学校　指導教諭　梅北　瑞輝　先生 ・総合的な探究の時間の授業デザイン		
受講者感想	・探究の授業をやっていくためには、教員の意識を変えていく必要があると考えています。しかし、研修がまったく足りておらず、どうやっていいのか分からないという方も多くいらっしゃいます。本校では統一したやり方で実施していますが、戸惑いも多いようです。今回の話を伺って、地域との連携の在り方で、ぜひコーディネーターに入ってもらえると助かると考えました。どのタイミングがいいのか分からないところもあり、課題が明確になった気がします。 ・スクールアイデンティティを具体化・見える化する上で、探究の時間が鍵になっていると感じています。他教科で身に付けた資質・能力をどう探究に活かしていくか、試行錯誤しています。学びを課題解決や探究に活かすことは、学ぶ意欲や理解にもつながっていくと感じますが、なかなか具体化できません。今回の研修の実践は「問いの設定」「意見交換」において頭の中の思考や知識をビジュアル化することの大切さを改めて実感しました。 ・生徒が積極的に「探究」に取り組めるように、教師側のスキルを高めていくことも必要であると感じた。探究の形（オンライン・オフライン）もテーマの設定次第でいろいろと変わってくる。今後も生徒に身につけさせたい力は何かを学校全体で考えて、全職員でかかわっていけるように研修を深めてきたい。		



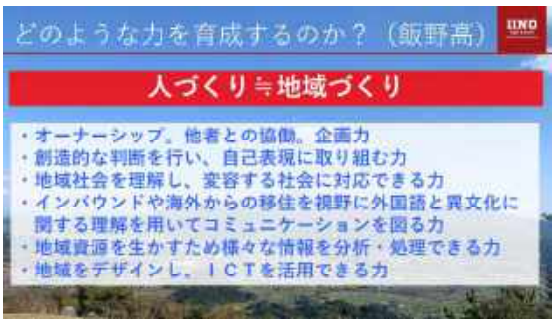
職員研修の様子　マッピングやワールドカフェによる演習

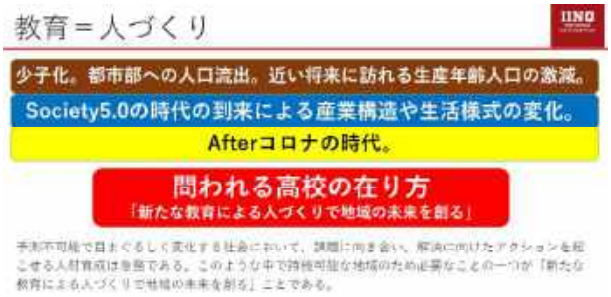
●中山さんが講演で使用されたスライドの一部





●梅北先生が演習で使用されたスライドの一部





４．カリキュラム・マネジメントに関するＱ＆Ａ

本節では、第３節の「カリキュラム・マネジメント研修会」等における外部講師の説明や質疑応答、参加者の研究協議でのやりとり等を「Ｑ＆Ａ」形式でまとめた。

Ｑ１　カリキュラム・マネジメント実践校の研究テーマの関連性は？

Ｑ２　教科横断的な視点に立った教育課程の編成を進めるには？

Ｑ３　各学校の教育目標と各教科で育成する資質・能力をを関連づけるには？

Ｑ４　各教科等と「総合的な探究の時間」で育成する資質・能力を関連づけるには？

Ｑ５　カリキュラム・マネジメントのＰＤＣＡを機能させるには？

Ｑ６　教員の同僚性・協働性を高めて、組織力を向上させるには？

Ｑ７　カリキュラム・マネジメントを進めるための校内の授業研修の在り方は？

Ｑ８　今後、各校のカリキュラム・マネジメントをどのように進めていけばよいか？

Ｑ１．カリキュラム・マネジメント実践校の研究テーマの関連性は？

カリキュラム・マネジメントの実践校３校においては、まず下記のａ～ｃの研究テーマの関係が話題となった。

〈研究テーマ〉

ａ　学校の教育目標等の設定及び実現に向けた研究（日向高等学校）

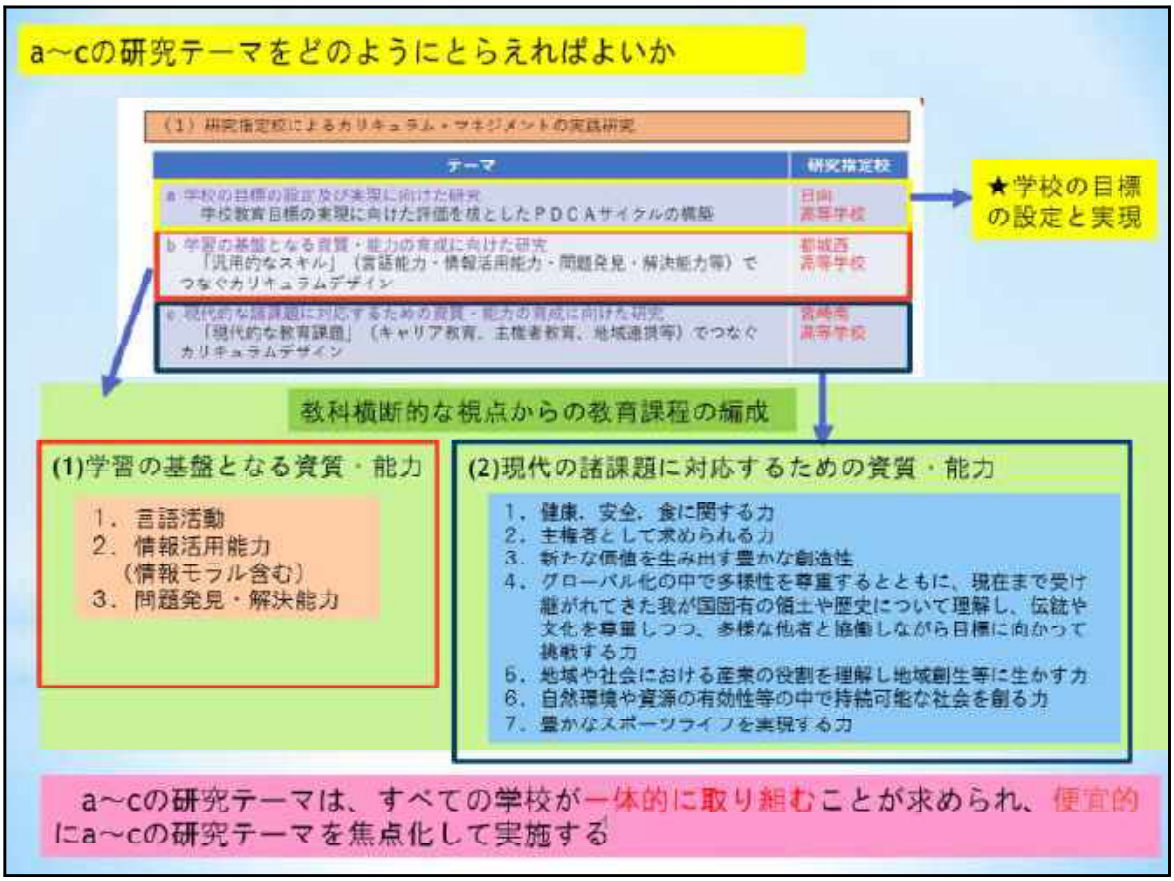
ｂ　学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究（都城西高等学校）

ｃ　現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究（宮崎南高等学校）

【課題】　ａ～ｃの研究テーマは、互いにどのような関係にあると考えるべきか？

当初、ａ～ｃの研究テーマについて、その内容のみを担当校で研究する予定だったが、実践を進める中で、ａ～ｃの内容は、結局、すべてを一体的に進めていかねばならないことがわかった。例えば、宮崎南高校は、学校の教育目標を「地域の次世代リーダーとして、地域に根差し、貢献できる人材の育成」と設定し（ａ）、そのために身に付けさせたい６つのスキルを、各教科・科目（ｂ）、総合的な探究の時間（ｃ）との教科横断的なカリキュラムにおいて育成するようにである。

ａ～ｃの研究テーマは、カリキュラム・マネジメントを進める上で、それぞれ独立して存在するものではなく、相互に関連し合い、一体的に取り組むことで初めて実を結ぶものと考えられる。ただ、実践研究は、日向高校は主に学校行事や職員会議、都城西高校は各教科・科目、宮崎南高校は総合的な探究の時間に焦点化して実施することになった。



Ｑ２．教科横断的な視点に立った教育課程の編成を進めるには？

また、高校における教科・科目は、小中学校に比べて「高度化」「細分化」しているため、「教科横断的な視点に立った教育課程の編成」をイメージしにくい。また、実際に教科横断的な視点に立った教育課程の編成に取り組むと、下記のような不安を感じる学校も多い。

【課題】　教科横断的な視点に立った教育課程の編成のために、各教科・科目等の教育目標や内容の相互関連が一目でわかるような「教育課程表」や「単元配列表」の作成に取り組んでいるが、はたしてそれらは有効活用できるのだろうか？

高校の各教科・科目の関係性を「見える化」するのは、かなりの労力を要するが、せっかく作った「教育課程表」や「単元配列表」も活用されなければ意味がない。

第２回カリキュラム・マネジメント研修会で講演をされた盛永俊弘先生は、「教科横断的な視点に立った教育課程」については、次の説明をされた。

教科横断的な視点に立った教育課程は、なぜ必要？　誰に必要？

・教科横断は“手段”
・教科横断をしなければいけないと言われるから、教科を横断するのではなく、「未来に生きる子供たちに必要な力を育てるために必要な視点」だから・・・
・コンテンツを無理につながるのではなく、コンピテンシーでつなぐ・・・

※専門性を深め生かしながら

先ほどのＰＤＣＡと同様、「教科横断」も「学校の教育目標を達成するための手段として機能させる」ことが重要で、その目的は「未来に生きる子供たちに必要な力を育てるため」と説明された上で、「ＳＴＥＡＭ教育」との関連性についても言及された。

ＳＴＥＡＭ教育については教育再生実行会議「技術の新展に応じた教育の革新、新しい時代に対応した高等学校改革について（抄）」（２０１９年５月１７日）[14]に次の説明がある。

Society5.0で求められる力と教育の在り方

国は、幅広い分野で新しい価値を提供できる人材を養成することができるよう、初等中等教育段階においては、ＳＴＥＡＭ教育（Science，Technology，Engineering,Art,Mathematics等の各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科横断的な教育）を推進するため、「総合的な学習の時間」や「総合的な探究の時間」、「理数探究」等における問題発見・解決的な学習活動の充実を図る。

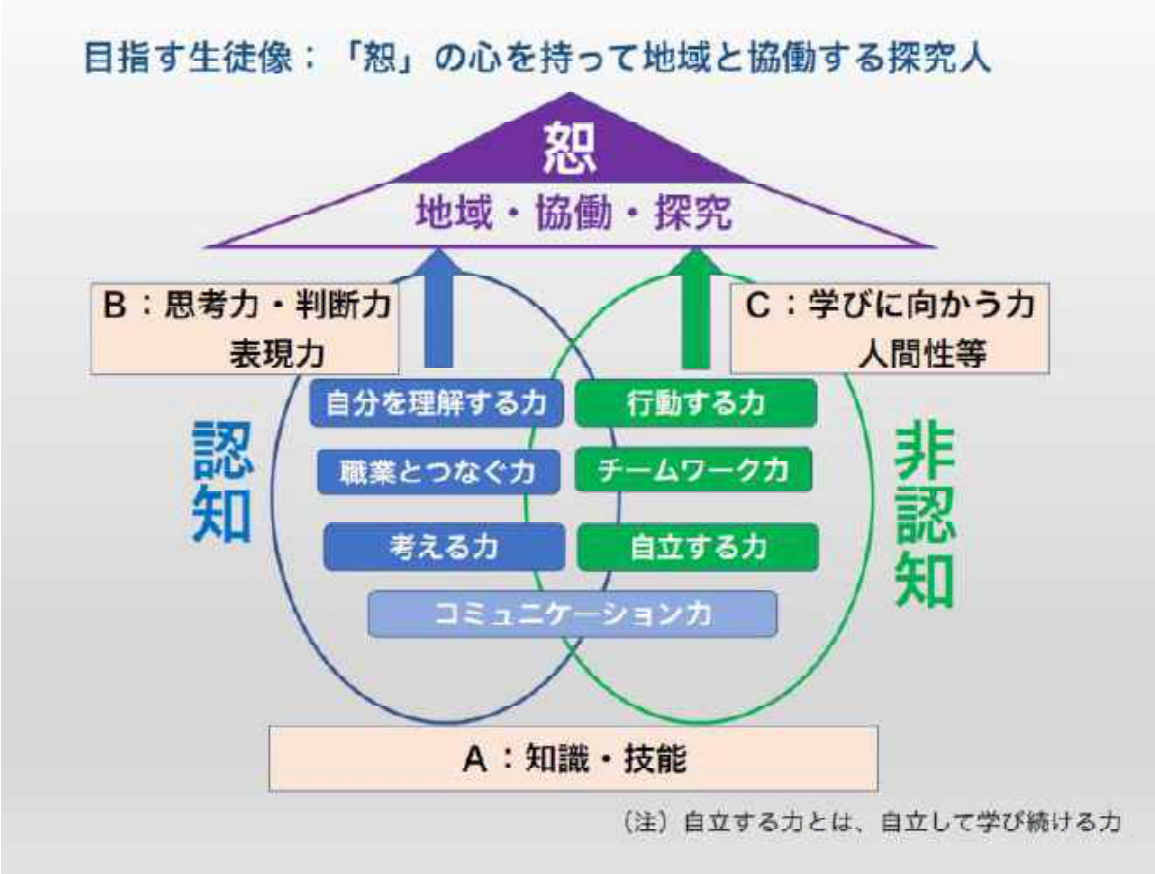
教科横断的な視点に立った教育課程の編成を進めるには、「未来に生きる子供たちの必要な力」を身に付けさせるために、まずは「総合的な探究の時間」を基軸にして、無理にコンテンツ（教育内容）をつなぐのではなく、コンピテンシー（身に付けさせたい資質・能力）でつなぐとよいだろう。なお、ＳＴＥＡＭ教育については、第４章第３節の「ＳＴＥＡＭ教育とカリキュラム・マネジメント」を参照。

Ｑ３．各学校の教育目標と各教科で育成する資質・能力を関連づけるには？

カリキュラム・マネジメント研修会におけるカリキュラム・マネジメントの議論のプロセスは、まず、①「教育目標の見直し」から始まり、次に、②「生徒に身に付けさせたい資質・能力」の検討に進み、最後に、その「資質・能力」を育成するために、③「教科横断的な教育課程をどのように進めていけばよいか？」というステップを踏むことが多い。そして①～②までは、割とスムーズに進んでも、③の段階で議論は足踏みをしてしまう。ひとまず「生徒に身に付けさせたい資質・能力」を「～力」というコンピテンシーとしてまとめたものの、それが日々の各教科の授業の中でどのように育成していくのかがイメージしにくい。

【課題】　各学校の教育目標（生徒に身に付けさせたい資質・能力）と各教科で育成する資質・能力をどのように関連づけて考えればよいか。

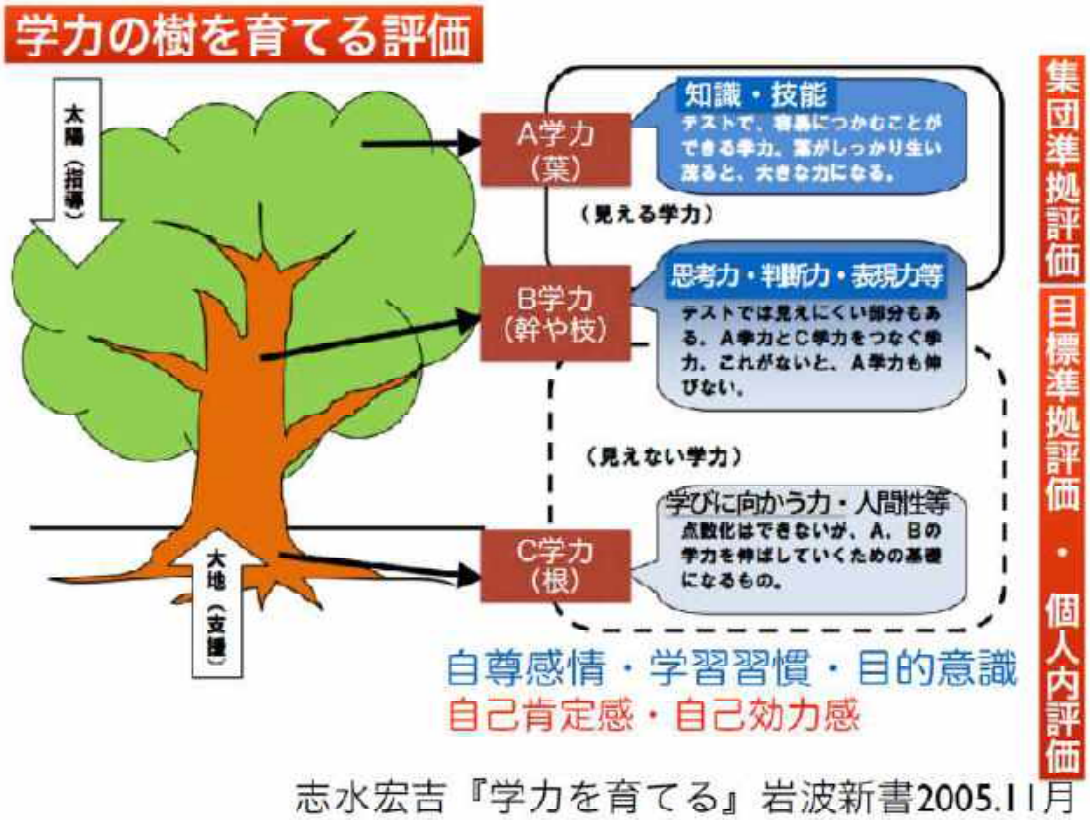
カリキュラム・マネジメント研修会（オンライン）で講演をされた香山真一先生は、下記のとおり説明された。

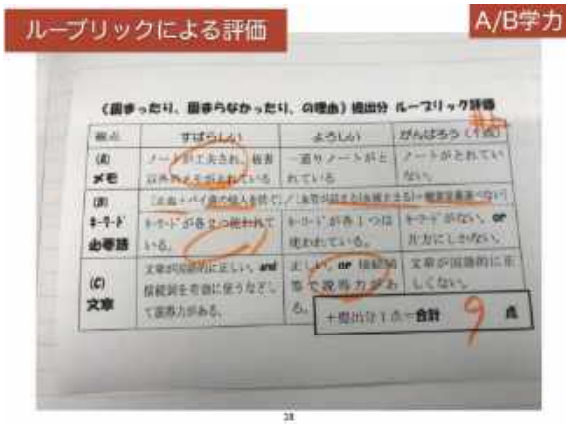


まずは、各学校の教育目標（生徒に身に付けさせたい資質・能力）を新学習指導要領の資質・能力の３つ柱（「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）を踏まえて、どのような位置付けになるのかを検討してみるとよい。

我々が「学力」としてイメージしがちなのは、知能検査等で測定できる「認知能力」の方だが、資質・能力の３つの柱は、「学びに向かう力、人間性等」のように「非認知能力」も想定している。各学校の教育目標（生徒に身に付けさせたい資質・能力）も、「認知能力」と「非認知能力」の両面から整理すると、各教科との結びつきもイメージしやすくなる。

また、香山先生は、各教科で育成する資質・能力の評価方法についても、下記の「学力の樹を育てる評価」の図を示されながら、「目標準拠評価」（ルーブリックによる評価）や「個人内評価」（ポートフォリオによる評価）の具体的な授業実践について説明された。





各学校の教育目標（生徒に身に付けさせたい資質・能力）と各教科で育成する資質・能力を関連づけるには、「資質・能力」の３つの柱（「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）を踏まえて整理をし、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価等も取り入れて、見えにくい学力もできるだけ可視化を図りながら、学校の教育目標の到達度を測ると良い。

Ｑ４．各教科等と「総合的な探究の時間」で育成する資質・能力を関連づけるには？

Ｑ４でも示したように、カリキュラム・マネジメントの議論は、「教科横断的な視点に立った授業の在り方」で暗礁に乗り上げることが多い。ここでは、「総合的な探究の時間」と各教科で育成する資質・能力の関連性について考察する。

【課題】　「総合的な探究の時間」と各教科等に関連付けて、どのように教科横断的な授業を進めていけばよいか？

一番イメージしやすいものが、『高等学校学習指導要領解説　総合的な探究の時間編』（平成３０年７月）[15]における下記のような学習内容の関連性を意識したものであろう。

> 例えば，エネルギーや環境の問題に関心をもち，課題の解決や探究活動を行った場合，生徒は，地球温暖化，酸性雨，オゾン層の破壊，砂漠化などについて調査し，地球規模の環境問題に起因する身近なエネルギーと環境・災害に関する課題を探究していく。ここでは，地理歴史科や公民科，理科で学習した資源と産業，政治，生態系とエネルギーなどに関する知識が発揮されることで，豊富な情報が収集される。

ただ、これらのアプローチは「生徒の課題解決のプロセスの中で必然性や必要感があるときには効果的であるが、教師側が無理につなげても、生徒はピンとこないことが多い」という指摘もあった。一方、「総合的な探究の時間」の研修会で講師の梅北先生が紹介した「マッピング」やパイロット教員の授業公開の研究協議で活用した「思考ツール（Ｙチャート）」などは、様々な場面で活用できる汎用性の高いものなので、「課題解決のためのスキルとして、すべての教科で意識させてはどうか？」という指摘もあった。これらは、物事を比較したり、分類したり、関連付けるための「考えるための技法」であり、『高等学校学習指導要領解説　総合的な探究の時間編』（平成３０年７月）[16]には、総合的な探究の時間において「考えるための技法」を活用することの意義について、次のような説明がある。

> 総合的な探究の時間が，各教科・科目等を越えた全ての学習の基盤となる資質・能力を育成すると同時に，各教科・科目等で学んだ資質・能力を実際の問題解決に活用するという特質を生かすという意義である。<u>「考えるための技法」を意識的に使えるようにすることによって，各教科・科目等と総合的な探究の時間の学習を相互に往還する意義が明確になる</u>。（傍線　筆者）

新学習指導要領では「思考力・判断力・表現力等」の育成が強調されているが、抽象的な情報を操作するのが苦手な生徒が、一歩前に進むための手立てとして「考えるための技法」は活用できる。また「個別の学び」だけでなく、「協働的な学び」においても「マッピング」などの「思考ツール」を活用して、それぞれの思考の過程を「可視化」することで、グループのメンバーの思考の深化やコミュニケーションの活性化を促すことができる。

『高等学校学習指導要領解説　総合的な探究の時間編』（平成３０年７月）[17]では、「考えるための技法」の例を、下記のようにまとめている。

○ 順序付ける
- 複数の対象について，ある視点や条件に沿って対象を並び替える。

○ 比較する
- 複数の対象について，ある視点から共通点や相違点を明らかにする。

○ 分類する
- 複数の対象について，ある視点から共通点のあるもの同士をまとめる。

○ 関連付ける
- 複数の対象がどのような関係にあるかを見付ける。
- ある対象に関係するものを見付けて増やしていく。

○ 多面的に見る・多角的に見る
- 対象のもつ複数の性質に着目したり，対象を異なる複数の角度から捉えたりする。

○ 理由付ける（原因や根拠を見付ける）
- 対象の理由や原因，根拠を見付けたり予想したりする。

○ 見通す（結果を予想する）
- 見通しを立てる。物事の結果を予想する。

○ 具体化する（個別化する，分解する）
- 対象に関する上位概念・規則に当てはまる具体例を挙げたり，対象を構成する下位概念や要素に分けたりする。

○ 抽象化する（一般化する，統合する）
- 対象に関する上位概念や法則を挙げたり，複数の対象を一つにまとめたりする。

○ 構造化する
- 考えを構造的（網構造・層構造など）に整理する。

また、「主体的・対話的で深い学び」の各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる学習過程においても、「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決を考えたり、思いや考えを基に想像したりすること」の中で、上記の「考えるための技法」を駆使して課題解決を図ることになる。

各教科等と「総合的な探究の時間」で身に付けた資質・能力を関連付けて、教科横断的な教育課程を進めていくには、まずは汎用的なスキルである「考えるために技法」を足がかりに、①生徒に身に付けさせたい資質・能力（学校の教育目標）、②総合的な探究の時間で身に付けさせたい資質・能力、③各教科で身に付けさせたい資質・能力を整理してみるとよい。

Ｑ５．カリキュラム・マネジメントのＰＤＣＡを機能させるには？

カリキュラム・マネジメントの３つの側面のうち、その中核は「教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと」といえるが、研修会において、このＰＤＣＡサイクルが、形骸化したものになるのではないかという声が多かった。

【課題】　自校の教育目標の見直しや育成すべき資質・能力の検討を進めたが、それらが形だけのものなり、ＰＤＣＡサイクルをうまく機能させられるだろうか？

カリキュラム・マネジメントは、よく「ＰＤＣＡは、目的ではなく、手段である」と説明されるが、「学校の教育目標を達成するための手段としてＰＤＣＡサイクルを機能させること」について悩まれる学校は多い。

カリキュラム・マネジメント研修会で講演をされた盛永俊弘先生は、「ＰＤＣＡ」について、研修資料の中で、次のように説明している。

> ＰＤＣＡに対しては、様々な意見があります。調査・診断（Research）を加えた「Ｒ－ＰＤＣＡ」、それにビジョン（Vision）を加えた「ＲＶ－ＰＤＣＡ」、また、「ＣＡＰ－Ｄ」、「Ｐｈ．Ｐ手法」、「ＤＡ・ＤＡ・ＤＡ」「ＤＣＰＡ」、さらには、「ＯＯＤＡ」「ＳＴＰＤ」など、いずれも、形骸化しがちなＰＤＣＡサイクルへの改善提案（警鐘）です。
>
> 傍線は筆者

また、Ｅ・ＦＯＲＵＭ２０１９ブレンディッドコース「実践づくりフォローアップ講習・学校課題と解決するマネジメント」の研修資料において、「学校マネジメントの多くが『現状分析を含めたＰ（プラン）の段階』で発生することを鑑みて、『Phased　Planning（フェーズド・プランニング）手法』（岡本薫、２０１１年）[18]を参考に、より実践的なマネジメントを追求し、課題解決に迫」ることを提案している。

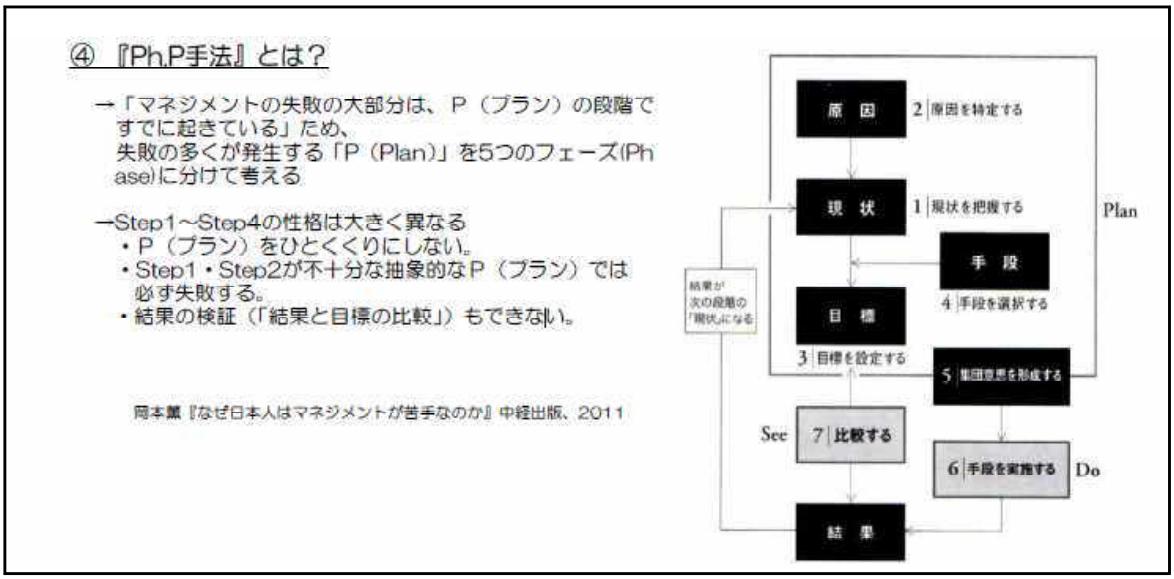


図２　Ｐｈ．Ｐ手法

下記の「図３　マネジメント構想シート」は、この岡本薫氏の「Ｐｈ.Ｐ手法」を参考に、盛永先生が、各学校のカリキュラム・マネジメントを構想する際に作成したシートである。

「カリキュラム・マネジメントの失敗はＰ（プラン）の段階で、すでに起きている」という認識のもと、「Ｐ（プラン）」の段階を、５つの Phase（フェーズ）「現状の把握」「原因の特定」「目標の設定」「手段の選択」「集団意志の形成」に分けて考えるところに特徴がある。このシートにカリキュラム・マネジメントの構想を書き込むことで、しっかり現状分析をした上で、適切な教育目標を設定できるようになっている。

⑤ マネジメント構想シート_Ver.1.0　【視点】

Step 0　*先ずは、今、あなたが一番感じていることを……解決したい課題、実現したい目標、仮説*

Plan

Step 1　現状の把握
- □「現状」を正確に把握しているか？　→「現状把握」で失敗したら、その後何をしてもダメ
- □実証的・客観的なデータでも確認（※エビデンス・ベースト）

Step 2　原因の特定
- □現状をもたらした「原因」を正確に特定しているか？
  - →「原因特定」を伴わない対策は、有効性を欠く
  - →課題の根本的な原因特定をしないまま目標をつくって実践しても、ＰＤＣＡは上手く回らない
- □「問題の原因」だけでなく、「今は上手くいっていることの原因」についても、因果関係を特定しておく

Step 3　目標の設定（仮説の再構築）
- □達成可能で具体的な「目標」を設定しているか？
  - →「達成可能」で「具体的」な目標を「選ぶ」ことが不可欠（結果が検証できるように）
    - ※人を動かすのはビジョンと大義、スローガンは目標ではなく手段、ゴールをより明確に
- □期限の明確化…「いつまで」（達成時期）がなければ目標とは言えない
- □あれもこれもではなく、あれかこれか（何のため、誰のため…なぜやるのか）
  - ※優先順位を明確にする

Step 4　手段の選択
- □実行可能で有効な「手段」を選択しているか？
  - →手段の善し悪しは「目標を達成できるか」ということだけで決まる　※「意識改革」は手段ではない

Step 5　集団意思の形成
- □関係者間の「集団意思」が十分に形成されているか？
  - →ステップ1～4の「現状把握」「原因特定」「目標設定」「手段選択」のすべてについて、関係者全員の認識や方針が統一されていなければならない

Do

Step 6　手段を実施
- □決定どおりの「手段実施」を確保
  - →手段の実施状況・進捗状況を常にモニターする　※柔軟に軌道修正
- □手段の目的化に陥らない

Check ↓ Action（改善）

Step 7　結果と目標の比較　*→結果が次の目標の現状になる*
- □「結果と目標の比較」を実施　→目標があいまいだと比較できない
- □「目標」と異なるチェックリストは不要（目標と比較するだけ）

図３　マネジメント構想シート

カリキュラム・マネジメントのＰＤＣＡを機能させるには、まずは現状分析をしっかり行った上で教育目標を設定することが重要で、研修資料では「現状の把握、原因の特定が不十分な抽象的なＰ（プラン）では必ず失敗する。結果の検証（「結果と目標の比較」）もできない。」と説明されている。

Ｑ６．教員の同僚性・協働性を高めて、組織力を向上させるには？

各学校のカリキュラム・マネジメント担当者は、校内において、学校の中心的な課題について旗振り役を担われている方が多い。研修会で研究協議をする中で「カリキュラム・マネジメントは管理職の仕事だと考える職員が多い」「教員のやっていることがバラバラで、なかなかチームとして動けない」「先生方はみんな仕事に追われて忙しいので、職員室が和気あいあいとした雰囲気にならない」などは、継続して議題となった。

【課題】　教育目標を設定し、その実現のために取り組もうとしても、各教員がバラバラに動いていることが多い。教員の同僚性・協働性を高めて、組織力を向上させるにはどうすればよいか？

盛永先生の『子どもたちを“座標軸”にした学校づくり』（日本標準社　２０１７年３月）[19]において、下記の説明がある。

私は組織力を向上させるため、方向性・共通目的の一致、風通しのよい職場の雰囲気や人間関係（どんな小さな成果・変化も共有できるコミュニケーション）、同僚性・協働性を発揮できる職場づくりという視点を大切にしてきました。認め合う賞賛の文化、切磋琢磨と省察を促す教職員文化は、教育活動の質を高め、学校づくりを進めるうえで大きな意味をもちます。また、非常勤の教職員をはじめ、どの職種の方々も生き生きと働きやすい職場づくりを意識してきました。（傍線部　引用者）

そして、下記の講演資料において、チームを活性化させる自己決定理論を紹介された。

「有能性　×　自律性　×　関係性」

メンバーの「有能性、自律性、関係性」という三つの欲求が満たされると、より自律的な動機づけをもち、行動が自発的になる！

＊**「有能性」**とは自分が仕事で成果を上げている、または上げられそうだと感じること。

「自律性」は組織において意志決定の場面に参加できる機会が与えられ、主体的に参加していると感じること。

「関係性」は他者との関係や集団になじみ、集団やリーダーと友好的でありたいと思うこと。

Deci & Ryan（ＳＤＴ：self-determination theory）自己決定理論（基本的心理欲求理論）

→“私たちの学校”という風土が高まれば一人ひとりの力は足し算ではなく、かけ算になる。組織力で達成した感動と充実感は、一人で達成する感動と充実感より広くて深いものになる。

→「早く行きたければ、ひとりで行け。遠くまで行きたければ、みんなで行け」（アフリカのことわざ）If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together.

なお、この教員のモチベーションを高め、学校の組織力を高める視点は、第1章で示した「カリキュラムマネジメント・チェックリスト」の「エ　組織文化」に共通する部分が多い。

要素	カリキュラム・マネジメントの基本的な実践内容
エ　組織文化	新しい実践への挑戦が奨励され、挑戦の結果失敗しても個人が責められない安心感がある。
	大方の教職員は、学校が力を入れている実践（特色）を具体的に説明できる。
	大方の教職員は、自己の知識や技能、実践内容を相互に提供し合う姿勢がある。
	大方の教職員は、学級や学年を越えて、生徒の成長を伝え合い、喜びを共有している。

ただ、現在、学校では、「働き方改革」が進められる中、会議や研修等の時間が削減され、教員同士のコミュニケーションの場が少なくなってきている。また、カリキュラム・マネジメント研修会で講演された香山真一先生は、質疑応答の中で、職員会議の運営上の工夫を、次のような説明をされた。

> 職員会議において、連絡で済むような内容は、極力ペーパーにまとめたものを、各自で読んでもらうようにし、一方、本校の教育課題に関わるような協議事項は、グループ協議を取り入れ、時間をかけて教員同士で話し合いをして、アイデアや意見を出してもらうようにしています。そのような工夫をすることで、教員一人一人に当事者意識が生まれ、「私たちの学校」という風土が高まります。

以上のことを踏まえると、まず、学校の業務内容を俯瞰して、量を削減するものと質の向上を図るものの取捨選択をし、例えば、事務的な連絡などは、ＩＣＴの活用（ペーパーレス化）等による効率化を図る一方で、学校教育の根幹を担う学習指導や生徒指導などは、チームとして共通理解を図りながら取り組めるように時間の確保を図るなど、業務にメリハリをつけることが求められる。

教員の同僚性・協働性を高めて、組織力を向上させるには、まずは、業務内容の精選と重点化を図った上で、各学校の重要な教育課題については、じっくり教員同士が話し合う場を保証し、その中で互いを認め合い、切磋琢磨しながら、各学校のミッションについて考え、教員一人一人の当事者意識を高めていくことが重要である。

Ｑ７　カリキュラム・マネジメントを進めるための校内の授業研修の在り方は？

カリキュラム・マネジメント研修会の研究協議では、校内の授業研修のあり方も話題になる。教員の負担を極力減らすために、「授業参観週間（あるいは月間）を設け、自由にお互いの授業を参観し合っている」「研究授業を実施しているが、研究協議まで時間が取れないため、アンケート用紙にコメントを記入している」などの工夫をしているが、「表面的なやりとりで終わっている」という意見が多い。また「研究授業と研究協議をセットで実施しているものの、研究協議では、場当たり的な発言が多く、話し合いが深まらない」という意見もある。さらに、「資質・能力を育成する上で、『主体的・対話的で深い学び』と『カリキュラム・マネジメント』は両輪だと言われるが、その実現のために、どのような授業研修を企画すればよいか」などの質問もあった。

【課題】　カリキュラム・マネジメントを進めるための校内の授業研修の在り方は、どのようなものか？

「資質・能力育成研究会」の「授業研究」部門パイロット教員が、「主体的・対話的で深い学び」の授業実践に取り組んでいるが、授業づくり・授業評価の視点として、①コンピテンシー（資質・能力）ベースの授業、②本時主義からの脱却、③新３観点による学習評価を意識して公開授業・研究協議を実施している。授業づくり・授業評価の視点を明確にすることで、単元レベルの目標・指導・評価の一貫性を問い、目標実現の到達度について、焦点化して話し合うことができた。また、研究協議では、思考ツール「Ｙチャート」を活用することで、協議内容が可視化でき、議論を活性化することができた。詳細は、第３章・第２節の「『主体的・対話的で深い学び』とカリキュラム・マネジメント」を参照。

また、高鍋高等学校の授業研究・授業研修では、「対象クラス担当の授業者でチームを作り、クラス生徒理解のための観察、研究テーマ設定、そして実践を通して、学びの質を上げる」取り組みを実施している。下記は、その取り組みの一部で、詳細は「資料　１．育てたい生徒像を踏まえた校内授業研修」を参照。

生徒実態　話し合う雰囲気やお互いに教えあえる雰囲気はあるが、全体で発表・発言をすることに対して抵抗がある生徒が多い。

テーマ　【生徒間の学びあいを通して、主体的に学ぶ事のできる生徒の育成】

具体的な手立て　「リトルティーチャー」の育成・活用

授業実践

国語　古典分野における主体的な読解のための指導

数学　グループ自作問題によるお互いの教えあい

音楽　学習活動ごとのリトルティーチャー導入

成果と課題　一人一人が主体的に取り組む姿勢を持ってくれた。コロナ禍における授業内での対策等を考えていく必要がある。

石井英真氏は、『授業づくりの深め方』（ミネルヴァ書房　２０２０年６月）[20]において、「授業改善が学校改革へとつなぐ」視点として、下記の説明をする。

学校をめぐる問題が複雑化し、教師や学校への信頼がゆらいでいる中、教師個々人の力を伸ばすという視点だけでなく、学校の組織力を高めるという視点から、学習する組織の中心（教師たちが力量を高めあい、知を共有・蓄積し、連帯を生み出す場）としての授業研究の意味にも注目が集まっています。教師個々人力量形成や授業改善の営みと、教師集団の組織力の構築や学校改善の営みとを結びつけて考えていく視点が求められています。

そして、「日常的な事後検討会のあり方を見直す視点」として、下記の説明[21]をする。

●検討会（プロセス）自体の有意義感（学んだ感、つながり感、参加できた感）

・立場の上下や専門性の有無にとらわれない民主的な関係性が構築されているか？
・参加者全員が自由に発言し、参加意識や議論に貢献できている感覚が持てているか?
・議論に活気があり、出された意見やつながり、新しい意見や発見が生まれるような、創発的なコミュニケーションが成立してるか？
・参加者が、明日の授業改善へのヒントを得られるものになっているか？
・子どもや教室の断片的な事実の交流を超えて、教授・学習過程の構造的な理解につながっているか？
・ダブル・ループの省察（枠組みの再構成によるアンラーン）、暗黙知の形式知化につながっているか？

●教師の一人ひとりの成長や学校改善（成果）につなげる工夫

校内研修を繰り返す中で
・教師個々人の学びが深まり、成長が促されているか？
・教師集団の共同的な知識（知恵や理論）の構築・共有がなされていっているか？
・同僚性や研究する協働文化の創出につながっているか？

今後、校内研修（授業研修）は、各学校の教育目標の実現を図る上で、その実施状況をＰＤＣＡサイクルによって評価・改善していく機能が求められる。なお、その際、教員の同僚性・協働性を高めて、組織力を向上させる場としても位置づけ、教員同士がじっくり話し合う中で、各学校のミッションについて考え、教員一人一人の当事者意識を高めていけるようにすることが重要である。

カリキュラム・マネジメントを進めるための授業研修の在り方は、学校の教育目標を踏まえ、単元レベルの目標・指導・評価の一貫性を問うことを繰り返す中で、学校の教育課題に対し、各教員が当事者意識を持ち、チームとして協働的・組織的に取り組めるようにしていく場であることが求められる。

Ｑ８　今後、各校のカリキュラム・マネジメントをどのように進めていけばよいか？

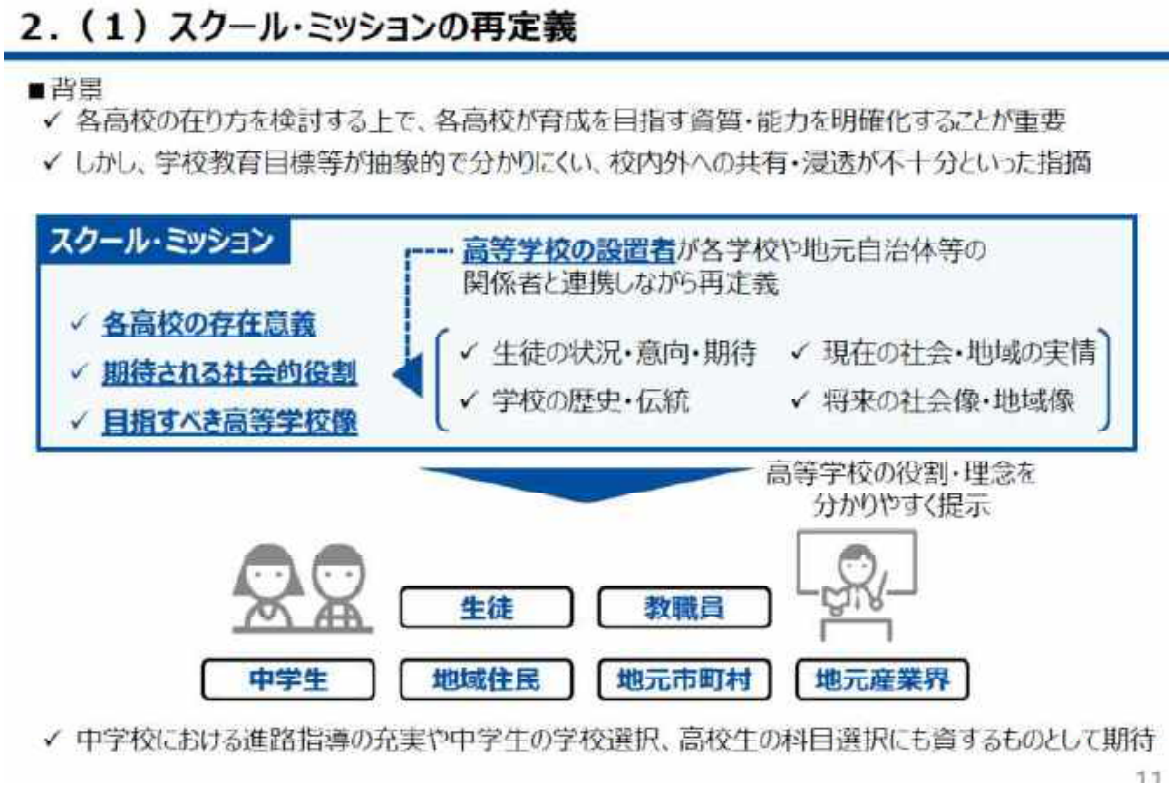
カリキュラム・マネジメントの実践研究や研修会等を通して、カリキュラム・マネジメントについては理解が深まったが、現在、文部科学省が進めている高校教育改革とカリキュラム・マネジメントはどのように結びつくのか。「スクール・ミッションの再定義」や「スクール・ポリシーの策定」、「新しい学科の設置」などの提言は、新学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善や「カリキュラム・マネジメント」の実現と、どのようにつながるのだろうか。

【課題】　文部科学省の高校教育改革を踏まえると、今後、各校のカリキュラム・マネジメントは、どのように進めていけばよいのか？

中央教育審議会「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議まとめ）～多様な生徒が社会とつながり、学ぶ意欲が育まれる魅力ある高等学校教育の実現に向けて～」（令和２年１１月１３日）[22]及び、「これからの高等学校教育について」（令和２年１１月２５日）[23]のスライド資料より、高校教育改革と「カリキュラム・マネジメント」に関わりを確認する。

カリキュラム・マネジメント研修会でも話題になった内容に「各学校の教育目標の形骸化」があり、参加者からは「抽象的でぼんやりしている」「教員間で意識されていない」「達成されたかどうかが検証できない」などの指摘が相次いだ。

そのような現状を踏まえ、「審議まとめ」では、高等学校の設置者が各学校や地方自治体等の関係者と連携しながら、各学校の存在意義や期待される社会的役割、目指すべき学校像等を「スクール・ミッション」として再定義することを求めている。



2.（2）スクール・ポリシーの策定

スクール・ポリシー

- ✓ **高等学校教育の入口から出口までの教育活動**を一貫した体系的なものへと再構成
- ✓ 各高等学校教育の**継続性を担保**
- ▶ 特色・魅力ある教育の実現に向けた**整合性のある指針としてスクール・ポリシーを策定・公表**
  - ●**育成を目指す資質・能力に関する方針（仮称）**
  - ●**教育課程の編成及び実施に関する方針（仮称）**
  - ●**入学者の受入れに関する方針（仮称）**

- ✓ 各高等学校における**育成を目指す資質・能力を明確化・具体化**
- ✓ **カリキュラム・マネジメント**を通じて、学校全体の教育活動の**組織的・計画的な改善**へと結実
- ✓ スクール・ポリシーを基準にして、**高等学校の教育活動や業務内容を精選・重点化**
- ✓ **学校評価**において、スクール・ポリシーに照らして自らの取組を点検・評価

スクール・ポリシーの内容

- ✓ 生徒や入学希望者の**学習意欲を喚起**し、学校生活や将来に対する展望を持ちやすい表現・内容
- ✓ 日常的に参照可能なよう、総花的なものとせず**真に重点的に取り組む内容**を示す指針
- ✓ スクール・ポリシーについても**日々の教育活動の検証等を通じた見直し**

1

次に、「スクール・ミッション」を踏まえ、各学校は①「育成を目指す資質・能力に関する方針」（グラデュエーション・ポリシー）、②「教育課程の編成及び実施に関する方針」（カリキュラム・ポリシー）、③「入学者の受入れに関する方針」（アドミッション・ポリシー）を「スクール・ポリシー」として一貫した体系的なものへと再構成することになる。

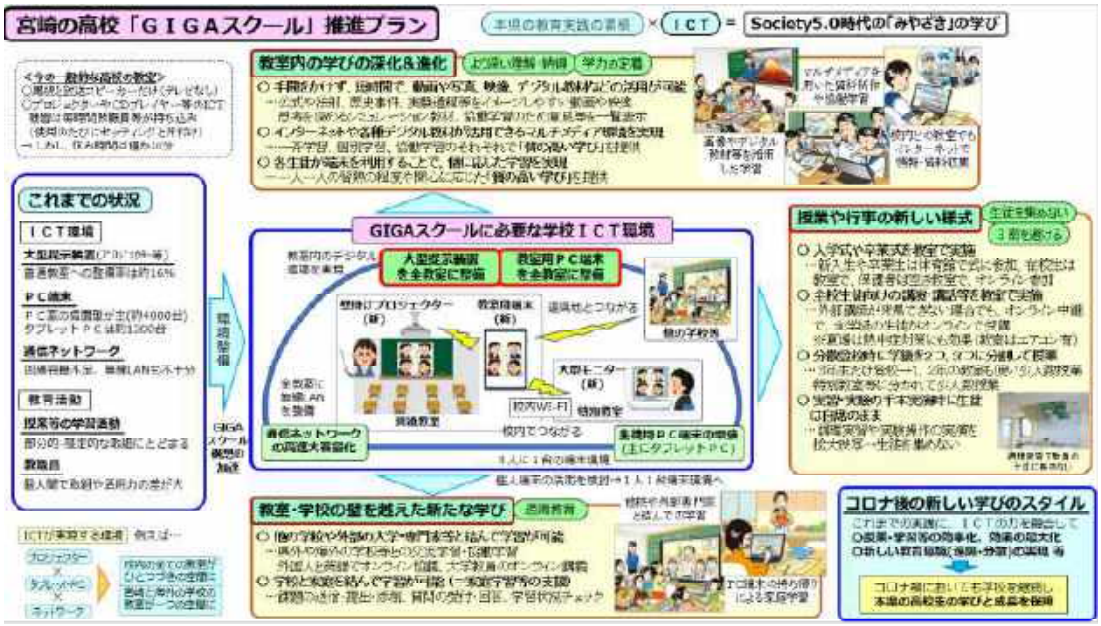
このような「スクール・ポリシー」を策定することで、各高等学校における育成を目指す資質・能力が明確化・具体化され、「スクール・ポリシー」を起点としたカリキュラム・マネジメントを通じて、学校全体の教育活動の組織的・計画的な改善へと結実する。また、「スクール・ポリシー」を基準にして、高等学校の教育活動や業務内容の精選や重点化を図り、学校評価においても、「スクール・ポリシー」に照らして自らの取り組みを点検・評価をすることになる。

先の研修会で課題としてあげられた「各学校の教育目標の形骸化」は、スクール・ミッション及びスクール・ポリシーに基づく教育活動の実施・改善により、教育目標が「抽象的でぼんやりしている」「教員間で意識されていない」「達成されたかどうかが検証できない」等の課題を克服できると言えよう。

今後、各校のカリキュラム・マネジメントは、スクール・ポリシーを起点として、教育課程や個々の授業、入学者選抜の在り方等について組織的かつ計画的に実施するとともに、ＰＤＣＡサイクルを通じて不断の改善を図っていくことが求められる。

なお、スクール・ポリシーについては、第４章・第２節の「スクール・ポリシーとカリキュラム・マネジメント」を参照。

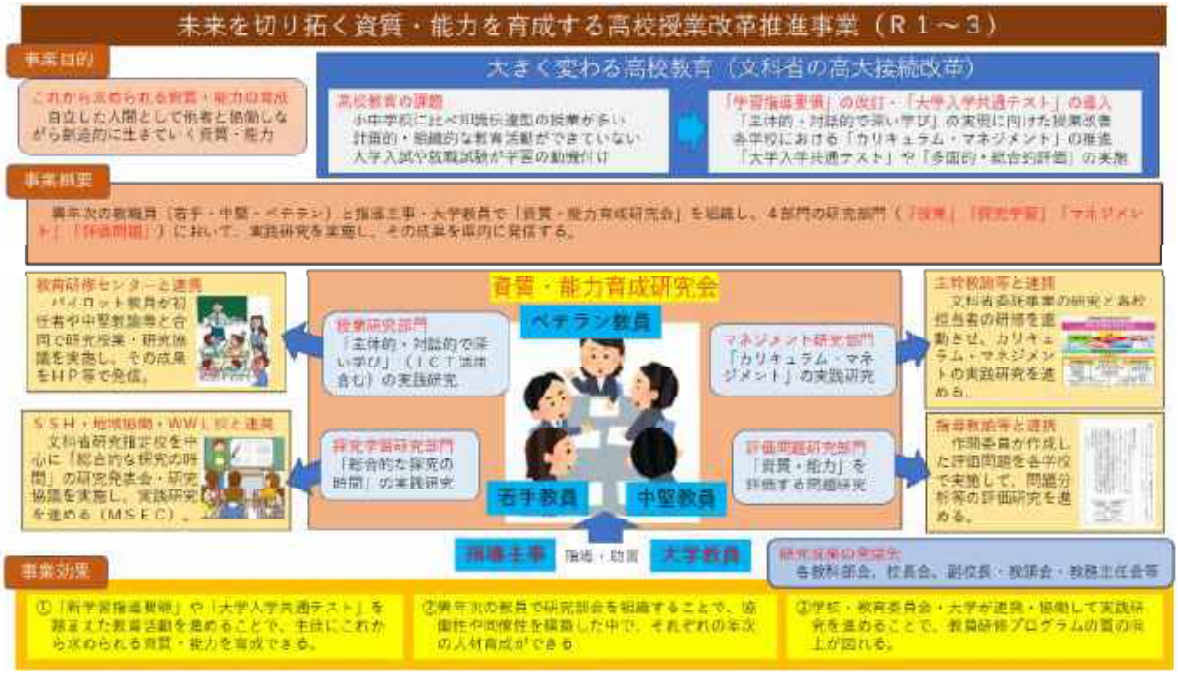
第３章　カリキュラム・マネジメントの推進



学びの保障とカリキュラム・マネジメント

新型コロナウイルス感染症対策に伴う臨時休業が長期化する中で、生徒の「学びの保障」の観点からのカリキュラム・マネジメントの充実が求められるようになった。

１．「資質・能力育成研究会」の概要



本県では、新学習指導要領を踏まえた教育活動を推進するため「資質・能力育成研究会」を組織し、４つの研究部門（「授業」「探究学習」「マネジメント」「評価問題」）において実践研究を実施している。カリキュラム・マネジメントについては、第２章でお示ししたようにカリキュラム・マネジメント実践校３校による実践研究と「マネジメント研究部門」のおける担当者向けの研修会を連動して実施している。

しかし、カリキュラム・マネジメントは、教育課程の実施状況を評価・改善していく営みであるため、「主体的・対話的で深い学び」や「探究的な学び」等の授業実践と一体的に捉えることが重要である。そのため、授業研究部門では、単元（題材）など内容や時間のまとまりを見通した「主体的・対話的で深い学び」の授業研究を、探究学習研究部門では、教科横断的な視点に立った「総合的な探究の時間」の実践研究を、評価問題研究部門では、各教科の「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」を測る評価問題研究を実施し、カリキュラム・マネジメントとの関連性を踏まえて、実践研究を進めている。また、それぞれの部門の研究成果は、各研修会やＨＰ等を通して広く共有し、「資質・能力」の育成について、総合的に考え、取り組めるようにしている。

資質・能力育成研究会（令和２年度）実施状況

研究部門	事業名	期日	会場	参加者等
授業	①事前研修（全体説明会） ②授業公開１ ③授業公開２ ④事後研修	７月　７日（月） ９月３０日（水）他 １０月２９日（木）他 １２月１７日（木）	ひなた武道館 各学校　１２校 各学校　１２校 教育研修センター	パイロット教員２３名 パイロット教員１２名　参観　９３名 パイロット教員１１名　参観１６１名 パイロット教員２３名
評価問題	①評価問題検討会１ ②教育課程研究協議会（中止・資料配付のみ） ③評価問題検討会２（全体説明会） ④評価問題検討会３（日程変更）	７月２０日（月）～２８日（火） ８月１８日（火） １０月　５日（月） １月２５日（月）→３月下旬	各学校　９校 宮崎産業経営大学 教育研修センター 教育研修センター	責任者２２名　作成委員３４名 各校教科代表　１８５名 責任者２２名　作成委員３４名 責任者２２名　作成委員３４名
探究学習	①ＭＳＥＣ協議会１～４ ②ＭＳＥＣフォーラ（中止・動画配信） ③学校図書館活用研修会（中止） ④課題研究発表会	４月、５月、１０月、１月 ８月　７日（金） ９月２４日（木） ３月１５日（火）	オンラインを含む ひなた武道館 教育研修センター オンライン	担当教員　８０名 高校生　２００名程度 司書教諭３８名　学校司書３８名 高校生　２００名程度
マネジメント	①カリキュラム・マネジメント検討会議１～３ ②総合的な探究の時間研修会 ③カリキュラム・マネジメント研修会 ④教務主任等研修会	５月、１０月、１月 ７月１３日（月） １０月２３日（金） １月１３日（水）	オンライン ひなた武道館 オンライン オンライン	カリマネ検討委員５名、実践校担当３名 県立・私立高校４０名、特別支援１０名 各校担当　３８名、特別支援１０名 各校担当等　７６名　特別支援１０名

授業研究部門

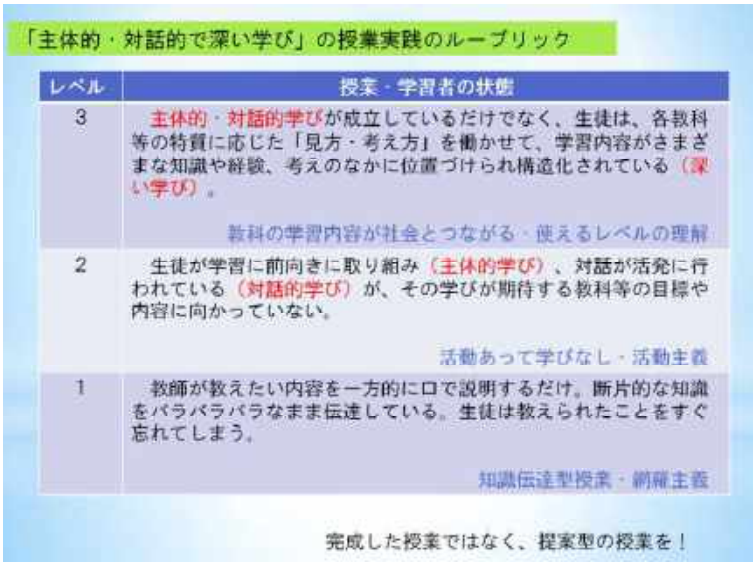
評価問題研究部門

探究学習研究部門

本章では、カリキュラム・マネジメントと関連のある分野の取組について紹介する。第２節では「主体的・対話的で深い学び」について、授業研究部門の授業研修や授業公開・研究協議の取組を、第３節では「探究的な学び」について、地域の課題解決に向けた飯野高校の先進的な取組を紹介する。また、令和２年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため、生徒の「学びの保障」にむけたカリキュラム・マネジメントの充実が喫緊の課題となった。そこで、第４節では、いち早くＩＣＴ活用によるオンライン学習や時間割編成を実施した五ヶ瀬中等教育学校の取組を紹介する。

2.「主体的・対話的で深い学び」とカリキュラム・マネジメント

(1)「主体的・対話的で深い学び」の授業デザイン



「主体的・対話的で深い学び」の授業実践のルーブリック

レベル	授業・学習者の状態
3	主体的・対話的学びが成立しているだけでなく、生徒は、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて、学習内容がさまざまな知識や経験、考えのなかに位置づけられ構造化されている（深い学び）。 教科の学習内容が社会とつながる・使えるレベルの理解
2	生徒が学習に前向きに取り組み（主体的学び）、対話が活発に行われている（対話的学び）が、その学びが期待する教科等の目標や内容に向かっていない。 活動あって学びなし・活動主義
1	教師が教えたい内容を一方的に口で説明するだけ。断片的な知識をバラバラバラなまま伝達している。生徒は教えられたことをすぐ忘れてしまう。 知識伝達型授業・網羅主義

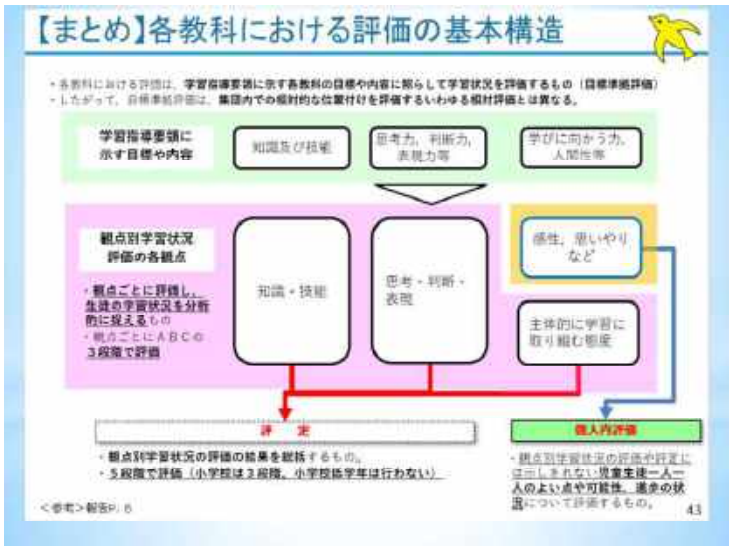
完成した授業ではなく、提案型の授業を！

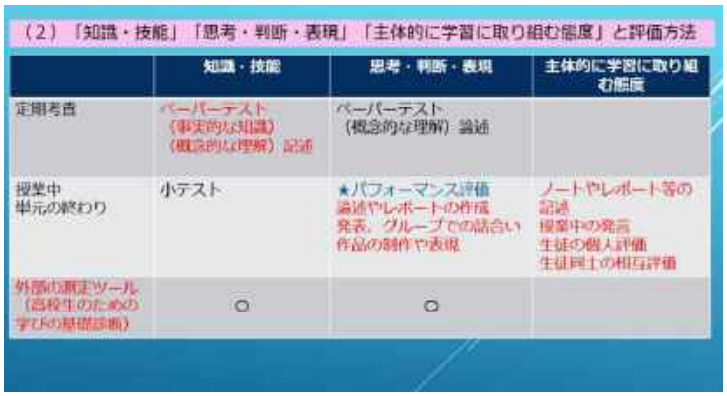
「授業研究」部門の研修会においては、「主体的・対話的で深い学び」の授業デザインについて講義・演習を実施した。研修では、「資質・能力」の概念（コンピテンシーベースの授業観）、「主体的・対話的で深い学び」が求められる背景、学習指導案の具体的な作成方法、新しい観点別学習状況評価等について説明している。

今回の学習指導要領の改訂は、「何を教えるか（何を学ぶか）」という教育内容を明示するだけでなく、「何を身に付けさせるか（何ができるようになるか）」という教育目標（資質・能力の育成）と「どのように教えるか（どのように学ぶか）」という教育方法（「主体的・対話的で深い学び」）を三位一体的な関係で整理している。

「主体的・対話的で深い学び」の授業については、その反対の概念が教師主導による知識伝達型の授業である（網羅主義）。そのような授業を克服するために、グループ活動や話し合いを取り入れるのが次のステップになるが、それが「活動あって学びなし」（活動主義）に陥らないためには、教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる「深い学び」の成立が求められる。

(2) 新しい３観点の学習評価





（2）「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」と評価方法

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
定期考査	ペーパーテスト （事実的な知識） （概念的な理解）記述	ペーパーテスト （概念的な理解）論述	
授業中 単元の終わり	小テスト	★パフォーマンス評価 論述やレポートの作成 発表，グループでの話合い 作品の制作や表現	ノートやレポート等の記述 授業中の発言 生徒の個人評価 生徒同士の相互評価
外部の測定ツール （高校生のための学びの基礎診断）	○	○	

学習指導案の作成例（指導と評価の一体化，シンプルにまとめる）

○○科　学習指導案（例）	
単元名	○○○　「科目名を選択」「科目名を新」
単元の目標 （単元で育成する資質・能力）	①知識及び技能 ②思考力・判断力・表現力等 ★学習指導要領の２「内容」の指導事項を示す　コピー＆ペースト

具体的な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
（例）○○を理解している ○○することができる	（例）○○ことを通じて，考えたり判断したり表現したりしている。	（例）主体的に知識・技能を身に付けたり，思考・判断・表現をしようとしたりしている

★上記の「単元の目標」を具体的な学習活動としてまとめる

単元計画

次	時	評価規準と評価方法	学習活動
一	1 2	【評価規準】 【評価方法】 （例）行動の観察	① ②
二	3 4 5	【評価規準】 【評価方法】	③ ④ ⑤
三	6 7	【評価規準】（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】	⑥ ⑦

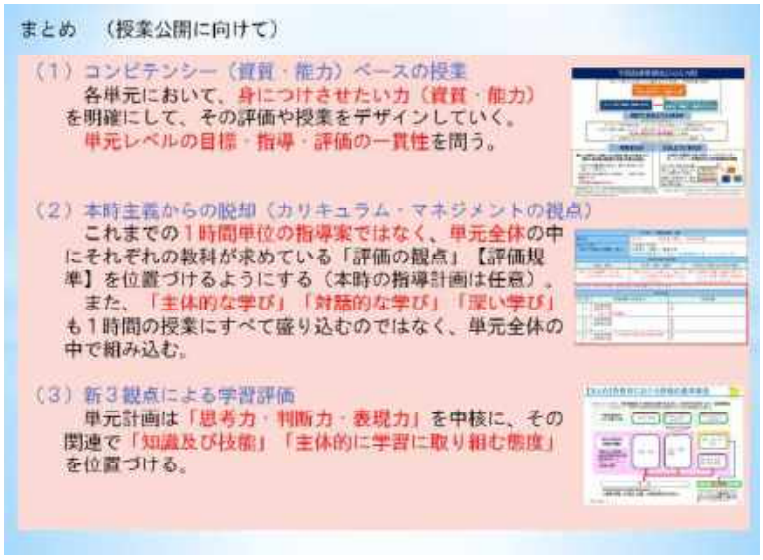
１時間の授業展開については，任意で作成

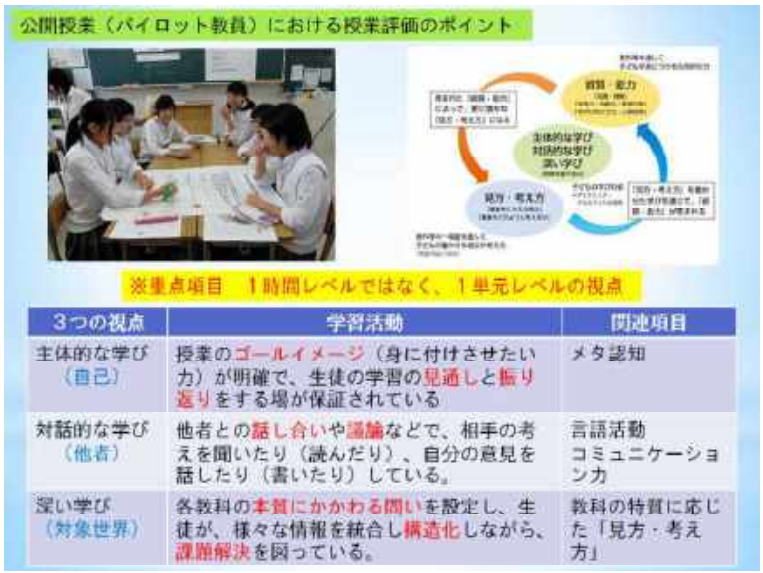
新学習指導要領では、「資質・能力」の３つの柱に基づいた「目標」や「内容」の再整理を踏まえて、観点別学習状況評価も、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点で整理されている。すなわち「目標」（学習指導要領）と「評価」（指導要録）が３観点で結ばれたことで、観点別学習状況評価の趣旨を踏まえた授業や評価の改善が求められることになる。

また評価方法については、「知識・技能」はペーパーテストで評価できるが、「思考・判断・表現」は、論述やレポートの作成、発表、グループでの話合い、作品の制作や表現等のパフォーマンス評価の導入も求めている。なお、「主体的に学習に取り組む態度」は、学習の取組状況を「粘り強さ」と「自己調整」の二つの側面で評価する。

学習指導案の「単元の目標」は、学習指導要領の「内容」の「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」から引用し、「具体的な評価規準」の「主体的に学習に取り組む態度」は、単元の「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」と結びつけて記載する。また、カリキュラム・マネジメントの視点から、１単位時間にとどまらない単元全体を見据えた指導計画（単元計画）が重要になる。

(3)「主体的・対話的で深い学び」の授業分析





3つの視点	学習活動	関連項目
主体的な学び（自己）	授業のゴールイメージ（身に付けさせたい力）が明確で、生徒の学習の見通しと振り返りをする場が保証されている	メタ認知
対話的な学び（他者）	他者との話し合いや議論などで、相手の考えを聞いたり（読んだり）、自分の意見を話したり（書いたり）している。	言語活動 コミュニケーション力
深い学び（対象世界）	各教科の本質にかかわる問いを設定し、生徒が、様々な情報を統合し構造化しながら、課題解決を図っている。	教科の特質に応じた「見方・考え方」

「授業研究」部門の公開授業・研究協議では、パイロット教員が、事前研修を踏まえ、①コンピテンシー（資質・能力）ベースの授業、②本時主義からの脱却、③新３観点による学習評価を意識した授業を公開し、「主体的・対話的で深い学び」の授業実践について参観者と研究協議を行う。授業づくりは宮崎大学の教員、県教育委員会の指導主事と協働で行ったものである。

授業評価は「１時間レベルではなく、１単元レベルの視点」で「主体的・対話的で深い学び」の実現について分析を行う。そのため、実際の１時間の授業だけでなく、学習指導案に記された単元全体の学習計画を検討する。特に議論になる「深い学び」については、「各教科の本質に関わる問いを設定し、生徒が、様々な情報を統合し構造化しながら、課題解決を図っているか」について検討する。

研究協議では、思考ツール「Ｙチャート」を用い、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点で、気づいことや考えたことを付箋にまとめて、意見交換を行う。その際、授業の成果を「青」、課題を「赤」、改善を「黄」などのように付箋を色分けして分類すると、グループ内の協議内容をビジュアルに可視化できる。

※パイロット教員の学習指導案は、巻末の「資料」に掲載している

３ .「総合的な探究の時間」とカリキュラム・マネジメント

(1)総合的な探究の時間を中核とした教育課程の編成

令和元年度に先行実施となった「総合的な探究の時間」は、高等学校学習指導要領解説にもあるように、教育課程の中核に位置付けるとともに，各教科・科目等との関わりを意識しながら，学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントを行うことが求められている。つまり、先行実施となった背景には、各学校において「探究的な学び」を柱とした教育課程の再編を行い生徒の学び方を変えていくというねらいがある。生徒が探究の見方・考え方を働かせながら横断的・総合的な学習に取り組むことにより，自己の在り方生き方を考えながら，よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成するものであり，変化の激しい社会においてますます重要な役割を果たしていくのである。特に、２０２０年の新型コロナウイルスの感染拡大以降、社会の変容は加速していくものと思われる。すでに、Society 5.0 に向けた人材育成として社会の変容により学び方も変えなければいけないことは指摘されているところであり、思考の基盤となるＳＴＥＡＭ教育（図１）についても議論されている。このことから、新しい時代を切り拓いていく力を身につけていくことは社会と接続する高校においては極めて重要である。そのため各学校においては、新たな社会を牽引する人材の育成（図２）に向けて「総合的な探究の時間」を教育課程の中核に据え、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立することが大切である。

図１

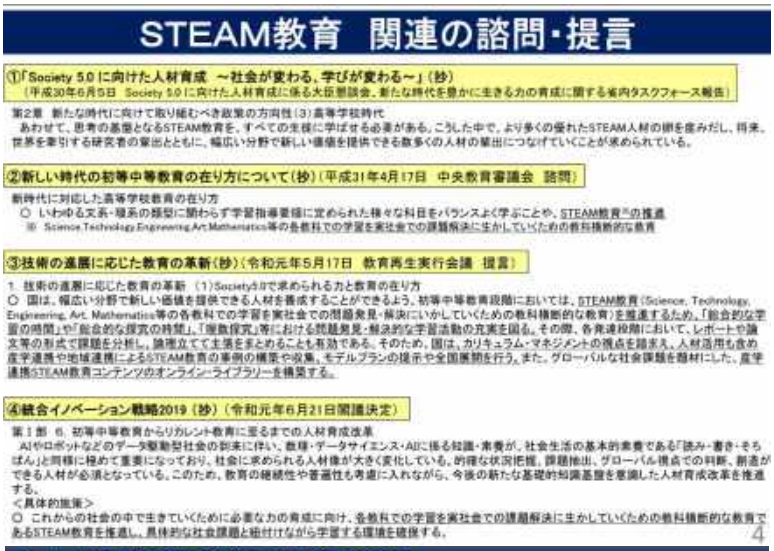
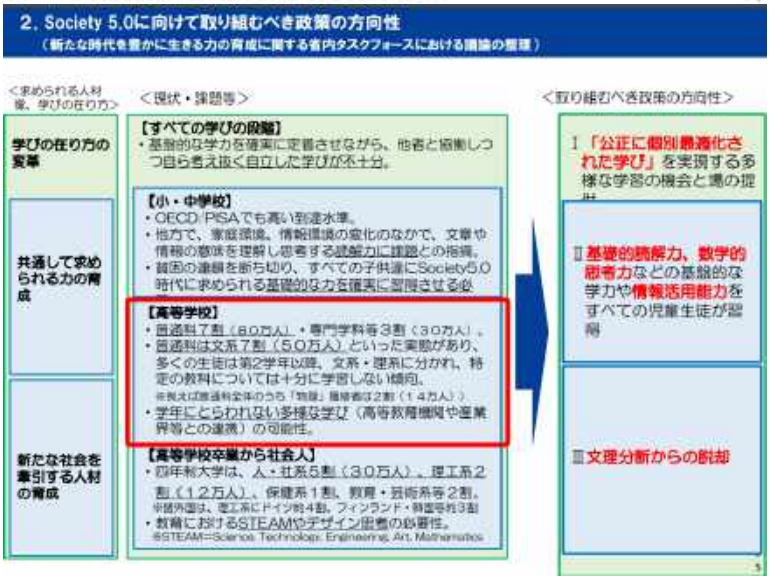


図２



～中央教育審議会における議論について～令和２年度高等学校教育課程研究協議会　2020. 12. 7

(2)「総合的な探究の時間」による社会に開かれた教育課程の実現

技術革新の進展や少子化の進行、地域社会の状況等を踏まえると、これからの高等学校教育においては、地元の自治体や産業界、社会教育機関、地域の NPO 法人などの多様な主体との連携・協働体制を構築するとともに、他の高等学校や高等教育機関等の関係機関との連携・協働を図ることで、各高等学校を取り巻く課題や状況に対応し、20 年後・30 年後の社会像を見据えた特色・魅力ある教育を行うことが求められている。また、上記の関係機関との連携・協働に加えて、複数の高等学校が連携・協働して高度かつ多様な学習プログラムを開発・共有し、全国の高校生がこうした学習プログラムに参加することを可能とする取組を進めることが必要である。高等学校は生徒の実情や地域から期待される役割などにおいて非常に多様であり総合的な探究の時間においてどのような資質・能力の育成を目指すのかということがその高等学校のいわばミッションを体現するものとなるべきであり学校全体で教職員が連携してその実現に向かっていくことが必要である。

～中央教育審議会における議論について～令和２年度高等学校教育課程研究協議会　2020. 12. 7

(3)事例にみる「総合的な探究の時間」の実践

本県では、「総合的な探究の時間」に関する研修及びカリキュラム・マネジメントの実践についての研究が全国でも早い段階から進められている。特に、文部科学省事業（ＳＳＨ、ＷＷＬ、地域協働高校改革）を通して探究的な学びに関する実践が県内各地で行われており各学校の実態にあわせて多様な学び方の研究が進んでいる。その中から、今回は宮崎県立飯野高等学校の地域と共学共創する探究活動のカリキュラム開発事例を紹介していきたい。

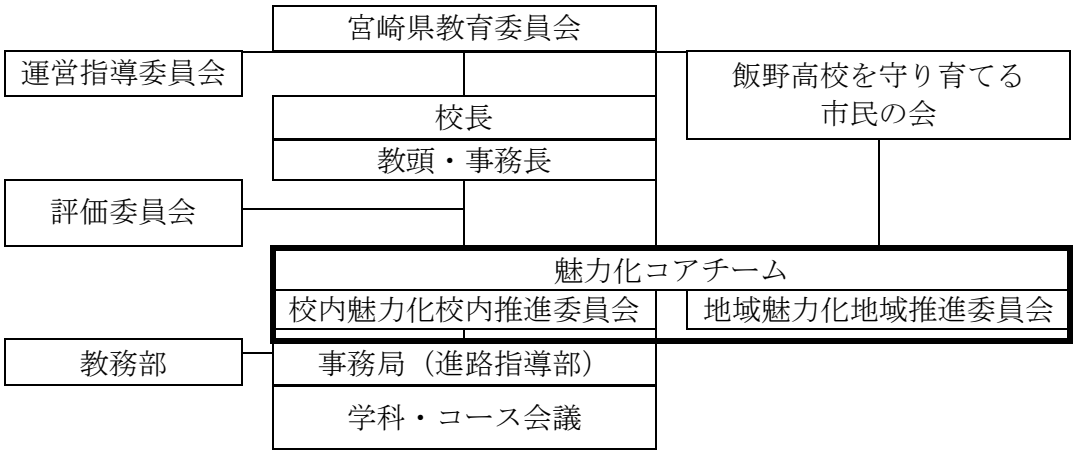
①研究開発の目的・目標

飯野高校の位置する宮崎県えびの市は、温泉郷をはじめ農産物などの地域資源がある一方で急速な人口減少などの地域課題を抱えている。このような環境で地域をフィールドにした新たな学び（探究活動）から、地域課題を国内外の社会課題と結びつけ、課題意識や貢献意識を持ち行動を起こす人材を育成する。さらに卒業後も、えびの市の地域振興と新たな地域価値を創造するグローカル・ヒーローとして活躍する人材の増加と人材の還流する仕組みづくりを目指している。

②研究開発の概要

飯野高校では、学科・コースごとにすべての生徒が地域で活動している。このことから、地域課題に関心がある生徒も多く、実際に地域の団体と連携して生徒主体のイベントを実践したり、継続的に様々な活動が行われるなど高校生が地域に欠かせない存在になっている。また、えびの市は、国内の少子高齢化が進む過疎地域と同様に多くの社会課題を抱えており、地域課題を考えることが社会課題を考えることにも通ずる。そこで、新たな価値の創造と地域社会で活躍するグローカル・ヒーローを育成するための３年間を見通した体系的・系統的な実践型地域課題解決学習のカリキュラムの開発・実践やその体制構築を行っている。開発・実践に当たっては地域の団体、事業所をはじめ、大学などと連携して行い、地域における課題意識や貢献意識を持つ人材育成により、地域振興の核としての機能を強化する。

③実施体制



④教師の役割及び担当する教師等に対する支援体制

事務局（進路指導部）に所属する教師が企画・立案を行い、魅力化コアチームに所属する教師が地域のコアチーム構成員とカリキュラム開発を行う。また、学科・コース会議には、すべての教師が学科・コースごとに所属し、実践する上での学習内容や指導法を共有する。これらの活動を支援するため、事務局に地域協働学習実施支援員、魅力化コアチームにカリキュラム開発等専門家を配置し活動の支援助言等を行っている。

※魅力化コアチーム：探究活動の支援を行う教師と地域の事業者で構成されるコンソーシアム

⑤研究開発の進捗管理，計画・方法の改善方策

計画・方法の改善方策については、年５回開催する魅力コアチームの戦略会議で企画・立案したものを実践している。実践後は、評価と反省に基づいて考察したことを反映させた計画・方策を打ち出し、常に内容を深化させていくＰＤＣＡサイクルを構築する。

⑥学校設定科目による探究活動の実践内容

⑦探究を通した教科横断的な学び

飯野高校では、（７）で示したように全学科コースで課題解決のための実践を通した探究活動を展開している。実践することで「主体的で、対話的で、深い学び」につながるからである。また、右のように探究のサイクルを回して学びを深めることで様々な教科の思考を要することもでてくる。例えば、観光プロジェクトに取り組んだ生徒で「域内だけ考えるのは限界で、課題を俯瞰し海外の事例を学びたい」と実際に渡航しての調査活動や、オンラインで意見交換会（英語で会話）を行うなど学校・地域の枠を超えた学びを自ら創り出していた。このように活動が深まればおのずと教科的な要素も強くなる事例も出てきている。また、カリキュラム中にインプット、アウトプットの機会を活用しながら教科的な要素を入れていくことも有効である。さらに、教科学習の中

でも学年・コースに応じて、どのような指導を行っていくか研修し、職員全体で探究を柱としたカリキュラム・マネジメントに取り組んでいる。以下は英語科の取組みである。

学年・クラス・コース		取り組み内容	期待できる効果
1学年	普通科ＡＢ	・授業はじめにスモールトーク（天気や、週末にしたことなどちょっとした会話）を実施する。 ・日本文化紹介や環境問題などのレッスンで、英語でペアまたはグループ発表を行う。	・自分が体験したこと、感じたことを発表することにより、主体的に表現する力を身につけることができる。 ・1 つのテーマについて、意見を出し合いながら、協働して活動する姿勢を育成できる。
	生活文化科Ｃ	・教科書や副教材、VITAL3000(英単語集)を活用し、基礎学力の定着を養成する。 ・普段の授業の中で、小学校英語教育が実践している「音声」（聞く・話す）から入り、「読み・書き」につなげる授業を展開する。	・インターンシップ（地域貢献活動）や田植え（地域支援活動）などを通じて、主体的に自国や地域の文化、自らの経験を英語で発表する素地を作ることが期待できる。
2学年	普通科Ａ総合コース	・地域貢献活動に関するトピックを英語でも取り上げることで、活動への意欲・関心を高める。 ・Small Talk をはじめ様々なグループ活動や、主体的プレゼンテーション活動を取り入れる。	・生徒が取り組んでいる活動を英語でも話題に取り上げることで、英語への苦手意識を払拭し、英語への意欲・関心も高まる。 ・他者とのかかわりの中で、主体性、協調性、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力といった社会で自立して生きる力が養われる。
	普通科Ｂ探究コース	・教科書の内容で環境問題や地域貢献などを取り扱った単元を読んだ後で、自分たちは何ができるか考え、英語で発表する機会を設ける。	・日本国内は元より、世界の事象や取り組みを知り、グローバルな視点で物事を捉えることができる。また、英語でのプレゼンやスピーチの経験を積み、自信を持って人前で発表できる態度を育成できる。
	生活文化科Ｃ	・生活文化科特有の活動に関するトピックを英語でも取り上げることで、活動への意欲・関心を高める。 ・Small Talk をはじめ様々なグループ活動や、主体的プレゼンテーション活動を取り入れる。	・生徒が取り組んでいる活動を英語でも話題に取り上げることで、英語への苦手意識を払拭し、英語への意欲・関心も高まる。 ・他者とのかかわりの中で、主体性、協調性、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力といった社会で自立して生きる力が養われる。
3学年	普通科Ａ総合コース	・教科書や副教材、Data Base4500(英単語集)を活用し、基礎学力の定着を図るとともに、グループワークを多用することで、授業への学習意欲や興味・関心を高めることに努める。	・普段から音を聞いたり、声を出すことを意識させながら、英語学習に取り組ませることで、モチベーションを維持し、コミュニケーション能力を高める効果が期待できる。 ・また、英語での発表の場を持つことで、主体的に、対話的に地域貢献活動につながる教育を目指す。
	普通科Ｂ探究コース	・授業の予習を義務付ける。 ・課の内容に沿って、スピーチやグループによるプレゼン発表をさせる。	・自宅学習だけでなく、授業でも主体的に学ぶ姿勢を持たせることができる。 ・他者と協働する姿勢、自分の考えを持ち、それを表現する力を育成できる。
	生活文化科Ｃ	・生活文化科特有の活動に関するトピックを英語でも取り上げることで、活動への意欲・関心を高める。 ・Small Talk をはじめ様々なグループ活動や、主体的プレゼンテーション活動を取り入れる。	・生徒が取り組んでいる活動を英語でも話題に取り上げることで、英語への苦手意識を払拭し、英語への意欲・関心も高まる。 ・他者とのかかわりの中で、主体性、協調性、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力といった社会で自立して生きる力が養われる。

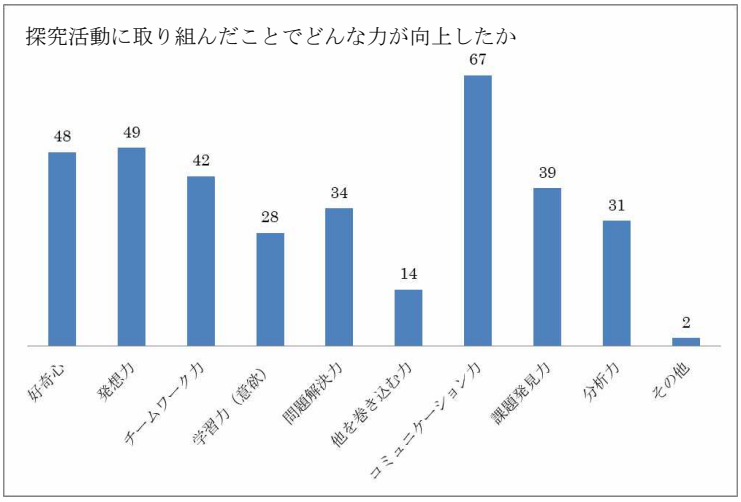
⑧社会といかに接続するか

以上のような地域と協働する探究活動を進める上で必要となるのが、いかにして地域のリソースを活用するかが課題である。例えば、市役所などの公的機関はすぐに連携の対象となりうるが、専門的な分野となれば別の機関や企業など専門職が所属する団体の方がよい。これについては、教師が開拓していくことはもちろん、自分事として探究を進めていく上でも生徒自身が広げていくことも認めていくと学校として地域とのつながりがより広がっていく。また、教師が多様な人材と生徒をつないでいくことも重要である。地域をはじめ各教科の専門領域から１人ずつ協力者をつくることができれば、それだけでも豊富なリソースが学校に集まってくることになる。そうなれば、子どもたちの学びの機会は増えより深いものになっていく。つまり、社会に開かれた教育課程を実現するためには生徒・職員ともに学校の枠を超えて越境することが重要である。

(4)総合的な探究の時間が学校の特色・魅力になる

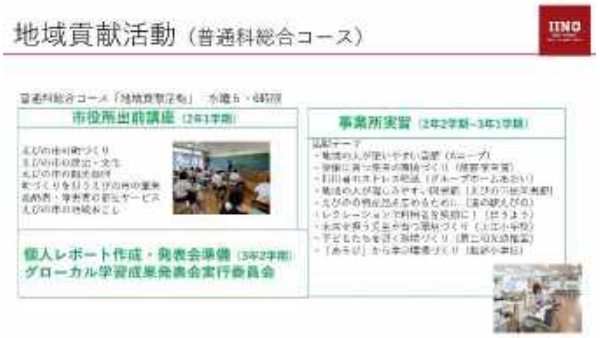
平成２６年度よりすすめてきた飯野高校の探究を核とした教育活動は、学校の特色となっている。卒業生への意識調査でも「自分の進路に活かせたか」という問に、すべての生徒（とても役立った７９％、役立った２１％）が肯定的にとらえている。「どのような力が向上したか」という問に関してはグラフにあるように活動を通して生徒たちが様々な力を身につけたことを実感していることが分かる。この数年は校外で成果発表する機会が増えており東京などで開催される全国規模の大会、県内大会で顕著な成績を修めている。主体的に活動する生徒が増えてきたことはコロナ禍においても活かされた。特に、休校中のＩＣＴの活用は探究と絡めて４年前から遠隔交流を進めてきたこともあり、生徒たちが積極的にオンラインを活用していた。おかげで休校中も職員のオンライン授業や探究のプロジェクトが円滑に進んでいった。

これらのことは、校内だけでなく学校全体の魅力の一つになっており地域からも高い評価を得ている。学校のミッションが何かを考え、担当者だけでなく学校全体で取り組み続けてきたことで，県内外で注目を集めるようになった。高校までに教科“探究”を経験していない教師にとって１から創り上げていくことは容易ではないが、新たな時代に必要な人材の育成が必要であるという視点と、子どもたちと共に学ぶ、創るという視座をもって取り組めば、「総合的な探究の時間」を柱とした学校オリジナルの新しい学び（主体的，対話的で深い学び）につながる教育課程ができるのではないだろうか。



教師が自ら主体的、対話的で深い学びを実践していくことで「総合的な探究の時間」におけるカリキュラム・マネジメントが進んでいくのである。

（添付資料）飯野高校の事例



未来を見据え動き出す生徒たち

- 京町・吉田温泉郷活性化プロジェクトで活動
- 地域団体ＡＰＥえびの　高校生副代表

トビタテ留学ジャパン地域人材コース
静宜大学（台湾）で温泉文化の研究

課題を勇敢して地域の枠をこえて考えたい！
ソーシャルイノベーター

進路先：九州大学共創学部

未来を見据え動き出す生徒たち

- VR観光プロジェクトで活動
- 高校時に様々な地域活動に参画

中国長春市へ短期留学
地域経済の循環に関心

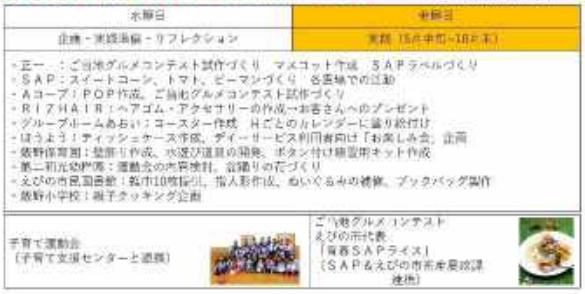
えびの市産の商品を
東京でマーケティング

進路先：大正大学地域創生学部

地域支援活動（生活文化科）

1・2年次から様々な体験で得た専門力をアウトプット
自分たちが地域に還元できるものは何かを考えて実践

地域支援活動
※生活文化科



探究活動が海外へ広がる！

オンライン海外インターン
東カンボジアの企業

台湾旅行プロデュース大会優勝

14

3名
平成２９年度

令和元年度

トビタテ留学ジャパン　せかい学

台湾への修学旅行プロデュース大会　優勝、準優勝!!

ジャメリカ（バストン）、中国、韓国、ラオス、フィリピン、ベーナム、シンガポールなどへの研修も参加できる！

全国サミット等に生徒を送り出す仕掛け

2015年	○全国高校生マイプロジェクトアワード（東京都）総合２位　受賞 ○宮崎県高等学校家庭クラブ研究発表大会　優秀賞 ○ハイスクールサミットin東北参加
2018年	○宮崎県高等学校家庭クラブ研究発表大会　優秀 ○宮崎おにぎりコンテスト優秀賞 ○全国高校生SRサミット優秀プレゼン
2019年	○まちづくり甲子園　優秀賞
2020年	○マニフェスト大賞優秀賞

全国サミット等で
入賞15回!!

PICK UP 4

"変"わった高校－宮崎　飯野高

デジタル・スクール・ネットワーク

世界最先端のＩＣＴで全国、世界と遠隔交流

飯野高校は、公開で初めてNTT西日本のCMでおなじみの「つながる教室」を導入しました。離れた空間をつなぎ海外や海外の人との交流を積極的に行っています。自分の考えをアウトプットしたり、プレゼンしたりすることで今必要な力を身につけることができます。

学びの土壌（地域の強力なサポート）

○地域との協働による探究的な学びにおけるガイドライン作成など意見の提言
○飯野高校魅力化全体構想の策定
○探究活動の伴走

委員は地域の30～40代の若手事業者、行政職員、大学教員で構成
年5回の定例会（生徒との対話の時間も設定）

パッショナブルな大人に触れる

昨年度来校した
外部講師

地域との協働による探究で起こってきたこと

地域との協働による探究で起こってきたこと

地域との協働による探究で起こってきたこと

進学後につながる！

宮崎 学生ビジネスプランコンテスト
特別賞　九州大会へ

マニフェスト大賞優秀賞
応募総数２８４２件から選出！！

４.「学びの保障」とカリキュラム・マネジメント

(1)「学習継続計画」の背景

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため，2020 年３月以降，全国的に学校の臨時休業措置が取られ，地域によっては約３カ月もの長期にわたって子供たちが学校に通えない状況が生じた。また，７月に発生した熊本県豪雨災害をはじめ，突発的な災害時には学校における教育活動が一時的に機能不全になる状況もあった。

こうした緊急事態下において，全国の学校現場では子供たちの学習機会の保障や心のケアなどに尽力する一方で，これまで当たり前のように存在していた学校に通えない状況が続くことで，子供たちや各家庭の日常において学校がどれだけ大きな存在であったのかということが改めて浮き彫りになったといえる。また，家庭の社会・経済・文化的背景（Economic, Social and Cultural Status：ESCS）に格差がある中で，子供たちの学力格差が拡大するのではないかという指摘や，家庭における児童虐待の増加に関する懸念も相次いだ。さらに，学校の臨時休業が続いた影響により，学校再開後の登校を躊躇する子供もいるのではないかという指摘もある。（図１）

そこで，今般の新型コロナウイルス感染症対応の経験を踏まえ，新たな感染症や災害の発生等の緊急事態であっても，必要な教育活動を継続することが重要である。さらに，「新しい生活様式」も踏まえ，健やかに学習できる衛生環境の整備や新しい時代の教室環境に応じた指導体制や必要な施設・設備の整備を図るとともに，学校・地域の特性に応じて作成された「学習継続計画」に基づいて，どのような緊急事態下においても学びを止めないための日常的な備え（カリキュラム・マネジメント）を行う必要がある。

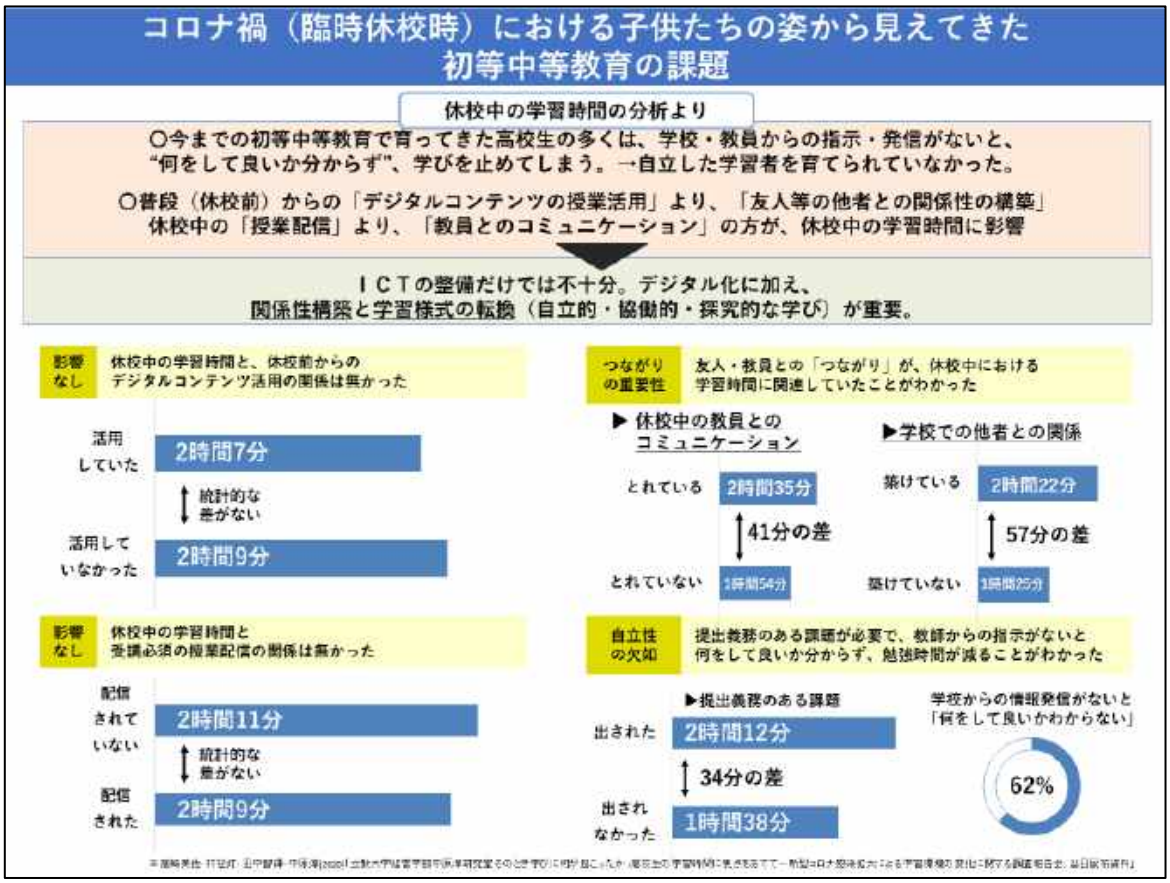


図１　コロナ禍で見えてきた初等中等教育の課題（中央教育審議会・初等中等教育分科会，2020.7.2.）

(2)「学習継続計画」が目指すもの（目的・意義）

学校の臨時休業に伴う問題や懸念が生じたことにより，学校は「学習機会と学力を保障する」という役割のみならず「全人的な発達・成長を保障する役割」や人と安全・安心につながることができる居場所・セーフティネットとして「身体的，精神的な健康を保障するという福祉的な役割」も担っていることが再認識された。（図２）

そこで，感染症や自然災害などあらゆる緊急事態に直面しても子供たちが学びを止めないための日常的な備え（仕組み・環境）を可視化し，学校と家庭，教育行政が一体となって取り組むための基本方針をまとめた「学習継続計画」を作成することによって，これまで日本型学校教育が担ってきた３つの役割（健康保障・関係保障・学習保障）を継承した「新しい学習様式」を構築することができるだろう。

図２　日本型学校教育が担う３つの役割（中央教育審議会・初等中等教育分科会，2020.7.2.）

「学習継続計画」では，都道府県版・高校版・生徒版の３つが想定されるが，それぞれの段階に応じて目的を達成するために必要な仕組み・環境を整えていく必要がある。（図３）今回は，高校版として宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校で作成した「令和２年度　学習継続計画」（補足資料）について，その作成に至るまでのプロセスを事例紹介していきたい。

※都道府県版は「学びの継続計画（長野県教育委員会）」をご参照いただきたい。
https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyoiku/corona/documents/020612shityouson.pdf

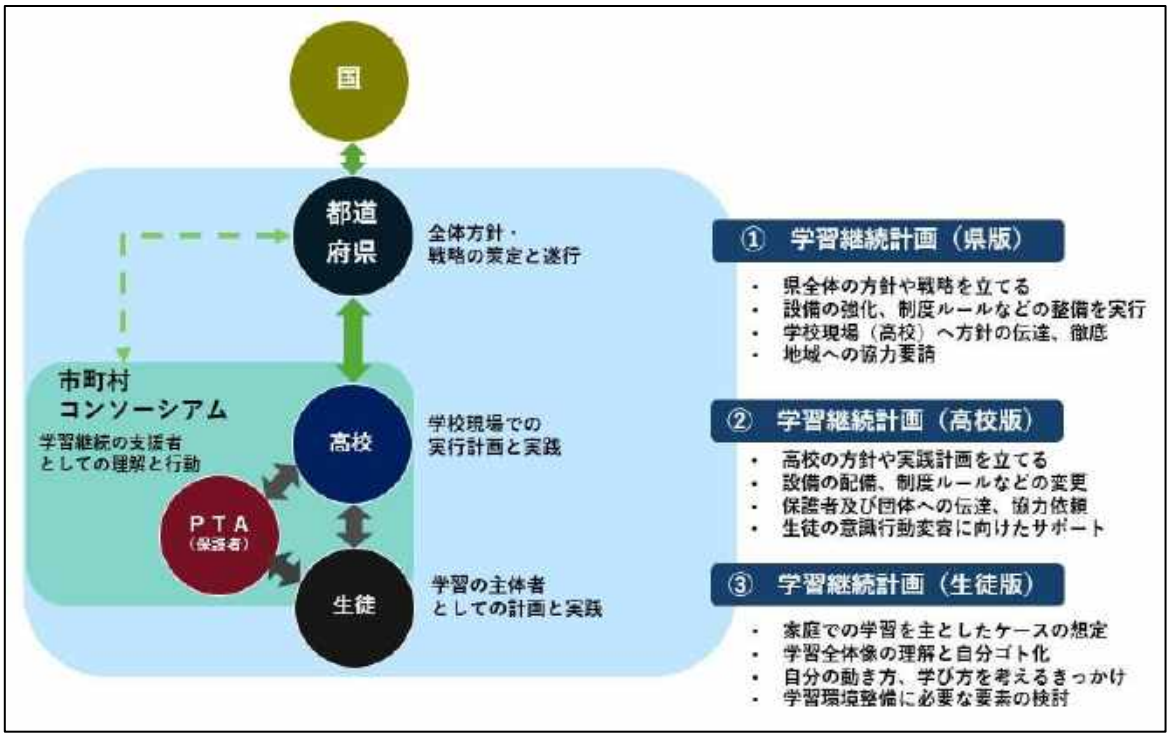


図３　「学習継続計画」の基本構造（株式会社ソフィア 提供）

(3)「学習継続計画」作成のプロセス（カリキュラム・マネジメントの実際）

１）学校の概要

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校は，１学年１学級 40 名で編成される全日制普通科で，１学年から３学年までを前期課程，４学年から６学年までを後期課程として，６年間を見通した教育活動を展開している。また，全寮制による生活体験を通して，社会性や自己管理能力などを身につけ，人間としての在り方・生き方を体得する教育活動を実践している。

さらに，「眼（まなこ）を世界に開き，未来を切り拓く，創造性豊かで主体的に生きる人材の育成を目指した感動と感性の教育」という設立理念のもと，スーパー・グローバル・ハイスクール（平成 26 年度～平成 30 年度），地域との協働による高等学校教育改革推進事業・グローカル型（令和元年度～）など，文部科学省の指定校としてカリキュラム開発に取り組んでいる。

２）作成のプロセス

［フェーズ１］令和２年３月

全国一斉の臨時休校措置を受けて，生徒間ならびに家庭と学校の繋がりを継続させるために，学年単位でのオンライン HR（週１回）を実施した。また，学習継続の手立てとして，郵送による教材配布に加えて，オンライン上の情報共有プラットフォーム（Stock）を活用する教科・科目もあった。フェーズ１は，緊急的な対応であったこともあり，教員間で情報共有を重ねながら試行錯誤で取り組む状況であった。

写真１　オンライン HR の様子

［フェーズ２］令和２年４月～５月

４月に新学期が始まった直後に２回目の休校措置となったため，すぐに３月の取組み（オンライン HR・オンラインを活用した学習支援）を全職員で共有し，学年や教科・科目単位での支援体制を検討した。その結果，リモートでの SHR や学習支援（教科でのテーマ別講座や質問対応，卒業生による講話）に挑戦する職員が増えて，積極的にオンラインを活用する雰囲気が醸成された。

写真２　リモートでの学習支援の様子

［フェーズ３］令和２年６月～８月

５月末から学校再開で通常授業が実施できるようになったが，コロナ感染拡大の第２波に備えて臨時休校時の支援方針・体制を改めて共通理解しておく必要があると感じ，「学習継続計画」の作成にとりかかった。各校務分掌ならびに学年主任で構成される「学びの森・ビジョン委員会（隔週で実施）」を設置し，休校時の支援方針や環境整備について議論を重ねた。その際，組織開発を専門とする廣田拓也さん（株式会社ソフィア代表）を外部アドバイザーとして招聘し，民間の立場からの知見を得ることによって，「学習継続計画」の作成を円滑に進めることができた。また，県教育委員会の支援のもと，オンライン上の情報共有プラットフォーム「G suite for Education」を取得し，全生徒に Google アカウントを配布することによって，全ての学年や教科・科目で統一した支援体制を整えることができた。８月の夏季休業期間には，Google form を活用した検温・外出記録や Google classroom での教材配布などを実施した。

写真３　ビジョン委員会の様子

［フェーズ４］令和２年９月～11 月

学校行事（文化祭・体育祭，探究シンポジウム）のライブ配信や，総合的な探究の時間におけるリモートでの講義（県外講師）など，これまでのオンライン活用の経験を活かした取組みが数多く見られた。また，10 月第１週に行われた授業研修では「ICT を取り入れた授業改善」をテーマに，全ての教科・科目で ICT を取り入れた授業設計に挑戦し，全職員で相互に参観ならびに意見交換する場となった。

写真４　学校行事のライブ配信の様子

［フェーズ５］令和２年 12 月

７月から取り組んできた「学習継続計画」について，どんな時にも『誰一人取り残さない学びづくり』をコンセプトに最終版を作成し，職員研修において全職員で共通理解を図った。今回完成した「学習継続計画・完成版」（添付資料）では，「生徒把握」を目的として，３つの観点（健康把握・生活把握・学習把握）で発達段階に応じた支援体制（オフライン・オンライン）を整理することによって，緊急時から不急時までどのような対応をするかを可視化することができた。

［フェーズ６］令和３年１月

全国的なコロナ感染拡大の第３波によって，１月当初から宮崎県内全ての県立学校が臨時休校措置になったため，「学習継続計画」に従って支援体制を整備した。具体的には，全ての学年において，Google form を活用した検温・外出記録の入力，Google Meet での朝 SHR の実施，オンラインでの学習支援体制（学習教材の配布，Google Meet でのリモート型支援）を時間割ベースで明示した「学びのガイド」（図４）を作成するなど，３つの観点（健康把握・生活把握・学習把握）を押さえながら，全職員で取り組むことができた。また，Google が行う「１人１端末実証実験」の協力校として，４年・５年の全生徒に Chrome book を 12 月から３月まで貸与しており，学校再開後の授業や学校行事の中でも継続して活用する予定である。

冬季自宅学習期間中の学びのガイド（４年生用）

1月12日～火～	校時		1	2	3	4	SHR	5	6
	時間	8:10～8:20	8:25～	9:25～	10:25～	11:25～	12:20～12:30	13:35～	14:35～
	授業名		国語総合	家庭/情報	数学	英語			
	学習内容	【毎日の記録】に各自入力・記入【厳守】	漢文必携P43応用問題①から最後までの解説動画を見て各自添削。質問はメール送信またはクラスルームに書き込み。	（家庭基礎）ホームプロジェクトに取り組もう。詳しくは、資料をUPします。提出：レポート（ 情報 ）クラスルームに掲載します。	進研模試過去問演習 クラスルームで詳細を説明します。	冬課題解説① 【Stephen's Story】 単語・読み・内容解説	オンラインＨＲ	面談希望者は随時連絡してください。できる限り対応します。	面談
	クリスコード								
1月13日～水～	校時		1	2	3	4	SHR	5	6
	時間	8:10～8:20	8:25～	9:25～	10:25～	11:25～	12:20～12:30	13:35～	14:35～
	授業名		国語総合	生物基礎	英語	数学			
	学習内容	【毎日の記録】に各自入力・記入【厳守】	漢文必携P44～P59疑問形～強調形の解説動画を見る。質問はメール送信またはクラスルームに書き込み。	骨格プリントNo.9、10、補足1、2 ※問題は教室部	冬課題解説② 【Stephen's Story】 単語・読み・内容解説	進研模試過去問演習 クラスルームで詳細を説明します。	オンラインＨＲ	面談	面談
	クリスコード								
1月14日～木～	校時		1	2	3	4	SHR	5	6
	時間	8:10～8:20	8:25～	9:25～	10:25～	11:25～	12:20～12:30	13:35～	14:35～
	授業名		国語総合	化学基礎	英語	地歴A			
	学習内容	【毎日の記録】に各自入力・記入【厳守】	疑問形～強調形の解説動画を見てP60－01の練習問題③に取り組む。問題解説動画を見て添削。質問はメールまたはクラスルームへ。	アクセスの質問対応	【VQ／VQ47】③ 質問受付・解説	日A…これからの日本 世A：Meetで授業 地A…地理学会に向けて	オンラインＨＲ	面談	面談
	クリスコード								
1月15日～金～	校時		1	2	3	4	SHR	5	6
	時間	8:10～8:20	8:25～	9:25～	10:25～	11:25～	12:20～12:30	13:35～	14:35～
	授業名		物理基礎	体育	数学	英語			
	学習内容	【毎日の記録】に各自入力・記入【厳守】	【エッセンス赤】電磁誘導、現在の返り点数の質問対応。Classroomにも課題等の掲示をUPしています。	【体育】 一緒に身体を動かそう！	進研模試過去問演習 クラスルームで詳細を説明します。	【VQ／VQ47】④ 質問受付・解説	オンラインＨＲ	面談	面談
	クリスコード								

図４　臨時休校措置に伴う自宅学習期間の「学びのガイド」

(4)「学習継続計画」から見えてきたもの（課題・展望）

感染症拡大に限らず，震災や豪雨などの災害など，私たちは「緊急事態」にいつ・どのような場面で遭遇するかわからない。そのため，緊急事態に『誰一人取り残さない学びづくり』を実現するためには，日常的かつ継続的に取り組み，備えておく必要がある。今回，五ヶ瀬中等教育学校では約 10 ヶ月をかけて「学習継続計画」に関わる取り組みを行ってきたが，長期的なビジョンを持って学校全体で取り組み続けてきたことが，大きな成果に繋がったと実感している。一方で，全職員が一丸となって取り組むためには，学校の教育目標や目指す生徒像，そして発達段階や実態把握まで，多くの情報を共有しながら議論を進めていくことが重要であることが分かった。また，オンライン環境の整備においては，保護者の理解はもちろんのこと，管理機関や外部機関との連携が不可欠である。「オフライン vs オンライン」といった二項対立（どちらか）ではなく，「オフライン×オンライン」の二項循環（どちらも）の視点で議論を深めることが重要である。この視点は，新しい学びの形（主体的，対話的で深い学び）に合致するものであり，「学習継続計画」は緊急事態下だけでなく通常の学校教育活動にも大きな効果を発揮するとともに，カリキュラムマネジメントとしても重要な意味を持つと確信する。（図５）

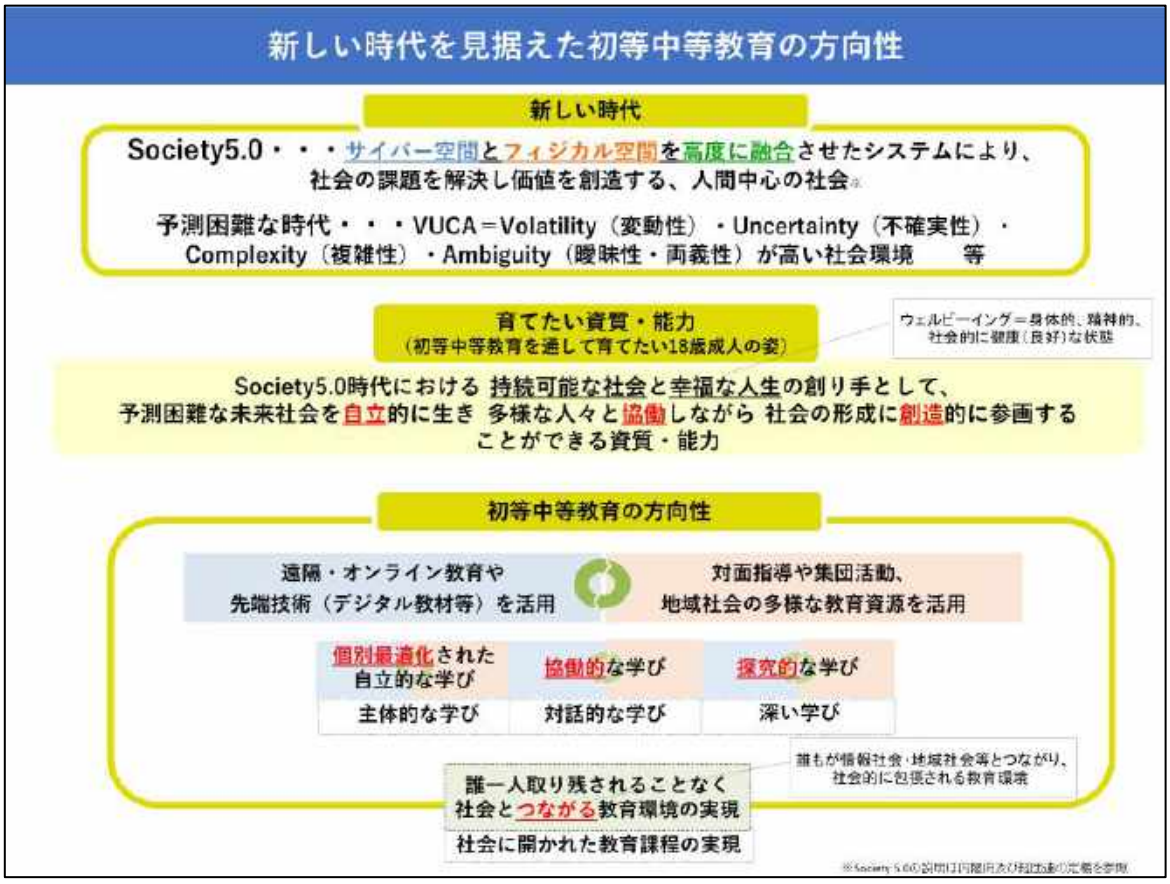


図５　中央教育審議会・初等中等教育分科会　資料より抜粋（2020.7.2.）

令和２年度
学習継続計画
ポストコロナ時代の新しい学び様式

フォレストピア学びの森

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

0

▶ はじめに

学習継続計画とは..

感染症（COV-19）や自然災害など

あらゆる緊急事態に直面しても

学習者が**学びを止めない**ための

日常的な備えを可視化したもの

である

(株)ソフィア講演資料より抜粋

ポストコロナを見据えた「**新しい学習様式**」

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

1

▶ 基本的な考え方

学習継続計画における基本的な考え方

誰一人取り残さない学びづくり

- ○ **これまで取り組んできたこと・いま目の前にあるもの**を大切に活用する
- ○ 生徒・教員・家庭にとって**無理のないスモールステップ**で段階的に実施する
- ○ 最低限の**学びの保障体制**を整えるとともに，**多様性のある学び**を最大限に支援する

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

2

▶ 学習継続計画における共通理解

視点①
日常化・習慣化
緊急事態時にスムーズに移行するために，最低限必要なICTスキルの習得

共通理解
何をしたいか？
何ができるか？

ゴール
学習継続計画
あらゆる緊急事態時においても，誰一人取り残さない学びを止めないための備え

視点②
多様化・最適化
生徒・職員の誰一人取り残さないために，段階的に応じたICT活用の機会

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

3

▶ 学習継続計画の概要（イメージ）

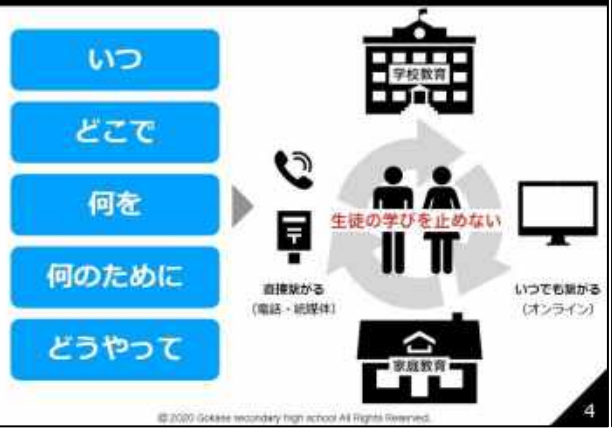
いつ

どこで

何を

何のために

どうやって



© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

4

▶ 学習継続計画の詳細①

学習継続計画【体制】

実態に応じた**ハイブリッド体制**

フェーズ	状況	体制（左：オフライン，右：オンライン）		
緊急	突発的な帰宅・帰寮が必要になった場合	保護者向け電話連絡（学年対応）	かつ	学校HPに掲載 保護者向けメール
不急	閉寮期間 ※長期休暇を含む	生徒向け電話連絡（学年対応）	または	G suite で配信（学年・教科対応）
その他	個別連絡が必要な場合 ※学習支援を含む	郵送（学校便り）配布教材の活用	または	G suite の活用（Gmail・Meet）

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

5

▶ 学習継続計画の詳細②

学習継続計画【環境】

1人1端末を支援・実現する

課程	学校でのオンライン環境	家庭でのオンライン環境
前期課程	文科省 GIGAスクール構想より Windows Tab を貸与する ※1～3年全員：順次対応	貸与端末は学校内でのみ使用可 ※家庭では個人所有の端末を使用
後期課程	Google 1人1台実証計画より Chrome book を貸与する ※4～5年全員：12月から	貸与端末の家庭持ち帰りを許可 ※保護者承諾・申請があった場合

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

▶ 学習継続計画の詳細③

学習継続計画【内容】

健康・生活・学習を把握する

把握すること	オフラインの場合（紙・電話）	オンラインの場合（G suite）
健康把握	検温・外出記録（記録用プリント）	検温・入力外出記録（Google form）
生活把握	生活のあゆみ（日誌） 電話連絡・登校日	オンラインHR・面談（Google Meet）
学習把握	学習教材の配布（課題プリント）	学習動画・資料の配信（Google Classroom）

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

▶ 【補足資料】G suite for Education

○ G suite for Education ホームページより

クラスを簡単に管理

Google Classroom を使うと、課題の作成から配布、進捗の把握、フィードバック、成績管理 までが例えば、教師と学習の管理をシンプルにできます。フォームは、大部分の 要素 をリアルタイムで解析、可視化でき、テストの作成や採点は自動化も備えています。

クラス内のコミュニケーションを手軽に、楽しく。

メッセージの投稿機能を使って、クラス内で手軽にコミュニケーションをおこなえます。
掲示板のように情報交換ができ、新着投稿は Gmail で全員へ通知されるので読み忘れを防止できます。
個別に連絡したい場合には、Classroom の画面から直接 Gmail を送信することもできます。

課題の管理を、ペーパーレス化してスピーディに。

Classroom を使って、課題の配布から回収までをペーパーレス化できます。
教師が新しい課題を作成すると、クラスの生徒に一斉に通知されます。
生徒は内容と提出期限を確認して、すぐに課題に取り組むことができます。
教師は各生徒の提出状況を確認し、コメントを添えてフィードバックしたり、採点ができます。

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

▶ 【補足資料】G suite for Education

○ G suite for Education ホームページより

最適な方法でのコミュニケーション

Gmail なら教育機関専用のメールシステムを設定でき、安全にメールをやり取りできます。Google Meet を活用すれば、ビデオ通話とメッセージ機能で、始めでも多様の学習を支援できます。屋内外につながる自で、屋外にいる教師との実会話も可能です。ウェブサイト構成ツールであるサイトは、カリキュラムの収集、生徒の屋外活動などに利用できます。

プレミアムなビデオ会議。今なら誰でも無料でご利用いただけます。

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

▶ 【補足資料】G suite for Education

○ G suite for Education ホームページより

場所を問わずに共同編集が可能

Google ドキュメント、Google スプレッドシート、Google スライドは、ウェブをベースとした共同作業ができるので、グループ学習などを通常の教室に最適です。またファイルにコメントを残して、教師と生徒が直接フィードバックのやり取りをすることも可能です。データは容量無制限のドライブに安全に保管され、いつでも、どの端末からでもアクセスできます。

どこからでも、ファイルにアクセス。

Google ドライブ は Mac / Windows / Android 端末や iOS 端末で使用できます。
どこからでもファイルの最新バージョンに、一元的にアクセスできます。

ファイル共有も簡単、安全に。

Google ドライブ は、ファイルを特定の人やグループと共有できます。
ファイルのコメント作成 / コメント送信機能は、意見やアイデアのフィードバックに便利です。

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

▶ さいごに

学習継続計画に込めた思い

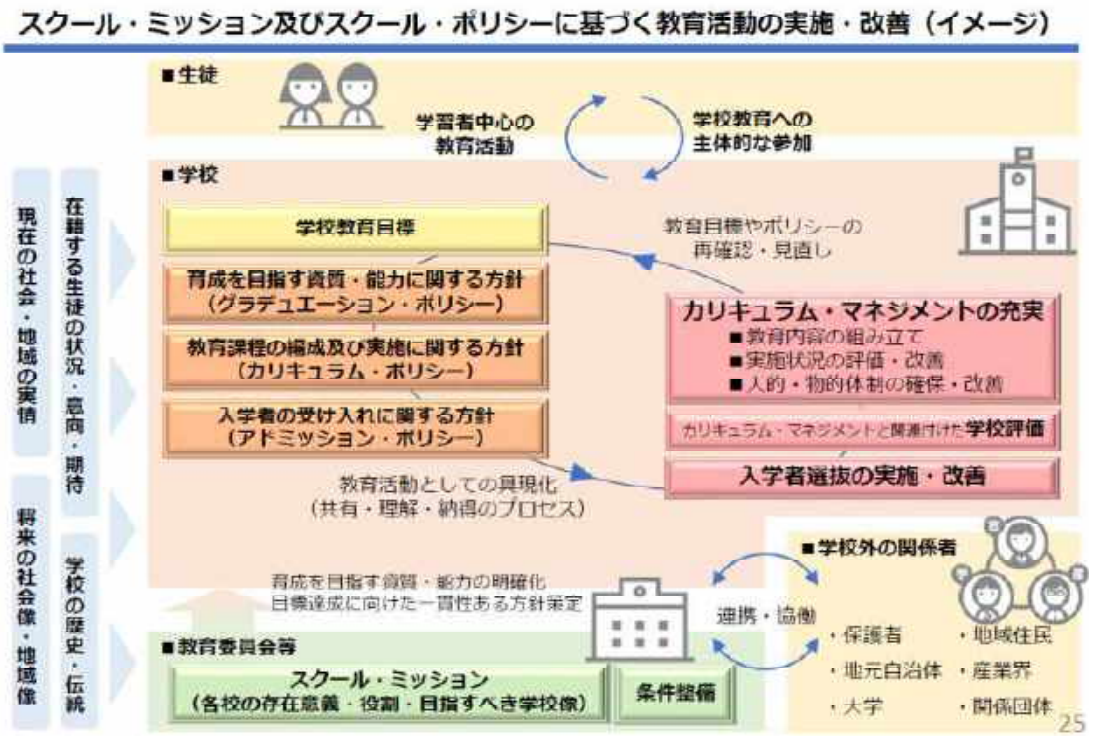
誰一人取り残さない学びづくり

未曾有の災害，コロナ感染症．．まさに「VUCA時代」と呼ばれる今こそ『野性味あふれる地球市民』の一人として，**自ら学びを創り，未来を生きる抜く力**が求められています。

誰一人取り残すことなく，**自分らしく学び・生きる（Well-Being）**ために，この学習継続計画が皆さんの支えになることを願っています。

© 2020 Gokase secondary high school All Rights Reserved.

第４章　カリキュラム・マネジメントのこれから



中央教育審議会初等中等教育分科会「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議まとめ）[24]より

スクール・ミッションとスクール・ポリシーに基づくカリキュラム・マネジメント

今後、高等学校では、各学校の存在意義や社会的役割等に基づき、育成を目指す資質・能力を明確化・具体化するとともに、カリキュラム・マネジメントを通じて学校全体の教育活動の組織的・計画的な改善が求められる。

１．カリキュラム・マネジメントのこれからを考える視点

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（中等教育審議会 令和３年１月２６日）[25]において、「新時代に対応した高等学校教育等の在り方について」は、下記のとおり構成されている。

> （１）基本的な考え方
> （２）高校生の学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸張するための各高等学校の特色化・魅力化
> （３）定時制・通信制課程における多様な学習ニーズへの対応と質保障
> （４）ＳＴＥＡＭ教育等の教科横断的な学習の推進による資質・能力の育成
> （５）高等専修学校の機能強化

カリキュラム・マネジメントとの関わりでは、（２）が「学校の教育目標等の設定及び実現」、（４）が「教科横断的な視点に立った教育課程」にあたる。本章では、第２節で「スクール・ミッションの再定義」や「スクール・ポリシーの策定」等について、第３節で「ＳＴＥＡＭ教育等の教科横断的な学習の推進による資質・能力の育成」について、上記の中教審答申の説明を中心に紹介する。また、第４節では、これからの時代に求められる資質・能力や教科横断的な学習について、経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）の「Education2030プロジェクト」の内容を紹介する。

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）【概要】」（中等教育審議会　令和３年１月２６日）[26]

２．スクール・ポリシーとカリキュラム・マネジメント

本節では文部科学省「これからの高等学校教育について」（令和２年１１月２５日）[27]のスライド資料をもとに「スクール・ミッションの再定義」「スクール・ポリシーの策定」「地域社会や高等教育機関等の関係機関等の連携・協働」について紹介する。

２．（１）スクール・ミッションの再定義

■背景

- ✓ 各高校の在り方を検討する上で、各高校が育成を目指す資質・能力を明確化することが重要
- ✓ しかし、学校教育目標等が抽象的で分かりにくい、校内外への共有・浸透が不十分といった指摘

スクール・ミッション

- ✓ 各高校の存在意義
- ✓ 期待される社会的役割
- ✓ 目指すべき高等学校像

高等学校の設置者が各学校や地元自治体等の関係者と連携しながら再定義

- ✓ 生徒の状況・意向・期待
- ✓ 現在の社会・地域の実情
- ✓ 学校の歴史・伝統
- ✓ 将来の社会像・地域像

高等学校の役割・理念を分かりやすく提示

- ✓ 中学校における進路指導の充実や中学生の学校選択、高校生の科目選択にも資するものとして期待

11

２．（２）スクール・ポリシーの策定

スクール・ポリシー

- ✓ 高等学校教育の入口から出口までの教育活動を一貫した体系的なものへと再構成
- ✓ 各高等学校教育の継続性を担保
  - ▶ 特色・魅力ある教育の実現に向けた整合性のある指針としてスクール・ポリシーを策定・公表
    - ●育成を目指す資質・能力に関する方針（仮称）
    - ●教育課程の編成及び実施に関する方針（仮称）
    - ●入学者の受入れに関する方針（仮称）

- ✓ 各高等学校における育成を目指す資質・能力を明確化・具体化
- ✓ カリキュラム・マネジメントを通じて、学校全体の教育活動の組織的・計画的な改善へと結実
- ✓ スクール・ポリシーを基準にして、高等学校の教育活動や業務内容を精選・重点化
- ✓ 学校評価において、スクール・ポリシーに照らして自らの取組を点検・評価

スクール・ポリシーの内容

- ✓ 生徒や入学希望者の学習意欲を喚起し、学校生活や将来に対する展望を持ちやすい表現・内容
- ✓ 日常的に参照可能なよう、総花的なものとせず真に重点的に取り組む内容を示す指針
- ✓ スクール・ポリシーについても日々の教育活動の検証等を通じた見直し

1

2.（2）スクール・ポリシーの策定

育成を目指す資質・能力に関する方針（仮称）

✓ **生徒の卒業後の姿を見据えて、学校教育活動を通じて生徒にどのような資質・能力を育成することを目指すのかを定める基本的な方針**

関係者	意義・効果
生徒	同方針に表れた資質・能力を身に付けることが**高等学校生活の目標の一つ** （卒業時の姿から逆算して日々の授業等への取組 大学入学者選抜や就職活動における自身に関する説明に活用可能）
教職員	同方針に表された資質・能力を育成することを**日々の教育活動の最終的な目標**として、年間指導計画の策定や日々の授業の実施・改善
設置者	同方針に基づく各高等学校の取組状況を踏まえて、 **予算・人事上の措置**や**指導主事の派遣**などの支援
入学希望者	明確化された卒業時の姿を**学校選択時の参考情報**として活用
関係機関	明確化された各高等学校が育成を目指す資質・能力を踏まえて、 **相互のコミュニケーションを円滑化**

✓ 授業改善等に活用できるよう、**一定の具体性をもった内容**とすることが必要
（その際、定量的なものというよりも、**定性的な目標**として記載されることに留意）

✓ 各教科・科目の単位修得と離れて**独自の卒業要件となるのではない**点に留意

1

2.（2）スクール・ポリシーの策定

教育課程の編成及び実施に関する方針（仮称）

✓ **育成を目指す資質・能力に関する方針（仮称）を達成するために、どのような教育課程を編成し、実施し、学習評価を行うのかを定める基本的な方針**

関係者	意義・効果
生徒	同方針の内容を踏まえて、卒業までの学習の道筋を捉える
教職員	同方針に基づいて教育課程全体の体系化や各教科・科目の意味付け 一貫した方針の下で**年間指導計画の策定**や**日々の授業の実施・改善**等
設置者	同方針に基づく各高等学校の取組状況を踏まえて、 **予算・人事上の措置や指導主事の派遣などの支援**
入学希望者	教育活動の基本的な方針を**学校選択時の参考情報**として活用
関係機関	各高等学校の教育内容に関する方針が共有されることで **相互のコミュニケーションが円滑化**

✓ 同方針は**カリキュラム・マネジメントの基盤**。教育課程の編成という計画段階の方針にとどまらず、教育課程の実施や、教育課程の評価に当たって参照されるもの

✓ 新学習指導要領において重要視される**「社会に開かれた教育課程」「主体的・対話的で深い学び」「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」**を意識して策定

17

2.（2）スクール・ポリシーの策定

入学者の受入れに関する方針（仮称）

✓ **スクール・ミッションや、育成を目指す資質・能力に関する方針（仮称）と教育課程の編成及び実施に関する方針（仮称）に基づく教育内容等を踏まえ、入学時に期待される生徒像を示す基本的な方針**

関係者	意義・効果
入学希望者	**学校選択時の判断基準**や**入学に向けた目標**
中学校の教職員	**進路指導に当たる上での参照情報**

✓ 一覧性を高める観点から、同方針の公表を各高等学校がそれぞれに行うだけでなく、**都道府県教育委員会のホームページ等で一元的に公表**するなどの工夫

（留意事項）

✓ 育成を目指す資質・能力に関する方針（仮称）と教育課程の編成及び実施に関する方針（仮称）を踏まえ、**これら方針に基づく教育を受ける生徒に対するメッセージ**としてふさわしい内容

✓ **生徒の資質・能力は可塑性に富む**ものであることから、入学時において求められる資質・能力を余りに厳格に定めることによって、**学ぶ意欲を持った生徒に対して高等学校教育の門戸を閉ざすこととなってはならない**

1

2.（2）スクール・ポリシーの策定

スクール・ポリシーの策定プロセス

✓ 各高等学校において以下の順で検討

①教育活動を通じてどのような資質・能力を育むことを目指すのか	：育成を目指す資質・能力に関する方針（仮称）
②そのために求められる教育課程を編成・実施するための方針	：教育課程の編成及び実施に関する方針（仮称）
③当該高等学校の教育内容等を踏まえ、入学時に期待される生徒像	：入学者の受入れに関する方針（仮称）

✓ **設置者がスクール・ポリシーの運用上の名称や具体的な策定方針、期間について検討**し、各高等学校における効果的な策定・運用を促進

✓ **校長がリーダーシップを発揮しながら、全教職員が当事者意識を持って参画**し、組織的かつ主体的に策定　（≠一部の教職員だけでの策定）

✓ 教職員をはじめとする関係者がスクール・ポリシーについて**共有、理解、納得のプロセス**を経ていくことそのものにも大きな意義

✓ 各高等学校や地域の実情によって、**生徒や保護者、地域住民等の関係者が参画**して検討を進めることも重要

2.（2）スクール・ポリシーの策定

スクール・ポリシーの策定手順（例）

（1）スクール・ポリシー策定の中心となる組織の特定

・スクール・ポリシーの策定に当たっては校長がリーダーシップを発揮することが重要であり、組織的に対応していくことが求められる。スクール・ポリシーを策定することのみを目的として校内組織を立ち上げることは必ずしも要せず、既に置かれている校内組織の活用や、既存の校内組織の見直しを行いながら検討を進めることが想定される。

↓

（2）スクール・ポリシー策定に係るプロセス及びスケジュールの確定

・策定の中心となる組織を特定した後は、学校内外の調整を含めてどういった工程で策定・公表までの検討作業を進めるのかについて具体的に決めることが必要である。

↓

（3）スクール・ポリシー策定に当たって踏まえるべき情報の整理

・教育基本法や学校教育法、学習指導要領等の関係法令、スクール・ミッション、学校教育目標、これまでの当該高等学校における取組、生徒の状況や進路希望、地域の実情等を整理し、教職員間で共有する。
・生徒の状況や地域の実情等については、生徒を対象としたアンケートや保護者アンケート、学校運営協議会の場でのやり取り等を通じて既に入手・整理されているものも含まれる。

↓

（4）スクール・ポリシーの案の作成及び教職員間での協議

・整理された関係情報を踏まえて、校内組織において育成を目指す資質・能力に関する方針（仮称）、教育課程の編成及び実施に関する方針（仮称）、入学者の受入れに関する方針（仮称）の順に案を作成する。
・校内組織において作成された案を基に、職員会議等を活用して全教職員が参画可能な形で精査を行う。

↓

2.（2）スクール・ポリシーの策定

スクール・ポリシーの策定手順（例）

（5）生徒や保護者等の学校外の関係者との対話

・ホームルーム活動や生徒会活動等の場において、学校教育の中心である生徒に対してスクール・ポリシーの案を提示し、生徒が自らの学校生活を振り返るとともに、学校生活を通して身に付けたい資質・能力について主体的に考える機会を設ける。
・学校運営協議会等の組織において、地域住民や保護者等の学校外の関係者に対してスクール・ポリシーの案を示し、地域社会から学校に対する期待することや、学校教育活動を推進する上でどんな連携・協働が可能かなどについて話し合う機会を設ける。

↓

（6）スクール・ポリシーの策定

・生徒や学校外の関係者から聴取した意見を踏まえて、校内組織で再検討を加えた上で、最終的に校長がスクール・ポリシーを決定する。

↓

（7）スクール・ポリシーの再確認・見直し

・スクール・ポリシー策定後も、固定的に捉えるのではなく、絶えず振り返り、教育活動の評価や生徒の状況を踏まえて、必要に応じてスクール・ポリシーの見直しを行う。

2.（2）スクール・ポリシーの策定

スクール・ポリシーに基づく教育活動の実施・改善

✓ **カリキュラム・マネジメント**を通じて、学校全体の教育活動の**組織的・計画的な改善**を行うため、校内の組織・校務分掌の在り方を見直すなど**教職員体制を改善**

✓ **高等学校の設置者**においては、各高等学校の自主的・自律的な取組が進められるよう、教育活動をはじめとする学校運営に関する**学校の裁量の拡大**を図りながら**指導助言・支援**

✓ 育成を目指す資質・能力に関する方針（仮称）と教育課程の編成及び実施に関する方針（仮称）を活用した**教育活動の一例**は以下のとおり
（※各高校の風土や土壌、伝統を踏まえながら、各校の戦略に基づいて多様な方策を検討）

- 各教科・科目等の**年間指導計画や単元指導計画**、**学級・学年経営案**におけるスクール・ポリシーを踏まえた目標設定・計画立案
- スクール・ポリシーに表された**資質・能力の具体的な達成水準についての分析・記述**を通じた教職員間の共通理解
- **入学式・始業式**や、**キャリア・パスポート等を活用した振り返り**における、スクール・ポリシーと関連付けた講話や指導
- **授業研究**において、スクール・ポリシーと関連付けた授業研究の主題設定
- **赴任した教職員に対する研修**等の機会を捉えたスクール・ポリシーに関する理解促進

2.（2）スクール・ポリシーの策定

スクール・ポリシーに基づく入学者選抜の実施・改善

✓ 入学者の受入れに関する方針（仮称）に基づく入学者選抜が可能となるよう、各教育委員会が**一定の範囲で具体的な選抜方法について各高校の判断に委ねる**といった工夫

- 学力検査の**実施教科や教科ごとの配点の変更**
- 学力検査における各高校による**独自問題**の作問
- **調査書と学力検査の成績の比重**の変更　など

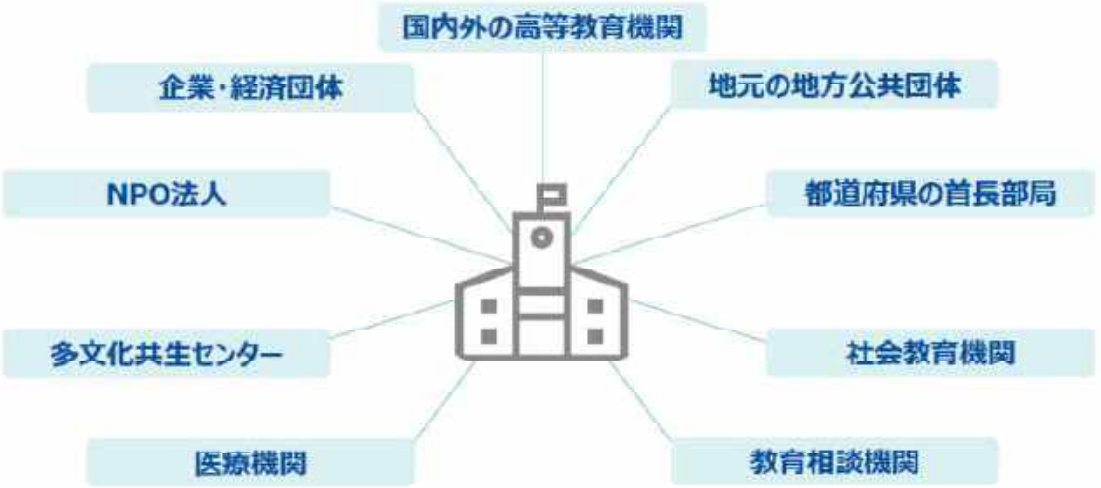
※ 学力検査の作問に当たっては、教育委員会による作問、各高校の独自問題の作問のいずれにおいても、単に知識の量を問うような問題はできるだけ避け、思考力や分析力等を問う問題の出題など一層の工夫が必要

✓ 推薦型入学者選抜などにおいては、**自己申告書の記載内容や面接での応答等に表れる生徒像**が入学者の受入れに関する方針（仮称）に合致するかどうかという観点から判定

2.（3）地域社会や高等教育機関等の関係機関との連携・協働

自前主義からの脱却

✓ 各高等学校の自律性を前提としつつも、**一つの高等学校の中で全ての教育活動を完結させるという「自前主義」から脱却**し、各高等学校のスクール・ミッションや、各学校・地域の実情に応じた関係機関と連携・協働した社会とつながる多様な学びを実現



2.（3）地域社会や高等教育機関等の関係機関との連携・協働

スクール・ミッション等に応じた連携・協働体制の例

✓ **地域を支えるために必要となる力の育成**をスクール・ミッションに掲げる高等学校においては、学校運営協議会の設置や地域学校協働本部における活動に加え、高等学校と**地方公共団体、産業界、高等教育機関、NPO法人等との連携・協働体制**（いわゆる「コンソーシアム」）を構築し、地域の課題や魅力に着目した実践的な学びを実現

✓ **国内外の社会課題の発見・解決に向けて対応できるリーダーの素養の育成**をスクール・ミッションに掲げる高等学校においては、**国内外の高等教育機関や高等学校、企業等との連携・協働体制**を構築し、高度で先進的な学びを実現

✓ **職業教育を主とする専門学科**においては、近年の急速な技術革新を踏まえて最先端の実践的な職業教育を進めるため、**企業や地元経済団体等、都道府県・市町村行政、高等教育機関等との連携・協働**を強化

✓ 不登校や中途退学経験者、特別な支援を要する生徒、日本語の指導を要する生徒など、**特別な配慮が必要な生徒への支援**に当たっては、**市町村の教育相談機関、医療機関、多文化共生センター、福祉事務所、NPO法人等の関係機関との連携・協働**を進め、一人一人のニーズに応じて義務教育段階での学習内容の確実な定着を含めた教育支援を実施

2.（3）地域社会や高等教育機関等の関係機関との連携・協働

関係機関との連携・協働体制

「組織対組織」のつながり

- ✓ 校長などの**管理職やミドルリーダー**がリーダーシップを発揮
- ✓ **設置者**（教育委員会）による積極的な支援・関与
- ✓ 各高等学校や地域の実情に応じて以下の取組を実施
  - **コンソーシアム**としての体制づくり
  - 高等学校内に地域連携協働室などを設置
  - 関係機関との調整を行う**コーディネーター**の配置

「個対個」のつながり

- ✓ 担当者の属人的なつながり
- ✓ その場限りのつながり
- ✓ その年限りのつながり

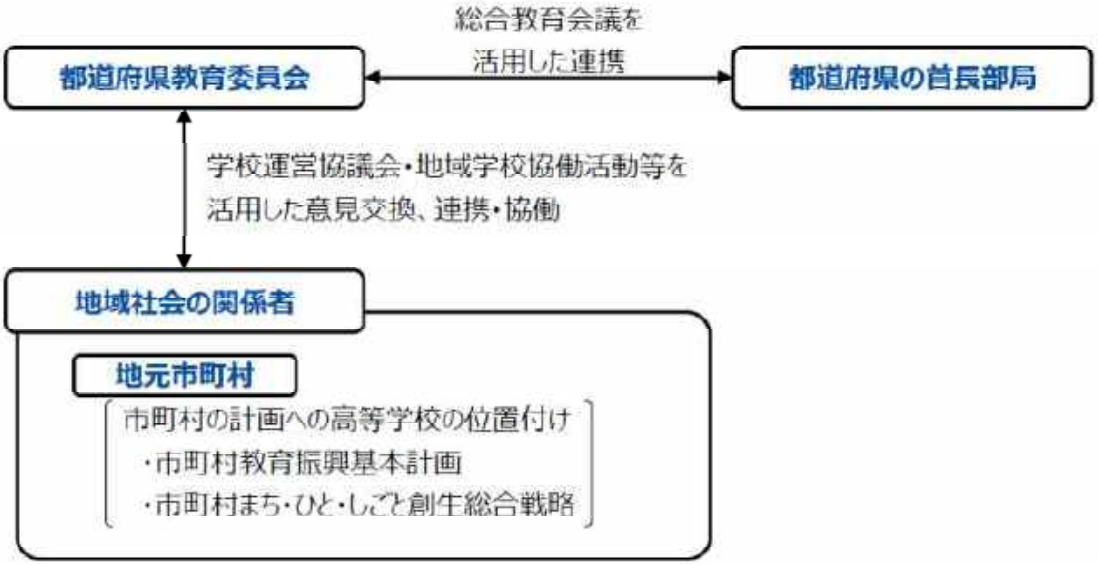
- ✓ **コンソーシアム**・・・関係機関の**一体的な合意形成**、**計画的・持続的な連携・協働**
  特に地域社会との連携・協働を進める観点からは、**学校運営協議会**と**地域学校協働本部**における活動を一体的に推進
- ✓ **大学等の科目履修・学校外学修の単位認定制度**の積極活用
- ✓ 関係機関との連携・協働に加えて、**複数の高等学校が連携・協働**することによって、全国の高校生が高度かつ多様なプログラムに参加することを可能とする取組

29

2.（3）地域社会や高等教育機関等の関係機関との連携・協働

持続的な地方創生の核としての機能

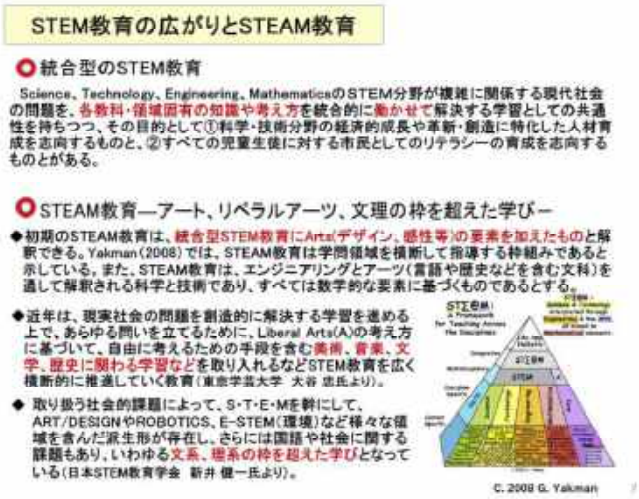
- ✓ 特に公立高等学校は、持続的な地方創生の核としての機能をも有する
  →都道府県の首長部局や地域社会の関係者と連携して、各地域の高校教育の在り方を検討



３．ＳＴＥＡＭ教育とカリキュラム・マネジメント

本節では中等教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」（令和３年１月２６日）[28]より「ＳＴＥＡＭ教育等の教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成」を紹介する。なお、「ＳＴＥＡＭ教育について」議論された有識者（松原憲司氏、田村学氏、長尾篤志氏）の発表資料（中等教育分科会教育課程部会　２０１９年９月４日）も併せて掲載する。

○　AI や IoT などの急速な技術の進展により社会が激しく変化し，多様な課題が生じている今日においては，これまでの文系・理系といった枠にとらわれず，各教科等の学びを基盤としつつ，様々な情報を活用しながらそれを統合し，課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成が求められている。



松原憲治氏の発表資料[29]

○　教育再生実行会議第次提言において，幅広い分野で新しい価値を提供できる人材を養成することができるよう，新学習指導要領において充実されたプログラミングやデータサイエンスに関する教育，統計教育に加え，STEAM 教育の推進が提言された。高等学校改革を取り上げた本提言において，STEAM 教育は「各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科横断的な教育」とされている。

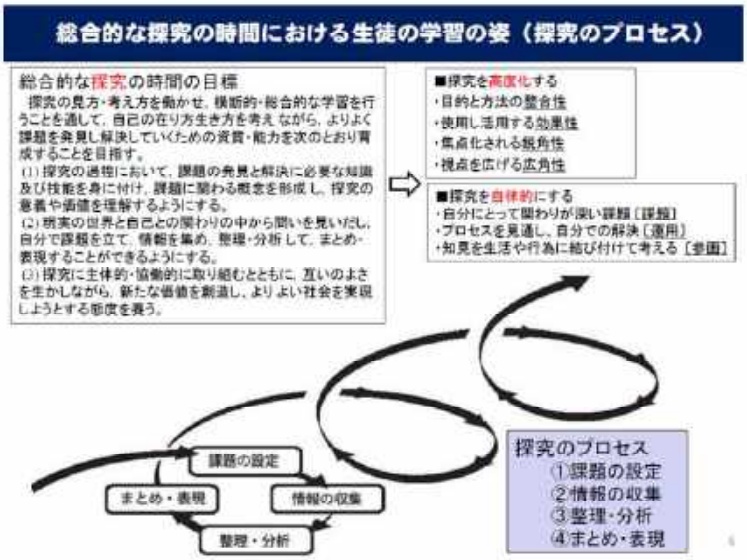
○　この STEAM 教育については，国際的に見ても，各国で定義が様々であり，STEM（Science, Technology, Engineering, Mathematics）に加わった A の範囲をデザインや感性などと狭く捉えるものや，芸術，文化，生活，経済，法律，政治，倫理等を含めた広い範囲で定義するものもある。

STEAM 教育の目的には，人材育成の側面と，STEAM を構成する各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民の育成の側面がある。各教科等の知識・技能等を活用することを通じた問題解決を行うものであることから，課題の選択や進め方によっては生徒の強力な学ぶ動機付けにもなる。一方で，STEAM 教育を推進する上では，多様な生徒の実態を踏まえる必要がある。科学技術分野に特化した人材育成の側面のみに着目して STEAM 教育を推進すると，例えば，学習に困難を抱える生徒が在籍する学校においては実施することが難しい場合も考えられ，学校間の格差を拡大する可能性が懸念される。教科等横断的な学習を充実することは学習意欲に課題のある生徒たちにこそ非常に重要であり，生徒の能力や関心に応じた STEAM 教育を推進する必要がある。

このため STEAM の各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民として必要となる資質・能力の育成を志向する STEAM 教育の側面に着目し，STEAM の A の範囲を芸術，文化のみならず，生活，経済，法律，政治，倫理等を含めた広い範囲（Liberal Arts）で定義し，推進

することが重要である。

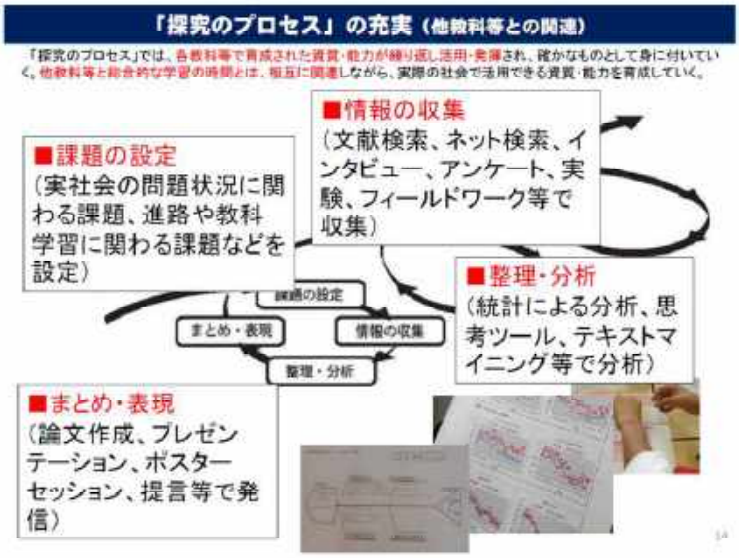
○　新学習指導要領においては，学習の基盤となる資質・能力や，現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成するため，教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることとされている。



田村学氏の発表資料[30]

STEAM　教育の特性を生かし，実社会につながる課題の解決等を通じた問題発見・解決能力の育成や，レポートや論文，プレゼンテーション等の形式で課題を分析し，論理立てて主張をまとめること等を通じた言語能力の育成，情報手段の基本的な操作の習得，プログラミング的思考，情報モラル等に関する資質・能力等も含む情報活用能力の育成等の学習の基盤となる資質・能力の育成，芸術的な感性も生かし心豊かな生活や社会的な価値を創り出す創造性などの現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成について，文理の枠を超えて教科等横断的な視点に立って進めることが重要であり，その実現のためにはカリキュラム・マネジメントを充実する必要がある。

○　STEAM　教育は，「社会に開かれた教育課程」の理念の下，産業界等と連携し，各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていく高度な内容となるものであることから，高等学校における教科等横断的な学習の中で重点的に取り組むべきものであるが，その土台として，幼児期からのものづくり体験や科学的な体験の充実，小学校，中学校での各教科等や総合的な学習の時間における教科等横断的な学習や探究的な学習，プログラミング教育などの充実に努めることも重要である。さらに，小学校，中学校においても，児童生徒の学習の状況によっては教科等横断的な学習の中で STEAM　教育に取り組 むことも考えられる。その際，発達の段階に応じて，児童生徒の興味・関心等を生かし，教師が一人一人に応じた学習活動を課すことで，児童生徒自身が主体的に学習テーマや 探究方法等を設定することが重要である。



田村学氏の発表資料[31]

STEAM教育と「総合的な探究の時間」／共通教科「理数」の関係

	STEAM教育	総合的な探究の時間 ※「理数探究」及び「理数探究基礎」について
目　的	■科学・技術分野の経済的成長や革新・創造に特化した人材育成 ■STEAM分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民の育成	■実社会や実生活との関わりにおいて、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力の育成 ※数学的な見方・考え方や理科の見方・考え方を組み合わせるなどして働かせ、探究の過程を通して、課題を解決するために必要な資質・能力の育成。
対象・領域	■STEM分野を軸としつつも扱う社会課題によって様々な領域を含む。 （例えば、科学・技術分野に特化した課題から、ART/DESIGN、ROBOTICS、eSTEM（環境）、国語や社会に関する課題など）	■特定の教科・科目等に留まらず、横断的・総合的であり、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する事象が対象 （例えば、現代的な諸課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の進路に関する課題など） ※自然や社会などの様々な事象から数学や理科などに関する課題を設定。
学習過程	■各教科・領域固有の知識や考え方を統合的に活用することを通した問題解決的な学習を重視	■複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせるとともに、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する問題を様々な角度から俯瞰して捉え、考えていく「探究のプロセス」を重視 ■解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題に対して納得解や最適解を見いだすことを重視 ※数学的な手法や科学的な手法などを用いて、仮説設定、検証計画の立案、観察、実験、調査等、結果の処理を行う、一連の探究過程の遂行や、探究過程を整理し、成果などを適切に表現することを重視。
教育課程	（学校全体の仕組みとして機能が期待できる）	■教育目標との関連を図る教育課程の中核。各学校において目標や内容を設定 ■他教科等及び総合的な探究の時間で身に付けた資質・能力を相互に関連付け、教科等横断的な視点で編成・育成 ※アイデアの創発、挑戦性、総合性や融合性の視点を重視した、従前の教科・科目の枠にとらわれない科目設定。 19

長尾篤志氏の発表資料[32]

○　高等学校においては，新学習指導要領に新たに位置付けられた「総合的な探究の時間」や「理数探究」が，

・実生活，実社会における複雑な文脈の中に存在する事象などを対象として教科等横断的な課題を設定する点

・課題の解決に際して，各教科等で学んだことを統合的に働かせながら，探究のプロセスを展開する点

など STEAM　教育がねらいとするところと多くの共通点があり，各高等学校において，これらの科目等を中心として STEAM 教育に取り組むことが期待される。

また，必履修科目として地理歴史科・公民科や数学科，理科，情報科の基礎的な内容等を幅広く位置付けた新学習指導要領の下，教科等横断的な視点で教育課程を編成し，その実施状況を評価して改善を図るとともに，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制の確保を進め，地域や高等教育機関，行政機関，民間企業等と連携・協働しつつ，各高等学校において生徒や地域の実態にあった探究学習を充実することが重要である。

その際には，これまでのスーパーサイエンスハイスクール（SSH）などでの教育実践の成果を生かしていくことが考えられる。

さらに，教員養成や教員研修の在り方も併せて検討していくことが重要である。

○ STEAM　教育の推進に当たっては，探究学習の過程を重視し，その過程で生じた疑問や思考の過程などを生徒に記録させ，自己の成長の過程を認識できるようにするとともに，　社会に開かれた教育課程の観点から，STEAM　教育に関わる学校内外の関係者による多様な視点を生かし，生徒の良い点や進歩の状況などを積極的に評価し，学習したことの意義や価値を実感できるよう努めることが重要である。

○　また，実社会での問題発見・解決に生かしていく視点から生徒が自らテーマを設定し，学習を進めるためには，生徒が地域や産業界，大学などと多様な接点を持ち，社会的な課題や現在行われている取組などについて学ぶことが必要である。生徒が多様な機会を 得ることができるよう，社会全体で取組を進めることが求められる。このため，国においては産業界や大学等とも連携し，STEAM　教育に資する教育コンテンツの整備を進めるとともに，事例の収集や周知などの取組を進める必要がある。

○　STEAM　教育等の教科等横断的な学習の前提として，小学校，中学校，高等学校などの 各教科等の学習も重要であることは言うまでもない。各学校において，習得・活用・探究という学びの過程を重視しながら,各教科等において育成を目指す資質・能力を確実に育むとともに，それを横断する学びとしての STEAM　教育を行い，更にその成果を各教 科に還元するという往還が重要である。

総合的な探究の時間の充実の方向性②

探究のプロセスの充実に関わって

－育成を目指す資質･能力や探究のプロセスの具体的取組－

■「地域の人々の協力」「社会教育施設、社会教育関係団体等の各種団体等との連携」「地域の教材や学習環境の積極的な活用」の視点から、地域連携、産学連携が重要である。企業とのコラボも含めたSTEAM関連の事例を先進的に創造し実践していく。

■「各教科等における指導内容と総合的な探究の時間の学習との関連的な指導の充実」「言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動の充実」を実現するために、「考えるための技法」を生かした多様な分析、論文やレポートにまとめ表現することを積極的に実践していく。

田村学氏の発表資料[33]

４．エージェンシーとカリキュラム・マネジメント

本節では、白井俊氏の「Education　２０３０プロジェクト」の解説から「エージェンシーAgency」とカリキュラム・マネジメント（主に教科横断的な視点に立った教育課程）に関する説明を紹介する。

経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）では、これからの時代に求められる資質・能力を再定義する「Education ２０３０プロジェクト」において、「ＯＥＣＤラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」（２０１９年）を公表し、その中で「生徒エージェンシー」（Student Agency）を「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく姿勢・意欲」[34]と定義し、中心的な概念として位置づけている。『OECD Education ２０３０プロジェクトが描く教育の未来』（ミネルヴァ書房、２０２０年１２月２０日）では次のように説明している[35]。

Figure 1. The OECD Learning Framework 2030: Work-in-progress

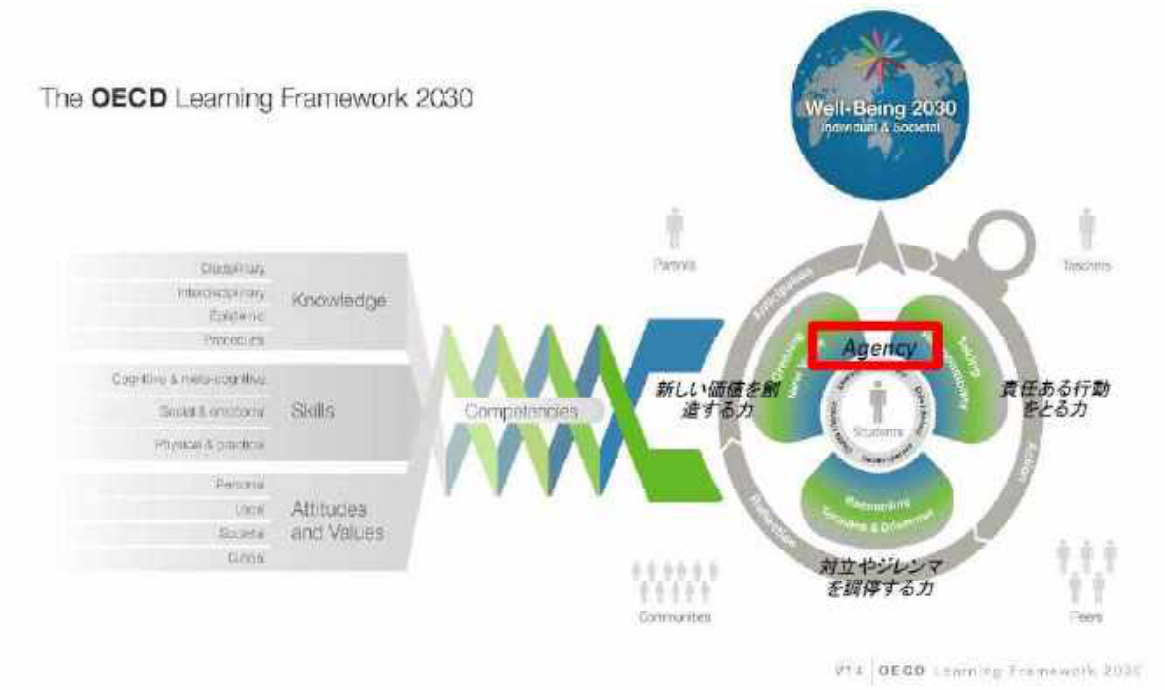


図１　ＯＥＣＤの学習枠組み２０３０[36]

この図では、後にコンセプト・ノートにおいて示されることになるラーニング・コンパスの骨格となる考え方が示されている。すなわち、コンパスの形状を明示しながら、２０３０年のウェルビーイングの実現が目指すべき目標として示されている。また、要素としての知識、スキル、態度及び価値観が絡み合ってコンピテンシーにつながり、特に２０３０年という文脈においては、新しい価値を創造する力など３つの「変革をもたらすコンピテンシー」が重要であること、また、それらをよりよく獲得し、育成していくための「ＡＲサイクル」が示されるなど、全体的な関係性がよりわかりやすく示されていると言えよう。

「ラーニング・コンパス」では、「学びの中核的な基盤」（知識、スキル、態度及び価値）をもとに、「変化をもたらすコンピテンシー」（①新たな価値を創造する力、②対立やジレン

マを調定する力、③責任ある行動をとる力）を育成するために、「ＡＡＲサイクル」（見通し anticipation・行動 action・振り返り reflection）を回しながら、個人及び社会全体の２０３０年における「ウェルビーイング」（人々が心身共に幸せな状態）を目指して学んでいくというイメージが描かれている。

ラーニング・コンパスの「方位」は私たちが希望する未来へ生徒が進むための支えとなる

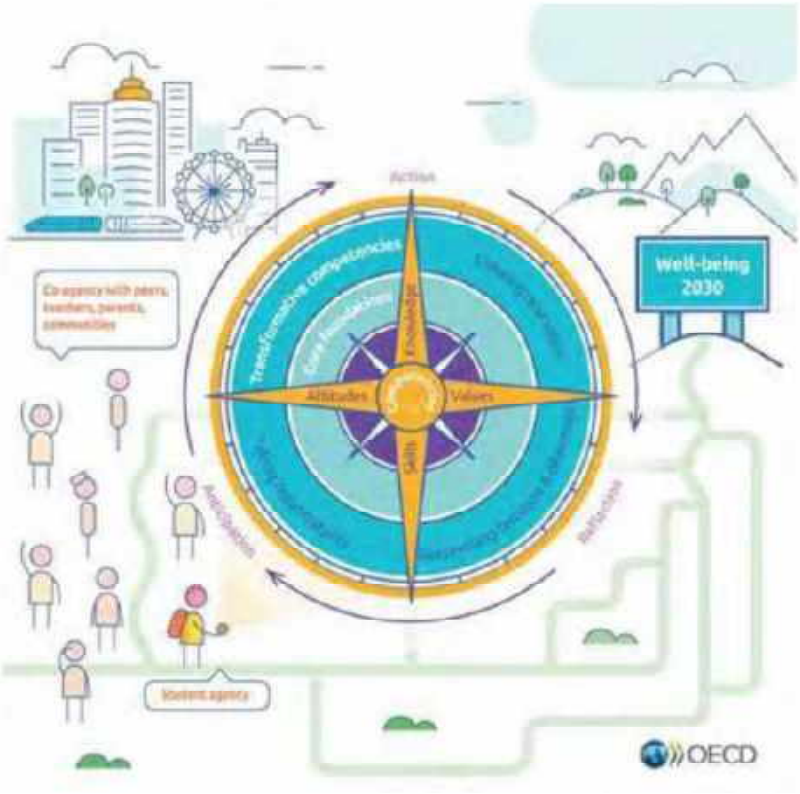


図　Education2030　ラーニング・コンパス[37]

そして、このような資質・能力を育成する上で、教科横断的な視点に立った教育課程が求められる理由について、下記の説明をする[38]。

より VUCA となる２０３０年の世界において、複雑化する問題に対して様々な解決策を見出すためには、各教科の学問分野を越えて考えたり、「点と点をつなげること（connecting the dots）」が必要になる（OECD，2018a）。教科横断的な知識が重要なのは、それらが、各学問分野の原理や概念、コンテンツを、別の学問分野の原理や概念、コンテンツと関連づける知識であるということにある。すなわち、教科横断的な知識を獲得することで、ある知識を他の分野へと転移（transfer）させることが可能になるのである。

さらに「教科横断的な知識を育成するための工夫」として、下記の説明をしている[39]。

Education2030 プロジェクトでは、教科横断的な知識を育成するためのカリキュラム・マネジメントの上での工夫として、以下の５つのアプローチを例示している。（OECD2019）

①キー・コンセプトーやビッグ・アイディアに関する学習

キー・コンセプトやビッグ・アイディアは、一般に、各教科などにおける中核的な概念のことをいう。詳細なコンテンツの一つ一つを学習するというよりも、幅広い転移可能性を持つ概念を重視することで、表面的にコンテンツを理解する学習から、より教科の本質を理解した学習への転換を図っていくということが考えらえる。

こうしたキー・コンセプトやビッグアイディアは、一般に各教科の枠組みの中で想定されることが多いが、教科を越えた「メタ・コンセプト」や「マクロ・コンセプト」としても認識される場合も考えられる。カリキュラムにおいて、こうした教科横断的なキー・コンセプトやビッグ・アイディアを重視することで、教科横断的な知識についての理解も深まることが考えられる。

②概念相互の関係性の特定

実社会・実生活上の課題は、様々な事象が複雑に絡み合っていることから、一つの学問分野だけでなく、複数の学問分野を越えて柔軟に対応していくことが求められる。カリキュラムの中に、そうした実社会・実生活上の課題を取り入れることで、生徒は、特定の学問分野を越えた多様な概念の中から、相互の関連性について学ぶことができるようになる。こうした工夫は、教科横断的な知識を身につけるうえでも有用と考えられる。

③テーマに沿った学習

例えば、「環境」や「金融」、「安全保障」など、特定のテーマに沿った学習も、異なる学問領域の相互関係を学習する上で重要であり、教科横断的な知識の習得に有用であると考えられる。もっとも、そうした特定のテーマごとに科目を新設することは、カリキュラム・オーバーロード（引用者注　カリキュラムにおいて、学校や教師、生徒に過大な負担がかかっている状態）を加速することにもなりかねない。そのため、個別の領域について新しい科目を設定するのではなく、既存のカリキュラムの中に、こうしたテーマを広く学ぶことができる機会を入れ込むことで対応している国もある。

④教科科目の再編統合や新設

教科横断的な学習を促進するための直接的な手段として、関係する教科を統合したり、新しい教科を設けることも考えられる。こうした新教科の設定や教科の再編は、「教科横断的な知識の重要性を示すための戦略として用いられる」場合もあるが、一方では、カリキュラム・オーバーロードの問題が生じたり、他の教科との関係性の整理も必要なため、特定の教科を学習領域　（learning areas）という形で再編するような事例もある。

⑤プロジェクト型学習（Project-based learning:PBL）

生徒が一定の課題に取り組むＰＢＬの場合にも、複雑な課題に取り組むために、様々な知識を活用することが求められる。そのため、カリキュラムにＰＢＬを採り入れることも、教科横断的な学習の促進につながる。なお、一般にＰＢＬというと、指導方法の穂とつとして理解されがちであるが、ここでは、カリキュラム・デザインに対するアプローチとして考えられている。

資料

1．「主体的・対話的で深い学び」の授業実践の学習指導案（一部）

宮崎県教育庁　高校教育課　　資質・能力育成研究会

授業研究部門		評価問題研究部門
国　語	家　庭	国　語
地歴（日・世・地）・公民	情　報	地歴（日・世・地）・公民
数　学	農　業	数学
理科（物理・化学・生物）	工　業	理科（物理・化学・生物）
保健体育	商　業	外国語（英語）
芸術（音楽・美術・書道）	水　産	
外国語（英語）	福　祉	

○授業研究部門は、公開授業を行った各パイロット教員の学習指導案や授業プリント及び授業レポート等を、評価問題研究部門は評価問題を掲載しています。

パイロット教員の学習指導案と授業レポートは、「宮崎県教育情報通信ネットワーク（教育ネットひむか）」のホームページに掲載している。ここでは、学習指導案の一部を掲載した。

2．育てたい生徒像を踏まえた校内授業研修（「高鍋高校授業研究レポート」の一部）

高鍋高校授業研究レポート

高鍋高校では、育てたい生徒像を踏まえ校内授業研修を実施している。ここでは、授業研究レポートの一部を掲載した。

１．「主体的・対話的で深い学び」の授業実践の学習指導案（一部）

国語科 学習指導案	
単元名	時候・天文の季語をテーマにして季節のエッセイを書く（言語文化）
単元の目標 （身に付けさせたい力）	① 知識及び技能 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し，それらの文化的背景について理解を深め，文章の中で使うことを通して，語感を磨き，語彙を豊かにすること。【（１）言葉の特徴や使い方に関する事項ウ】 ② 思考力・判断力・表現力等 自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にすること。【Ａ書くこと（１）ア】

具体的な評価規準		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
我が国の言語文化に特徴的な語句である季語について理解を深め，語彙や語感を豊かにすることが出来ている。	自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，集めた材料のよさや味わいを吟味して，表現したいことを明確にして書くことが出来ている。	『徒然草』『枕草子』等の作品を踏まえて，季節についての視点を増やし，自分の体験や思いの中から季語と関わる題材を吟味し，書くことを通して，季語について理解を深め語彙や語感を豊かにしようとしている。

単元計画

次	時	評価規準と評価方法	学習活動
一	1	【評価規準】 ・古典作品における筆者の主張に触れることによって、見通しを持って自らの語感を磨き語彙を豊かにしようとしている。（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】 記述の確認	①『徒然草』の「花は盛りに」の本文と現代語訳のプリントを読み，内容を把握する。 ②『枕草子』第一段の本文と現代語訳のプリントを読み，内容を把握する。 ③「秋」に関わる言葉を挙げる。
二	2 3	【評価規準】 ・様々な季語について理解を深め，語彙や語感を豊かに出来ている。（知識・技能） 【評価方法】 ・記述の確認	④『古典歳時記』（角川選書）の一部を資料プリントとして配布し，「季語をテーマにして季節のエッセイを書く」という見通しを持つ。 ⑤「季語集」や「歳時記」を使って，紹介したいと思う季語を探し，グループで選んだものを共有する。 ⑥挙げられた季語の中からエッセイを書く際にテーマにしたい季語を選ぶ。
三	4	【評価規準】 ・自分の知識や体験の中から適切な題材を決め，表現したいことを明確にして書いている。（思考・判断・表現） 【評価方法】 ・記述の確認	⑦選んだ季語をもとにして，季節のエッセイを書く。
四	5	【評価規準】 ・季語について理解を深め語彙や語感を豊かにしようとしている。（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】 ・記述の確認	⑧グループで互いのエッセイを読み合い，総合的に判断して代表のものを決める。 ⑨グループごとに，代表としたエッセイを発表する。 ⑩学習活動を通して，季語について考えたこと，気づいたことをまとめる。

数学科　学習指導案	
単元名	数列　「数学Ｂ※現行」(数学Ｂ※新)
単元の目標 （単元で育成する資質・能力）	数列について，数学的活動を通して，その有用性を認識するとともに，次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア　次のような知識及び技能を身に付けること。 （ア）等差数列と等比数列について理解し，それらの一般項や和を求めること。 （イ）いろいろな数列の一般項や和を求める方法について理解すること。 （ウ）漸化式について理解し，事象の変化を漸化式で表したり，簡単な漸化式で表された数列の一般項を求めたりすること。 （エ）数学的帰納法について理解すること。 イ　次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。 （ア）事象から離散的な変化を見いだし，それらの変化の規則性を数学的に表現し考察すること。 （イ）事象の再帰的な関係に着目し，日常の事象や社会の事象などを数学的に捉え，数列の考えを問題解決に活用すること。 （ウ）自然数の性質などを見いだし，それらを数学的帰納法を用いて証明するとともに，他の証明方法と比較し多面的に考察すること。

具体的な評価規準		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・等差数列と等比数列について理解し，それらの一般項や和を求めることができる。 ・いろいろな数列の一般項や和を求めることができる。 ・漸化式について理解し，事象の変化を漸化式で表したり，簡単な漸化式で表された数列の一般項を求めたりすることができる。	・事象から離散的な変化を見いだし，それらの変化の規則性を数学的に表現し考察することができる。 ・事象の再帰的な関係に着目し，日常の事象や社会の事象などを数学的に捉え，数列の考えを問題解決に活用することができる。 ・自然数の性質などを見いだし，それらを数学的帰納法を用いて証明するとともに，他の証明方法と比較し多面的に考察することができる。	・主体的に知識を身につけ、それを活用しようとしている。 ・数学の概念を拡張させ、関数や微分積分との関係を理解しようとしている。 ・日常の事象や社会の事象を数学的に捉え、数列の考え方を問題解決に活用させることで、その有用性を認識しようとしている。 ・問題解決に当たって対話を積極的に行い、自分の考えを表現し、相手の考えを理解しようとしている。

単元計画			
次	時	評価規準と評価方法	学習活動
一	1 2	【評価規準】等差数列や等比数列、和の公式等を理解し、一般項や和を求めることができる。（知識・技能） 【評価方法】記述の点検	等差数列や等比数列の一般項および和、記号Σを用いて表された数列の和の公式を理解し、それを用いて一般項や和を求める。
二	3 4 5	【評価規準】和の性質を理解し、差分の考え方を用いて数列の考察することができる。（思考力・判断力・表現力）階差数列を用いた一般項の導出や、与えられた和から一般項の導出ができる。（知識・技能） 【評価方法】行動の観察、記述の観察	数列の和について理解し、階差数列の考え方を用いて一般項を求める。
三	6 7	【評価規準】様々な数列の特徴を理解し、それに応じた方法で数列の和を求めることができる。（思考力・判断力・表現力） 【評価方法】記述の確認	部分分数分解などの方法を用いて、数列の和を求める。
四	8 9	【評価規準】これまで学んだ数列の一般項や和の求め方を活用して、群数列における第n群の初項や和などを求めることができる。（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】行動の確認、記述の確認	対話をしながら群数列における第n群の初項や和などを求める。
五	10 11	【評価規準】数列を漸化式で表すことの意義やその特徴を理解することができる。（思考力・判断力・表現力）漸化式の特徴を判断して一般項を求めることができる。（知識・技能） 【評価規準】行動の確認	漸化式で数列の特徴を把握し、一般項を求める。
六	12 13	【評価規準】数学的帰納法の考え方を理解し、与えられた命題を証明することができる。（思考力・判断力・表現力）証明した命題について他の証明法を用いて示し、違いを考察することができる。（主体的に学習に取り組む態度） 【評価規準】行動の分析、記述の分析	簡単な命題を、数学的帰納法を用いて証明し、その意味を理解する。また、同じ命題を他の証明法を用いて示し、比較をする。
七	14 15 16	【評価規準】発展的な問題や社会の事象に関する問題を、対話をしながら数列を用いて考えることができる。（主体的に学習に取り組む態度） 【評価規準】行動の分析	様々な演習問題を、生徒同士での対話をしながら解く。

外国語科学習指導案

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ		
実施日	令和２年１０月２３日（金）	実施時間	１１：２５～１２：１５（４校時）
場所	AL 教室	指導者	○○　○○
対象生徒	高校２年生（１６名）	使用教科書	Revised POLESTAR English Communication Ⅱ(数研出版)

外国語科　目　標
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結びつけた統合的な言語活動を通して、情報や考えなど的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
(1)英語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を４技能による実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身につけるようにする。 (2)コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、英語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や聞き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。 (3)英語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

具体的な言語活動			
聞くこと	読むこと	話すこと	書くこと
・「英語落語」について、対話やスピーチ、または実際の演目などから必要な情報を聞き取り、話の展開や話し手の意図を把握する活動。また、聞き取った内容を基に考えをまとめ、話したり書いたりして伝え合う活動。 ＊「必要に応じて、話される速さが調整されたり、別の語句での言い換えを聞いたりしながら」活動を進めるものとします。	・「英語落語」についての説明文から必要な情報を読み取り，文章の展開や書き手の意図を把握する活動。また，読み取った内容を基に考えをまとめ，話したり書いたりして伝え合う活動。 ＊「必要に応じて，別の語句や文での言い換えや，書かれている文章の背景に関する説明などを聞いたり読んだりしながら」活動を進めるものとします。	・「英語落語」について，必要に応じて，使用する語句や文，やり取りの具体的な進め方が示される状況で，情報や考え，気持ちなどを詳しく話して伝え合う活動。（やりとり） ・「英語落語」について，必要に応じて，使用する語句や文，発話例が示されたり，準備のための一定の時間が確保されたりする状 況で，情報や考え，気持ちなどを理由や根拠とともに詳しく話して伝える活動。ま た，発表した内容について，質疑応答をしたり，意見や感想を伝え合ったりする活 動。（発表）	・「英語落語」について，情報や考え，気持ちなどを理由や根拠とともに複数の段落を用いて詳しく書いて伝える活動。また，書いた内容を読み合い，質疑応答をしたり，意見や感想を伝え合ったりする活動。 ・「英語落語」についての説明を聞いたり読んだりして，情報や考え，気持ちなどを理由や根拠とともに複数の段落を用いて詳しく書いて伝える活動。 ＊「必要に応じて，使用する語句や文，文章例が示されたり，準備のための一定の時間が確保されたりする状況で」活動を進めるものとします。

単元名	Lesson　7　Rakugo in English
単元の目標	(1)英語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を４技能による実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身につけるようにする。（知識・技能） (2) 英語落語についての内容理解を深めながら、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、英語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。さらに、英語を使うことで広がる自分の将来の可能性について意見を書いたり話したりすることで伝えるようにする。(思考・判断・表現) (3)桂かい枝さんの活動や、英語落語の特徴への理解を通して、海外における日本文化について考えを深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。（主体的に学習に取り組む態度）

具体的な評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・英語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解している。 ・英語の音声や語彙、表現、文法の知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる。	・音読活動、またはペア活動を通して、本文の内容理解を深め、さらに実際のコミュニケーションにおいて、内容を的確に理解し、適切に表現することができる。	・音読活動やペア活動において積極的かつ協力的に学びを深めようとしている。また、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとしている。

単元計画

次	時	評価基準と評価方法	学習活動
A	1	【評価基準】本文全体を読み、概要や要点を的確に理解している。（思考・判断・表現） 【評価方法】行動の観察・WPM 計測	英語落語の導入活動に取り組み、レッスン全体の本文を読み、WPM 計測を行う。
B	2 3 4 5 6 7 8 9	【評価基準】 ・英語の音声や語彙、表現、文法などを理解し、活用できる。（知識・技能） ・教科書の内容について、内容を的確に理解し、要点を自分の言葉でまとめることができる。（思考・判断・表現） ・小噺の内容を正しく聞き取り、面白さを味わう。さらに、理解した内容をクラスメイトに正確に伝えることができる。（思考・判断・表現） ・ペアでの音読練習や小噺の発表を通して、自分の発音や表現力を高めようとする。また、積極的かつ協力的に活動に参加している。（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】行動の観察・ﾜｰｸｼｰﾄ記述の確認	【予習】 各パートの単語や表現を調べておき、内容理解問題を解き、答え合わせをしておく。また、音声データを使って、音読をしておく。 【授業】 各パートの重要表現や段落構成を理解しながら本文を読む。 英語の音声の特徴を理解した上で、正しく発音できるように、また、意味を意識しながら音読活動を行う。 本文の概要や、要点を質問し合い、内容理解を深める。 小噺を鑑賞し、概要や要点を捉え、聞いた内容をリフレーズする。また、その内容をクラスメイトと口頭で確認する。
C	10 (11) 12	【評価基準】 ・小噺の発表を通して、英語の音声や語彙、表現、文法の知識を、聞くこと、話すことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる。(知識・技能)	【予習】 小噺を各自で練習し、発表できるようにしておく。 【授業】 小噺をグループで練習し、発表動画を撮影する。 発表者は観客を笑わせる（内容を理解してもらう）ことに重きを置き、そ

		・小噺の概要・要点を的確に理解し、その内容を発表者に口頭で確認することができる。（思考・判断・表現） ・小噺の発表に挑戦し、観客を笑わせるために、自主的・自律的に練習しようとする。（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】行動の観察・ﾜｰｸｼｰﾄ記述の確認	のために何が大切かを自分で考えて練習する。 撮影した小噺を鑑賞し、発表者は概要・要点について英語で質問し、内容理解を促す。 鑑賞者は概要・要点を的確に理解し、その内容を発表者に口頭で確認する。 発表を相互評価する。 活動の感想や、英語でチャレンジすることで広がる将来の可能性を、理由や根拠とともに英語で書くことで振り返る。

本時の学習指導案

小単元 および 本時の位置	Lesson 7　Rakugo in English	本時の目標	・友人の再現した小噺を聞いて、概要・要点を理解し、互いに評価し合う中で、さらなる英語力向上につなげようとする。 ・英語でチャレンジすることの素晴らしさと可能性を感じ、自分の生き方や将来の夢に加味することができる。
生徒の実態 及び 指 導 観	本校は１学年１クラスで構成されており、５年生（高校２年生）は、明るく前向きな生徒が多く、授業中の学習態度や教師からの呼びかけに対しての反応もよい。英語に苦手意識を持つ生徒もおり、それぞれの個性を生かした授業構成が求められることから、学びのペースやニーズに応じて、学年を２クラスに分けて授業を展開している。寮生活で２４時間寝食を共にしている本校の利点を生かし、ペア活動に重きを置いている。今年度は彼らの「聞く力」を重点的に鍛え、アウトプットに繋がるよう、授業を組み立てている。本単元では、「落語というエンターテイメントを英語で楽しむ」ために彼らの聞く力の伸長にフォーカスを当てつつ、桂かい枝さんの海外での挑戦を踏まえ、英語で小噺に挑戦する中で、英語でのアウトプットや、コミュニケーションにも自信を持たせたい。さらに１１/7(土)の English Day（宮崎大学の留学生と交流し、GIAHS について理解を深める校内行事）に向けて、英語学習へのモチベーションを高めることも狙いとしている。		

観点別評価	A	知識・技能	積極的に知識や技能を活用する言語活動に取り組んでいるか。
	B	思考力・判断力・表現力	情報や考えなどを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝えあっているか。
	C	主体的な学習態度	主体的にｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝを図ろうとして、活動に積極的かつ協力的に参加しているか。

指　導　過　程

指導過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点・方法
導入 （５分）	１ Greeting 2 Goal Check	１本時の目標、活動内容を確認する。 2 本時の目標を確認する。	英語で説明しながら、全体で授業の流れを確認する。	A 教師の指示を聞いて内容を理解しているか
鑑賞活動 （２８分）	１ Introduction （３分） 2 Watching Rakugo （２５分）	活動の流れを確認する 以下の通りにペアを組み、互いの演目を鑑賞し、評価する。 1st round　A-B　C-D（８分） 2nd round　A-C　B-D（８分） 3rd round　A-D　B-C（８分）	発音はもちろん、声量、目線、間の取り方、適切な道具の使用など、噺家の技術が評価のポイントになっていることを可視化して強調する。 評価だけではなく、内容の確認や、鑑賞した感想を英語で伝えることが大切であることを伝える。	A 教師の指示を聞いて内容を理解しているか。 B 導入で確認したポイントに基づいて評価できたか。 AB 概要・要点を理解し、自分の言葉で相手に伝えられたか。

				また、相手の質問を聞いて適切に応答できているか。
フィードバック（１５分）	1 Sharing good performances（７分） 2 Self evaluation（８分）	①数名のパフォーマンスを全員で鑑賞し、何が優れているのかを共有する。 ②活動全体を振り返り、英作文で感想を書く。次回までの宿題とする。	①導入で確認したポイントと照らし合わせる。 ②かい枝さんの海外チャレンジと生徒の活動の共通点を可視化し、理解を促す。 ③ヒントを出すなど表現をサポートする。	C 良い部分を積極的に見つけ、共有しようとしているか。 B 活動を振り返り、キーワードを用いて適切に表現しようとしているか。 A 学習した単語や表現などを活用しているか。
まとめと次時の連絡（２分）	Notification for the assignment	宿題の内容の確認をする。 次時の予告をする		

地理歴史科（日本史）　学習指導案	
単元名	国民国家と明治維新　　「日本史Ｂ※現行」（歴史総合※新）
単元の目標 （単元で育成する資質・能力）	①　列強の進出と植民地の形成，日清・日露戦争などを基に，列強の帝国主義政策とアジア諸国の変容を理解すること。 ②　帝国主義政策の背景，帝国主義政策がアジア・アフリカに与えた影響などに着目して，主題を設定し，アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり，相互に関連付けたりするなどして，帝国主義政策の特徴，列強間の関係の変容などを多面的・多角的に考察し，表現すること。

具体的な評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・欧米列強の海外進出と植民地の形成について，背景や要因，経過，結果を理解している。 ・日清・日露戦争について，背景や要因，経過，結果を理解している。	・欧米列強の植民地争奪に対する諸地域の対応について考察し，表現している。 ・日露戦争後のアジア・アフリカの動向及び日本の対外姿勢・政策から，日露戦争における勝利の歴史的意味について考察し，表現している。	・知識・技能を率先して身に付けようとしている。 ・資料から自ら情報を探し，活用している。 ・本単元で扱った国や地域以外の動向について関心が高まっている。 ・本単元での学びを通して，次時以降の学習に対する意欲が高まっている。

単元計画

次	時	評価規準と評価方法	学習活動
一	1	【評価規準】 ・知識・技能を率先して身に付けようとしている。 ・欧米列強の海外進出と植民地の形成について，背景や要因，経過，結果を理解している。 【評価方法】行動の観察，記述の点検，記述の分析	・プリントをまとめる。 ・テキストを読む。 ・演習問題に取り組む。
	2	【評価規準】 ・資料から自ら情報を探し，活用している。 ・欧米列強の植民地争奪に対する諸地域の対応について考察し，表現している。 ・本単元で扱った国や地域以外の動向について関心が高まっている。 【評価方法】行動の観察，記述の確認，記述の分析	・問に対する答えを個人で考える。 ・グループで話し合い，考えをまとめる。 ・まとめたことを発表する。 ・授業の感想を書く。
二	3	【評価規準】 ・知識・技能を率先して身に付けようとしている。 ・日清・日露戦争について，背景や要因，経過，結果を理解している。 【評価方法】行動の観察，記述の点検，記述の分析	・プリントをまとめる。 ・教科書を読む。 ・演習問題に取り組む。
	4	【評価規準】 ・資料から自ら情報を探し，活用している。 ・日露戦争後のアジア・アフリカの動向及び日本の対外姿勢・政策から，日露戦争における勝利の歴史的意味について考察し，表現している。 ・本単元で扱った国や地域以外の動向について関心が高まっている。 ・本単元での学びを通して，次時以降の学習に対する意欲が高まっている。 【評価方法】行動の観察，記述の確認，記述の分析	・問に対する答えを個人で考える。 ・グループで話し合い，考えをまとめる。 ・まとめたことを発表する。 ・授業の感想を書く。

宮崎県立○○高等学校
○○　○○

理科　学習指導案	
単元名	酸・塩基と中和「化学基礎」
単元の目標 （単元で育成する資質･能力）	酸と塩基の性質及び中和反応に関与する物質の量的関係について理解するとともに，それらの観察，実験などに関する技能を身につけること。

具体的な内容		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
物質量と化学反応式，化学反応，化学が拓く世界について，次のことを理解するとともに，それらの観察，実験などに関する技能を身に付けている。	物質の変化とその利用について，観察，実験などを通して探究し，物質の変化における規則性や関係性を見いだして表現している。	酸と塩基の性質及び中和反応を通して観察，実験などに関する技能を身につけ，課題に対して解決しようとする態度や，科学的に探究しようとする態度が見られる。

単元計画

次	時	評価基準と評価方法	学習活動
一	1 2 3	【評価基準】物質量と化学反応式，化学反応，化学が拓く世界について，次のことを理解するとともに，それらの観察，実験などに関する技能を身に付けている。 【評価方法】行動の確認	物質量，化学反応式を理解するために物質量と質量，物質量と気体の体積の関係を扱うことで，酸と塩基の性質及び中和反応に関与する物質の量的関係を理解する。
二	4 5	【評価基準】物質の変化とその利用について，観察，実験などを通して探究し，物質の変化における規則性や関係性を見いだして表現している。 【評価方法】行動の確認	中和滴定の実験を行うことで，得られた結果を分析して解釈し，話し合いやレポートなどで表現させることで中和反応に関与する物質の量的関係を確認する。
三	6	【評価基準】酸と塩基の性質及び中和反応を通して観察，実験などに関する技能を身につけ，課題に対して解決しようとする態度や，科学的に探究しようとする態度が見られる。 【評価方法】記述の確認及び行動の確認	酸と塩基の性質及び中和反応に関与する物質の量的関係を理解し，実験から得られた結果を表現することで日常生活や社会をさせている科学技術との結びつきを理解確認する。

第１学年　保健体育科学習指導案

令和２年10月 １日 木曜日
第１学年〇級（男子20名、女子20名）
場所　〇〇〇高等学校体育館
指導者　〇〇　〇〇

１　単元名　体つくり運動（実生活に生かす運動の計画）

２　単元の目標

⑴　体つくり運動を通して、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、運動を継続する意義、体の構造、運動の原則などを理解するとともに、健康の保持増進や体力の向上を目指し、目的に適した運動の計画を立てて取り組むことができるようにする。（知識及び運動）

ア　体ほぐしの運動では、手軽な運動を行い、心と体は互いに影響し変化することや心身の状態に気付き、仲間と自主的に関わり合うことができるようにする。

イ　実生活に生かす運動の計画では、ねらいに応じて、健康の保持増進や調和のとれた体力の向上を図るための運動の計画を立て取り組むことができるようにする。

⑵　自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。（思考力、判断力、表現力等）

⑶　体つくり運動に自主的に取り組むとともに、互いに助け合い教え合おうとすること、一人一人の違いに応じた動きなどを大切にしようとすること、話合いに貢献しようとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。（学びに向かう力、人間性等）

３　運動の一般的特性

体つくり運動は、体ほぐしの運動と実生活に生かす運動の計画で構成され、自他の心と体に向き合って、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、心と体をほぐしたり、体の動きを高める方法を学んだりすることができる領域である。

高等学校では、これまでの学習を踏まえて「体を動かす楽しさや心地よさを味わい、自己の体力や生活に応じた継続的な運動の計画を立て、実生活に役立てること」などが求められる。

したがって入学年次では、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、運動を継続する意義、体の構造、運動の原則などを理解するとともに、健康の保持増進や体力の向上を目指し、目的に適した運動の計画を立て取り組むことができるようにすることが求められる。

４　生徒の実態

⑴　運動に触れる楽しさの体験状況

普通科第１学年１年40名（男子20名、女子20名）で、運動部活動に加入している生徒が29

名、事前調査では「体を動かすことが好きですか」の問いに対して 26 名が大変好き・好きと答え、「運動をすると心が軽くなりますか」の問いに対しても 32 名が軽くなると感じており、運動に触れる楽しさを比較的感じられている生徒の割合が多かった。本領域については、他学年で実施した授業後の調査で、「楽しく学べた」と回答する生徒が大半だった。これは他の領域と比べても自分自身の健康課題に合わせた運動計画を立てる過程や、仲間と協働していくことが他の領域よりも充実していることによるものと考えられる。少数意見として、思い切り活動ができないと物足りなく思う生徒もいる状況である。

⑵　「知識及び運動」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の習得状況

本校は文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定と、県のカリキュラム・マネジメント研究の指定も受けていることから保健体育科のみならず、全ての教科で多面的・総合評価の実践研究を行い、「(生徒の)Society5.0 を生き抜く力の育成と学力向上」を目指した教育活動を行っている。しかし、今年度はコロナ感染拡大による休校や新しい生活様式のなかで授業を展開していることから、３つの柱の育成が十分に図れているとは言えない状況もみられる。

「知識及び運動」においては、中学校までの学習内容の定着を図るために、体の動きを高める運動を中心に学び直しを行い、体の構造や運動の原則についても学習を進めてきた。体ほぐしの運動は仲間と自主的に関わることの重要性について学び、「リズムジャンプ」を取り入れてビートの強い音楽に合わせて様々なジャンプを踏む運動で脳と身体に刺激を加えながらも心と体は互いに影響し、変化することの気付きを得る活動を行った。

「思考力、判断力、表現力等」においては、本校独自の準備運動「パワーアップ体操」を通して偏ることなく調和のとれた運動をすることの重要性は理解しているようであるが、正しく行うために知識を活用し、応用して運動効果を高めようとする力までは培われていない。探究的な学習を各教科で横断的に進めていることから、今後教科内でも課題発見力や解決に向けて主体的に取り組む姿を高める指導の必要性を感じている。

「学びに向かう力、人間性等」においては、「話し合いに貢献しようとする」姿も少しずつ力をつけている様にみられるが、学習指導要領に示された「共生、責任、健康、安全」など指導事項へのコロナ渦での育成の工夫や、個別への指導は今後も充実していく必要性を感じている。

⑶　体力の状況

事前アンケートでは「体力は必要だと思いますか」の問いに対して「とても必要」、「必要だと思う」と全員が答え、重要性は認識しているようである。新体力テストもコロナ感染拡大予防の観点から今年度は実施しないこととなったため、昨年度の数値を参考に比較したところ、男子は「握力」「長座前体屈」で、女子は「50M 走」で県平均を下回った他は平均を上回る結果となった。

新体力テストの結果

	男子				女子			
段階	A	B	C	D	A	B	C	D
人数	1	6	8	3	3	9	8	0

項目別結果一覧表（平均）　●…県平均より上　▲…県平均以下　※参考 R1 県平均

項目		男子	女子	項目		男子	女子
握力	本クラス	▲34.0	●28.4	シャトルラン	本クラス	●91.2	●60.5
	R1 県平均	38.1	26.0		R1 県平均	91.1	53,3
上体起こし	本クラス	●29.6	●25.2	５０M走	本クラス	●7.7	▲8.9
	R1 県平均	29.0	22.8		R1 県平均	7.4	8.8
長座体前屈	本クラス	▲43.2	●52.0	立ち幅とび	本クラス	●225	●181
	R1 県平均	49.9	48.5		R1 県平均	223	175
反復横とび	本クラス	●58	●50.3	ハンドボール投げ	本クラス	●26.1	●15.7
	R1 県平均	57.0	48.7		R1 県平均	26.0	14.5

５　学習を進めるに当たって

本領域は健康の保持増進や体力の基礎要素やその高め方、及び運動する意欲の向上を図る学習となっている。カリキュラム・マネジメントの視点から体育理論では「体の動き」「工夫された動き」の学習で体の構造について学び、保健においては、第１単元で「健康」についての知識を深めているため、自らの身体や体力を知り、自己に合った運動の計画を学ぶには最適な領域だと考える。

しかし、生徒の実態として体ほぐしの運動では様々な運動を積極的に楽しく行えてはいるが、生徒自身が心と体が互いに影響し変化することや、運動効果を実感する意識が低いことから、心身に目を向け意識を引き出す等の指導の工夫が必要だと感じている。また、実生活に生かす運動の計画を立てる際には新体力テストの結果から測定項目をそのまま自身の運動課題に設定してしまったり、生活習慣の改善も含めた課題設定までの考えには至っていない生徒も見られる。

そこで学習した知識を広げ、仲間との関わりのなかで多面的に生徒自らの課題を見つけ、その課題を解決していく探究的な学習を取り入れる。本県で研究を進めてきた体つくり運動実践事例集「ひなたプログラム」を ICT 機器に取り入れ、2～3 時間目の授業でグループワークによって中学校で学習した体の動きを高める運動の学び直しを行う。更に「ひなたプログラム」で学習したことを基に発展して 4 つの運動(体の柔らかさ・巧みな動き・力強い動き・動きを持続する)を幅広く生徒自身が調べ、ICT 機器で実際に調べた運動を動画撮影し、授業時にクラス全員分の視聴できるようにしていきたい。5 時間目からの実生活に生かす運動の計画でプログラムを作成する際に動画撮影した運動を視聴し、活用しながら自分の課題に適した運動を選択し、仲間と意見交換をすることでより一層学びが深まるようにする。また、仲間にアドバイスをする際のポイント（全面性・意識性・個別性・漸進性・反復性）を明確にできるように学習カードを工夫し、「～だったから～するといいのでは？」をキーワードにして具体的にアドバイスができる対話の指導

を行い、深い学びに向かう力を身に付けさせたい。10 時間目のまとめで発表会を行う際も根拠を持って作成した運動プログラムを説明できるように発表用カードを工夫し、表現力を高められるように指導する。

以上のような課題の解決に向けた探究的な機会を通して、運動の計画を立てるだけではなく、日常化するために思考を働かせ、主体的に運動に親しめるように生徒を導いていきたい。

６　単元の評価規準（○中学第３学年　●高校入学年次　◎共通）

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
全ての単元の評価規準	○定期的・計画的に運動を継続することは、心身の健康、健康や体力の保持増進につながる意義があることを言ったり書き出したりしている。 ◎運動を安全に行うには、関節の負荷がかかりすぎないようにすることや軽い運動から始めるなど、徐々に筋肉を温めてから行うことを言ったり書き出したりしている。 ●運動を計画して行う際は、どのようなねらいをもつ運動か、偏りがないか、自分に合っているかなどの運動の原則があることを言ったり書き出したりしている。 ●実生活で運動を継続するには、行いやすいこと、無理のない計画であることなどが大切であることを言ったり書き出したりしている。	●ねらいや体力の程度を踏まえ、自己や仲間の課題に応じた強度、時間、回数、頻度を設定している。 ◎健康や安全を確保するために、体力や体調に応じた運動の計画等について振り返ることができている。 ●課題を解決するために仲間と話し合う場面で、合意形成するための関わり方を見付け、仲間に伝えている。 ○体力の程度や性別等の違いに配慮して、仲間とともに体つくり運動を楽しむための活動の方法や修正の仕方を見付けている。 ●体つくり運動の学習成果を踏まえて、実生活で継続しやすい運動例や運動の組み合わせの例を見付けている。	●体つくり運動の学習に自主的に取り組もうとする。 ○仲間に課題を伝え合うなど、互いに助け合い教え合おうとしている。 ●一人一人の違いに応じた動きや交流、発表の仕方などを大切にしようとしている。 ●自己や仲間の課題解決に向けた話し合いに貢献しようとしている。 ○健康・安全を確保しようとしている。

単元の評価規準	①定期的・計画的に運動を継続することは、心身の健康、健康や体力の保持増進につながる意義があることを言ったり書き出したりしている。 ②運動を安全に行うには、関節の負荷がかかりすぎないようにすることや軽い運動から始めるなど、徐々に筋肉を温めてから行うことを言ったり書き出したりしている。 ③運動を計画して行う際は、どのようなねらいをもつ運動か、偏りがないか、自分に合っているかなどの運動の原則があることを言ったり書き出したりしている。 ④実生活で運動を継続するには、行いやすいこと、無理のない計画であることなどが大切であることを言ったり書き出したりしている。	①ねらいや体力の程度を踏まえ、自己や仲間の課題に応じた強度、時間、回数、頻度を設定している。 ②健康や安全を確保するために、体力や体調に応じた運動の計画等について振り返ることができている。 ③課題を解決するために仲間と話し合う場面で、合意形成するための関わり方を見付け、仲間に伝えている。 ④体つくり運動の学習成果を踏まえて、実生活で継続しやすい運動例や運動の組み合わせの例を見付けている。	①体つくり運動の学習に自主的に取り組もうとする。 ②自己や仲間の課題解決に向けた話し合いに貢献しようとしている。

8　本時の学習（8／10 時間）

（１）　本時の目標

○　課題を解決するために仲間と話し合う場面で、合意形成するための関わり方を見付け、仲間に伝えることができるようにする。　（思考力、判断力、表現力等）

（２）　本時の評価項目

○　課題を解決するために仲間と話し合う場面で、合意形成するための関わり方を見付け、仲間に伝えようとしている。　（思考・判断・表現）

9　学習指導過程

	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	○：評価項目 （評価方法） 【Ａの例】	「努力を要する」状況と判断される生徒への手立て
	1　集合、整列、挨拶、健康観察	・体調不良者はいないか確認を行う。		

	2　本時のねらい、学習の流れを確認する。			
	運動計画を完成させるために、習得した知識を基に仲間と話し合いながら合意形成するための関わり方を見付け、仲間に伝えることができるように工夫しよう！			
	3　体ほぐしの運動をする ・ストレッチを行う ・リズムジャンプを行う 発展的な内容を仲間と考え、実践する。 4　実生活に生かす運動の計画を行う。 ・評価の確認をする。 ・前時までの進捗状況を確認し、各グループでの新たな課題を見付ける。 ・タブレット端末を活用し情報収集や実際に撮影しながら多面的に修正･見直しを行う。 ・動画･運動計画を他のグループと見せ合い、アドバイスをもらい情報収集し、グループの運動計画を修正し、まとめる。 ・グループ内での振り返りと次時の課題を確認する	・音楽に合わせて心が弾む雰囲気を持たせる。 ・仲間と協力して課題達成に取り組ませる。 ・ルーブリックを活用して評価項目を再確認させ、指導と評価の一体化を図る。 ・回数や強度、運動の選択が適切かを確認させながら取り組ませる。 ・タブレット端末を活用して修正、見直しを行わせる。 ・巡視しながら課題に沿った計画が立てられているか、どの部分が高まっているのか等の問いかけを行う。 ・現状を整理し、今後の見通しを持たせる。	○ 課題を解決するために仲間と話し合う場面で、合意形成するための関わり方を見付け、仲間に伝えている（観察） 【Ａの例】 合意形成するために仲間の意見を否定せずスムーズな関わり方を見付け、分かりやすく仲間に伝えている。	○グループ活動に関わり課題の見つけ方や仲間への伝え方を助言する。また、生徒が話しやすい雰囲気を作るようにする。 【Ｃの例】 話合いに関わることができない。仲間に伝えることができない。
	5　本時の振り返り 6　健康状態の確認 挨拶、解散	・本時の内容の振り返りを行う。 ・次時の確認		

音楽Ⅰ　学習指導案

指導者　宮崎県立○○高等学校　○○　○○

1　題　　材　「オリジナル CM ソングをつくろう」

2　題材の目標

音楽を形づくっている諸要素を知覚し、それらのはたらきが生み出す特質や雰囲気を感受し、思いや意図を持ってオリジナル CM の旋律を創ることができる。

3　学習指導要領との関連

A表現　（3）創作

ア　創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、自己のイメージをもって創作表現を創意工夫すること。

イ　音素材、音を連ねたり重ねたりしたときの響き、音階や音型などの特徴及び構成上の特徴について、表したいイメージと関わらせて理解すること。

ウ　創意工夫を生かした創作表現をするために必要な、次の技能を身に付けること。

(ｱ)　反復、変化、対照などの手法を活用して音楽をつくる技能

4　題材の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
知　音素材、音を連ねたり重ねたりしたときの響き、音階や音型などの特徴及び構成上の特徴について、表したいイメージと関わらせて理解している。 技　反復、変化、対照などの手法を活用して音楽をつくる技能を身につけている。	思　音楽を形づくっている諸要素の働きを知覚し、それらが生み出す雰囲気や効果を感じながら、自己のイメージに合った創作表現を創意工夫している。	態　タブレットを一人一台用いた創作活動の中で、作品に対するイメージを持ちながらそれを音で表現していく過程に主体的に取り組もうとしている。

5　指導と評価の計画（８時間）

次	時	学習内容・学習活動	知・技	思	態
			〈　〉内は評価方法		
一	1 2	○フリーソフト「ミューズスコア３」を用い、４小節の旋律を創作する。作品を共有する中で明確なイメージのもと創られた作品や、偶発的に創られた作品が存在することを理解する。 ○偶発的に創られた作品の中にも「規則性」や「対照性」などの、生徒のこれまでの知識や経験に基づいた「隠れた意図や思い」があることに気づく。 ○反復、変化、対照について学習する。	評価の場面Ⅰ 知・技 〈ワークシート・タブレット〉		
二	3 4 5 6	○既成の CM ソングを鑑賞する。 ○日向市の魅力を PR する為のテーマを決定し、歌詞や旋律を創作する。 〈創作する際の課題や条件〉 (1) 反復・変化・対照を用いる。 (2) １５秒の CM ソングをつくる。 (3) 歌詞を付ける。 ○中間発表と相互評価を行う。**【本時】** ○周囲の作品や意見を共有する中で、様々なイメージに基づいた創作方法が存在することを学ぶ。 ○練り直しを行う。		評価の場面Ⅱ 思 〈ワークシート・タブレット〉	
三	7 8	○最終的なイメージを基に作品を完成させる。 ○最終発表会を行う。			

6　本時の目標

・音楽を形づくっている諸要素の働きを知覚し、それらが生み出す雰囲気や効果を感じながら、自己のイメージに合った創作表現を創意工夫している。

7　学習指導過程

学習活動及び学習内容	指導上の留意点・評価
1　前時の学習内容を確認する。	○創作する際の課題や条件を確認させる。
2　本時の学習内容を確認する。	○本時の目標を明確にさせる。
「友達のオリジナル CM ソングの特色を探し出そう」	
3　中間発表と相互評価を行う。 ① 中間発表 ① 作品のテーマ ② 創作の経緯 ③ 工夫した点 ④ 気になる点、上手くいかない点 〈発表方法の例〉 (1)「ミューズスコア３」で再生する。 (2) 実際に演奏する。 (3) 全員で歌う。	○反復・変化・対照を視点の一つとして、感じたことや気づいたこと等をワークシートに書かせる。 ○上述の視点から、一番良いと思った作品を一つ選ばせる。 ○仲間の演奏を注意深く聴かせ、様々な創作方法や表現方法があることに気付かせる。 ○創作活動が不得手な生徒でも認められるような雰囲気作りを心がける。 ○演奏が難しい生徒は教師が演奏、若しくは全員で歌わせる。 ☆音楽を形づくっている諸要素の働きを知覚し、それらが生み出す雰囲気や効果を感じながら、自己のイメージに合った創作表現を創意工夫している。 （思考・判断・表現） 【ワークシート・タブレット】
4　一部の作品についてグループで分析する。	○何故多くの支持を得たのかを考えさせる。グループの考えをタブレット上に記入させる。 ○状況に応じて、他の友人の作品についても分析し、より効果的な反復・変化・対照の活用法をグループで考えさせる。
5　本時の学習内容のまとめ、次時の予告を聞く。	○本時の感想や次時の展望を記入させる。

8　生徒の実態に応じた選択学習活動

段階	A　自由創作	B　循環コードによる創作	C　言葉の抑揚による創作	D　リズムによる創作
主な活動	・自由に進めていく。 ・状況に応じて経過音や刺繍音、和音の構成音について学ぶ。	・循環コード（C→G→Ａm→Ｅm→F→C→F→G）に旋律をつけていく。 ・状況に応じて刺繍音や経過音、和音の構成音について学ぶ。【タブレット、キーボード】	・テーマに沿ったキーワード（観光名所や特産品など）をもとに歌詞をつくる。 ・言葉の抑揚に合わせて、歌詞に音を当てはめていく。【タブレット、キーボード】	・テーマに沿ったキーワードをあげる。 ・言葉をつなぎ合わせ、語呂合わせの良い、または心地の良い組み合わせを考える。 ・リズムパターンにキーワードをはめていく。【タブレット、キーボード】

9　本時のルーブリック評価

評価項目	A 十分に達成できている	B 概ね達成できている	C 努力を要する	評価
思考 判断 表現	自己のイメージに合った作品を生み出すために、より効果的な表現方法について様々な知識や諸要素を試行錯誤するなど、創作表現を創意工夫している。	音楽を形づくっている諸要素の働きを知覚し、それらが生み出す雰囲気や効果を感じながら、自己のイメージに合った創作表現を創意工夫している。	自己のイメージに合った創作表現を創意工夫することができない。	
主体的に学習に取り組む態度	構成上の特徴やその効果やよさに基づいて、相互評価をしたり、自身の作品を練り直したりすることができている。	音楽から知覚・感受される曲想についてのよさについて自分なりの言葉で評価をすることができている。	お互いの作品や自身の作品について、どのような視点から評価をすることが妥当なのか判断をすることができていない。	

情報科　学習指導案	
単元名	・問題解決と表現　「社会と情報」
単元の目標 （単元で育成する資質・能力）	・情報を分かりやすく表現し効率的に伝達するために，情報機器や素材を適切に選択し利用する方法を習得させる。 ・情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して問題を解決する方法を習得させる。 ・問題の発見，明確化，分析及び解決の方法を習得させ，問題解決の目的や状況に応じてこれらの方法を適切に選択することの重要性を考えさせる。

具体的な評価規準		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・問題解決で活用できる各種の手法や考え方について理解を深めることができる。 ・プレゼンテーションの意味や意義について理解している。 ・知的財産権や個人情報を保護する目的を理解している。	・発想法の手順に従って，個々のアイディアを関連付けたり分類したりすることがでる。 ・適切な問題設定を行い，注意深く分析し，解決の糸口を見つけることができる。 ・集めた情報を根拠にして，プレゼンテーションに説得力を持たせることができる。	・実習に積極的に取り組むことができる。 ・プレゼンテーションでは質疑応答に積極的に参加する。

単元計画

次	時	評価規準と評価方法	学習活動
一	1 2	【評価規準】　プレゼンテーションの意味や意義について理解し、まとめることができる。 （知識・理解） 【評価方法】行動の観察　記述の点検・確認	①　プレゼンテーションの意味を考え、生徒同士で話し合い、プレゼンテーションの意義を見つけ出す。 ②　マンダラートを作成する。
二	3 4	【評価規準】　発想法の手順に従って，個々のアイディアを関連付けたり分類したりすることができる。（思考・判断・表現） 【評価方法】行動の分析　記述の確認	①　２つのキーワードを組み合わせ、テーマを決める。 ②　目的・調べ方について具体的にまとまる。 （計画書の作成）
三	6 7	【評価規準】　適切な問題設定を行い，注意深く分析し，解決の糸口を見つけることができる。（思考・判断・表現） 【評価方法】行動の観察　記述の確認	①　他者と計画について問題点を挙げる。 ②　計画書（目的・調べ方）の問題点を見つけ、計画書を完成させる。
四	8 9	【評価規準】　実習に積極的に取り組むことができたか。プレゼンテーションの準備を行う。 （主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】行動の観察・確認	①　計画書に基づいてプレゼンテーションの準備をする。 ②　アンケートの作成

五	10	【評価規準】　知的財産権や個人情報を保護する目的を理解している。 （思考・判断・表現） 【評価方法】行動の観察　記述の確認	①　著作権について理解し、作成したスライドに著作権の侵害になる部分がないかを見つけ出す。 ②　引用のルールに基づいてスライドを作成し直す。
六	11	【評価規準】　実習に積極的に取り組むことができたか。（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】行動の分析　記述の点検	①　プレゼンテーションのリハーサルを行い、チェックシートを活用して、改善点を見つけ出す。 ②　他者の発表の問題点を見つけ出す。
七	12	【評価規準】　集めた情報を根拠にして，プレゼンテーションに説得力を持たせることができたる。（思考・判断・表現） プレゼンテーションでは質疑応答に積極的に参加する。（思考・判断・表現） 【評価方法】行動の分析	①　5 分間のプレゼンテーションを行う。 ②　他者の発表の評価をつける。
八	13	【評価規準】　適切な問題設定を行い，注意深く分析し，解決の糸口を見つけることができる。 （思考・判断・表現） 【評価方法】行動の分析　記述の確認・分析	①　評価をもとに、改善点を見つけ出す。 ②　改善点をまとめたレポートを作成する。

家庭科　学習指導案	
単元名	これからの生き方と家族　「家庭総合」（家庭総合）
単元の目標 （単元で育成する資質・能力）	①衣生活を取り巻く課題、日本と世界の衣文化など、被服と人との関わりについて理解を深める。 ②ライフステージの特徴や課題に着目し、身体特性と被服の機能及び着装について理解するとともに、健康と安全、環境に配慮した自己と家族の衣生活の計画・管理に必要な情報の収集・整理ができる。 ③被服材料、被服構成、被服製作、被服衛生及び被服管理について科学的に理解し、衣生活の自立に必要な技能を身につける。 ④主体的に衣生活を営むことができるよう目的や個性に応じた健康で快適、機能的な着装や日本の衣文化の継承･創造について考察し、工夫する。

具体的な評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・衣生活を取り巻く課題、日本と世界の衣文化など、被服と人との関わりについて理解している。 ・ライフステージの特徴や課題に着目し、身体特性と被服の機能及び着装について理解している。 ・被服材料、被服構成、被服製作、被服衛生及び被服管理について科学的に理解している。	・健康と安全、環境に配慮した自己と家族の衣生活の計画・管理に必要な情報の収集・整理ができる。 ・着用目的に応じた健康で快適、機能的な被服の選択と着装の区別ができる。 ・日本の衣文化の継承・創造について考察し、工夫している。	・衣生活において自立しようとする態度を身に付けている。 ・よりよい衣生活の創造について、自らの生活に活かそうと主体的に考え、工夫しようとする実践的な態度を身に付けている。

単元計画

次	時	評価規準と評価方法	学習内容・学習活動
一	1 2	【評価規準】 ミシンの操作を理解している。**（知識）** ミシンの基本的な操作ができる。**（技能）** 【評価方法】行動の観察（ミシンの操作） 作品の確認（基礎縫いの布）	**【被服実習①基礎縫い】** ○ミシンを使って、基本的な操作（直線縫い・返し縫い・角縫い）をする。
	3 4	【評価規準】 袋縫いで布端の処理ができる。**（技能）** 【評価方法】行動の観察（ミシンの操作） 作品の確認（袋縫い）	**【被服実習②エコバッグの製作】** ○布端を処理することの意味と手法（袋縫い）を理解する。 ○バッグの構成を理解した上で、底を適切に縫う。
	5 6	【評価規準】 力が加わる部分を理解し、適切に縫うことができる。**（知識・技能）** バッグを使用する場面を想像し、バッグを活用しやすいようにしている。 **（思考力・判断力・表現力）** 【評価方法】行動の観察（ミシンの操作） 作品の確認（エコバッグの仕上がり）	**【被服実習③エコバッグの製作】** ○力が加わる部分を理解し、適切な縫い方で持ち手をつける。 ○バッグを使用する場面を想像し、バッグのアレンジを考える。

二	7	【評価規準】 被服の機能を理解している。**(知識)** TPO に合わせた被服を選択し、理由を説明できる。**(思考力・判断力・表現力)** 【評価方法】記述の確認（提出プリント）	**【人と被服の関わり、被服の機能について学習する】** ○日常の活動場面に応じた被服を題材に、着用目的を考え、被服の機能を理解する。 ○被服の機能について理解し、TPO に合わせた被服を選択する。 **(振り返りの視点①：デザイン)**
三	8 9	【評価規準】 立体構成と平面構成の特徴を理解している。**(知識)** 各ライフステージにおける被服の特徴をまとめ、発表する。**(思考力・判断力・表現力)** 【評価方法】記述の確認（提出プリント） 行動の観察（班活動時の取り組みの様子）	**【被服の構造とライフステージに応じた被服について学習する】** ○浴衣と洋服をみて、立体構成と平面構成の違いを理解する。 ○各ライフステージの特徴を理解し、グループごとに被服の特徴をまとめる。 ○他のグループの意見を聞き、理解を深める。 **(振り返りの視点②：構造)**
四	10 11	【評価規準】 布の構造を理解し、適切に分類している。**(思考力・判断力・表現力)** 天然繊維と化学繊維の特徴を理解している。**(知識)** 【評価方法】記述の確認（提出プリント） 行動の記録（布の分類作業への取り組み）	**【被服材料の種類と特徴について、表にまとめる】** ○布の構造をもとに分類する。 （織物・編物・不織布） ○綿とポリエステルの布を触って違いを実感する。 ○天然繊維と化学繊維の特徴を表にまとめる。 **(振り返りの視点③：材料)**
五	12 13	【評価規準】 洗濯実験の意図を理解し、積極的に取り組んでいる。**(思考力・判断力・表現力)** 界面活性剤の働きを理解し、まとめている。**(思考力・判断力・表現力)** 【評価方法】　記述の確認（提出プリント） 行動の観察（実験時の様子）	**【洗濯実験を行い洗濯のしくみを学習する】** ○洗濯実験を行い、界面活性剤の働きを理解する。（浸透作用、乳化･分散作用、再付着防止作用）　※グループ学習 ○洗濯（洗剤の量、水温、洗濯物の量）に関するグラフの読み取りによって主体的に理解を深める。※個人学習 **(振り返りの視点④：管理)**
六	14 15 本 時	【評価規準】 品質表示、取扱い絵表示の意味を理解している。**(知識)** 場面や目的に応じた被服を選ぶ際に、状況を考えて、大切にしたい観点を見いだしている。**(主体的に学習に取り組む態度)** 【評価方法】記述の確認（提出プリント） 行動の観察（発表の態度･内容）	**【既製服の表示を学習する】** ○品質表示、取扱い絵表示の意味をプリントにまとめる。 **【目的に応じた被服の選択について学習する】** ○受験や入社式、入学式の場面を想定し、デザインはほぼ同じ 4 枚の白いシャツから自分の目的に応じたものを選ぶ。その際に、被服材料、被服管理からの視点も含めて選ぶ。 **(振り返りの視点⑤：性能)** ○既習の知識と関連づけて、選んだ理由を説明する。

七	16	【評価規準】 　学んだ知識を活かし、実生活で活用しやすいオリジナルエコバッグをデザインし、発表する。**（思考力・判断力・表現力）** 【評価方法】 記述の確認（提出プリント） 行動の確認（オリジナルエコバッグの発表）	**【オリジナルエコバッグを考えることをとおして望ましい衣生活について振り返る】** ○本単元で学んだ振り返りの視点①～⑤を踏まえ、製作したエコバッグの改善点を考える。 ○理想のオリジナルエコバッグのプレゼンを行う。 ○振り返りシートでこれまでの学習を振り返り、これからの望ましい衣生活について自分なりの考えをまとめて記入する。

科目名	家庭総合	実施日	令和２年１０月２９日（木）１限
場所	４EF 教室	指導者	○○　○○
対象者	普通科・商業科２年　１４名		
単元名	装う	使用教科書	家庭総合（第一学習社）
本時の主題	目的に応じた被服を適切に選択しよう。（　１５／１６時間　）		
前時の目標	品質表示、取扱い絵表示の意味を理解する。（知識）		
本時の目標	・品質表示、取扱い絵表示をもとに、目的に応じた衣服を選択することができる。 （思考力・判断力・表現力） ・被服を選択する際に重視する観点を見出すことができる。 （主体的に学習に取り組む態度）		
評価方法	記述の確認（提出プリント）　行動の観察（発表の態度・内容）		

過程時間	主な学習活動	評価
導入 ５分	・前時の復習をする。 ・本時の流れと目標を確認し、ゴールイメージを持つ。	
展開１ １５分	・4 枚のほとんど同じデザインのシャツから、１枚自分に適するシャツを選ぶ。 ・品質表示や取扱い絵表示を確認した後に再度考えて自分に適するシャツを選び、理由も記入する。	・記述の確認（提出プリント）
展開２ １５分	・お悩み相談に対する答えを考え、４枚のシャツの中から選んでアドバイスを記入し、発表する。 ・他の人の意見を聞いてみて、参考になった点を記録する。	・行動の観察 （発表態度や取り組みの様子） ・記述の確認（提出プリント）
展開３ まとめ １０分	・被服を選ぶ際には、表示を参考に選ぶこと、表示を確認することの重要性を確認する。 ・本時を振り返り、学んだこと、気づいたことを記入する。	・記述の確認（提出プリント）

「主体的に取り組む態度」の評価規準

１　不十分	２　達成	３　十分達成
被服を選択する際に重視する観点を見出せていない。	表示をもとに、被服を選択する際に重視する観点を見出している。	表示をもとに根拠をもって、被服を選択する際に重視する観点を見出している。

学習指導案			
教科・科目名	工業・情報技術基礎（３単位）　（新学習指導要領科目名：工業情報数理）		
単元名	プログラミングと工業に関する事象の数理処理（ア　アルゴリズムとプログラミング）		
学年・学科	１年　電子情報科		
指導者	○○　○○		
単元の目標 （単元で育成する資質・能力）	プログラミングと工業に関する事象の数理処理について，工業の事象の数理処理をモデル化する視点で捉え，科学的な根拠に基づき情報，数学，物理及び化学の理論と関連付けて考察し，実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して，工業の各分野において情報技術及び情報手段や数理処理を活用する力を身に付けることができるようにする。		
具体的な評価規準			
A：知識及び技能	B：思考力・判断力・表現力等	C：主体的に学習に取り組む態度	
プログラミングと工業に関する事象の数理処理について工業に関する事象の数理処理をモデル化してシミュレーションを行うアルゴリズムを踏まえて理解するとともに，関連する技術を身に付けている。	工業の事象の数理処理のモデル化に着目して，プログラミングと工業に関する事象の数理処理に関する課題を見いだすとともに解決策を考え，科学的な根拠に基づき結果を検証し改善している。	プログラミングと工業に関する事象の数理処理について自ら学び，情報技術の活用に主体的かつ協働的に取り組もうとしている。	

単元計画			
次	時	評価規準と評価方法	学習活動
一	1	【評価基準】　プログラムの基本形式を理解し、データの入出力プログラムを記述している。（A）（C） 【評価方法】行動の観察、プログラムの確認	C 言語の特徴を理解し、printf 文を使って、データの出力方法を習得する。
	2		データ型、変数について理解し、scanf 文を使って、データの入力方法を習得する。
二	3	【評価基準】　プログラムの基礎基本を理解し、主体的かつ協働的にプログラミングを取り組んでいる。（C） 【評価方法】行動の観察、プログラムの確認	様々な指定子や算術演算子の使い方を学び、簡単な計算プログラムを作成する。
	4		
三	5	【評価基準】　選択処理プログラムを理解し、身近な事象の処理プログラムを記述している。（A）（B） 【評価方法】行動の観察、プログラムの確認	if 文を使用した２分岐のプログラムを作成・実行する。
	6		else if 文と switch 文を使用した多分岐のプログラムを作成・実行する。
	7		
四	8	【評価基準】　繰返し処理プログラムを理解し、身近な事象の処理プログラムを記述している。また、選択処理も一緒に活用して、工業に関する事象の数理処理プログラムを記述している。（A）（B） 【評価方法】行動の観察、プログラムの確認	for 文の書式を理解し、繰返し処理を行うプログラムを作成・実行する。
	9		while 文、do～while 文の書式を理解し、繰返し処理を行うプログラムを作成・実行する。
	10		多重ループ処理を理解し、二重ループを用いたプログラムを作成・実行する。
五	11	【評価基準】　一次元配列の概念を理解し、配列を用いて、工業に関する事象の数理処理プログラムを記述している。（A） 【評価方法】行動の観察、プログラムの確認	一次元配列を理解し、最大値と最小値を求めるアルゴリズムを理解し、プログラムを作成・実行する。
	12		並べ替えを行うアルゴリズムを理解し、プログラムを作成・実行する。
	13		データの検索を行うアルゴリズムを理解し、プログラムを作成・実行する。
六	14	【評価基準】　関数を用いたプログラム作成を主体的かつ協働的に取り組んでいる。（C） 【評価方法】行動の観察、プログラムの確認	標準関数と自作関数について理解して、関数を用いたプログラムを作成・実行する。
	15		

学習指導（略）案

教科名 (科目名)	実　施　日　時	令和２年　９月　３０日
	学 年 ・ 学 科	１年　電子情報科（男子 37 名，女子３名）
工業 (情報技術基礎)	実　施　場　所	第１コンピュータ室（総合実習棟）
	指　　導　　者	○○　○○

◆本時（１０／１５）の主たる評価のポイント

A:知識及び技能		B:思考力・判断力・表現力等		C:主体的に学習に取り組む態度	
応	二重ループ処理を活用し、複雑な図形描画のアルゴリズムを理解している。	応	二重ループ処理を活用し、複雑な図形描画のプログラムを適切に作成している。	応	
標	for 文の書式を用いた繰返し処理(二重)プログラムのアルゴリズムを理解している。	標	for 文の書式を用いた繰返し処理(二重)プログラムを適切に作成している。	標	
基	for 文の書式を用いた繰返し処理プログラムのアルゴリズムを理解している。	基	for 文の書式を用いた繰返し処理プログラムを適切に作成している。	基	

※基：基本レベル，標：標準レベル，応：応用レベル

◆本時（１０／１５）の学習指導計画

過程 (時間)	学習活動	指導上の留意点	評価の観点		
			A	B	C
5	・実習の準備をする。 ・振り返り調査の集計結果を見る。	・自分の理解度とクラス全体を比べさせる。また、自分の成長を感じさせる。			
5	・授業プリント１番の問題のプログラムを作成する。	・机間指導して、for 文を理解しているか、確認する。 ・学びあいができているか、確認する。	○		
10	・授業プリント２番の問題のプログラムを作成する。【一斉学習】	・プログラムの入力、説明を聞く、プリントに記述する、の作業を明確に分け、特に説明を聞かせるときは、入力作業を止めさせる。	○		
25	・協働学習を通して、授業プリント３番～４番のプログラムを作成する。 ・応用問題２問のプログラムを作成する。	・机間指導をして、実行結果が正しいか、確認する。 ・学びあいができているか、確認する。		◎	
5	・本時のまとめ	・進度を確認する。			

※主たる評価部分は◎

商業科　学習指導案	
単元名	第９章　商品売買の記帳　　「簿記」
単元の目標 （単元で育成する資質・能力）	①取引の記帳について理論と実務とを関連付けて理解するとともに、関連する技術を身に付けること。 ②取引の記帳法の妥当性と実務における課題を見いだし、科学的な根拠に基づいて課題に対応すること。 ③取引の記帳において自ら学び、適正な会計帳簿の作成に主体的かつ協働的に取り組むこと。

具体的な評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・分記法と３分法による商品売買の記帳ができる。 ・仕入帳、売上帳、商品有高帳を作成することができる。 ・商品売買損益の計算ができる。	・分記法と３分法の違いを理解することができる。 ・仕入帳・売上帳の記帳法を理解することができる。 ・商品有高帳の２種類の記帳法について理解することができる。 ・３分法における商品売買損益の計算を理解し、演習問題に対して判断・表現することができる。	・企業における日常の取引について、資料を、興味・関心をもって読み解き活用しようとしている。 ・問題演習にあたり、友人と積極的に対話を行い、考えを通じた課題解決法を模索し、生徒同士の相互学習を積極的に行おうとしている。

単元計画

次	時	評価規準と評価方法	学習活動
1	1	【評価規準】 これまでに学んだ商品売買の記帳法である分記法と３分法の違いについて理解することができる （思考力・判断力・表現力） 【評価方法】行動の観察・記述の確認	分記法との違いや３分法の特徴である、繰越商品（資産）、仕入（費用）、売上（収益）の３勘定を用いた処理方法について理解し、商品売買取引を記帳する。
2	2	【評価規準】 商品の仕入及び返品と値引など商品売買に関する記帳法を理解し、仕入帳を作成することができる。 （知識・技能）（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】行動の観察・記述の確認	日常の商品仕入れに関する資料を読み、適切な仕訳を行う。仕入戻しや値引、仕入諸掛について、適切な処理方法で仕入帳を記帳し、総仕入高、純仕入高を求める。
	3	【評価規準】 商品の売上及び返品と値引など商品売買に関する記帳法を理解し、売上帳を作成することができる。 （知識・技能）（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】行動の観察・記述の確認	日常の商品売り上げに関する資料を読み、適切な仕訳を行う。売上戻りや値引、発送諸掛について、適切な処理方法で売上帳を記帳し、総売上高、純売上高を求める。
3	4	【評価規準】 先入先出法を用いて、払出単価を計算し、商品有高帳を作成することができる。 （知識・技能）（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】行動の観察・記述の確認	「先に受け入れた単価の分を先に払い出す」ことにして払出単価を決め、商品有高帳の商品受け入れ、払い出しおよび残高の明細を記録する。
	5	【評価規準】 移動平均法を用いて、払出単価を計算し、商品有高帳を作成することができる。 （知識・技能）（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】行動の観察・記述の確認	「仕入れのつど、残高欄の金額と仕入金額を合計し、その合計額を残高数量と仕入数量の合計数で割って、新しい平均単価を計算する」ことにして払出単価を決め、商品有高帳の商品受け入れ、払い出しおよび残高の明細を記録する。
4	6	【評価規準】 ３分法によって記帳している場合の商品売買損益を計算することができる。また、売上帳から売上原価を読み取り、計算することができる。 （知識・技能）（主体的に学習に取り組む態度） 【評価方法】行動の観察・記述の確認	商品有高帳から、１月分の売上原価を読み取り計算する。また、資料を読み取り、１会計期間の純仕入高、純売上高、売上原価、商品売買損益の計算を行う。

宮崎県立○○○高等学校

水産科　学習指導案	
単元名	第５章　食品の安全管理　第２節　安全管理システム「食品管理２」
単元の目標 （単元で育成する資質・能力）	①　知識及び技能 食品の安全管理について理解すること。 ②　思考力・判断力・表現力等 食品の安全管理に関する課題を発見し，衛生管理の方法や安全管理システム，食品添加物に着目して合理的かつ創造的に解決すること。 食品の安全管理について自ら学び，主体的かつ協働的に取り組むこと。

具体的な評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
食品工場における衛生管理の意義や，食品の安全管理に必要な一般的衛生管理の方法についての基礎的な内容を知る。HACCP システム，ISO，食品トレーサビリティシステムについて理解する。	自分の考えをまとめ，グループで意見を共有し，考えを広げたり深めたりしながら，話し合いの内容を判断したり表現したりできる。	食品の安全管理について自ら学び，主体的かつ協働的に取り組むことができる。

単元計画

次	時	評価規準と評価方法	学習活動
一	1 2 3	【評価規準】食品工場における衛生管理の意義や，食品の安全管理に必要な一般的衛生管理の方法についての基礎的な内容を知る。HACCP システム，ISO，食品トレーサビリティシステムについて理解する。 【評価方法】ノート（ワークシート） 発表の内容 考える様子の観察	①　HACCP システムとはどのようなものか，その概要を知る。HACCP システムの歴史について学び，我が国の現状を知る。HACCP システムの特徴を調べ，ワークシートにまとめる。
二	4 5 6 7 8	【評価規準】HACCP プラン作成にともない，危害分析（HA）と重要管理点（CCP）について自分の考えをまとめ，チームで意見を共有し，考えを広げたり深めたりしながら意見をまとめ，発表できる。 【評価方法】ノート（ワークシート） チームでの討論の様子 ホワイトボードの内容 発表内容	②　本校の食品工場を基に，どのように衛生管理を行う必要があるか，考える。一般的衛生管理の方法について，総合実習中の様子から大切なことを学ぶ。危害分析・重要管理点方式（HACCP システム）の概要について学ぶ。 本校の実習製品の製造工程を基に，危害分析（HA）をチームで行う。発見した危害要因を基に，重要管理点（CCP）をチームで考える。 管理基準，改善措置，検証の具体的内容に触れ，本校のマグロ油漬け缶詰製造工程の HACCP プランを完成させる。

三	９ １０ １１ １２	【評価規準】食品の安全管理について自ら学び，主体的かつ協働的に取り組むことができる。 【評価方法】ワークシートの内容 発表内容	③　食品管理システムについて自ら学び，その学習内容をグループ内で共有し，相手の考えを聞く中で，自らの考えを広げたり深めたりしながら，クラスみんなに理解してもらえるように発表できる。

○ ○ 高等学校　海洋科学科（食品管理２）学習指導案			№.1
対象学級	海洋科学科　3年C組 男子　15名　女子10名　計25名	指 導 者	○○　○○
実 施 日	令和2年9月30日（水）3限目	実施場所	情報処理室

1．単元名	第5章　食品の安全管理　第2節　安全管理システム 使用教科書（食品管理２：文部科学省）海文堂
2．単元の目標	食品工場における衛生管理の方法や，食品の安全管理システム，我が国の食品安全管理体制や国際的な標準化の動向，食品添加物について扱い，食品の安全管理について具体的に理解させること。
3．指導観	〔教材観〕 本単元では，食品工場における衛生管理の意義や，食品の安全管理に必要な一般的衛生管理の方法についての基礎的な内容を身につけるよう指導し，学校の実習設備などにおいて衛生管理が行えるようにする。 〔生徒観〕 年度当初より，食品工場で実習を行う際の衛生管理については細かな指導を心がけてきた。そのため生徒それぞれがしっかりと衛生管理の意味を理解し，行動できるようになっている。本単元においては，現在の食品安全マネジメントシステムが，それぞれの企業においてどのように適用されているか興味を持たせたい。
4．指導計画	第５章　食品の安全管理 第２節　安全管理システム 第２　食品安全マネジメントシステム（６時間） １　食品安全マネジメントシステム・・　１時間 ２　ISO について・・・・・・・・・・・　１時間 ３　ISO22000 について・・・・・・・　１時間 ４　ISO22000 の概要・・・・・・・・　３時間（本時５／６）
5．評価の観点	単元の評価規準
A　知識・技能	食品の衛生管理についてその意義や役割を理解することができる。食品工場における衛生管理の意義や，HACCP システム，ISO，食品トレーサビリティシステムについて理解する。
B　思考・判断・表現	衛生管理に関する自分の考えをまとめ，グループで意見を共有し，考えを広げたり深めたりしながら，話し合いの内容を判断したり表現したりできる。周りの意見を聞きながらまとめ，発言することができる。
C　主体的に学習に取り組む態度	食品の安全管理について自ら学び，主体的かつ協働的に取り組むことができる。
6．本時の目標	食品安全マネジメントシステムとして国際的に規定されている ISO9001,ISO22000,HACCP，FSSC22000 についてどのようなシステムか調査し，自分の言葉でまとめることができる。

○ ○　高等学校　海洋科学科（食品管理２）学習指導案					№２
７．本時の学習指導計画					
過程	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点（方法）
導入	5分	始業の挨拶 出席確認 前時の復習 本時の学習内容	服装・姿勢を正す。 元気よく返事をする。 前時の内容を振り返る。 本時の目標と学習内容を確認する。	授業に臨む態度・環境を整えさせる。 準備物等の確認。 食品安全マネジメントシステムとはどのようなものであったか確認する。 全員が目標と内容を確認できたか，観察しながら進める。	取り組む姿勢（C） 本時に対する興味・関心（C）
展開	40分	思考ツール（KWL）作成 食品マネジメントシステムについて，調べたことの確認	グループ内で自分が調べた内容を共有し，確認する。 意見の発表をする際のルール（マナー）について聞く。 グループ内で調べたことをどのようにまとめるか，話し合い意見を出す。 説明があいまいな場合は，インターネット等を使って再度調査する。	意見交換が活発に進むように助言をする。 どんな意見に対しても肯定的に聞くように発表のルール説明をする。 他の人の意見を聞いて，他に分かりやすい説明がないか考えさせる。	グループ活動に積極的に取り組めたか（B） グループの意見をまとめKWLシートに記入できたか（A） 他の人の意見を静かに聞くことができる（C）
まとめ	5分	本時のまとめ 次回の予告 終業の挨拶	本時の学習内容をワークシートで再度確認して，理解を深める。 次回の学習内容を聞く。 服装を正し，挨拶する。	本時の学習内容を再度振り返り，知識の定着を図る。	

○ ○　高等学校　海洋科学科（食品管理２）学習指導案				№.1
対象学級	海洋科学科　３年Ｃ組 男子　15名　女子10名　計25名		指 導 者	○○　○○
実 施 日	令和２年９月30日（水）４限目		実施場所	水産流通実習室

１．単元名	第５章　食品の安全管理　第２節　安全管理システム 使用教科書（食品管理２：文部科学省）海文堂
２．単元の目標	食品工場における衛生管理の方法や，食品の安全管理システム，我が国の食品安全管理体制や国際的な標準化の動向，食品添加物について扱い，食品の安全管理について具体的に理解させること。
３．指導観	〔教材観〕 本単元では，食品工場における衛生管理の意義や，食品の安全管理に必要な一般的衛生管理の方法についての基礎的な内容を身につけるよう指導し，学校の実習設備などにおいて衛生管理が行えるようにする。 〔生徒観〕 年度当初より，食品工場で実習を行う際の衛生管理については細かな指導を心がけてきた。そのため生徒それぞれがしっかりと衛生管理の意味を理解し，行動できるようになっている。本単元においては，現在の食品安全マネジメントシステムが，それぞれの企業においてどのように適用されているか興味を持たせたい。
４．指導計画	第５章　食品の安全管理 第２節　安全管理システム 第２　食品安全マネジメントシステム（６時間） １　食品安全マネジメントシステム・・　１時間 ２　ISO について・・・・・・・・・・・　１時間 ３　ISO22000 について・・・・・・・　１時間 ４　ISO22000 の概要・・・・・・・・　３時間（本時６／６）

５．評価の観点		単元の評価規準
A	知識・技能	食品の衛生管理についてその意義や役割を理解することができる。食品工場における衛生管理の意義や，HACCP システム，ISO，食品トレーサビリティシステムについて理解する。
B	思考・判断・表現	衛生管理に関する自分の考えをまとめ，グループで意見を共有し，考えを広げたり深めたりしながら，話し合いの内容を判断したり表現したりできる。周りの意見を聞きながらまとめ，発言することができる。
C	主体的に学習に取り組む態度	食品の安全管理について自ら学び，主体的かつ協働的に取り組むことができる。
６．本時の目標		食品安全マネジメントシステムとして国際的に規定されている ISO9001,ISO22000,HACCP，FSSC22000 についてどのようなシステムか調査しまとめたものを自分の言葉で発表（説明）できる。

○ ○　高等学校　海洋科学科（食品管理２）学習指導案					№.２
７．本時の学習指導計画					
過程	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点（方法）
導入	5分	始業の挨拶 出席確認 本時の学習内容	服装・姿勢を正す。 元気よく返事をする。 本時の目標と学習内容を確認する。	授業に臨む態度・環境を整えさせる。 準備物等の確認。 全員が目標と内容を確認できたか，観察しながら進める。	取り組む姿勢（C） 本時に対する興味・関心（C）
展開	30分	思考ツール（KWL）を基に，調べた内容をグループで共有する。 調べた内容の発表 質問内容について答えを考える	グループごとに食品安全マネジメントシステムについて調べた内容を確認する。 発表をする際のルール（マナー）について聞く。 グループでまとめた内容を発表（説明）する。 発表（説明）を聞き，質問を考える。	どのように意見交換を進めるか，分かるように説明をする。 意見交換が活発に進むように助言をする。 どんな意見に対しても肯定的に聞くように発表のルール説明をする。 他のグループの発表（説明）を聞いて，質問を考えさせる。	グループ活動に積極的に取り組めたか（B） 他のグループの意見を静かに聞くことができる（C） 自分のグループの意見をみんなに説明することができる（B）
まとめ	15分	本時のまとめ 次回の予告 終業の挨拶	本時の学習内容をワークシートで再度確認して，理解を深める。 次回の学習内容を聞く。 服装を正し，挨拶する。	本時の学習内容を再度振り返り，知識の定着を図る。	本時の内容が理解できたか（A）

○ ○ 高等学校　農業科「農業と環境」　学習指導案			No.1
対象学級	生産流通科　1年 男子4名　女子36名　計40名	指 導 者	教諭　○○　○○
実 施 日	令和2年10月29日（木）3限目	実施場所	生産流通科1年　教室

1．単元名	第3章　農業生産と環境保全の実際 Ⅰ　栽培・飼育のプロジェクト　2　種子・果実を利用する植物の栽培と利用 1　イネ 使用教科書　：　農業と環境（農文協）
2．単元の目標 （単元で育成する資質・能力）	「農業と環境」とプロジェクト学習 ア　農業学習の特質（身近な事例を取り扱う） イ　プロジェクト学習の方法と進め方

3．具体的な評価規準

知識・技術	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
農業学習の特質や、農業と環境に関するプロジェクト学習の意義、及び方法と進め方について理解している。	農業と環境に関する課題を発見し、プロジェクト学習により、科学的な根拠に基づいて創造的に解決する力を身に付けている。	農業と環境について自ら学び、プロジェクト学習に必要な情報収集と分析について、主体的かつ協働的に取り組む態度を身に付けている。

4．単元計画

次	時	評価規準と評価方法	学習活動
一	1 2 3 4	【評価規準】農業学習の特質や、農業と環境に関するプロジェクト学習の意義、及び方法と進め方について理解している。（知識・技術） 【評価方法】行動の観察	プロジェクト学習の導入として、イネの植栽本数の違いから、なぜ？どうして？の疑問を持ち、課題の設定をする。グループごとに調査区を設定し、田植えを行う。 仮説を立てることができる。
二	5 6 7	【評価規準】農業と環境に関する課題を発見し、プロジェクト学習により、科学的な根拠に基づいて創造的に解決する力を身に付けている。（思考力・判断力・表現力） 【評価方法】記述の確認	イネの生育と管理を理解し、水田の特徴や役割を踏まえ、生育調査を行い確認する。 管理・作業や生育状況はできるだけこまかく記録し、いつでも状況を正しく把握できるようにしておく。
三	8 9 10 (本時) 11 12	【評価規準】農業と環境について自ら学び、プロジェクト学習に必要な情報収集と分析について、主体的かつ協働的に取り組む態度を身に付けている。（主体的に学習に取り組む姿勢） 【評価方法】行動の分析	収量調査を行い、草丈、穂数、重量、必要経費など様々な視点から、仮説の検証を行う。 検証方法では、自分の考えをグループの中で伝え、他の意見を取り入れることで結論を導き出したのち、個人の仮説の適否を判断して評価・反省し、次の課題の設定へ発展する。

5．本時の目標	イネの植栽本数の違いによる収量調査結果から、自分の意見をホワイトボードに書きだすことができる。各グループの意見をもとに、全体の意見を比較し、自分の仮説の検証から結論を導き出すことができる。

○ ○ 高等学校　農業科　「農業と環境」　学習指導案					No.2
６．本時の学習指導計画					
過程	時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点（方法）
導入	5分	始業の挨拶 出席確認 前時の復習 本時の学習内容	服装・姿勢を正す 始業前点検を行う。 前時の内容を振り返る 本時の目標と学習内容を確認する。	授業に臨む態度・環境を整えさせる。 準備物等の確認。 収量調査で何を調べたのかを確認する。 全員が目標と内容を確認できたか観察しながら進める。	取り組む姿勢 本時に対する興味・関心
展開	40分	調査データのまとめ グループでの意見の集約 各グループの意見の確認 各自の仮説の検証	個人で、調査データからわかることを見つけ出す。前時、書けなかったことを付け足す。 ホワイトボードに個人の意見を書き込んでいく。 各グループの考えを黒板に張り出し、他のグループの意見を取り入れる。 これまでのデータから、各自で立てた仮説の検証を行い、結論を導き出す。	列ごとに渡すデータを変え、隣の人の意見を気にせず考え、自分の意見をプリントに記入させる。 他人の意見に流されず、自分の考えを書き込むように説明する。 班長に挑戦するように促す。 不足内容があれば補足する。	プリントに記入できているか。 ホワイトボードの他の人の意見をうけ、自分の意見を書き込んでいるか。 他のグループの発表内容をまとめ、プリントに記入できているか。
まとめ	5分	本時のまとめ 次回の予告 終業の挨拶	プリントの授業後点検を行う。 次回の学習内容を聞く。 服装を正し、挨拶する。	本時の学習内容を振り返り知識の定着を図る。	

宮崎県立〇〇高等学校

福祉科 学習指導案	
単元名	介護過程 介護過程の展開の実際
単元の目標 (単元で育成する資質・能力)	①介護過程の実践的展開について理解するとともに、関連する技術を身に付けること。 ②アセスメント、介護計画の立案、実施、評価の介護過程の実践的展開についての課題を発見し、職業人として求められる倫理観を踏まえ科学的根拠に基づいて創造的に解決すること。 ③サービス利用者主体の継続した地域生活を支援するための介護過程の実践的展開について自ら学び、主体的かつ協働的に取り組むこと。

具体的な評価規準

知識・技術	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・介護過程の展開について理解している ・介護過程に関連する技術を身に付けている	・アセスメント、介護計画の立案、実施、評価の介護過程の実践的展開についての課題を発見している ・職業人として求められる倫理観を踏まえ科学的根拠に基づいて創造的に解決しようとしている	サービス利用者主体の継続した地域生活を支援するための介護過程の実践的展開について自ら学び、主体的かつ協働的に取り組もうとしている

単元計画

次	時	評価規準と評価方法	学習活動
一	1	【評価基準】 グループホームや有料老人ホームについて理解している (知識[『社会福祉基礎』『介護福祉基礎』]) アルツハイマー型認知症について理解している(知識〔『こころとからだの理勁『介護実習』〕) 【評価方法】 筆記テスト	【事例学習I】 グループホームにおける認知症高齢者 Aさん(91歳、女性、要介護3) 〇他科目で゛学習した居宅サービスやアルツハイマー型認知症の特徴を振り返る 〇介護実習の綱験から、認矢口症高齢者の特性を理解する
二	2	【評価基準】 グループホームにおける認知症高齢者の事例から必要な情報を収集し、アセスメントシートにまとめることができる (思考・判断・表現) 【評価方法】 記述の分析(介護過程No.1、2の内容)	〇フェイスシート及び情報1又集シートからペアで検討し、介護過程No.1、2に必要な情報をまとめる
三	3 4	【評価基準】 利用者の現在の状態や思いから、生活課題を見いだすことができる (主体的に学習に取り組む態度) 利用者の全体像を把握し、長期目標を達成するために、課題の優先順位を決めることができる (思考・判断・表現) 【評価方法】 行動の観察(ペア活動時の取り組みの様子) 記述の分析(利用者に関する情報)	〇利用者の現在の状態や思いをペアで検討し、まとめる 〇日常生活のそれぞれの場面での課題を考察する 〇利用者主体の生活を継続するため、解決すべき課題に優先順位をつける

四	5 6	【評価規準】 介護計画を立案することができる (主体的に学習に取り組む態度) 【評価方法】 行動の観察(ペア活動時の取り組みの様子) 記述の分析(介護過程No.3)	○短期目標を立てる ○短期目標を達成するため、根拠に基づいて、具体的な援助内容・方法を考察する ○利用者の’む身の状況に配慮し、援助の頻度を考察する
五	7	【評価規準】 実施評価表から、新たな課題を考察することができる　(思考力・判断力・表現力) 【評価方法】 記述の分析(介護過程No.4)	○実施評価表から、介護過程No.4をまとめる ○ペアで検討し、新たな課題を見いだす
六	8	【評価規準】 脳性麻痺について理解している (知諸〔『介護福祉基鐵L『こころとからだの理解』]) 障害支援区分について理解している (知識[『社会福祉基礎』『介護福祉基礎』]) 【評価方法】 筆記テスト	【事例学習Ⅱ】 脳性麻痺のある男性 Dさん(43歳、男性、障害支援区分6) ○他科目で学習した脳性麻痺の特徴を振り返る ○障害者支援施設で介護実習を行った生徒の経験から、障害者の生活について理解する
七	9	【評価規準】 脳性麻痺のある男性の事例から必要な情報を収集し、アセスメントシートにまとめることができる (思考力・判断力・表現力) 【評価方法】 記述の分析(介護過程No.1、2の内容)	○フェイスシート及び情報収集シートから、介護過程No.1、2に必要な情報をまとめる
八	10 11	【評価規準】 利用者の現在の状態や思いから、生活課題を見いだすことができる (主体的に学習に取り組む態度) 利用者の全体像を把握し、長期目標を達成するために、課題の優先順位を決めることができる　(思考力・判断力・表現力) 【評価方法】 記述の分析(利用者に関する情報)	○利用者の現在の状態や思いをまとめる ○日常生活のそれぞれの場面での課題を考察する ○利用者主体の生活を継続するため、解決すべき課題に優先順位をつける
九	12 13	【評価規準】 介護計画を立案することができる (主体的に学習に取り組む態度) 【評価方法】 記述の分析(介護過程No.3)	○短期目標を立てる ○短期目標を達成するため、根拠に基づいて、具体的な援助内容・方法を考察する ○利用者の心身の状況に配慮し、援助の頻度を考察する
十	14	【評価規準】 実施評価表から、新たな課題を考察することができる　(思考力・判断力・表現力) 【評価方法】 記述の分析(介護過程No.4)	○実施評価表から、介護過程No.4をまとめる ○ペアで検討し、新たな課題を見いだす

授業展開計画

科 目 名	介護過程	実施日	今和2年11月17日(火)4限目
場　　所	福祉科2年教室	指導者	教諭　〇〇　〇〇
対 象 者	福祉科2年 21名(男子2名、女子19名)		
単 元 名	介護過程の展開の実際 (全14時間)	使用教科書	介護過程(実教出版株式会社) 介護過程(中央法規株式会社)
本時の主題	課題の明確化(本時4/14時間)		
前時の目標	利用者の現在の状態や思いから、生活課題を見いだすことができる (主体的に学習に取り組む態度)		
本時の目標	長期目標を達成するために、解決すべき課題の優先順位を決めることができる (思考力・判断力・表現力)		
評価方法	行動の観察(ペア活動の様子)、記述の分析(提出プリント)		

過程 時間	主な学習活動	評価
導入 5分	・本時の流れと目標を確認し、ゴールイメージを持つ ・前時にまとめた利用者に関する情報シートを振り返り、A様が日常生活を送る上で、様々な課題があることに気づく	
展開Ⅰ 15分	・長期目標の意味を解釈する ・解決すべき課題に優先順位をつけるための根拠を理解する	
展開Ⅱ 25分	・ペアで情報収集シートを確認し、長期目標を達成するために解決すべき課題を検討する ・優先順位が高い課題を2つ挙げ、選んだ根拠をまとめる ・各ペアの用紙を回覧し、他のペアが選んだ課題と根拠を知る	行動の観察 (ペア活動の取り組みの様子) 記述の分析 (提出したプリント)
まとめ 5分	・長期目標を達成するために解決すべき課題は、たくさんあることを気づかせる ・本時のペア学習の評価を行い、感想をまとめる	

「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準

S	A	B	C
日常生活のそれぞれの場面で、根拠に基づいた生活課題を見いだすことができる	日常生活のそれぞれの場面で、生活課題を見いだすことができる	日常生活の一部の場面で生活課題を見いだすことができる	生活課題を見いだすことができていない

「思考力 ・判断力・表現力」の評価規準

S	A	B	C
根拠に基づき、長期目標を達成するために解決すべき課題を考察することができる (2つ以上)	根拠に基づき、長期目標を達成するために解決すべき課題を考察することができる (1つ)	長期目標を達成するために解決すべき課題を考察することができる	解決すべき課題と長期目標との関連が見られない

２．育てたい生徒像を踏まえた校内授業研修（「高鍋高校授業研究レポート」の一部）

1　研究の概要

これまでの授業改善の成果を踏まえつつ、授業者を各クラス単位で割り当て、「生徒観察」「実践」「分析」「検討」を行い、授業力および学力向上という観点から研究する。

2　育てたい生徒（ゴールイメージ）

基礎基本を確実に身につけ自ら学び自ら考え、主体的に判断・行動し、問題解決できる生徒の育成。
さらに、高みに挑戦する気概を持つ志の高い生徒の育成。

①目的意識をもって授業や課題に取り組む生徒
②時間を有効に使いながら自宅学習の充実を図れる生徒
③基礎的な学習内容を大切にしつつ高い目標を志せる生徒

3　研究の内容

（１）対象クラス担当の授業者でチームを作り、クラス生徒理解のための観察、研究テーマ設定、そして実践を通して、学びの質を上げる。
（２）高大接続（共通テスト実施・新学習指導要領施行）むけた教科内での研究を兼ねて、校内実力考査の問題作成および評価（問題）について検討する。
（３）授業研究を活かしつつ、教科総合訪問での研究授業・指導案作成を行う。

4　令和２年度の取組【詳細】

第１回（４月中）
①教科代表者会で概要の説明　　②各教科会で共通理解
第２回（７月１日）協議会Ⅰ
①グループ顔合わせ　　②対象クラスについての協議（生徒理解）
③テーマ設定にむけて（見通しをつける）
第３回（８月２４日）協議Ⅱ
①１学期の生徒観察結果の報告（共通理解）
②２学期の研究にむけてテーマ設定（できれば２学期授業日までに）
③テーマ研究にむけての具体的方策の検討
第４回（１０月７日）協議Ⅲ
①経過報告
第５回（１１月２７日）協議Ⅳ
①分析・まとめにむけて
第６回（２月１５日）協議Ⅴ
①まとめ発表（各グループ５～７分程度）

5　研究グループ　　※最上段の先生が研究リーダー（担任）

１０１	１０３	１０４	２０１	２０３	２０７	３０１	３０３	３０７
○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
○○	○○		○○			○○		○○
			○○			○○		○○

令和2年度校内授業研究レポート

1．ターゲットクラス【１０１】	2．メンバー　○○、○○、○○、○○、○○、○○

3．研究内容

（1）ターゲットクラスの生徒実態

- 幅広い学力層（スタディサポート（４月実施）GTZ：A1～C2）
- 話し合う雰囲気やお互いに教えあえる雰囲気はあるが、全体で発表発言をすることに対して抵抗がある生徒が多い。
- クラス一斉で取り組むことには、しっかりと取り組むことができる。
- 自学自習など主体的に学ぶ力が不足している生徒がいる。

（2）仮説･テーマ

生徒実態を踏まえ、以下のようなクラス・生徒になってほしい！

- 自学ができる、主体的に勉強できる集団にしたい。
- 授業の中で、質問ができる集団であってほしい。
- 発言しやすい雰囲気作りをしたい。
- 一人一人が殻を破ってほしい。

教科の特性を生かしながら、教科の理解度が高い生徒を動かしたり、ペア学習やグループ学習などを行ったりする中で、質問しあえる雰囲気を作り、主体的に学ぶ事のできる生徒育成を目指し、テーマを設定した。

テーマ【　**生徒間の学びあいを通して、主体的に学ぶ事のできる生徒の育成**　】

具体的な手立て：「リトルティーチャー」の育成・活用

（3）研究内容の詳細（実践）

＜国語（〇〇）＞

実践内容：古典分野における主体的な読解のための指導

古文・漢文の教材を用いて、協働的な読解を繰り返すことで、生徒の主体性を引き出す授業である。扱う本文を板書し、既習事項や現代語訳、調べた語句の意味などを生徒全員で書き込む。生徒が板書している間、指導者は個別に質問を受けながらサポートする。生徒同士で訂正したり、教えあったりすることで、基本事項の定着と同時に、「できること」と「できないこと」を自覚することを目指した。

ペアワークの様子

先生と生徒のやりとりの様子

黒板に自分の考えを板書する様子

漢文を指で追って読む様子

成果：「全員板書！」を合い言葉に進めてきたので、普段は挙手しない生徒であっても仲間に教えてもらいながら参加することができていた。また、板書をしながら生徒同士の会話に耳を傾けることで、実際に何が分からないのか、どこで躓いているのか、を知ることもできた。

課題：今回のように、古典分野では取り組みやすいが、現代文分野でどのように展開するか、試行錯誤している。今後研究していきたい。また、オンラインでの取組も準備しており、展開していく予定である。

＜数学（〇〇）＞

実践内容：グループ自作問題によるお互いの教えあい

①数学 A『図形の性質』の単元分野を細分化（チェバ・メネラウスの定理、方べきの定理、内心・外心・重心、角の二等分線、接弦定理等）し、その内容が入った問題を【基礎レベル問題】、【応用レベル問題】で自作させ、自作問題集を作成した。（グループ活動）

②問題を自作したグループがリトルティーチャーとして教えあい＋板書を用いた解説

成果：・『図形の性質』の単元分野を細分化して問題を考えさせたことによって、内容の理解度を高めることができた。

・講義形式の授業ではなく、生徒主体の活動にさせたことで、生徒同士の教えあいや協力する様子が多く見られた。

・問題作成に当たって、グループ内での協力する姿勢が見られた。

・板書を用いた一人一解説をさせたことで、人前で話をすることに抵抗感が少なくなった。

課題：生徒に問題を自作させる取り組みに初挑戦してみたが、多くの生徒が問題を作ることに苦戦していた。様々な問題（定期考査だけでなく模試の問題や入試問題等）を多く解いて、理解度が高まった状態で問題を自作させると、良問を作ることができる生徒が増えてくるのではないだろうか。まだまだ改善することができると考える。

＜音楽（〇〇）＞

実践内容：学習活動ごとのリトルティーチャー導入

個人の得意とする力（実技力・鑑賞力・発言力）を見抜いて、授業の中で活躍の場を設定。その活動がある度にリーダーが自主的に動き、学び合いの一つのスタイルを確立させ、全体の総合的表現力を高めることを目指した。

成果：自尊感情が高まり、音楽活動の活性化につながったこと。

課題：①可能性があっても自覚ができていない生徒や行動に出せていない生徒がいるので、さらに働きかけの策を練ること。

②with コロナで学びを止めない歌唱学習の在り方。２学期より歌唱実技に取り組むことができ、良き個性的表現が見えてきたところだったが、１年生は未だ合唱づくりに至っていない。発声の制限がある今日においては、学習手順を調整し、読譜・指揮・理論等を学習する中で、新たな得意分野を見つけさせ、発声練習に備えているところである。

（４）成果と課題

～生徒の授業アンケートによるコメントより～

＜国語＞

- みんなで板書をすることで、授業の一体感が出た。
- 積極的に前に出て板書するようになった。
- 自分で訳を考える力がついた。
- 漢文の力が上がり、模試で国語が１番高くとれました。

＜数学＞

- 問題作成者に直接聞けたので分かりやすかった。
- ペア・グループの仲が深まり、自分たちで問題を考え、解決する力がついた。
- 問題作成力がついた。思考力がついた。

＜音楽＞

- 分からないことをみんなで共有することができて、みんなでできるようになろうとする意識が高まった。

＜全体＞

- クラスの授業の雰囲気が良くなった。明るくなった。まとまっていた。（１１）
- 友達とお互いに教え合ったり、協力して答えに近づけたことで、学ぶ事の楽しさや協調性、授業に取り組む姿勢・学習への意欲が上がった。（７）
- 自分たちで考える力がついた。主体的に取り組むことができた。（７）
- 分からないときに、周りの友達や先生に気軽に質問できる雰囲気が今まで以上になった。（７）
- 教えあいなどを行うことによって、分からないところを教え合ったり、自分たちの意見を議論することによって理解を深められた。自分の考えの幅を広げることができた。（７）
- 理解力が高まった（５）
- 授業を受け身で受けるのではなく、自ら積極的に考えようとする力がついた。（５）
- コミュニケーションがとれるようになった。（４）
- 意見が多く出せるようになった。（３）
- 他の人と話し合ったりすることで答えを出す力が身についた。（２）
- 伝える力が身についた。（２）
- 問題を解くことに集中できた。
- 授業で分からなかったところを、休み時間に友達に聞いたりすることができた。嫌な顔せず教えてくれるので嬉しい。
- 前に出たりすることに対しての抵抗がなくなった。

・相手に説明できるようになろうと思うようになり、より理解しようとすることが自然とできるようになった。
・お互いの考えを共有することで、他人の良いところを吸収できた。
・難しい問題でもすぐに諦めなくなった。

全体的に、今回の授業研を通して、生徒の反応や一人一人が感じたことは良い方向へと進んでいるように感じている。生徒同士の教えあいやリトルティーチャー制を導入したことによって、一人一人が主体的に取り組む姿勢を持ってくれた。また、お互いにコミュニケーションをとることで他者やクラスを理解してくれたようである。

今後の課題として、こういった活動を継続させていくこと、ペアワークやグループ活動を取り入れるタイミング、コロナ禍による授業内での対策等を考えていく必要性がある。

注

1　中央教育審議会初等中等教育分科会「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議のまとめ）～多様な生徒が社会とつながり、学ぶ意欲が育まれる魅力ある高等学校教育の実現に向けて～」２０２０年１１月１３日、pp. 60

2　中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちを引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」２０２１年１月２６日、pp. 52

3　田村学「『主体的・対話的で深い学び』の実践に向けて」独立行政法人教職員支援機構「オンライン講座　校内研修シリーズNo．25」https://www.nits.go.jp/materials/intramural/025.html

4　田村知子「カリキュラムマネジメント」篠原清昭（監修）学校管理職養成研究会（編）『学校管理職養成講座　スクールリーダー育成のための１２講』ミネルヴァ書房、２０１８年８月、pp135

5　髙木展郎「カリキュラムマネジメント～新学習指導要領とこれからの授業づくり～」独立行政法人教職員支援機構「オンライン講座　校内研修シリーズNo．54」https://www.nits.go.jp/materials/intramural/054.html

6　文部科学省『高等学校学習指導要領（平成３０年告示）解説　総則編』pp45

7　文部科学省「平成３０年度改訂の高等学校学習指導要領に関するＱ＆Ａ　〈総則に関すること〉」２０１９年１１月１８日、pp4

8　田村知子「カリキュラムマネジメントの全体構造を利用した実態分析」田村知子・村川雅弘・吉冨芳正・西岡加名恵（編著）『カリキュラムマネジメントハンドブック』ぎょうせい、２０１６年６月、pp37

9　同書、pp40

10　同書、pp44-50

11　文部科学省『高等学校学習指導要領（平成３０年告示）解説　総則編』pp51-56

12　盛永俊弘『日本標準ブックレット　No．19　子どもたちを“座標軸”にした学校づくりー授業を変えるカリキュラム・マネジメントー』日本標準　２０１７年３月２５日

13　文部科学省『高等学校学習指導要領（平成３０年告示）解説　総合的な探究の時間編』pp76

14　教育再生実行会議「技術の進展に応じた教育の革新　新時代に対応した高等学校改革について（第十一次提言）」２０１９年５月１７日、pp6 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai11_teigen_1.pdf

15　同13、pp42

16　同13、pp96

17　同13、pp97

18　岡本薫『なぜ日本人はマネジメントが苦手なのか』中経出版、２０１１年

19　同12、pp58

20　石井英真『授業づくりの深め方ー「良い授業」をデザインするための５つのツボー』ミネルヴァ書房、２０２０年６月１０日、pp344

21　同20、pp343

22　同１

23　文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当）「これからの高等学校教育について」スライド　https://www.mext.go.jp/content/20201124-mxt_koukou02-000011165_03.pdf

24　同１、pp. 60

25　同２、目次

26　中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちを引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）【概要】」２０２１年１月２６日、pp. 8

27　同 23、pp. 11、15-18、20-24、27-30

28　同２、pp. 56-58

29　松原憲治「資質・能力の育成を目指す教科横断的な学習としてのＳＴＥＭ／ＳＴＥＡＭ教育と国際的な動向（抄）」中央教育審議会中等教育分科会教育課程部会資料、２０１９年９月４日

30　田村学「総合的な探究の時間とＳＴＥＡＭ教育－総合的な探究の時間の充実の観点から－（抄）」中央教育審議会中等教育分科会教育課程部会資料、２０１９年９月４日

31　同30

32　長尾篤志「『理数探究』の充実とＳＴＥＡＭ教育」中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会資料、２０１９年９月４日

33　同30

34　白井俊「OECD における Agency に関する議論について」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/142/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2019/01/28/1412759_2.pdf

35　白井俊『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房、２０２０年１２月２０日、pp. 72-73

36　同34

37　秋田喜代美他「OECD　ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030　」仮訳 http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-earning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf
原文 http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learningcompass-2030/OECD _Learning_Compass_2030_concept_note　.

38　同 35　pp. 105

39　同 35　pp. 108-109

執筆者一覧

井上　稔	日向高等学校	教頭	第２章　第２節(1)
大峰　清広	都城西高等学校	教諭	第２章　第２節(2)
甲斐　健二	宮崎南高等学校	指導教諭	第２章　第２節(3)
梅北　瑞樹	飯野高等学校	指導教諭	第３章　第３節
上水　陽一	五ヶ瀬中等教育学校	教諭	第３章　第４節
山崎　俊一	宮崎県教育庁高校教育課	指導主事	上記以外

なお、巻末の「資料」の第１節で「資質・能力育成研究会」のパイロット教員の先生方に学習指導案を、第２節で高鍋高等学校の三浦章子先生に「高鍋高校授業研究レポート」を提供いただいた。また、第１章第４節の「カリキュラム・マネジメントの実態分析」の集計は、教育研修センター研修生の柳田大介先生にご協力いただいた。

おわりに

本資料は、カリキュラム・マネジメントの調査研究（Ｒ１～Ｒ２）の一環として、カリキュラム・マネジメント実践校３校の実践研究と「資質・能力育成研究会」（マネジメント研究部門）の研修会等を踏まえて作成した「手引き」になる。２年前にこの事業を始めたときは、検討会議や研修会の中で、「そもそもカリキュラム・マネジメントとは何？」という声が飛び交っていたが、実践研究と研究協議を重ねながら、何とかその成果を「手引き」としてまとめることができた。そのため、本資料では、カリキュラム・マネジメントの実践研究を進める過程で、「何が課題としてあげられ、どんな議論がなされたか」について、できるだけ再現するように心がけた。

まず、カリキュラム・マネジメント実践校の先生方には、２年間にわたる実践研究に粘り強く取り組んでいただいた。日向高校の井上稔教頭先生には日向ＳＰ、都城西高校の塚本譲二前校長先生と大峰清広先生にはＮＰ９、宮崎南高校の甲斐健二先生には鵬ＤＰという育成を目指す資質・能力（コンピテンシー）を設定して、各教科・総合的な探究の時間・学校行事等の在り方について、実践研究をしていただいた。そして、研究の進捗状況を研修会で報告していただいたおかげで、今後、高校で進められる「スクール・ミッション及びスクール・ポリシーに基づく教育活動の実施・改善」のイメージを本県で共有することができた。

また、カリキュラム・マネジメント研修会の外部講師として、京都大学の盛永俊弘先生にはカリキュラム・マネジメントの理論的な側面を、岡山県青少年教育センター閑谷学校の香山真一先生には実践的な側面を中心にご講演いただいた。また、こゆ地域づくり推進機構の中山隆さんには隠岐島前高等学校の「総合的な探究的な時間」の取組を紹介いただいた。本資料に講演資料や質疑応答でのやりとり等も提供いただいたおかげで、研修内容を広く共有することができた。

さらに、本資料を作成する途中で、カリキュラム・マネジメントの議論は、ＳＴＥＡＭ教育やコロナ禍における学びの保証など、新たな視点も求められるようになった。新しい教育課題にも対応できる「手引き」を作成するために、本県で先進的な取り組みをされている梅北瑞樹先生（飯野高等学校）と上水陽一先生（五ヶ瀬中等教育学校）に急遽お願いしたところ、本事業の趣旨に賛同いただき、すぐに玉稿を提供してくださった。

最後に、カリキュラム・マネジメント検討会議の皆様には、２年間にわたって本事業の実践研究の伴走をしていただいた。宮崎大学の添田佳伸先生と遠藤宏美先生には有識者の立場から、校長会の髙橋哲郎校長先生や澁谷好一校長先生には学校教育の立場から、教育研修センターの間曽妙子課長には教育行政の立場（澁谷校長先生は令和元年度はこちらでした）から、示唆に富むご助言をいただいた。令和２年度の検討会議はオンラインでの開催となり、これまでのご支援に、直接お礼を申し上げることができなかったことが、心残りである。

このように本資料は、多くの方々のご協力とご支援によって作成されたものである。また、各校のカリキュラム・マネジメント担当の先生方が作成されたレポートや研究協議のやりとりも、本資料の基底となっている。ここに記して、心より感謝申し上げたい。そして、本資料が各学校でカリキュラム・マネジメントの旗振り役として、試行錯誤されている先生方の一助となれば幸いである。

令和３年３月

宮崎県教育庁・高校教育課
高校教育・学力向上担当　山﨑俊一